
時空戦艦『紀伊』

キプロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空戦艦『紀伊』

【Nコード】

N5121N

【作者名】

キプロス

【あらすじ】

大和型第4番艦は史実通り解体されず、戦艦として建造が続行していた。しかし完成間に合わずして敗戦。その後米軍の手によって完成し、海上自衛隊に配備される。そして2004年、イージスシステムやVTOL機対応飛行甲板といった近代改装が施された航空機搭載型護衛艦『きい』はリムパック演習に向かう中、61年前の世界へとタイムスリップしてしまう。

序章『きい』

序章『きい』

2004年6月1日AM07:00

広島県江田島市

海上自衛隊江田島基地内

遠方より差し込む朝陽は、赤煉瓦の建物を燃え滾らせる。

明治21年（1888年）創設のこの建物は、旧海軍兵学校（現海上自衛隊幹部候補生学校）。アナポリス米海軍兵学校やダートマス英海軍兵学校と並ぶ三大学の1つであり、現在は海上自衛隊の幹部候補生達がしごかれている。

瀟洒な赤煉瓦は英国製。全て最高級品で1枚1枚輸入したという。その建物の前、正面玄関に1人の海上自衛官が立ち、思いに耽っていた。

その1人、高橋三等海佐は赤煉瓦の外観を睨り、息をのんだ。その背後、右斜め後ろから延びてくる人影を見つけた高橋はとっさに後ろを振り返った。

そこには、同期である横峰三等海佐が笑みを漏らしながら立っていた。

「久し振りだな、高橋」

横峰が手を差し出したので、高橋は握手を交わした。

高橋は元の方角に顔を戻し、建物の方を伺った。全く変わっていない。だが次第に、それまで気付かなかったものも見え始めてきた。盟友の変わりぶりだ。勇猛たる表層は内側に隠しているのか、かつてよりも少し冷静さを持った気がし始めていた。卒業式のせいだろうか……。

「今も昔もここは変わって無いな」

横峰はそう言いつつ、足を一步前に踏み出した。

その刹那、背後より吹きつける荒々しい風が瀟洒たる赤煉瓦の建物の周りを縁取る木立は叩き付けられたが如く、軽く捻じ曲がっている。

背筋に入り込む風に高橋は鳥肌を立たせた。風音が冷やかに静まる中、木々の間を渡る風もその力を弱めていた。

中庭。

赤煉瓦に彩られる洒落た廊下は、複数のアーチによって形取られ、数本に木々に縁立つ中庭には誰の姿もなかった。赤い煉瓦壁と白い漆喰壁に木材の木組みをめぐらせたアーチは、この静かな学校の外気の中に伝統の重みを感じさせる。

その間、瀟洒な廊下を2人の三等海佐は歴史を感じながら歩いていた。

「お前は『紀伊』に志願したんだろ？」

「ああ」と高橋は重々しい声で返事を返した。「物好きだとも思ってるのか？」

「そりゃ思うさ、54年来の骨董品だぜ。近代改装したと言ってもな」

横峰はため息を吐きながら言った。

「そう言っても、お前も紀伊配属だろ？」

高橋はそう言いながら、横峰の左肩に手を置いた。

「だからだよ。俺は成績が悪いからあそこに配属されたんだ。でもお前は違う……優秀なのに自ら嘆願したって話じゃないか」

横峰は低く単調な声で言った。

「子孫優遇……って言う暗黙の了解を使ったからだよ。祖父も親父もあの艦に配属されてきたんだからな」高橋はとげとげしく言った。「祖父は大和を生存して海上警備隊を経て紀伊に配属されたし、親父も紀伊に属したからな」

十数歩進んだ所で、2人は中庭に出た。

2人の進む先には――1本の桜の木。

旧海軍兵学校時代に植えられたその桜は、『同期の桜』に歌われた桜の1本であり、今だにそれは見事聳え立っていた。

「2人がやってきたからやるのか？お前は」

「それだけじゃないさ、あのフネは本気で乗ってみたいんだよ……」

そこで高橋は腕時計に目をやり、後ろへ一歩足を進めた。

「……時間だ」

2004年6月1日AM08:00

呉基地

国旗掲揚が滞りなく行われる中、2人の三等海佐は杏と赤と金色の光の帯に輝く海面上に浮かんだ1隻の巨大戦艦――の姿を見据え、足を進めた。静寂に包まれる湾内には数人の乗員達の姿ほどしかなく、五月蠅い記者達は一般公開前まで外で車の中で待機するなりしているようだ。

天高く聳え立つ艦橋。

前面に配備された重厚な46cm砲。

撤去された3番砲塔に造られた大型甲板。

巨大なレーダーと、4基のフランクス。

そして――ミサイル発射口。

後方の大型甲板に据えられるは――ハリアー？。

前方にあるのは――球体艦首『バルバス・バウ』

全てが物語っているが、これは大和型戦艦である。

艦首付近には大きな白文字で『きい』と書かれていた。

高橋と横峰はただそれを見つめ、無言を続けるしかなかった。

世界広しと言えども、これだけの規模の戦艦は最早存在していな

い。アイオワ級はとつくの昔に除籍されており、今や記念品の一部として飾られているのが主である。

そんな戦艦——しかも大和型がこうして生きているのは、過去の歴史が関係している。

1945年

日本敗北後、呉のとあるドックである『フネ』の存在が明らかになった。

111号艦——通称『大和型4番艦』。史実ではミッドウエーの悲劇から空母こそが戦いの流れを決めるとして20%完成していたものは解体された。

しかし、今物語においては建造が密かに続けられ、信濃を空母として4番艦は戦艦のまま開発が続けられる事となった。

1945年初頭には、きたる本土決戦に備え、建造が進められたが結局敗戦。米軍に接収された後、改装によって兵装が付け加えられた形で建造が続けられ、50年に完成し、『きい』と名付けられた。しかし、その後は予備艦として海上警備隊に配備され、その後海上自衛隊に。

60年代の高度経済成長期には、大規模公共事業の一環として米国のアイオワ級よりも先に近代改装を開始。80年にはハリアー搭載仕様のVTOL飛行甲板を3番砲塔を撤去する事によって後方に取り付け、89年には米国からハリアー？を購入。特別飛行科が造られ、きいのハリアー搭乗員が生まれる事となった。

そして2000年、イージス・システムを配備。

こうして『きい』は21世紀の戦艦として、湾岸戦争配備後退役したアイオワ級を除いたミサイル戦艦として、VTOL機専用空母開発予定の2010年代まで就役している。

しかし、きいは元々専守防衛を謳う海自の中でも予備艦という閑職の中の閑職であり、しばしば政治家や世論、軍事評論家の間で不必要と言われている為、愛国心の強い自衛官達の中では、最も安全

ながらも配属されたくない艦の1つである。

その現状はまさに戦時の『大和』に酷似していた。

序章『きい』（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第1章『時間旅行』第1話 出航（前書き）

・航空機搭載型護衛艦『きい』性能諸元

排水量 基準68,000t

満載74,809t

全長263.0m

全幅39.0m

吃水10.5m

機関

COGAG式GE製LM2500ガスタービンエンジン×8基
(320,000PS)

最高速力…30ノット以上

乗員3,225名

兵装

45口径46cm3連装砲塔2基

高性能20mm機関砲(CIW)4基

Mk41垂直発射装置61セル

HOS-302 3連装短魚雷発射筒2基

ハーブーン対艦ミサイル4連装ボックスランチャー6基

トマホーク対艦ミサイル4連装ボックスランチャー110基

艦載機SH-60J哨戒ヘリコプター2機

ハリアー?VTOL戦闘機13機

システム

主砲管制装置

ミサイル火器管制装置

MOFシステム

イージスシステム（ベースライン5）

戦術データ・リンク

レーダー

AN／SPY・1D多機能レーダー1基

OPS・28D対水上搜索・低空警戒レーダー1基

OPS・20航海レーダー1基

ソナー

QQS・5艦首ソナー

QQR・2戦術曳航ソナー

電子戦・対抗手段

NOLQ・3統合電子戦装置

Mk36SRBOSチャフ・フレア発射機

SLQ・25曳航式対魚雷デコイ

第1章『時間旅行』第1話 出航

第1話『出航』

2004年6月1日AM09…26

広島県市幸市

海上自衛隊呉基地

『きい』艦橋

高橋、横峰三等海佐が到着してから1時間、航空機搭載型護衛艦『きい』は出発の時を迎えていた。2000年近くから近代改修を受けた『きい』は大和型戦艦ながらも、内部にイージスシステムを備えた新鋭艦としての能力も兼ね備えており、高い防空戦力を備えているのだ。

高橋がこうしてきいに搭乗したのは10回目。

1～6回までは一般公開。7～10回までは、艦勤務の為である。その結果、高橋はこの艦の構造を確実に理解し、右も左も分からない……という事は無かった。言わば、親の背を見るが如くきいを見て育ってきたという所であり、艦に居るだけで安らぎを覚えていた。

「高橋三佐、問題は無いかね？」

吉岡作治一等海佐は真剣な表情で窓に身を乗り出しながら言った。吉岡は艦長で、非常におおらかな性格をした50代である。その年には似合わない程、体は良く引き締まっていた。

「異常なしです」

「では、出航用意。資材、物資等の確認を」

艦長の命令を受けて、副長である高橋は艦内通信システムを用い、連絡する。数分後、準備完了の連絡が通達されてきた。

「準備完了しました」

連絡を聞き、吉岡は静かに頷くと艦内インカムを手を取った。

「もやい放て！」

艦長の声と共にもやいが鈍い音を立てて解かれた。水がそれまでとは違う音を立てながら、その艦体を鋭く叩いたのだ。きいのGE製LM2500ガスタービンエンジンは低く単調な音を響かせ、静寂の湾内にさざ波を立てた。

きいはいこうして、出航の時を迎えた。

第1章『時間旅行』第1話 出航（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第2話 天変地異

第2話『天変地異』

2004年6月3日PM10:07

太平洋

『きい』艦橋

艦橋から海を眺めると、漆黒の波が腕のように艦体に纏わり付いているように見えた。

2隻の僚艦『あまぎり』『いなづま』の姿は、重々しく海に垂れ下がった鼠色の積乱雲の下に隠され、見えなくなっていた。

航海長である横峰三等海佐は、真剣な眼差しを海に差し向ける吉岡艦長の右隣に立ち、共にその光景を見据えていた。

「艦長、気象報告に無い低気圧が接近中です」

「規模は？」

「詳しくは分かっていませんが、かなり大規模なものかと……」

横峰の言葉に耳を澄ましていた吉岡は、唸るようにしてため息を吐いた。

「迂回コースを取る程では無いと思うが、対処は万全にしておいてくれ」

雨足が強まり、漆黒の中を2対の稲妻が駆け抜ける。

同時に、海面の下から艦首が跳ね上がり、『きい』の巨艦たる重厚な艦体が矢のように飛び出しながら、低気圧の中へ突進する。荒波に打たれ、海水がいつもとは違う音を立てて艦体を叩き始めてきた。やっとの事で保っている体のバランスを崩さないように気を付

けながら、きいは他の音を掻き消すような凄まじい音と共に進んでいたが、ほどなく、GE製LM2500ガスタービンエンジンが質力を落とし、静かになった。その直後、頭上を稲妻が迸り、きいの艦体は鋼鉄の輝きを見せた。

54年という長い時を生きてきた『きい』は他艦に比べれば速度は遅い。

しかし、VTOL機を唯一運用出来る海自航空プラットホームとして、本来退役してもおかしくない時間の中で使われている訳だ。

CICに居た高橋三等海佐は、入室し来た艦長吉岡へとつさに敬礼の動作を取った。吉岡はその動作に答えるように敬礼をり返した。

「副長、2210に当艦は低気圧に突入したが……どうするべきか意見を聞きたい」

吉岡は言った。

「私としては……」

その刹那、電測長の喜田一等海曹が慌てた様子で駆け寄ってきた。

「艦長、突如1つの竜巻が発生しました！」

「何だと!？」

ほぼ気付かれることなく、周辺海域の右手に1つの竜巻が姿を現した。天高くまで聳え立つその竜巻は艦体を震わせた。海の右方に近付くにつれ、吹き付けてくる風は強くなっている。きいから放出される蒸気と熱、竜巻の風が濃い霧となって、後から後から海面に流れてくるのだ。

太平洋の真中、きいは海面で眠る海獣のように丸くなってうずくまる。

この艦には3000人規模の乗員が乗っているが、その全員が場の空気が変わった事に対し、気付いているようだった。

途端に9つの外部ディスプレイは霧に白く染まってしまった。

「何が起きているんだ……」

艦長吉岡は愕然とした様子で白く染まったディスプレイを見据え、

眩いた。

空は稲妻が迸っており、1秒に1回のペースで海面に落雷が生じた。竜巻は猛然ときいに迫っており、激しい暴風雨が、きいの艦体を叩き付けた。

その最中、高橋の背後で轟音が夜気を切り裂いた。はっとしてディスプレイを見据えると、艦尾のすぐ近くに複数の落雷が生じている事に気が付いた。そして、既に艦が竜巻の範囲に入っていることも、確認する事が出来た。

その時、頭上で空を突き破るような轟音が響き渡り、画面が閃光に包まれた。

第2話 天変地異（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第3話 時空転移

第3話『時空転移』

????年???月???日PM10..34

太平洋

『きい』C I C

不気味なエネルギーのさざ波が細胞を伝わり、灯が消えた。

とっさに高橋三等海佐は拳を握り締め、電灯の消えたC I Cは異様な静寂に包まれ、暗闇が高橋達の喉元めがけて飛びかかってきた。10秒前に頭上から響いた轟音を聞き、何が起ころうとも不思議では無いだろうと高橋は思った。

途端に足音が響き、体と体がぶつかった瞬間、天井から差す眩しい光が自分達を照らすのが見えた。血まみれの乗員か、大破した機器でもあるかと思っていたが、光を浴びたC I C内部には血など一滴も無く……妖しげに光るディスプレイ画面と、正常に稼動する電子機器があるだけだ。あの轟音は見掛け倒しで、全く支障が無さそうだ。

高橋は艦長吉岡の横を通り抜けて先に進むと、喜田一等海曹の混乱した顔が視界に飛び込んできた。

「どうした？」

高橋は訊いた。

「いえそれがGPS受信機が故障したのか……動いていないんです」

そんな馬鹿な……と高橋は胸の中で呟いた。GPSは船舶においては非常に重要な役割を持つ。動いていないのなら、精度の低い羅針盤を頼りに進むしか無いだろう。

「電源が落ちたんじゃないのか？」

「私もそう思ったんですが……機器自体に異常が無いのと、これを見れば……」

喜田はそう言うのと、右手を掲げて光を放つディスプレイを指差した。

「……とにかく、復旧を進めてくれ」

AM10・40

『きい』後部飛行甲板。

金色の光の帯に包まれ、ハリアー？は瑠璃色に輝いた。

AV・8B＋……ハリアー？プラスは1989年に海上自衛隊に導入されて以降、独自の改良の末に欠点である速度性能の向上、航続距離の増大が図られ、高い性能を確保した。艦載可能艦艇がこの『きい』だけであるが、艦載量は13機と予備機が数機である。

飛行長の西川一等海尉は神経を尖らせながら、甲板の方へと近付いていった。白い霧が渦を巻いて乱れ、野晒しにされていた1機のハリアー？の脚部を行きつ戻りつしている。

不気味な霧か、異常な寒気か。西川の脚は震えていたが、甲板を進む内、北より吹き付けてくる風はより強みを増していた。艦から外部に漏れる熱気と空を覆う雲が螺旋に重なり合い、後から後から霧が地上へと流れ込んでくるのだ。

「西川一尉！」

懐かしみのある声を聞き、振り返ると航海長である横峰三等海佐の姿があった。

「何か問題はないか？」

「凄い嵐みたいでしたが問題はありません」

報告を聞いた横峰は微笑み、天を仰いだ。

その刹那、横峰の視界に異常とも思える光景が映り込み、口をあ

んぐりと開けた。

「……月は満月じゃなかったか？」

彼の囁きに西村は渋面を浮かべ、か細い目で空を見据えた。すると、漆黒の空に輝いていたはずの満月の半分が裂けたかのようになくなっており、右半部のみが光輝いているのだ。当初は何かと死んだような目で見ていた西村もぱっちりと目を見開き、骨ばった手で両手の平を擦り合わせた。

「半月……？」

これと似たような光景を見た気がする。

青年期、よく架空戦記を読んでいた横峰はそう感じた。

「これは……まるで……B級映画みたいだな」

横峰はフライトデッキから外に乗り出した身を引っ込めながら呟いた。思いたくは無かったが……合理的に考えても……タイムスリップしたのか。

「今は何年何日なんですか？」

同じ結論にでも行き着いたのか、横に居た西川は訊いた。

「まさか、そうだったとは完全に決めて無いよ」

横峰は顔を顰めながら言った。「少なくとも、お前が思ってるミッドウェー海戦前夜ではなさそうだが」

『きい』ブリーフィング室

「……私が思うに、これはタイムスリップかと」

奇想天外な発言を受け、横峰を除く一同は愕然とした。密やかな苦言と冷やかな視線、そして鈍い咳が2回、隊員達の中から漏れ出した。

「そう思う理由は？」

吉岡は渋面を浮かべながら、言った。

「月の形があります。今夜は満月だったはずが、今では半月です」

「なるほど……」

吉岡はコーヒークップを持って口元に近付けた。自身の目でも見たが、これは許されざる事態である。今俺が聞きたい事ははっきりしている。今、最も興味深い疑問、曖昧な答えの中に潜んでいる1つの疑問は、何故、という事である。

「……艦長、横峰三佐の言葉は本当です」

高橋は愕然した表層で告げた。

「うむ、第1の問題はそこなのだよ」

吉岡は下顎を擦りながら言った。「母港の呉に戻るか、ハワイに行くかだ」

この非常時、決断の全ては艦長吉岡に委ねられる。第1の問題である行き先もその1つであり、誰もが納得するような結論を出さねばならないのだ。

「僚艦の2隻の事もあります」

高橋は唸るように言った。2隻もタイムスリップしている可能性が無いとは言えないからだ。

「そうだな、搜索も視野に入れねばならない」

吉岡は言った。……カフェインがもっと要りそうだ。

第3話 時空転移（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第4話 6ヵ月

第4話『6ヵ月』

異変から1日経過

『きい』食堂

AM07・02

——そろそろ起きる時間だ。朝食の用意は出来てる。

親父がそう怪訝に布団を放り出し、酔態と酷い寝相を浮かべていた俺に告げた。親父はさっと扉の向こうに引っ込むと、すぐに戻ってきて膝元へ雑作にTシャツを放り投げた。Tシャツはグレーの無地で、パリパリに乾いており、几帳面と言える程多端であったように、折り皺が付いていた。そして階段を足早に下りていくと、味噌の匂いが鼻孔を駆け抜ける……。

今、眼前に置かれた1つの容器に入れられたそれも、同じような香ばしい匂いがしている。

「現実には60云年前に来たとすれば、これを食べれるのは一週間がいい所だな」

高橋三等海佐は過ぎし日の思い出に没面を浮かべながら、眼前の朝食を見渡した。アイリボーホワイト色に輝く白米、琥珀色の味噌汁。さらに焼魚の香りが漂ってくる。

「……星の位置から1時間強で割り出したらしいが……今日は1941年6月4日らしい」

右隣に座っていた横峰三等海佐は、口に茶を含ませながら言った。国防色に似た茶の水面から湯気が流れ出し、螺旋を描いて宙を渦巻く。

「1941年6月4日……真珠湾攻撃開始から6ヵ月弱か……」

「流石に戦争回避は無理かもな」

横峰は怪訝な表情を浮かべながら言った。

「……夢の見過ぎだ」

味噌のこうばしい香りを鼻元に伝わせつつ、高橋は告げた。密やかな音を立てて潮がゆっくり引いていくように、2人の夢の余韻が消えていった。

「もし歴史改変を期待しているのなら、まずは呉の現状を見てからだ」

高橋は言った。

「この艦はシビリアンコントロールから離れてるんだ。主導権は俺達にある」

「だからこそ、人としての道を踏み外さない事を祈るよ」

高橋はコーヒーを一口飲んで、呟いた。

「……そういう訳じゃない、分かってる」横峰は洩面を浮かべた。
「淡い少年期の夢物語さ」

1941年6月5日PM09…17

呉近海

『きい』後方部飛行甲板

SH・60J哨戒ヘリ要員の1人である三好三等海曹は64式7.62mm小銃を掲げながら、強めに扉を開け、機内に体を突き出した。

間も無く、SH・60Jは機体を垂直に浮かせ、轟音を響かせながら飛翔した。

三好が機内の座椅子に腰を埋める中、背部からはGE製T700ターボファンエンジンの鈍い轟音が流れており、振動が頭蓋骨を揺さ振った。

やがて陸地が見え、三好の視界に流れ込む。

市幸市の海上自衛隊呉基地に針路を取るSH-60Jはその機体を徐々に下げていき、一定の高度を維持し始めた。左端に置いてあった1つのカメラを手に取ると、三好は窓にカメラレンズを向け、地上の様子を写真に収め始めた。

……いつもと様子が違う。

レンズ越しに景色を焼き付けていた三好は心の中に呟いた。普段は無数の灯に照らされているはずの町々や呉基地は暗く、蛍の光が如くおぼろげな光源が灯っているばかりである。

『……………』

沈黙を続ける呉基地。

ザーザーと無機質な雑音が鳴り響くのみで、返答は全く無い状態だった。

その瞬間、一同は推測論がその域を達し始めた事を気付かずにいられなかった。

第4話 6ヵ月（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第5話 緊急事態（前書き）

登場人物紹介

○高橋将也 たかはししょうや

兵庫県宝塚市出身。33歳。

第4護衛艦群所属。階級は三等海佐。航空機搭載型護衛艦『きい』副長兼砲雷長を務めている。防衛大学校卒業後、海自幹部候補生学校に入り勉学に勤しみ、その成績は校内でも上位にあった。しかし、祖父や父親同様に閑職のきい勤務を望み、新鋭イージス艦の幹部職を蹴ってきいに属する事になる。冷静に分析し、行動する中、自衛隊の限界を破るべく、歴史改変に好意を抱いている。

○吉岡藤次郎 よしおかとうじろう

『きい』艦長。階級は一等海佐。52歳。

第4護衛艦群所属。非常におおらかながらも厳しい性格で、人命を強く尊重する。かつては別の護衛艦に居たが、人命重視の軍規破りや不要な発言をしたが為、閑職であるきいに左遷された。自衛隊に関しては限界を感じており、法の下の不自由を少しでも廃した国防軍として再編する事を密かに願っている。

○横峰隆太 よこみねりゅうた

航海長。階級は三等海佐。33歳。

高橋の同期であり、自信過剰。強い信念と短気な性格が災いして過去にはいくつかの事件を起こしており、幹部候補生時代にも成績の悪さが目立ち、閑職であるきい勤務を言い渡されてしまい、卒業式後に暴力騒ぎを起こしかけた経験を持つ。

第5話 緊急事態

第5話『緊急事態』

1941年6月5日PM11:05

呉鎮守府司令長官官舎

海軍少佐の桐野義樹は日本仕様のハーレーダビッドソンに乗り、道路にひたすら走らせていた。林道をジグザグに進んで、漆黒に染まった小道へ曲がり込んだ。呉鎮守府司令長官の住む、官舎へと向かっているのだ。

道はがらんとしていたが、途方も無く暗かった。

唯一の光源であるヘッドライトも、光量が知れている。

やがて、遂に前輪は、砂利敷きのドライブウェイに乗りかかったかと思うと、2つのガス灯のほのかな光が、桐野の目に差し込んできた。

両輪が鈍い音を立ててブレーキを掛け、完全に停止すると桐野は座椅子から降り、砂利の上を歩き始めた。バイク前方には由緒正しき英国のハーフティンバー様式を元に形造られた1軒の洋館が佇んでいた。脚元を冷たげな風が吹き抜け、屋敷周囲を取り囲む樹木を揺らす。

錨と桜模様のすりガラスが入れられた玄関扉を2回、叩くと使用人の男が1人出てきた。

「……日比野司令長官を呼んで貰いたい」

呉鎮守府司令長官官舎の立派な玄関ホールに立つ、海軍服を身に纏う垢抜けた青年将校風の男に目を大きく見開きながらも、使用人の男は静かに頷いて家の中へと足を進めた。

裏側の居住区。

英国風様式の洋館の裏手に佇む和風住居部の一角に立ち、使用人は手の甲で2回、明障子を叩くと、行灯のほのかな光と共に、布団から身を起こす人間のシルエットが映りこんだ。低い吐息が障子越しに響く中、足音が夜の洋館に虚しく響いた。

静かに開いた障子からは、渋面を浮かべる男が顔を覗かせていた。

「旦那様、御来客です」

寝間着の和服に身を包む男は使用人の声を聞き、怪訝そうに頷いた。頭を掻きながら、鈍い足音を立てて廊下を進むと、玄関に立つ1人の海軍将校の姿が目に入った。垢抜けたその男は、寝間着で出てきた男を見るや否や、深々と敬礼して見せた。

「……桐野少佐。何の用だ？」

男はまっすぐと、桐野を見据えながら言った。

「日比野司令長官……緊急事態です」

1941年6月6日AM01…26

呉鎮守府庁舎

白タイルの続く庁舎前を流れる様に進むと、1台のハーレーダビッドソンは停車した。夜の外気は思った以上に冷たく、日比野の両手はポケットに潜り込んだ。

バイクが完全に停車しないうちに、軍服に身を包む日比野は側車から外に飛び出し、赤煉瓦の巨大な建物の中へと進んでいくとしており、桐野は慣れた手付きでバイクを停車させると、鍵を抜いて早足で後に続いた。頂部に聳える白色のドーム望む、赤煉瓦の1群である呉鎮守府庁舎は1度、地震で崩壊していたが、新たに造られており、これは2代目庁舎である。

ふと、日比野は足を止め、空を見渡した。

満天の星空だったが、その内の1つに奇妙に動く星が潜んでいるのだ。

「あれか？」

日比野は囁いた。

「はい、司令長官。未確認の飛行物体です」

「……あれが1時間前に確認されたと」

問いに桐野は頷いた。その飛行物体は、呉海軍工廠の周辺空域を低空で飛行しており、警備隊や陸戦隊は既に臨戦態勢を敷いている。

「照明で照らして、高射砲で撃ち落とすべきか……」

そう呟く日比野に対し、桐野は首を振って否定した。

「そうすれば戦争になりかねません」

「状況を見定める必要がある……という所か」

銀河に潜む、米か英か分からぬ航空機が皇地の空を汚すとは……。そんな憤りを桐野は覚えていたが、それでもこの状況で攻撃などすれば大変な事になるのは理解していた。

その刹那、突然光道が空を貫き、正体不明の航空機を照らしめた。

「何が起こった!？」

日比野は慌てふためき、周りを見回した。

「恐らく、警備隊の仕業です。末端部まで情報が伝わっていないか
ったのか……」

「すぐに止めさせろ!」

そう日比野は叫んだものの、最悪の事態はその間に起こってしまっていた。突然、地上の彼方から高射砲の火の弾が、夜空に飛び出していったのだ。

AM01・33

空襲警報がけたたましく鳴り響く中、十数発の弾丸が空に飛び出す。

呉上空で空中偵察任務を続けていたSH-60Jは陸戦隊の鋼の洗札が迫るのを知り、機体を激しく旋回させた。銃弾はローターの直上を通り抜けていく。

三好がカメラをとっさにカメラを引っ込めて窓から地上を睥る最中、その右隣から露骨な金属音が響き、カシヤツという鈍い音が三好の耳を駆け抜けた。

慌てて右を見ると、そこには64式7.62mm小銃を持ち、構える隊員の姿があつた。

「何をしてるんだ！」

激怒する三好に、思わず隊員はたじろいた。

「緊急事態ですから……」

「馬鹿！銃撃許可はまだ出て無いだろ！」

三好は暗視装置を付けられた64式7.62mm小銃を隊員の手から奪い取り、左端に隠し込んだ。憤りを浮かべる三好は1分間、隊員の顔を見据え続けた。

その間、SH-60Jは高度を増し、大急ぎで攻撃範囲から離脱していく。

『……………』

空に舞う対空砲火を見据えつつ、三好は呉基地から響く雑音を聞き入った。その瞬間、モニター越しにCICで見ていた高橋も吉岡も横峰も、自分達の現状が推測論通りになる事を悟った。虚しく響くローターの羽音に耳を澄ましながら、正体不明の飛行物体が足早に去る光景を見ていた日比野と桐野の2人も、最悪のシナリオが進行している事を悟り始めていた。

第5話 緊急事態（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第6話 宿命

第6話『宿命』

1941年6月6日AM02:00

『きい』ブリーフィング室

「最早、一刻の猶予ありません。呉に入港しましょう」

そう高らかに告げるのは、横峰三等海佐である。歴史改変派の中心、淡い夢物語のような思想を抱く彼を止める者は1人も居ない……いや、それが正しい行動だった。

当時、国力の象徴とされていた軍艦が、護衛も付けずたった1隻で太平洋上をウロウロしていれば、それだけで米英の目を惹いてしまい、真珠湾奇襲の失敗や、戦争の早期化という別の歴史を生み出してしまう危険性があるからだ。そもそもこの艦は、既にハワイへ向かうだけの燃料の燃料も残っておらず、補給を受けなければ、鋼鉄の塊として、洋上を漂流する事になってしまう。

——それだけは絶対に避けなければならぬ。

横峰は胸の中に呟き、拳を握り締めた。

「昨日の騒ぎもある……」そう告げるのは、高橋三等海佐だ。

「SH-60Jの搭乗員達に落度は無い、正常な防衛反応だよ」

横峰は鋭い口調で言った。

「……食糧の問題もある。入港は必須事項だろう」

艦長吉岡の言葉に、横峰の顔から笑みが漏れる。

「では、8000に呉入港を開始する」

吉岡のその言葉を区切りに、ブリーフィングは終結した。一同はサッと同時に立ち上がり、揃うようにして敬礼する。

そして、徐々に退室を始めた。

退室した高橋は、ブリーフィング用にまとめておいた報告書類の山を抱え、1人自室へと戻り始めていた。低く単調な足音が流動的に廊下に響いていた最中、その音は途中で途切れる。

高橋の目の前には、廊下の壁にもたれかかる横峰の姿があった。

「……今日は」

「……ああ」

横峰は垢抜けた表情で、高橋を見据える。

「あまり乗り気じゃないな」

その鋭い語調は、胸の奥まで突き刺さった。

高橋が彼と再会して6日。かつて2人は同期であり、深い信頼関係を持っていた。しかし、海上自衛隊幹部候補生学校の卒業式後、2人は口論の末――暴力沙汰を起こしかけた。

その火種は『きい』への配属。

閑職たるきい勤務は、まさに屈辱的なものだった。3代目のきい勤務を受け継ぐ高橋は、愛国心の名の下、精一杯の努力をしていくつもりだったが、横峰はそれを否定した。

卒業の祝賀会、そこが2人の関係を一瞬引き裂いた。

1994年3月21日

海上自衛隊幹部候補生学校

ラッパの爽快な音と共に卒業生、儀仗隊、音楽隊の一同は整列、沈黙が生まれ始めた。

同時に、1台の車両が道路沿いに停車し、そこから1人の初老の男が顔をひょっこりと出し、右脚を地面に出して外に出る。

「……おい、あれ園部幕僚長だぜ」

密やかに囁いたのは幹部候補生である横峰である。高橋はそこから少し離れた地点に直立不動の体勢を維持しており、横峰の囁きを

無視した。

園部海上幕僚長の到着は場の人間達を騒然とさせていたが、栄誉礼は始まった。敬礼といった一通りの儀礼が進み、一同は大講堂に移動。そこで卒業証書授与式が厳粛の中で進み、高橋は授与待機の一団の列に入り、待った。

その列はすぐに進み、遂に高橋の元に幕僚長の姿がやってくる。壇上に歩を進めた高橋は、目前で証書を読み上げる園部海上幕僚長を見据え続けた。

証書を受け取った後、高橋はレッドカーペットの上を進んで自身の座席の元へと戻った。不安と緊張は、腰を下ろした瞬時で解き放たれ、ただ体を椅子に任せるしかなかった。

それから間も無く、横峰も滞りなく証書授与を済ませて自席に戻った。

卒業式後の練習航海から1日後。

高橋は、横峰主催の祝賀会へと呼ばれ、早々に足を運んだ。愛想良い女性店員が1人、盆に乗せた数十本のビールジョッキを卓上に置くと、一同は素早く、それを口に入れた。香ばしいつまみやオードブル類が次々と運ばれていくその最中、横峰は真剣そうな表層を浮かべていた。

「どうした？」

高橋は疑問に思い、尋ねた。

「……いや、今後の事なんだがな」

「今後……か……」

護衛艦『きい』に配属された2人だったが、きいは1994年――つまりは今年から10年に渡る大規模近代改装を受ける為、2人は別の護衛艦に配属される事となっている。

「俺はあんな閑職艦に配属されるのは真っ平なんだよ」

横峰はそう告げながら、右手にビールジョッキを持って一気に飲

み干した。

「まだまだ先だよ。10年後の事じゃないか」

高橋は少しでも気を紛らわそうと、そう発言した。

「……10年後と言ってもなあ」

「これは宿命と思って決意しないと」

「宿命……か」

微笑する横峰は飲み干したジョッキを荒く卓上に置き、冷やかな視線を高橋に投げ掛けた。

「俺はその宿命を抗ってみたいね。それが俺なりの“宿命”って奴さ」

それからの記憶を2人はよく覚えていない。

だが、暴力沙汰にまで発展しかけたのは同期の卒業生達が目撃しており、横峰が高橋の胸倉を掴んだとも、殴り倒したとも言うので、彼らもさほど2人と変わらないという所なのだ。

「覚えてるか？あの祝賀会で言った“宿命”」

横峰の問に高橋は静かに頷いた。

「今回がそれだよ。俺は現存の歴史に抗いたい」

「……歴史に抗う？」

高橋は渋面を作り、見据えた。

「それが俺なりの“宿命”なんだよ」

横峰はそう告げながら、高橋の横を通り抜けて去っていった。

第6話 宿命（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第7話 呉入港

第7話『呉入港』

1941年6月6日AM08・00

呉鎮守府庁舎

2階、朝明けの曙光差し込む司令長官室。

呉鎮守府司令長官の日比野海軍中將は、苛立たしげに警備隊責任者の報告調書に一瞥をくれ、大きな木製の机に置かれた正体不明の航空機が描かれたラフ・スケッチを見据えた。

机前では、今事件の調査責任者に抜擢された桐野少佐が立ち、その光景を見守っていたが、頭にあるのは、米英との戦争の事ばかりを考え続けていた。夜の景色——星空に駆け上っていく高射砲の弾丸と、それを直前で避け、逃げ帰った航空機の姿が絶えずして記憶の奥底から蘇り、不安と困惑の表情が浮かんでしまう。

「どうも分からない」

日比野長官は顔を顰めながら言った。「米英国の大使館から何の宣言も無いのは何故だ？ すぐにでも宣戦布告の行為だとして、言ってくるはずだ……」

桐野は黙したまま、ずっと立ちつくしていた。やがて、不承不承深く息を吐き、脳裏に浮かんだ考えを整理して、言葉を慎重に選んで話し始めた。

「日比野長官、もしかすると……あくまでも仮説ですが……両国ではないのかもしれませんが」

「違う？」

「そうです。あの……オートジャイロを開発出来る国は限られてきますが、攻撃を受けても宣戦布告を起こさない事を考えれば、必

然的に宣戦布告を狙うアメリカは除外、技術の低いイギリスなど、例外もいい所です」

日比野は耳を疑い、身を乗り出した。

「ならどの国だ？」

「……分かりません。何か別の勢力かと」

日比野はため息を漏らした。

「別の勢力？何をおかしな事を言っているんだ」

「唯一開発出来ると思われるドイツであれば、すぐに苦情が来るはずですし、イタリア・ソ連の技術力を推測すれば、先進国とは思えないのです」

「分からないな。理解不能だ」

日比野は頭を抱えて告げた。

「仮説ですの……もしかすれば、米英独のどの国かが極秘開発している為に、公に出来ないのかもしれない」

2人が唸るようにして話していると兵士が1人、部屋に入ってきた。兵士は青ざめた表層を浮かべており、体は自然と震えているようだった。

「どうした？」

桐野は渋面を浮かべて言った。

「呉近海に戦艦らしき艦影を発見。後、通信が……」

「艦の所属国籍は？」

日比野は真剣な表情で訊いた。

「不明です。ただ“呉への入港と上陸許可、責任者との会談”を要請しています」

兵士はややためらいがちに言った。

「どうなさるおつもりで？」

桐野は訊いた。

「……とりあえず、許可しろ」

日比野は重々しい口調で言った。

AM08・20

赤煉瓦と御影石で形造られた呉鎮守府を出て10分弱、日比野と桐野の2人は呉港の一角に到着し、徐々に迫る1隻の戦艦を視界に収めた。幅が約40m、巨大な体躯に独特の艦首を持つその戦艦は、2人とも何処かで見たような気がしてならなかった。始めに気付いたのは、日比野長官の方だ。

「……大和型か？」

その言葉は囁き程度だったが、桐野も耳に入れて思い出した。彼は現在、呉海軍工廠に属していて、計画にも大きく関わっているの
で、一般将校達と比べれば情報量は多い。

「何故……一体どういう事なんだ……」

桐野も密やかに言った。大和の事を一般兵士達に知らさない為だ。2人が注意深く眺めていると、大和型に酷似するその戦艦は、湾内に突入してメッセージを送ってきた。通信兵が足早に日比野の元へと駆け寄り、それを読み上げる。

『……我、交戦ノ意思ハナイ』

何となく、桐野はあの戦艦が危害を加える事はないと感じた。妙な話だが、この場ではそれが非常に重要な意味を持つ。近年は独自のコードやレーダーで敵味方を判別するが、この時代は人間の本能と視界に入る全ての現象の精査こそ、第1防衛線として機能する。日本海軍などは敵艦の発見に人の眼に頼っているのです、なおさら現実をよく理解出来る。

直進する1隻の戦艦はその速度を落とし、やがて港に到着した。

刹那、1機のオートジャイロが戦艦後部から出現したので、流石の2人も不安の波に襲われた。

オートジャイロは優美な弧を描いて空から港へと下っており、開けた一角へと着陸すると、周辺に爆風を吹き乱して鈍い摩擦音を響かせた。

三八式歩兵銃を握る陸戦隊と警備隊の兵達は瞬時に、オートジャ

イロの周りを取り囲んだ。

「撃つんじゃない、撃つんじゃないぞ！」

日比野は叫び、兵士達は銃口を地面に下した。

護衛の兵士と桐野、少数の将校達を引き連れて日比野と桐野はその機へと歩み寄っていく。爆音は上部のプロペラの停止とともに静まり始め、唐突に扉が開いて2人の男が出てきた。

その1人の手には、重厚な銃器が握られている。

日本人か？

日比野はオートジャイロから降りてきた2人の男を見据え、心の中で呟いた。顔から察するに日本人らしいが、短足短腕という日本人のイメージを崩壊させる程、標準的な欧米人の体つきをしており、日系米国人との見解が頭に浮かんた。

「何者だ？」

日比野は訊いた。

「……責任者ですか？」

50前半の男が歩み寄り、尋ねた。

「呉鎮守府司令長官の日比野だ。階級は中将」

これはすごい。

艦長吉岡は胸の中で呟き、その顔をまじまじと見据えた。しばらく息を整えて、制服の肩に付いた埃を払い落した。

その傍ら、同伴してきた横峰は両腕に銃を握って威嚇していた。

「日比野司令長官、我が艦『きい』への乗艦を望みます」

膠着する状態は吉岡の言葉で解け、日比野と桐野は顔を見合わせた。2人ともその行為が危険だと考えていたが、眼前の現状を見れば、あの艦が何なのかを知りたいと思っていた。

「……分かった」

日比野は告げ、オートジャイロへと乗り込んだ。

第7話 呉入港（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第8話 接触

第8話『接触』

1941年6月6日AM08…52

オートジャイロ―SH・60Jは早暁に燃える湾上空を飛んでいた。搭乗するのは、艦長吉岡・横峰三等海佐。そして大日本帝国海軍の日比野中将に桐野少佐。

日比野はふと、眼下の海を見つめた。後戻りは出来ない。唯一の逃げ道は陸戦隊と警備隊の武力威圧だ。日比野は足元でさざ波を立てている機体を見回し、轟きと衝撃を痛感しながら考えた。

もし……このまま帰れなかったら……。

そう理性は考えても、本能がそれを押え付ける。人の本能とは本当に恐ろしいものだ。精神や理念を超越して、争いを続ける人間を繋げる事さあるのだから……。

日比野はもう一度、振り向いて呉港を見た。湾岸施設の輪郭がころうじて見分けられたが、それは千里も離れた場所の光景のように思えてくるのだ。

「……貴殿らは何処に属している？」

日比野は低い語調で言った。

「日本です」

吉岡は答えた。

「そうか……日本か――」

「……しかし、我々の“日本”は此処ではありません」

SH・60Jが大きく揺れ、下降していたので一瞬ではあるが、日比野は憤慨した表層を浮かべていた。何を言っているんだ？

憤りは着陸とともに消え行ってしまった。

AM08・59

不意に轟音が聞こえてきた。同時に、オートジャイロの機内の窓から戦艦の重厚とした飛行甲板と、すらりとした艦体が矢のように飛び出してきた。これは……。

やっこのことで保っている体のバランスを崩さないように気を付けたが、日比野はオートジャイロから片脚を出して、戦艦への第一歩を果たした。甲板上には、10人近くの兵士が点在しており、日比野は思わず敬礼する形を取って見せた。

その刹那、兵士達は返答として敬礼を返してきてくれた。

「……少なくとも、意識はあるらしい」

そう呟くと、右隣で護衛の任に就く桐野は警戒しながら頷いた。程なく、背後のオートジャイロから2人の操縦士が降りてきて、静かになった。さっと後ろを振り向くと、巨大な艦橋と共に鋼鉄の輝きが視界に流れ込んできた。

艦長室。

2人がそこに案内されたのは、艦内を一通り案内されてからだった。

内装は質素なものであったが、21インチ程度の液晶テレビと瀟洒なソファ、それに比較的大きな木製のデスクが中央近くに置かれていた。

日比野と桐野の両名はソファへと案内され、腰を埋めた。

「……どういふことだ？ “日本”ではないとは」

「つまりは、我々が別の……世界からやってきたということです」
吉岡がそう答えたので、日比野はますます眉間に皺を寄せる事になった。

「意味が分からない」

日比野は重々しい口調で告げた。

「……我々は“未来”から来たということですよ」

——沈黙。

静謐に満たされた室内は——無の世界。

この戦艦に呼び込まれた2人は顔を見合わせずとも、一致する結論だと感じた。

「馬鹿にするのもいい加減にして貰いたい」

日比野の冷やかな言葉に、吉岡は怪訝な表情を浮かべながら後ろを振り向いた。後ろには横峰が無表情で立っていたが、両腕に15冊程の書籍を抱え、前へと歩み寄って日比野の眼前へとそれを差し出した。

1冊は、朝雲新聞社より刊行された『戦史叢書』。戦前の事から真珠湾、終戦と続くその鮮明な文章を見た2人は——啞然とした。

また、昭和天皇とマッカーサーのツーショット写真も……。

極めつけは——広島・長崎の原爆白黒写真。思わず2人の目からは涙が溢れ出た。

「理解できましたか？」

吉岡の問いに対し、日比野は静かに頷いた。

「……認めるしかない」

「では……我々の要求ですが……」

吉岡が話そうとした矢先、涙を漏らす日比野は待ったの手をかけた。

「私には権限は無い。だが、要求する席は設けてやろう」

「……感謝します」

2人は立ち上がり——握手を交わした。僅かなる希望を抱いて……。

第8話 接触（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第9話 帝都訪問

第9話 『帝都訪問』

1941年6月25日AM10…12

東京霞ヶ関

帝都東京の空は、晴々しく澄み切っている。

四方八方が赤煉瓦とガス灯、独特の風貌の人混みによって連なり、その上空には白いインクの染みのように、点々と雲が浮かんでいた。黒塗りの古き良き外国車に魅せられた吉岡は、よく整えられた座席に腰を埋め、流動する帝都の姿に圧巻させられる。こんな光景中々お目にかかれない。

吉岡の横には、横峰と日本海軍の桐野少佐。日比野呉鎮守府司令長官に指名された、目的地までの道と、そこでのバックアップを兼ねた水先案内人である。

なお、高橋三等海佐は副長として艦長不在の『きい』を任されている。

2人が呆然として帝都の景色を見据える中、桐野は懐かしみを感じて見入っていた。

「……あっ、見えてきましたよ」

そう告げた桐野の声は、どこか嬉々とした感触があった。

ともかく、3人を乗せた車は煉瓦張りの大通りの路肩に流れるようにして右折し、帝都の栄華を象徴する1つの建物の中に入った。

海軍省。

瀟洒な赤煉瓦に彩られる外観は、正に栄光を示す。陸軍省が市ヶ谷に聳えるのに対し、海軍省は一等地中の一等地である霞ヶ関に聳えている訳で、多くの政府施設が集中するこの地域に存在するとい

うことは、その重要性を真に知らしめている。

3人はドアを開け、外へと一歩足を踏み出す。心地良い涼風が首元を伝い、まるで来訪者の到来を祝福するかのようなだった。

英国人、ジョサイア・コンコルドのセンスの良さが見るうち見るうち伺え知れた。

3人が建物に入ると、すぐに案内の人間がやって来た。3人は言われるがまま奥へ奥へと歩を進めていき、やがて一角で静止する。前方には、瀟洒な扉。

桐野が先頭へと進み寄り、扉を拳の甲で2回程叩く。ハーレーダビッドソンで闇夜の呉を爆走し、司令長官官舎の正面玄関扉で行った20日前のように……。

それを考えれば、桐野も今の状況がおかしいと思わざるを得なかった。

「……よく来てくれましたな」

扉を開け、笑みを漏らしながら中に居た1人の男は言った。

彼は海軍大臣、及川古志郎である。

2人は及川の差し伸べる手先にある洒落たソファへと言われるがまま腰掛け、その背後に桐野が直立不動で待つ……という形になった。及川は2人の前のソファへと腰を埋める。

「光栄です」

吉岡は嬉しそうに言った。

「呉からの報告は聞いていますぞ。何でも“未来”から……」

「はい……我々も詳しくは知りませんが……」

そう告げる吉岡に、及川は待ったの手を掛けた。

「まずは……証拠となるものを見たいのですが」

いぶかしげな表情を浮かべる及川の前に、10冊近くの書籍が音を立てて置かれた。興味深そうに見据える及川の眼光は非常に鋭かった。

流れるページ。

静謐の世界。

唸り声。

——そして、絶望の喘ぎ。

この惨劇とも救世主とも言える書籍群は、ここに来るまでにも歴史の証明品として多く流用されていた。

「……分かりましたか」

「……分かった」

2人の会話は瞬時に途切れ、吉岡は本題に入り始めた。

「では支援の方に——」

吉岡が話す最中、及川は睨みを利かせて黙らせた。

「1つだけ、問題点がある」

「……問題点？」

吉岡はパニックの波に襲われた。何が問題なんだ!?

「1941年6月22日開始の『バルバロッサ作戦』と言われるドイツの軍事作戦だが……」

及川は一息吐いた。

「……『バルバロッサ作戦』は“中止”された」

第1章 『時間旅行』 完

第9話 帝都訪問（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第2章『エジプト侵攻』第10話 ドイツ軍南下セリ（前書き）

・航空母艦『グラフ・ツェッペリン』性能諸元

排水量 基準22,500 t

満載31,367 t

全長262.5 m

全幅31.5 m

吃水7.6 m

機関

蒸気タービン×4基

（160,000 PS）4軸

最高速力…34ノット

乗員1,700名

兵装

10.5 cm連装高角砲12基

37 mm連装機銃22基

20 mm連装機銃7基

艦載機

Me109 T

計80機

ドイツ海軍初の航空母艦。当時、空母開発の経験が無かったドイツ軍内は日本からの技術提供を受けようとしたが、ある1人のドイツ海軍大佐による発案が早期にあった為、史実よりも早く建造が始まっている。

しかし、その海軍大佐が全くの無名であると同時にとびぬけた秀才ではない事。構造上が後の蒼龍級に酷似する事。ヒトラーが発案の発表と同時に、まるで何かに憑りつかれたかのように、無意識の内に空母建造発言を続けた事等、幾つもの謎を含む故、その存在はドイツ海軍内において一種のミステリーとされている。

第2章『エジプト侵攻』第10話 ドイツ軍南下セリ

第10話『ドイツ軍南下セリ』

1941年6月27日PM06・42

リビア

ハルファヤ峠

はるか北には、尖った稜線が連なり、その上空には白いしみのように雲が浮かんでいる。砂漠には見渡す限り、英軍の塹壕や土囊群が点々と散らばって映えている。その光景を、軍用車に搭乗していたエルヴィン・ロンメルは静かに見据えていた。昼中には、車内は外気の気温に更に生温かい風を付け加えたサウナ状態になっていたが、夕先になって気温が下がり、涼しげな冷風が頬を伝ったので心地良かった。

数日前、トブルクを占領したロンメルは直後、ヒトラーからエジプト侵攻を命令された。トブルク軍港にはドイツ軍の新鋭空母『グラーフ・ツェッペリン』と戦艦『ティルピッツ』が留まっている。史実以上に早く、トブルクを占領出来たのは、その海軍戦力のおかげであった。

総統の御意志はよく分からん……。

6月4日、ソ連侵攻を中止してからヒトラーはその戦力の10分の1近くを北アフリカ戦線に投入し、6月25日にトブルク陥落。

それから2日経つが、ロンメル配下の兵は一新された。大半はソ連領内に向かうはずだった精鋭が揃えられ、戦線に並べられた。

「そろそろ始めるか」

ロンメルは西の淵に沈む太陽の光を浴びて地面に降り立ち、脱帽して剃り上げられた頭部を滑るように手で撫でながら、黄土に生え

る灌木の香りを運んでくる心地良き風を一身に受けた。太陽が堕ちていく中、ロンメルの手は上へ上へと伸びていき、頂点まで伸び切った。

「攻撃開始！！」

這うように延びた土手は、爆音に震撼した。

60両近くの？号戦車が同時に咆哮し、無数の砲弾が宙を舞った。その背後からは？号突撃砲のマイバッハHL120TRM12エンジンが唸りを放ちながら、狂ったように75mm榴弾が駆け上っていく。その側面からは、洋上に展開する空母グラーフ・ツェッペリンから発艦したMe109T艦上戦闘機と、飛行場から発進したMe109E戦闘機が五月雨式に峠の英軍防衛隊に襲い掛かり、MGFF20mm機関砲が火を噴いた。一度、荒涼に包まれるハルファヤ峠は、『Ok牧場の決闘』の如き突然の騒乱に襲われるのだった。不意を突かれた豪・ニュージールランドから成る植民地軍と少数の英兵で編成された守備隊は猛攻をただただ受けるしかない。

第5軽装甲師団が悠々と峠へ足を進められたのは、それから3時間満ちた頃であった。

1941年7月1日AM06・52

地中海は予想以上に静寂を保っていたので、戦艦ティルピッツの艦長カール・トップは悪寒を覚えた。前方には早暁が長い影を投げかけてくる。頭上へと上っていくMe109Tの轟きは遠く聞こえ、下らないもののように感じた。

報告が入り、艦砲射撃が始まった。

その矛先となるのは——英国軍の主要軍港——エル・アラメイン。ロンメル率いる第5軽装甲師団は一足先に到着し、英軍最終防衛線を完膚無きに叩き潰す準備を始めていた。

その最中、近海では動きがあった。

『敵艦隊発見す。戦艦2隻、空母2隻、軽巡5隻、駆逐艦17隻から成る……』

「地中海艦隊のお出ましだ」

戦艦ティルピッツの艦首が東を向き、波がさざめき立った。右手の護衛艦群も同時に方向展開し、迫り来る英国海軍H部隊の猛攻に備える。

とはいえ、その大半の艦艇を爆撃や人間魚雷で失っている地中海艦隊は逆境に立たされた状況であり、その戦力をH部隊が補う形を取っていた。

両艦隊は接近し、やがて遠距離での同航戦が始まった。双方とも、高速で直進しながら主砲を相手に向けて撃ち続けた。水柱が1つ、また1つと海を切り裂きながら立ち昇ったが、高速で移動している為に、中々命中には繋がらなかった。

しかし、相手はネルソンとヴァリアント。20年以上も前の老艦である。

ティルピッツの38cm砲が咆哮し――遂にネルソンが悲鳴を上げ始めた。

第2章『エジプト侵攻』第10話 ドイツ軍南下セリ（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第11話 エル・アラメイン沖海戦

第11話『エル・アラメイン沖海戦』

1941年7月1日AM07・21

地中海

空から眺めると、紺碧の海原に2つの太陽がかかっているように見えた。

1つは桃と杏と金色の光の帯を引きながら、地中海洋上を燦々と照らしている。だが、そのもう一方——海間に、紅連の炎に包まれたもう1つの太陽が浮かんでいるのだ。その火の玉は英軍地中海艦隊の護衛団の間に腰を据え、早暁空に向かっておぞましい炎の刃を突き立てていた。

もちろん、これはもう1つの太陽などではない。本当は、それは戦艦なのだ。今や、戦艦だったと言うべきだろう。英海軍の栄光——戦艦『ネルソン』の最期の姿である。地中海艦隊の乗員達はデツキに詰め寄かけ、その様を見ていた。

空母『アーク・ロイヤル』第1次攻撃隊長、フランシス・ハウス少佐もその1人だった。

「Bullshit! Kraut! (ふざけんな! キャベツ野郎!)」

彼は憤慨し、苛立たしげに肩をいからせた。青磁色のビロードのように滑らかな海面を、ネルソンが威風堂々進んで居たはずの地点には、何か形の分からないものがあり、苦臭と黒煙を放ちながら左へ右へと流れていく。

我を忘れたハウスは第1次攻撃隊を率いて即時反撃に打って出た。戦艦ネルソンを粉々に破壊したキャベツ野郎——クラウト——ドイ

ツ海軍兵へのリベンジである。

12機のソードフィッシュは戦艦ティルピッツに針路を向ける。不意に、ドイツ海軍の駆逐艦の対空砲火のくぐもった音が響いたが、全機はその編隊隊形を崩さずにティルピッツへ進んだ。

ドイツ艦の対空砲は激しく機銃弾を空へと放ち、防衛に努めていた。厚い弾幕が張られて第1次攻撃隊もついに被害者が出始めていた。

ハウスは後ろを見た。もう後戻りは出来ない。唯一の逃げ道は――勝利だ。

決意したハウスは操縦桿を限界まで傾けた。同時に機体は高度を下げ、紺碧の海原と同化する。その先にあるのは――ティルピッツ――何者でも無いドイツ海軍の戦艦だ。

7月1日AM06・01

……こんな箱船、糞喰らえだ。

海戦開始前、空母グラーフ・ツェッペリンの飛行甲板には、第2攻撃隊のMe109T艦上戦闘機が列を作っていた。フライト・デッキからバランスを崩さないように気を付けながら、DB106Aエンジンが鈍い唸りを上げ始めた。程なく、Me109Tの重体を受けて艦体が軋んだ。

ジビレ・シュミット海軍少佐は、初の空母戦闘機乗りになる事を好ましく思っていない。今だ海軍内で空母の存在価値が確立されていないからだ。

Me109Tは他の音を全て掻き消すような爆音を轟かせながら――走り始めた。凄まじい衝撃を受けて体がえびそり、機体が浮かび上がる。そして、鋼鉄の飛行甲板を蹴って飛び立った。

矢の如く、飛び立った15機のMe109Tは体勢を整え、空で維持する。地中海の上空を翔る事1時間半、高速で飛行する10機近くの敵機を確認した。英海軍航空隊の雷撃機、ソードフィッシュ

だ。この敵に対し、誰にでも好かれそうなデザインと容姿の美しさ、そしてMGFF20mm機関砲を武器にして、Me109Tは迎撃に向かう。

シュミットの背後で、轟音が外気を切り裂いた。

はつとして振り返ると、戦艦ティルピッツの周囲に展開していた駆逐艦の1隻が、轟然と立ち昇る黒煙と水柱に覆われていた。駆逐艦は程なく、海に吞まれて沈む。それはソードフィッシュの雷撃だった。

英水兵
『ライミーを奈落の底に突き墮とせ!』

戦艦ティルピッツの通信兵から送られてくる畏怖混じりの声は、シュミットの耳に入った。

……言われなくともやってやるさ。

Me109T機内に轟く英水兵への軽蔑の言葉を聞き流しながら、シュミットは胸の中で呟いた。第2次攻撃隊の15機のMe109Tの先頭に立ち、大空を猛進する。編隊を組んでいたソードフィッシュはMGFF20mm機関砲の咆哮を受けて、散り散りになった。

ハウスは絶望の淵に居た。

ソードフィッシュに備えられた兵装は7.7mm機関銃が2門のみで、なおかつ機体性能でも完敗していた。だが、そんな事を考えず、ハウスは迫り来るMe109Tに立ち向かうとする。

機首を起こし、急上昇。銃撃をかすめるように避け、ソードフィッシュに奇跡的な性能を開花させた。元々、熟年パイロット達には素直に稼働するように設計されていたが如く、ソードフィッシュは経験のあるハウスを裏切りはしなかった。

シュミットの操るMe109Tが割り込んできた直後、編隊は寸断されて荒々しいドイツ海軍パイロット達に6人程あぶり殺されている為、ハウス隊の兵力は半分やられたことになる。

「ぶっ殺してやる！」

憤りが限界まで達したシュミットは巧みに操縦桿を操り、急降下した。Me109Tが2機、背後にとりつこうと同時に急降下した。異常な機体性能を発揮するソードフィッシュは、そこから急上昇して1回転。曲芸飛行にも精通していたハウスは、体を振り乱しながら形勢逆転した形で、背後から7・7mm機関銃で2機のMe109Tに猛撃を食らわせた。が、あまりにも速度が速過ぎて既に姿が無かったのだ。

不意に――背筋に戦慄が迸る。

シュミットの操るMe109Tは搭載されたMGFF20mm機関砲で軟弱なソードフィッシュの機体を撃ち抜いた。

ハウスは左腕をやられ、これ以上の戦闘は不可能であった。

ハウスが絶体絶命の時、水平線の彼方からは地中海艦隊を恐怖に陥れる兵器――急降下爆撃機JU87が大量の爆弾を積み、悪夢を与えようとしていた。

第11話 エル・アラメイン沖海戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第12話 交響曲第5番（前書き）

ぜひ、交響曲第5番『運命』を聞きながらお読み下さい。

第12話 交響曲第5番

第12話『交響曲第5番』

1941年7月1日AM08…33

地中海

空母『グラフ・ツェッペリン』艦橋

艦長のアルブレヒト・ベルンフリート大佐は艦橋に立ち、地中海艦隊に襲い掛かろうとするJU87急降下爆撃機を見据え、笑みを漏らした。「……決まったな」

中柄で身だしなみの良い北部出身のこの紳士は、僅かに北ドイツ訛りがある。蒼色の瞳はドイツ軍人らしい冷厳さの中に優しさを備え、鼻は鋭く尖っており、薄桃色の肌はビロードのように滑らかだ。剃りあげられた黒髪の中には、少なからず金色のブロンドが混じっており、塗色料で程よく染められていた。靴は磨き上げられていて輝きを放っている。

「聞こえるか？JU87の行進音だ」

そう呟くベルンフリートに、左隅に立っていた参謀長は首を傾げた。

「……ラッパは廃止されたのでは？」

「そうじゃない」ベルンフリートは答えた。「飛魂の音色さ」

ドイツ空軍のJU87急降下爆撃機は旋律を合わせたが如く、編隊隊形を確保する。同時に、Jumo211エンジンの低く単調な鼓動が重なり、同調し合った。

ベルンフリートは蓄音機を取り出し、それを艦橋中央に置くと、隅から1枚のレコードを取り出して蓄音機の盤へと静かに置いた。レコード針が熱を帯び始める。円筒からは曇りがかった音が響き始

め——それは1つの音楽として、形成されていく。

——交響曲第5番『運命』。ドイツ人作曲家、ベートーヴェンの傑作の1つだ。

ババババーン！

4つの音が唐突に鳴り響き、更に4回の旋律。それは心臓を締めんばかりの力を秘めていた。戦闘中も、『運命』は人の心を大きく揺さぶる。

「……“運命”が扉を叩いたんだ」

ベルンフリートはそう言い、いたずらっぽく笑みを浮かべながら、ドアをノックする仕草をやって見せた。同時間、地中海艦隊の本陣の上空では、第1波攻撃が高度500m地点から250キロ爆弾を落とし——連続して4回の爆音が響いた。まさに“運命”だと、ベルンフリートは言った。

運命は、高低差の激しいパートに突入。第2波が過ぎ、第3波爆撃が続くといった具合に、音楽に沿う大爆撃が、地中海艦隊を激しく揺さぶるのだ。

その最中、参謀長はベルンフリートは空想上の指揮棒を持ったかのように激しく両手を振っているのに気付いた。もちろん、オーケストラメンバーは他でもないJU87急降下爆撃機。中期パートの滑らかに続く音楽と共に指揮棒の動きは小さかったが、一度音楽が激しくなるとその手付きも激しくなり、頭を振り乱して架空の音楽団の指揮を続けるのだった。中期パートの終盤では、再びJU87の急降下爆撃が続き、ババババーンというリズムと同時に爆撃が続いた。

一度、音楽が途切れると、上空に展開していたJU87の一部が最後の爆弾を落として撤退を始めた。同時に、後ろからは後続の急降下爆撃隊が迫りつつあった。

爆撃後援隊到着と同時に、演奏開始。

冒頭と同じく、ババババーンという旋律が響くのだが、それは最初の鈍器のような鈍着な感触を持たず、ナイフのような鋭さを備えていた。精鋭部隊の到着による、精密度の増した爆撃が始まる。

パート全体が高音、JU87も間髪入れずに爆撃していた。新米と精鋭の根性と経験の差といった所か。小川のせせらぎが如き音が艦橋を迸る中、雲間に隠れながら進むJU87は、空母『アーク・ロイヤル』直下に到着すると、瞬時に急降下して250キロ爆弾を投下した。同時に音楽も高音となる。

囁きの音楽は大爆発し——アーク・ロイヤルも炎上す。

終盤パートは爆音と共に続き、アーク・ロイヤルや戦艦『ヴァリアント』も爆発する。

大爆撃によって壊滅寸前の地中海艦隊は最後のパートで序盤同様のバツバツバーンという低く単調な音と共に、引き延ばした3回の重点爆撃により——完全崩壊した。そこで、レコードも終わりを告げた。

迫真の演奏——を終えたベルンフリートは——指揮棒を下した。同時に、艦橋内に喝采の拍手と歓喜が巻き上がった。

艦橋の窓は——終焉を迎える地中海艦隊の姿に染まっていた。

第12話 交響曲第5番（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第13話 エル・アラメイン沖海戦——決着

第13話『エル・アラメイン沖海戦——決着』

1941年7月1日AM09・42
地中海

『……………♪』

突然、無線越しに鳴り響いてくるその音楽を聞き、ベートーヴェン作曲の交響曲第5番『運命』である事をジビレ・シュミット少佐は瞬時に気付いた。人生に激しく関係する“運命”を密接に描いたこの曲は、ベートーヴェン傑作の森の1作品だ。やや戸惑いを覚えながらも、テンポ激しい音楽は後方に鳴り響く爆音や金切り音を消し去ってくれた。

ふと気付くと、前方で焼かれるソードフィッシュは——なくなつた。焼失したのではない、完全にその姿を消していたのだ。

1機の敵機が——30秒前には俺の鼻先に黒煙を撒き散らしていたあの骨董品は何処だ？

シュミットは視線を360度回転させて搜索したが、旋律を奏でるJU87急降下爆撃機隊と炎上する敵艦の姿しか見えなかった。

それから2分後、シュミットは空母1隻が沈む様と、もう1隻の空母が大破した戦艦を引き連れて帰る様を見た為、紺碧の海の上を後にする決意を決めた。

気付けば、交響曲第5番は——既に終わっていた。

英国海軍のフランシス・ハウス少佐は苦痛を抑えながら帰投していた。

ほんの2～3分前まで、ハウスは雷撃機ソードフィッシュに乗り、11名の勇猛で尊する価値を持つ男達と共に――忌わしき第3帝国の戦艦『ティルピッツ』相手に戦っていた。だが、ティルピッツを示していた針はMe109Tの面々によって大きく揺さぶられて、地中海の空で止まった。そして相手は無数の銃撃を加えて、第1波攻撃隊を壊滅させた。ハウス機にも、50発以上の銃撃が加えられていたが、翼に多少の穴を開けられた程度なので難を逃れていた。喜べばいいのか、叫べばいいのか、分からなかった。少なくとも、後者の方を先にやるべきなのだろう。敵は弄ぶが如く、11人の命を奪ったのだから。

地中海の空で俺を追い回したあのくそ野郎は最初からその気だった。

「……ッ！」

激痛に身がよじれる。慌てているので、止血も出来ない。

顔を引き攣らせる中、ハウスは自力で母艦への帰還を目指していたが、最早その夢も打ち砕かれようとしていた。アーク・ロイヤルが燃えているのだ。

ハウスは鉄壁空母『ヴィクトリアス』に着艦の望みを託すしかなかった。

空母『グラーフ・ツェッペリン』艦橋

AM10・58

艦長のベルンフリート大佐は窓の前で足を止め、不透明な視線を地中海艦隊に向けて放った。ベルンフリートは前方の燃え盛る空母『アーク・ロイヤル』の火明かりを浴びながら、ねじくれた鋼鉄の塊をただじっと見ていた。黒煙の漂う洋上では、JU87が吹雪のように舞い、渦を巻いて飛んでいた。

「……エル・アラメイン掌握まで後1歩。……地中海艦隊殲滅ま

で後2歩」

ベルンフリートが呟く。「……エジプト掌握まで、後3歩……
といった所かな」

その表情には——どこか曇りが見えていた。

1941年6月25日AM11…38

東京霞ヶ関

『海軍省』

「……事の始まりは6月3日。ヒトラー総統が突然に『バルバロッサ作戦』中止を打ち出し、同時に海軍の大増強を表明。当初8隻だった空母建造数を3倍の24隻に変更し、その予算も大幅に増やしました。リビアでは、第5軽装甲師団が包囲状態のトブルクを砲撃や空襲、洋上戦力で叩き潰し、多くの艦艇を軍港内に入れて、エジプト侵攻への守備を固めています」

及川の言葉に、吉岡と横峰の2人は根が生えたようにそこから動けなくなっていた。

「そんな……何故……ありえない……」

横峰は鯉のように口をパクパクとさせながら言った。

「6月3日というのは本当ですか？」

「もちろん、正式には後日の6月4日ですが、3日夜7時頃には発言していたと」

吉岡はそれを聞くや否や、深く考え込んだ。日本とドイツの時差は8時間。『きい』は太平洋上で午後10時頃にタイムスリップしたわけなので、ドイツ時刻では午後2時。それから5時間後の発言というのは——出来過ぎた偶然なのだろうか？

「我々は……既に歴史を激しく変えてしまった」

吉岡は呆然としながら言った。「最早、歴史改変の速度は止まら

ない」

……ならば、なおさら歴史を変えなければならない。

横峰は胸の中で呟いた。目は爛々と輝いていた。

「艦長、我々は歴史の傍観者……とはいかなくなり始めたようです」

即ち、腹を括れ……か。

「我々は……戦う。いや、抗うべきです」

横峰の言葉には、力が込められており、それが吉岡の喉をめがけて飛びかかる。吉岡はその直後、決心を固めた。

「……1歩、線を置いた状態ではあるが……我々は確かに交戦しなければならぬ」

吉岡は、激しい不安を覚えながらも——覚悟を決めた。

第13話 エル・アラメイン沖海戦――決着（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第14話 夏の訪れ

第14話『夏の訪れ』

1941年8月5日

海上自衛隊と『きい』が出現してから2ヶ月程が過ぎた。その未来戦艦の2人の乗員は、帝都東京に訪れてから既に1ヶ月の歳月を帝国ホテルに宿泊して過ごし、海軍や陸軍、政府内部や天皇陛下に面会し続け、説明と歴史改変の計画を提案した。その見返りや歴史改変計画の内容に納得出来ないと反対する人間も少なからず居たが、未来の惨状を知れば考えも変わる。吉岡と横峰の2人は、海軍少佐桐野の助言やバックアップを受けながら、コネクションを増やしていった。

真っ先に決められたのが、護衛艦『きい』のドック。これは大和級同様のものを呉に増設する事となり、8月上旬から作業が進められている。

また、中国の話も協議の卓上に上げられた。

未来情報によってもたらされた大慶油田を交渉条件とし、蒋介石と話し合ったのだ。大慶油田自体は、元々史実で日本陸軍によって発見されていたのだが、当時の日本の採掘技術の低さから、陸軍は商業開発を諦めていた。

とはいえ、石油を輸入に頼り切っていた中国にしてみれば、金の山である。未来の現状も相まって蒋介石は講和を承認し、満州国を認める代わりとして、中華民国建国と油田の共同開発権が与えられた。

その間、日本は満州の遼河油田開発を進めた。

さらに協議は続けられ、大艦巨砲主義も見直される事となった。

大和級第3番艦『信濃』、第4番艦『紀伊』は装甲空母としての建造が決定する。

1941年8月5日PM02:08

東京千代田区

帝国ホテル

「地中海の現状を聞いていますか？」

桐野の言葉に、2人は真剣な表情で首を横に振った。海軍少佐で諜報技術を知り、人目を惹かない狡猾な海軍将校の彼は、時々世界情勢についての情報を回してくれた。

「……7月2日、エル・アラメイン沖海戦が終結し、英地中海艦隊は損傷激しいH部隊所属艦艇を率いてアレキサンドリア軍港に戻った訳ですが、つい2日前にイタリア海軍とドイツ空海軍が魚雷攻撃や空爆を敢行し、8割近くの艦艇を撃沈・損傷させたそうです」

「8割も？」

横峰は意表を突かれた声で言った。

「これで事実上、地中海艦隊は動けなくなった訳だ……」

吉岡は呟いた。

「10月には、エル・アラメインのロンメル將軍率いる大部隊が、エジプト全域の占領作戦を開始するとの事です」

「……エジプト陥落か」

バルバロッサ作戦の中止以降、6月から始まったエジプト侵攻作戦は予想以上のペースで進んでいる。英海軍は地中海艦隊を失った為、現在地中海にはH部隊しか残っていない現状だが、H部隊は専ら大西洋での作戦を優先しており、地中海まで手が回らない状態にあった。唯一生存した空母『ヴィクトリアス』も、飛行甲板に250キロ爆弾の直撃を食らった為、使用不可能となっている。

一方、ドイツ海軍はグラーフ・ツェッペリン級航空母艦第2番艦『オットー・リリエントール』が10月就役、3番艦『ペーター・シュトラッサー』も来年就役を控えている。『空母24隻構想』とも『第3帝国海軍大機動艦隊構想』とも呼ばれるドイツの空母大建造政策は、着実に進んでいた。

第2章 『エジプト侵攻』 完

第14話 夏の訪れ（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第3章『三国同盟崩壊』第15話 あじあ号にて

第15話『あじあ号にて』

1941年11月12日07・03AM

満州国

大連／連京線

エアホーンが鳴り響き、甲高いアクセルの音が空気を切り裂いた。同時に、車軸が悲鳴を上げながら進み始めた為、3等客車に席を持つ3人の海軍少佐――は胸を撫で下ろして座席に身を任せた。

車掌の号令が徐々に遠のいていく……。

機関士は自動投入されていく石炭の前に当惑を浮かべながらも、要領良く列車を進ませる作業を続け、ただそれに集中する。牽引を担うパシナ機関車も客室も独特な流線型のフォルムを持つこの特急列車『あじあ号』は、実験的取り組みを多く導入している満州国の中でも、象徴的な存在だ。特有の形状に加え、二重窓による保温性向上や冷房装置といった空調設備の充実等、最先端技術をふんだんに取り入れている。

この7両編成の特急列車の3両目、3等客車に3人の海軍少佐――高橋、横峰、桐野は乗車していた。3人は対面4人掛けの座席に座り、二重窓の先に広がる景色を眺めていた。

此处、満州に3人が居るのには訳がある。

今年9月、帝都で活動が続いていた吉岡と横峰は、遂に1つの歴史改変を成功させた。

――それは『三国同盟解消』である。

7月から、着実にコネクションを増やしていた2人は歴史改変の

第1目標として、『日独伊三国同盟』の破棄を願い、その成功に向けて活動を続けた。それは日本が米国の目から逃れる為でもあったが、ドイツとの関係が非常に無意味であるという考えが強かった。元々、ドイツの兵器技術は日本の技術では理解することさえ無理であった。

それであればいっその事、ドイツとの関係を断ち切ってしまうといい。戦争回避も出来る。横峰はそう考えて艦長吉岡に提案し、吉岡もその思想に賛同した。

破棄工作は無事に進んでいった。当時三国同盟に反対し、『条約反対三羽ガラス』と揶揄された山本五十六、井上成美、米内光政の3名との関係を強め、海軍内の同盟破棄論を扇動。陸軍にも揺さぶりを掛け、やっとの事で今に至る。

10月、実現となった三国同盟解消は、駐在大使や軍上層部の誰かが直接対談して進められると思われていたが、ドイツ側は予想外の“交渉相手”を提示してきた。

それは――護衛艦『きい』関係者。

大日本帝国の重要機密情報であった『きい』の存在を何故ドイツが知っているのかは疑問が渦巻いたが、現在の国情を考えれば迷う暇は無かった。

当初は、吉岡、横峰の2人に護衛兼通訳の桐野という3人が向かう予定だった。しかし、高橋はその危険性を考え、艦長兼任を要求して承認された。

吉岡はきい内に留まり、高橋を加えた3人で向かう事となった。

1941年11月12日、翌朝。

大日本帝国海軍の少佐の位と、新品の海軍礼服を与えられた高橋三等海佐と横峰三等海佐は、対面4人掛けの座席に桐野少佐に向かい合う形で座っていた。これは表向き隠密下での作戦であったための配慮である。三国同盟解消は、天皇陛下も了承した事項として国

家規模で進み始めていたが、陸軍内では反対する人間も少なからず居た。ましてや、日中戦争終結で引き上げてきた関東軍は満州内で莫大な戦力を保有しており、何が起ころうともおかしくない状態であった。大地を歩くだけでも、危険な訳だ。

3人は満鉄連京線から京浜線、浜洲線からシベリア鉄道に乗り換えてモスクワへと向かい、そこからベルリンへと向かう手筈となっている。交渉場所は今だ伝えられておらず、現地で知らされる事となっていたために、3人は不安を隠しきれずにいた。

——結論から言えば、危険な旅だ。

3人が今回、特務大使でありながら3等客車を利用したのも、爆死の心配をしなくていい“その他大勢”の一般人で居たければ、多少サービスの質が劣るのもやむを得ないからだ。

度々、陸軍暗躍の舞台となっている満鉄。そこを自分が利用している……今現在。

隣に座っていた高橋は、横峰の動揺に気が付くと表情を変えることなく、静かに横峰の顔を覗き込んだ。

「……分からないな」

高橋は呟き、横峰は我に帰った。

「何が？」

「ドイツだよ、何で俺達の存在が知られている？」

「陸軍が漏らしたのか……海軍が漏らしたのか……それとも……」
横峰は低い声で言った。「ドイツのスパイが漏らしたのか」

高橋は唾を口に含んだ。

「どんな機密情報も完全に防ぐことは出来ない。コネクション形成に躍起になっていたから、恐らく民間人も2~3人位は知っているかもな」

「寓話として、信じる者は少ないでしょう」

付け加える形で、桐野は言った。

「誰も『きい』の全貌を知る人間は居ない。此処にいる桐野少佐と初めて乗艦した日比野中将、それに山本大将を含めた数名しか、

あのフネには乗艦していないんだ。桐野少佐が言ったように、直接対面していない人間は、大半が半信半疑だろう」

「認めたくない人間も居るでしょう。その連中が流したのかもしれない」

桐野の言葉に、2人は唸るように同調した。

「もう1つ教えて欲しいんだが」高橋は両手を握りながら言った。「北アフリカはどうなってる？ドイツはソ連に侵攻すると歴史で学んだが……」

1941年6月22日、ドイツ軍はソ連領内侵攻作戦『バルバロッサ作戦』を発動。ドイツ軍はあっという間にソ連領内へと侵攻し、破竹の勢いでモスクワまで迫った。

しかし戦況は悪化。敗北を喫し、敗戦へと追い込まれる。

「それは分からないが、バルバロッサ作戦が無かったからこの“あじあ号”は動いてるんだ。むしろ感謝するべきじゃないか？」

横峰はいたずらっぽく笑みを漏らして言った。史実では1941年7月2日、独ソ戦開始と共に対ソ連軍防衛の為、70万の兵力を派遣した『関東軍特種演習』によってあじあ号は運休しているのだが、独ソ戦が無かったので、支障無く運行している。

シベリア鉄道の使用に関しても、独ソ戦が無かった訳だから寛容になっている。

「いや、別に悪いとは言っていないさ」

高橋は申し訳なさそうに言った。「だが、嫌な予感がするんだよ」

1941年10月4日07..58PM

帝国ホテル

——約1か月前。

夜膳の会食は豪華なもので、洋食が大半であった。

3人の海軍軍人――山本五十六、米内光政、井上成美は同じくして違う2人の海軍軍人――吉岡一等海佐と横峰三等海佐と向き合った。横峰は震えが止まらず、2人の海軍大将と1人の海軍中将の顔を伺うようにして、見据えていた。

料理と飲み物を純白の卓上に置き終え、料理長がいそいそと会席の場を後にする。カートの4車輪は、鈍い音を立てて、程なく消えた。

前菜の冷え切ったニース風サラダはオリーブ油とアンチョビの香りが漂い、隣のスープと同調する。メインディッシュのシャリアピンステーキは1936年に筒井料理長によって考案されたもので、事前に玉ねぎのみじん切りに漬け込んでおいたサーロインは程良く焼かれていて、玉ねぎの効果で柔らかく仕上がっていた。

近くにいた給仕の2人の男はグラスに真紅の赤ワインを注ぐと、3歩後ずさって直立不動の体勢を取った。

「……未来の人間というのは、本当なのかね？」

山本大将は渋面を浮かべながら訊いた。

「無論、事実です」

井上と米内は辛辣な視線を吉岡に送っていたが、山本だけは違っていた。

「あの艦を見て頂ければ分かるかと」

「分かっていたさ。念の為だよ」

山本はいたずらっぽく笑みを浮かべながら言った。

「未来の現状も把握なさっているとか……」

吉岡は眉間を顰めながら訊いた。

「ああ、噂程度だがね。この会食で教えてくれるのだから？」

隣で待機していた横峰は、慣れた手つきでノートパソコンを起動し、内部に蓄えた膨大なデータを――まるで企業のプレゼンテーションのような形で見せつけた。

10分間に渡る未来との対面の後、涙を漏らす井上と米内の横で、山本は涙を流していなかった。

「……思い描いた通りの未来だ。あつてほしくない……ね」

山本はワインを口に含んで言った。「涙は当に枯れ果てている」

「山本司令長官、この惨事を変える方法は……」

「無い……だろう？」

寂しげに、山本は言った。

「いえ、今からでもやれます。まずは三国同盟を解消したいのです」

吉岡は真剣な表情で告げた。

「だから呼んだのか？」

井上中將は涙を漏らしながら言った。「長官、私は賛同します」

「同じく、考える点が多いが……」

米内大將もやや考え込みながら、同意を示した。

「……我々は同盟反対三羽ガラスだ。今回は“同盟破棄三羽ガラス”になってやろう」

山本はそう言うと、その場にいる4人と握手を交わした。

第3章 『三国同盟崩壊』 第15話 あじあ号にて（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第16話 あじあのカツカレー

第16話『あじあのカツカレー』

1941年11月12日07・18PM

満州国

特別急行列車『あじあ』食堂車

3人の海軍少佐は中央に位置する食堂車へと向かい、あじあ号の夕食を味わおうとしていた。高橋はさっと3等車両から向こう側の食堂車へ引っこみ、扉を閉めた。そして2人の後へと着いて行った。2人は扉からすぐ右手前の机へと腰を下したので、高橋もそこに座った。純白に染まったリネンのテーブルクロスはきちんと畳んであったらしく、折り皺が出来ていた。鼻を近付けてみると、まるで高山の麓で干してあったかのような清潔なおいがして、思わず顔が綻んでしまう。

3人が席に座ると同時に、1人のウェイトレスが笑みを浮かべながらやってきた。金色のブロンドヘアと、蒼白の肌はロシア人特有のものだ。黒いエプロンドレスを身に纏い、左腕には白布が掛けられている。彼女は堅苦しくない、慣れた態度で礼儀正しく自己紹介した後、ビーフカツカレーを勧めた。

「じゃあ……それで」

高橋はぎこちない様子で告げ、2人も同調した。ウェイトレスは深々と一礼した後、早々に去って行った。

「後、20分ぐらいだな」

「ええ、それぐらいでハルビン駅に到着するでしょう」

高橋の言葉に、桐野は答えた。

「ようやく……といった所か」

横峰は唸るように言った。

「いや、まだまだこれからだよ。ドイツの事もあるがソ連の事もある。この三国同盟破棄の事を知れば、ソ連も何をしてくるか分からないぞ」

高橋は不安げな表情を浮かべて告げた。

「知らせる人間はいるが、スターリンは信じないだろうな。『バルバロッサ作戦』でも、スターリンはドイツ軍の動きを知らずながらも、人間不信でその情報をSIS（英国情報局秘密情報部）が流した誤情報として信じなかった」

そこは彼等にとって、都合の良い事実であった。この頃、既にソ連では65%の将校が粛清され、優秀な人材は僅かしか居ない。3人の日本海軍将校がシベリア鉄道を使用する事は、事前にソ連側に伝えられていたが、スターリンはその事実さえ信じようとしなかったのだ。あくまでもSISの策謀だとして、英国に対する監視の目を光らせるので3人はその存在を知られながらも、隠密下で動くことができた。

不意に、2つの靴音が反響しながら近付いてきて、3皿のビーフカツカレーが純白の卓上へと置かれた。最初に出会ったロシア人の女給は銅色のポットを手に取り、半透明の冷水を硝子コップへと静かに注いだ。

「ごゆっくり」

女給の靴音はまたもや反響し、足早に消え入った。残された3人の眼前には、湯気の立つビーフカツカレーが置かれ、光輝くスプーンがその前で横たわっていた。

「……美味しい。まさか満州でビーフカツカレーが食べれるとは」
「流石に『きい』のには負けるかもしれないが、それでも十分な味だな」

横峰はそう言いながら、スプーンを皿に滑らせた。

やがて突然、ハルビンの街々が目の前に立ち現れた。倉庫や新しい建物がちらほらと見え、ゆったりと静かに景色が流れていった。

西の淵には、沈み行く茜色の太陽が頭を覗かせている。

——3人が無言で夕食を食べ進める中、あじあ号はハルビン駅に到着した。

11月13日09…55AM

オトポール駅

翌日、ハルビンから浜洲線で向かった3人はオトポール駅でシベリア鉄道に乗り換えの為、切符の購入を進めていた。切符売り場近くに立ち、3人は辺りを見渡した。

『オトポール事件』で知られるオトポール駅は、ソ連—満州国の国境沿いに位置し、1938年にはナチスの迫害を逃れる為、2万人に及ぶユダヤ人が詰めかけた事もある。

しかし、今は人影も少なく、寂れた廃駅のような光景となっていた。

3人はここで、ロシア人の通訳者と会う約束をしていた。留学経験や欧米での駐在武官の経験から、英語やドイツ語学に堪能な桐野少佐でも、ロシア語には精通していない。シベリア鉄道を怪しまれず、支障なく進むためには、そういった人間が必要となる。

数分後、1番ホームに鈍い靴音が響き、3人はその音源の先を見据えた。アレクセイ・ニコラエヴィッチ・ヴァシレフスキーは、胸板の厚い男で図体がでかく、漆黒の髪を持ち、赤く膨れ上がった団子鼻が特徴的な人物だった。簡素な農民風の衣服とは裏腹に、頭にはツイードのハンチングを被っていた。その姿は、絵に描いたような成金商人か、凄腕ロシア人探偵——といった所である。

「ヴァシレフスキー……か？」

桐野はややためらいがちに、男の元へと歩み寄って訊いた。

「そうだ。あんたらが契約相手の3人だろ？」

「大日本帝国海軍の桐野少佐だ。こちらは高橋少佐と横峰少佐」

桐野は手先を2人に向け、言った。同時に高橋と横峰は軽く一礼する。

「よろしくな。これからあんたらをサポートするアレクセイ・ニコラエヴィッチ・ヴァシレフスキーだ。どうやら顧客さんは色々事情があるみたいだから、既に口止め料は貰っているよ」

桐野が金を取ろうと腰元に手を突っ込んだのを見て、ヴァシレフスキーは言った。

「お見通しなようだ」

「ああ、そうさ」

ヴァシレフスキーはまるで巨人のような笑い声を腹底から響かせた。笑みを浮かべる中、3人は切符売り場へと向かうヴァシレフスキーの後に続いた。

……こっちもお見通しだよ。その銃は護身用か？

桐野は、ヴァシレフスキーの膨らんだ歪な腰元を見て、胸の中に呟いた。

第16話 あじあのカツカレー（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第17話 大陸横断鉄道にて（前書き）

登場人物紹介

○桐野義樹きりのよしき

大日本帝国海軍所属。階級は少佐。33歳。

帝国海軍期待の新人。大尉時代には、武官としてドイツに駐在。その経験と独学、高度な教育を受けた結果、英語とドイツ語に精通している。『きい』出現後は調査主任、初の接触者、乗員護衛を経て『きい』と帝国海軍の仲介的役割を任されている。諜報活動にも長けており、冷静沈着な性格。

高橋、横峰とは同年代。

○アレクセイ・ニコラエヴィッチ・ヴァシレフスキー

ロシア人通訳士だが、人身売買仲買人・武器・宝石商といった複数の肩書きを持つ謎の人物。国家規模のクライアントを相手とした闇の仕事にも関わっており、日本やドイツを顧客にソ連国内でスパイ紛いの活動を行っている。

第17話 大陸横断鉄道にて

第17話 『大陸横断鉄道にて』

1941年11月13日11:06AM

ソビエト社会主義共和国連邦

k19・列車『ヴォストーク』

オトポールを出発してから約1時間。

ヴァシレフスキーは3人の傍をすり抜けて別車に向かった。流石の奴も便意には我慢が効かないようだ。縛られた鎖が解けたかのように3人は足を伸ばして、固まった腿の筋肉を緩ませた。この天井には、2～3本程のパイプが通っており、それが唯一の暖房設備だった。熱は石炭を燃やすストーブから発したもので、震動しているが、古過ぎるか手抜きなソビエト製品だけあって、すっかり冷えて機能していないものもある。3人は暖を逃がすまいとして、両腕をしっかりと体に巻きつけた。

満州がまるで春のようだ。

高橋はそう呟き、予め持ってきておいた熱材に摩擦を加えて熱を生じさせる。肌から染み入るぬくもりに笑みが浮かんでしまった。

「……寒いな」口を開くと、白色の吐息が漏れ出し、宙に舞った。

「流石はソ連、北国を甘く見てたよ」

11月のソ連は——正に地獄だった。この頃、史実ではドイツ軍がモスクワ攻略の『タイフーン作戦』が開始され、前線部隊が極寒の中で凍傷に苦しんでいたことだろう……。今頃、ドイツ軍はエジプト攻略の為、温暖なカイロで銃撃戦に精を出し、植民地兵を皆殺しにしているはずだ。

「1つ言えば、奴も甘く見ない方がいいと思いますよ」

桐野の言葉に、たちまち2人は顔を見合わせ、後ろを振り返った。ヴァシレフスキーはまだ帰ってきてない。

「俺もヴァシレフスキーの事を信用してはいない」

高橋は辛辣な口調で告げた。「奴は危険だ」

「――恐らく、右ポケットに銃が入っています」

刹那、列車がトンネルに入り、視界が遮られた。しばらく行くと、トンネルは左に曲がったのが震動として体に伝わり、3人は左に傾いた。

視界が遮られたと同時に目の緊張が解け、3人は聴覚に集中した。すると背後から、床を擦って歩く密やかな靴音が聞こえてきた。

3人は何も言わずに俯き、心臓の鼓動が速まるのを感じた。やがて、遠くの方で唸るような音がして、その直後、パイプに震動が走った。温い空気が頬を伝い、トンネル内の照明がちかちかと点滅し、高橋は誰かに見られている事を悟った。――これは暖房の熱気じゃない……人の息だ。やがて出口から光が差し込み、高橋は慌てて後ろを振り返った。

……誰も居ない。

「ふう……すっきりした」

背後から低い声色が震動と共に伝わり、3人は後ろを見た。そこには、満足気な顔を浮かべながらずんと歩を進めるヴァシレフスキーが居た。

3人はさつと顔を引つ込め、俯いた。横峰は何うように前の大男を見据えた。ヴァシレフスキーは、まるでジャックと豆の木か何かの絵本に出てきそうな巨人のような男で、とても日本語通訳が出来るとは思えないような見た目だった。しかし、現実話に話せているのだから信じるしかない。

「……そんなに物珍しいか？」

「え……あ……いや」

横峰は言葉に詰まりながら、否定しようとした。

「俺みたいなのは“筋肉バカ”だ何だと思われるだろ？それがい

いんだよ。意外性って奴さ」

ヴァシレフスキーはそう言いつつ、煙草を取り出した。煙草に火を付けて深々と吸い、肺にしみる温もりを味わった。

煙草の煙が螺旋を描いて宙を舞った。

1941年11月13日01…32PM

エジプト／カイロ

カイロの空に聳える太陽は燦々と光を放っていたが、街は闇に包まれていた。

原因は上空を駆るJU87急降下爆撃機を落とさんとする英軍対空火砲陣の砲火によるもので、インクのような黒いシミが空中を覆い尽くしていて、それが長い影を街に刻んでいる。

丘陵の上から、エルヴィン・ロンメル大將はカイロを望んでいた。足元には黄土の大地が、遙か下の銀灰色の海のような街に向かってこぼれるように広がっている。軍用車に備えてあった双眼鏡を手に取り、光沢のある金色の光を投げ掛ける対空火砲陣を捉えた。まるで獲物を探すハゲタカのように上空を旋回していたJU87が1機、紅蓮の炎に包まれながら下へ下へと落ちていく。

両手でそっと包むように持っていた双眼鏡を下し、ロンメルは黙祷を捧げた。最後に見た時、JU87は空中分裂して、両翼を完全に？がれていた。最早、生き残るのは不可能だろう……。

「戦況は良好です」と、背後から1人の兵士が柔らかな声で告げた。

ロンメルは真剣な表情で振り返り、「そうか」と素気なく答えを返して見せた。砂漠の狐と賞賛を浴びるロンメルも、人間には変わりはない。死を目の当たりに、哀しい感情が胸の中を駆け回る。

植民地兵は弱過ぎたが、ゴキブリの如く湧いた。1つの防衛陣地

を攻略したかと思えば、また別の陣地が構築されて、新兵が姿を見せる。彼等は訓練間もなく、専ら盾代わりに使われていた。

先月、アレクサンドリア軍港が戦略爆撃を受けて以降、英軍は劣勢続きである。

——エジプト中の全戦力を集結させたこのカイロを落とせば、1つの戦争が幕を閉じる。

ロンメルは胸の中で呟き、戦いの決意を新たに指揮を執るのだった……。

第17話 大陸横断鉄道にて（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第18話 ケールシュタインハウス

第18話『ケールシュタインハウス』

1941年11月23日06..27AM

ソビエト社会主義共和国連邦

k19・列車『ヴォストーク』

光の滝が、窓一面を金色に染める。時折、雷鳴の如く列車の連結部が軋みを上げ、しばらく経つと静まるという事の繰り返しだった。外を見渡す限り、雪原が広がっていたが、この時には少なからず家が見え始めた。

……終着の時は近い。

高橋はシベリア鉄道の終焉に迫るのを感じて、呟いた。10日間、寒さと腐敗臭に苛まれながら固い座席を寢床にしていただけあって、その顔はやつれている。髪は皮脂でギトギトに汚れ、顎先や鼻元には無精髭が生えていた。

「日常茶飯事の事だよ」

ヴァシレフスキーは高橋の顔から、その真意を察して告げた。過酷なソ連で法律を無視しながら生活するこの男の話は、確かに信用性が高かった。ツイードのハンチングと贅沢品の煙草を持っているだけでも、この男がどれだけ頭が切れるか見て取れる。並に居そうな頭の悪い、体重視の腕っぷしが強い人間では、ウォッカを手に入れるので精一杯だろう。

「ところでヴァシレフスキー、あんたは日本政府に雇われたんだよな」

「そうだ。普段は別の顧客も居るけどね……COIとか」

ヴァシレフスキーは短く笑った。「全ては神の身加護の代理であ

る“金”の為さ」

「誰でも構わないのか？」

高橋は仏頂面を浮かべながら言った。

「このソビエトじゃ当然の行為だよ。金が命と未来を保証してくれる。少なくとも、粛清の対象を逃れる為には必要なんだ」

「命か……」高橋は静かに言った。

しばらくしてから、高橋は頷いた。

見渡す限りの雪原は消え失せ、列車は既にモスクワ市内に突入していた。煉瓦造りの家々が軒を連ね、線路横に聳え立ち、多くの人々が行き交っていた。しばらく進むと、1つの大きな施設が列車前方に現れ、海軍少佐の3人組は天を仰いだ。

――終点、ヤロスラフスキー駅到着。

開業1862年のヤロスラフスキー駅は、ロシアの城塞を模して建設された。外観は城のようで、漆喰と彩色タイルで覆われた建物は、目を瞠る美しさであった。4人はヴォストーク号から降り、3番ホームを進んでいる。

ここから、高橋達3人はヴァシレフスキーと別れ、ベルリン方面行きの列車へと乗り込む。しかし、まだ時間が余っていたため、4人は駅前の広場で時間を潰すことにした。門を抜け、外に出ると真っ先に曙光が出迎えてくれた。――それと酒瓶を持って酔い潰れ、広場に座る男も。

高橋が頭上を仰ぐと、1本の尖塔が杏と桃と金色の輝きを放ちながら、駅に腰を据えていた。城塞を模しただけあって、手の込んだ装飾が施されている。

「ここでお別れって訳だ」

駅の尖塔を見据えながら、ヴァシレフスキーは小声で言った。

「寂しいのか？」

高橋は訊いた。

「いや」ヴァシレフスキーは言った。「野暮用があるからそんな事も言ってもらえないんだ」

“悲しみの中に幸福を求めるがよい、働くんだ、たゆみなく働くんだ” ヴァシレフスキーは跪き、芝居風に独特のアクセントを付けて言った。

「何の事だ？」

横峰は首を傾げ、訊いた。

「……ドストエフスキー、『カラマーゾフの兄弟』の1節だ」
彼は眉間を顰めながら告げた。「読んだ事はないのか？」

「無いね」

横峰は答え、高橋も同調した。桐野は読んでいたのか、頷きはしなかった。

「読んだ方がよい……絶対にな」

1941年11月27日10…50AM

ドイツ

バイエルン州の田舎、ベルヒテスガーデンは澄んでいた。3人の海軍少佐はドイツの御料車、メルセデス・ベンツ770kに乗り、通りを走っていた。殆ど通行量の無い青空の下、田舎道を、4台の護衛軍用バイクを前後方に張り付けた形で進むのだ。クリーム色のボディは、蒼色に染まった。

ケーニヒ湖を迂回し、ベルヒテスガーデンの村を直走していると、やがて1つの山脈が姿を見え始めた。オーバーザルツベルク（塩の山）は、かつては塩脈として知られていたが、1928年から『ナチスの巢』として生まれ変わる事となった。

突然、車が路肩に入っただけと同時に、3人は道路が変わった事に気

付いた。これまでの土手道とは訳が違う、よく舗装された道路だった。

しばらくすると、メルセデス・ベンツ770kが停止する。

「ここからは歩きとなります」

垢抜けた1人の男が後部席のドアを開け、告げた。頭に被られた制帽と右袖には荒々しく羽を広げる鷲の紋章が刻まれており、桐野は一目でその男がSSの隊員であることを知ってしまった。

3人が降りると、車は走り出した。後ろを振り返ると、SS隊員が何の表情も浮かべずに直立不動の姿勢で立っていた。

「こちらです」

SS隊員は少しずつ行き先を指示していった。3人は黄緑色の大地を進み、1つのトンネルに到達した。周りはSSに包囲されており、完全な厳戒態勢が敷かれていた。3人はトンネル内に足を進め、専用のエレベーターへと乗り込んだ。

エレベーター内部は真鍮や鏡で豪華に彩られており、爽快な田園風景には似合わない。

124mほど昇った所でエレベーターは轟音を上げて停まり、3人はSS隊員の後に続いて降りた。

3人は白色の小道を真っ直ぐに進んだ。その先には、一軒の家が聳えていた。高橋達は、ヒトラーの別荘、ケールシュタインハウスへと向かっているのだ。

道はSSが左右を埋め、真ん中のみが開いていた。ざっと見積もった所、30~40人は居る。高橋は激しい動悸に襲われ、腰元のホルスターを見据えた。9mm拳銃が座している。弾数は、装填された9発と予備の弾倉1つなので計18発。1人2発とすれば合計9人は始末出来るかもしれない……。

そう考えたが、すぐに馬鹿な事だと高橋は悟った。

ケールシュタインハウスは陸の孤島だ。1940年、ヒトラー50歳を祝って贈られたこの別荘は、オーバーザルツベルク山頂付近、海拔1881mに位置する。

やがて別荘の玄関前に到達すると、SSの中佐と思わしき人物が近づき「武器を」と手を伸ばしてきた。

3人の内、桐野は銃を手渡したが、高橋だけは渡さなかった。横峰は初めから持っていない。

SS中佐は鋭い眼光で高橋の顔を見据えたものの、背後からやってきたSS隊員の報告を聞いた後、ボディチェックもせずに通してくれた。

山荘内部は壮嚴的だった。インテリアデザイナーのポール・ラズロのデザインの家具がひしめき、高山の澄んだ空気が駆け抜ける。しかし史実では、ヒトラーはこの別荘を10回ほどしか訪れていない。ポール・ラズロのセンスとヒトラーの高所恐怖症が融合した結果だと言われている。

3人はよく武装されたSS隊員達が見守る中、山荘内を進む。SS中佐の姿が消えたと同時に、背後の玄関扉が音を立てて閉まった。廊下の突き当りに到達すると、背後からあのSS中佐がひょっこりと顔を見せ、いぶかしげな視線を3人に向けた。少しの間、沈黙の時間が続いたが、SS中佐はくると身を翻して、扉に拳を2回打ち付け、来客の到来を室内の人間に告げた。

ガチャリ……と真鍮のドアノブが音を立て、静かに扉が開く。

SS中佐が見守る中、高橋達はその部屋へと足を踏み入れた。

第18話 ケールシュタインハウス（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第19話 50の前世を持つ男

第19話『50の前世を持つ男』

静謐に包まれた中、3人は部屋に足を踏み入れた。そこは会議室で、古ゆかしい一室には、本草と燃える薪と紅茶の香りが漂っていた。そして、奥には窓寄りに1人の男が革張りの椅子に座している。男は訪問してきた3人の日本海軍少佐の顔を見て、一瞬渋面を作った。「……ようこそ」

——アドルフ・ヒトラー？

高橋は立ったまま凍り付き、眼前の恐ろしい光景に見入っていた。彼は英語で話しており、高橋と横峰も理解出来た。何とか震えを抑え、腰元に手を滑らせた。9mm拳銃は健在だ。

しかし、それを使う事は無かった。

太陽の光を一身に浴びながら、ビスケットとザワークラウトを頬張る男。それがヒトラーの正体だった。……健康的生活を好み不健康なユダヤ人を嫌う最高司令官。

その隣には、男が1人立っており、総統を護る態勢を取っている。ゲルマン民族らしい端正な顔立ちや引き締まった体を持つその男は、SSとは違う軍服を身に纏っている所から、桐野は当惑した。その軍服は、明らかにドイツ海軍のものだった。

護衛の男は何やらヒトラーの耳元に囁いて、1歩下がった。

「座りなさい」ヒトラーは言った。

3人は扉から部屋の中央へと歩を進めた。ムッソリーニが贈った暖炉はパチパチと音を立て、そこから燃え盛る炎の光が、昭和天皇の名の元に贈られた絹の絨毯を艶やかに染めた。絨毯は300キロ近くもあるという特注品で、かなりの値だ。3人はその上を歩き、ヒトラーの大きな木製の机と向かい合うひとり掛けの椅子に腰を下

ろした。護衛の男は、ムッソリーニの暖炉から離れた漆黒の淵へと後ずさっており、顔は影に消し去られていた。

「……何故、君等の事を知っているか……分かるかね？」

ヒトラーは紅茶を口に含みつつ、渋い語調で3人に話しかけた。

桐野が日本語に訳す。

そうだ。そうだったな……。

不意に3人の記憶の奥底から1つの情報が出され、脳裏を迸った。今回の旅行の中には、三国同盟解消の他、機密情報の漏洩を探るという任務も含まれていた。3人は陸軍経由で漏れたものではないかと考えていたが、定かではなかった。確証が必要となる。

高橋は小さく息を吐いた。「……いえ」直後、桐野が日本語に訳して再度言う。

ヒトラーは何も言わなかった。

「何故ご存知で？」

ヒトラーは右手を上げ、それを見て後ろの男が前へ躍り出た。「彼はアルブレヒト・ベルンフリート。海軍大佐だ」ヒトラーは笑みを浮かべて言った。

高橋はベルンフリートの顔を見ていった。「どうも。光栄です」ベルンフリートは不屈の眼差しで3人を見ると、一礼した。

「……ここは好かないんだよ。アメリカの豚共にはお似合いだったかな」

高橋と横峰の2人は顔を見合わせた。……今何て？

1945年5月、このケールシュタインハウスは米陸軍第101空挺師団によって占領され、1960年まで占領が続いた。その淀みと蔑みの込められたヒトラーの言葉はとても冗談とは思えない声色をしており、2人は何とも嫌な予感を感じ取ってしまった。

「さて……本題を言おう。君等の事は知っている。未来から来たのだろう？」ヒトラーは手を叩き、擦り合わせながら言った。「我輩と似ているな」

「……似ている……とは？」

高橋の愕然とする顔色を見る中、ヒトラーは蔑むような笑みを浮かべた。

これは面白い……。

ヒトラーは恐怖に戦く3人の海軍少佐の顔を見ながら、満足そうに笑みを浮かべた。総統ヒトラーはこの時を。パーキンソン病が発病した9月頃から、真実を語り聞かせる時を待っていた。自分の言葉により、自ら同盟を破棄し、我が後援を捨て去った愚かな模倣国日本に復讐する時を……。

そして今、その瞬間が訪れた。自分の言葉の重みが3人の海軍少佐の汚らわしい大和魂を徐々に押し潰す様が見たくてたまらず、ヒトラーは涎を零しながらゆっくりと話し始めた。

「全ては今年の6月のことだ。我輩が来たるべきバルバロッサ作戦に精を出す中、脳裏にある1隻の“フネ”が浮かび上がった……名は——『きい』」桐野が訳せずとも、2人は雰囲気で危機感を感じ入った。訳された言葉は、さらにおいうちを掛ける。

……………。

終始沈黙の中、再びヒトラーが口を開いた。

「世界は……1つじゃない。時空間には複数の世界が形成されており、それは源流となる川という名のベースの時空間から分岐しているわけだ。更に、その中にまた別の分岐が生まれる」ヒトラーは物腰優雅に指で流れる川を再現した。「……パラレルワールドはご存知か？」

3人は頷いた。

「我輩は……その川と同じだ。パラレルワールドでは暗殺で殺された我輩も居れば、まったく別の死を遂げた我輩も居る。そして、魂は輪廻する。しかし、その死後に別の生命体に転生してしまうだろう？だが、我輩は違う。運命の6月3日、我輩は——前世の記憶を思い出した」ヒトラーは勝利の笑みを浮かべた。「“パラレルワ

「ワールド」のな」

「……パラレルワールド？」

桐野は顔を歪めて言った。

「そうだ。パラレルワールドだよ。だが、それは限り無く源流に近いものだ。枢軸国——つまり、我が第3帝国が勝利した前世は無い。だが、あえて良い……我輩は暗殺によって死に至った49の人生を見た。全ての暗殺は成功し、我輩はそこで人生が終わった訳だよ。最初の小汚い暗殺劇から、最後の『ヴァルキューレ作戦』までだ」

「皮肉な事に、我輩の死でその“パラレルワールド”は“完全なるパラレルワールド”に変貌した訳だよ」

普段の演説よりも張り上げた声で、ヒトラーは高々に告げた。

「……なるほどな」

高橋の言葉に気付いたのか分からなかったが、ヒトラーは笑みを浮かべた。

「貴様らは分かった気でいる様だが——まだ物事の半分しか見えていないぞ」

彼は低い声で言った。「年配の者なら、更なる可能性を信じたらうにな」

「……そうです。彼等はまだ若い」唐突に響いた声を聴き、3人は首だけを横に向けた。その視線の先には、これまで無言に徹していたあの海軍大佐の姿があった。「私はアルブレヒト・ベルンフリート、空母『グラーフ・ツェッペリン』艦長をしています……それに“前世”を知る者も」

澄んだドイツ語を聞き取り、桐野は動揺しながら訳した。同時に3人は顔を見合わせ、謎多き海軍大佐の顔を見据えた。

——まだ物事の半分しか見えていない。

——彼等はまだ若い。

2人の言葉は若き海軍少佐達に揺さぶりをかけた。ヒトラーは目を半眼にして、3人の顔を睨みつけた。「我輩は……確かに暗殺に

よって死に陥った記憶も見たが……もう1つの前世も見ただよ」
高橋はヒトラーの鋭い眼光に射すくめられて、一瞬、体を強張らせた。これ以上、何が待っているっていうんだよ……。

1945年4月30日04…16PM
ドイツ／テンペルホフ軍事空港

ベルリン陥落が叫ばれ、ソ連軍が市街戦を繰り広げる中、テンペルホフ空港は慌しく離着陸を行う飛行機でごった返していた。その最中、1機のJu・52が着陸を果たした。エンジンが轟音を立て、車軸が軋みを上げる。

完全に停止したJu・52は、突如到来する夕立のようにやってきた複数のSS隊員達によって取り囲まれ、中に3人程乗り込んだ。
「……異常なしです」

1人のSS隊員が甲高い声で告げると、遠くから男女のペアが1組、早足で近付いてきた。男性はスーツケース。女性は大きなボストンバックを持っており、車輪が舗装された滑走路に軽快な音色を響かせた。

「ご苦労……」

男はそう告げ、SS隊員は仲間の2人と共に敬礼した。3人は後ずさりし、整列する上官の列へと戻っていった。幾人かが高々と腕を上げ、精一杯の声で叫んだ。「ハイル・ヒトラー！」

SS達がそう叫ぶ中、男女はJu・52へと乗り込んだ。中には、神父が1人と銃器を持ったSS隊員が1人、座している。男女は手を繋ぎ、神父の後部席に座ると、沈黙を唱えた。男女が乗り込んだ3分後、男が1人、慌てながら乗り込んだ。

「ハイル・ヒトラー……」

男は唱え、座す男はまああと手を示した。

全乗客が乗った事を知り、J u・52は体勢を整えてエンジンを噴かせ始めた。轟きを上げて急上昇し、J u・52は飛翔した。眼下には、扇状のターミナルが広がっていた。

高度が3000mに達した時、女性と共に座していた男は前席の神父に語り掛けた。「ベルリン上空で済ませてくれまいか……」

神父は了承し、立ち上がった。聖書を手に持ち、咳を1つした。

隣に座していた男も同時に立ち上がり、男女の元へと歩み行った。

「……頼むぞ、ボルマン」

「総統、お任せ下さい」

その男——マルティン・ボルマンは笑顔を浮かべて答え、男女は笑顔で返した。背後では映写用カメラが動き出し、男女達の姿をフィルムに焼き付け始めた。

「アドルフ・ヒトラー、エヴァ・ブラウン……」

神父は気難しい顔を浮かべながら唱え、2人は神父の前へ歩み出た。

——汝アドルフはエヴァと結婚し夫婦になろうとしています。

貴方は健やかなる時も、病める時も——。

富める時も貧しき時も——。

良き時も悪い時も——。

その命続く限り敬い慈しみ堅く節操を守り——。

彼女を愛することを誓いますか？

「……誓います」

カメラの作動音が轟き、アドルフの野太い声が刻まれる。神父はエヴァにも同じ質問を唱え、エヴァも同意を果たした。

神への誓いが唱えられる中、アドルフは――エヴァの右手の薬指へ――指輪をはめた。

「それでは――誓いの口付を」

神父の声が消え入ると、2人は寄り添り――向き合った。キスはこれで2回目だったが、心臓の鼓動はやむ気配は無かった。ドイツでは、2回結婚式を挙げるという風習があり、1回目は親しい友人や親族が立ち会うち、婚姻の届出をするというもので、2回目は教会で神父に誓いを唱え、式後はパーティーをするという形式的なものである。2人は既に前日に1回目を総統官邸地下壕で済ませていた。1回目には、今立ち会い人を務めるヒトラーの側近、マルティン・ボルマンも居た。

肩に手を置き、2人は顔を近付けていく。

――唇と唇が重なり、歓喜が上がった。

アドルフとエヴァを祝福する結婚式は、ベルリンの上空3000m地点で行われた。地上では、ソ連軍が残虐の限りを尽くしていることだろう……。

この記念的場面は、フィルムに記憶された。それは、南米で復活予定の第3帝国で、ラブ・ストーリー仕立てと記録を兼ねた映画を流す為である。

2人が唇を離す中、ライスシャワーが機内を彩った。

強面顔を浮かべるボルマンも笑顔を漏らし、2人を祝福する。

――こうして、逃亡の最中の結婚式は幕を閉じた。

1945年5月18日01:08AM
ノルウェー

海岸に1隻のUボートが座しており、新婚夫婦のアドルフとエヴァはそれに乗り込んだ。ボルマンもそれに同行する形で乗り込む。3人が乗り込むと、1人の垢抜けた海軍人が歩み寄ってアドルフと握手した。

「ドイツ海軍アルブレヒト・ベルンフリート中佐です。乗艦頂き光栄です総統閣下」

ベルンフリートの心からの賛辞を受け、アドルフも警戒心を解いた。「うむ。アルゼンチンまで頼むぞ……」

そう言い残し、アドルフはエヴァを連れて客室へと向かった。

「……物資、計器チェックを済ませろ」

ベルンフリートは告げ、兵達は慣れた手付きで済ませていった。

「異常ありません」

「よし、もやい放て！」

刹那、轟音が響き、エンジンが唸りを上げ始めた。Uボートが独特の音色を奏でる中、ベルンフリートは愛用の蓄音機を手に取り、1枚のレコードを蓄音機の盤へと置いた。レコード針が熱を帯び、音が外部へと漏れ始めた。

「艦長……音楽を流せば敵に気付かれる可能性が……」

兵士の1人が言ったが、ベルンフリートは笑みを浮かべて答えた。

「大目に見てくれまいか。ここに居ようとは思うまいだろうしな——ドイツは降伏したのだ」

ベルンフリートは軽くウインクをして見せながらも、重々しい表情を浮かべて言った。

流れてきたのは——『ワルキューレの騎行』。19世紀のドイツの作曲家、リヒャルト・ワーグナーの代表作の1つである。大抵は映画等で軍用ヘリBGMと知られるこの音楽がUボート内部で、軽快に流れ始めた。

「全速前進」

Uボートはワルキューレの騎行に低く単調な動作音を付け加え、演奏を開始した。湾内を抜け、海洋に脱出したこの艦を止めるもの

は——誰も居ない。

——こうして、Uボートは脱出を遂げた。

第19話 50の前世を持つ男（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第20話 選択の時

第20話『選択の時』

厳寒の個室の中で、3人の大日本帝国海軍少佐は汗が背を流れ落ちるのを感じた。全神経は聴覚と視覚に費やされており、前方に聳える男の物語に釘付けになった。

――ヒトラーが脱出した？

「……それからどうなったのです？」

危機感から、桐野は強く訊いた。

「それから……。我輩は南米に到達し、アルゼンチンの奥地へと身を潜めた。そして、そこで新生第3帝国を建国したのだ。我輩はエヴァ・ベルンフリート・ボルマン・ホッカー神父・クルト・タンク博士（元フォッケウルフ社設計部門責任者）を筆頭に第3帝国再建案を画策し、実行を始めた。エヴァと我輩は子作りを。ベルンフリートは空母や航空基礎技術や海軍技術の研究を。ボルマンは偽装の為、カムフラージュ組織としてオデッサ（元ナチス親衛隊組織）設立を。ホッカー神父は心理学に精通していたので、洗脳実験を。そして、クルト・タンク博士はアルゼンチン政府の国産戦闘機開発計画に参加し、裏で設計図や試作品を流した。博士はアルゼンチンから金を搾り取りながら、第3帝国主力戦闘機の試作機として、開発を進めたのだ。我輩達は戦闘機が比較的金の掛からない形で手に入るとして、大いに喜んだものだよ」

ヒトラーはそこから、ため息を吐いた。

「だが、長くは続かなかった。エヴァは子に恵まれず、オデッサは米ソの包囲網に入り始めた。神父は洗脳計画に反対。1953年にはアルゼンチン国産戦闘機計画は停止し、止む無くクルト・タンク博士は新たな金蔓を手に入れるべく、インドへと渡った」

ヒトラーは哀しげな視線をベルンフリートに向け、彼は呆然と見返した。常に物事は上手くいくとは限らない。元々、資金も乏しかったのでアルゼンチンのプルキ？戦闘機が完成していたとしても、第3帝国では量産出来ないのだ。

「そして1960年——我輩は死んだ」

「……何故です？」桐野が割って入った。

「病気だよ。急性のな。我輩はそうして寿命を終わらせ……蘇ったのだ。不死鳥の如く」

ヒトラーは天を仰ぎ、甲高い声で叫んだ。

「1つ不思議なのですが、何故そんな後世の記憶を持っているのです？今は1941年のはず」

桐野の問いにヒトラーはふんと鼻で笑い、答え始めた。「常に時空間が並行して進む訳ではない。それは前にもいった通り、パラレルワールドにおける前世の記憶だが、その世界がこの世界と時間を共有しているとは限らないだろ？推測だが、恐らくこの世界は我輩が1960年に死ぬ世界と1つの管で繋がっているのだ。人工的な水路のように、流れを変えたのだよ」

「それは……タイムスリップの影響ですか？」

「恐らくな。その1960年の世界で我輩が死んだと同時に、この世界は生まれたのかもしれない。今、この世界に居る人間の中には、かつて我輩と繋がりを持っていたが為に潜在的能力を秘めた人間が数多居る。海陸空軍の新兵は数ヶ月分の訓練を受けたような潜在的経験を秘め、ベルンフリートは何の勉強も励んでいないのに空母の図が頭にあった。クルト・タンクは今まさにジェット戦闘機開発を進め、ボルマンは暗殺を企てようと目論む人間達を潜在的に見極め、粛清している」ヒトラーは嘲るような笑いを浮かべる「そして6月3日、我輩達6人は完全に前世の記憶を取り戻した」

「でだ、君等の事に本題を戻そうか」

ヒトラーは言い、3人は吸い込まれるが如く、身をヒトラーへと突き出した。

「……第3帝国に無条件降伏を宣言しろ」

3人はその唐突な言葉に顔を見合わせ、混乱の色を顔に浮かべた。あまりにも身勝手で恐ろしいその発言は、生粋の日本海軍人の桐野に怒りの炎を灯した。

「そんな馬鹿な事、吞めるはずがないだろう！」

桐野は感情をドイツ語に込め、腹底から響かせた。

「無理はない。だが、状況はこちらの方が優勢だと思わないか？」
ヒトラーは言った。「例え君等の未来戦艦が驚異的な戦闘能力を有していても、乗組員が未来技術を有していても限界はある。第1世代並の戦闘機や潜在的に行われた航空主義転換、更に我輩の万物を見える眼の前に勝てると思うか？」

「……選択せよ」

背後に佇むベルンフリートは告げた。

3人は洪面を浮かべ、齒を食い縛った。

「我々にそんな権限はない」

高橋は言ったが、翻訳されて桐野の口から出されると、ヒトラーは笑みを浮かべた。

「いやいや、我輩は君等に言っているのだ。未来戦艦——『きい』にだ。君等が降伏してドイツ海軍の旗艦となれば、大日本帝国も迂闊に手を出せなくなる。何しろ未来の技術の結晶だ。ぜひ我が隷下に入り、艦隊旗艦となれ」

不意の静寂——。

それを引き裂くが如く、高橋が口を開こうとした刹那——全ては崩落した。

“世界を支配しているのは、神とその法則である”

野太い声が響き、3人は首を右へ傾げると、そこにはよく見慣れた男の姿があった。「……ヴァシレフスキー？」3つの声は同調し、室内に響き渡った。

「素晴らしいだろ？」ヒトラーは言った。「ドストエフスキー『作家の日記』の1節だ」

「フョードルは言った。『アリョーシカ、不死はあるか？』アリョーシヤは答えた。『あります』フョードルは更に続けた。『神も不死も？』アリョーシヤは答えた。『神もあります。神の中に不死もあるのです』」

ヴァシレフスキーは笑みを浮かべた。「『カラゾーマフの兄弟』の1節だよ」

「彼の言いたい事は分かったか？」

ヒトラーは問う——3人は虚空の表情を浮かべる。

「貴方が神とでも言いたいのかヒトラー。前世から蘇ったからと言って——」桐野が最後まで言い終わらないうちに声が喉に引っ掛かった。本当に万物を見る眼や、前世より蘇りし力を秘めているのなら、これは本当に彼が神なのかもしれない。若しくは——死神の生まれ変わりか……。

“神が存在しないなら私が神である” ヒトラーは言った。「ドストエフスキー『悪霊』だ」

「——決断しろ」

ヴァシレフスキーは言った。

「神である我輩に忠誠を誓うか……それとも……死か？」

——決断の時は急接近した。

第20話 選択の時（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第21話 決断の時（前書き）

登場人物紹介

・カイザーハウスゼクス（Kaiser-House）

カイザーハウスゼクスとは、1960年までヒトラーが生きた世界における、第3帝国SS隊員達の間で呼ばれるアルゼンチン奥地に建国された『新生第3帝国』創立者達の総称である。“皇帝”といった具合に創立者6人ごとに愛称が名付けられているが、皇帝体制を拒むヒトラーは頑なに否定しており、転生後、ヒトラーは6人がそれぞれを愛称で言い合うことを禁止している。

○アドルフ・ヒトラー

第3帝国総統。

50に及ぶ前世を持つ男であり、新生第3帝国の“皇帝”^{カイザー}。本人は皇帝体制を拒んでいるので、愛称を使う事を禁止している。極度の軍事オタクで、新生第3帝国でも複数の軍事書籍を取り寄せては熟読していた。

○エヴァ・ブラウン

ヒトラーの愛人。

前世を知る者『Kaiser-House6』の一員であり、愛称は“皇后”^{カイザリン}。ヒトラーに陶醉している。

○マルティン・ボルマン

ヒトラーの側近の1人で『Kaiser-House6』メンバー。
1。

“相談役”の愛称で知られ、新生第3帝国では擬装用組織『オデッサ』設立等の行動を起こした。1回目、2回目と結婚式の立会人として力を貸し、ベルリン脱出にも深く関わっている。

○アルブレヒト・ベルンフリート

第3帝国海軍大佐。

愛称は“近衛隊長”

元Uボート艦長で準エース。幼少期、ウィーンの音楽学校に入学し、主席で卒業。第1次大戦にも参加し、海軍職に就いた。新生第3帝国では航空戦略・海洋戦略を提案し、空母の知識を深く学んでいる。転生世界では、日本の蒼龍級を基とした空母案を発案し、ドイツ海軍の航空主兵主義を大きく前進させる要因となった。

○ホッカー神父

聖職者及び心理学者。

愛称は“司祭枢機卿”

ヒトラーとエヴァの2回目の結婚式を行い、新生第3帝国にも招かれる。元は心理学者を目指し、余暇の多い聖職者になろうと神学を学んでいたが徐々に神への意識を深め、神父になった経歴を持つ。新生第3帝国では洗脳実験に参加していたが、凄惨な人体実験に嫌気が差し、最後には反対することとなる。

○クルト・タンク博士

航空エンジニア及び飛行パイロット。

愛称は“魔術師”

新たな市場を求めるという名目でアルゼンチンに上陸。奥地に潜伏する新生第3帝国に接触する。アルゼンチンの国産戦闘機開発に参加し、その国産機『プルキ?』の設計図や試作品を秘密裏に流して新生第3帝国新鋭戦闘機の開発に繋げた。しかし1953年に計画が中止し、新たな資金源を求めてインドに渡ることとなる。

第21話 決断の時

第21話『決断の時』

1945年4月28日AM11…57

ドイツ／総統地下壕

——去れど我が魂は尽きん……。

ヒトラーの意識は底知れぬ深淵を漂っていた。

光もない。音もない。感覚もない。

あるのは柔らかな光と——右手に握られたワルサーPPkの表面から伝う悪寒。

物質世界は消滅した……。そして、時間と空間も。

拍手の手を立てる瞬間を伺う2人の立会人、ボルマンとゲッベルズが見守る中、ブラウン嬢は羽筆を手にながら、婚姻届に名前を書き連ねる。

Eva, B……。

おやおや、ご乱心かなブラウン嬢。ヒトラーは温もりを含んだ笑みを漏らした。かわいい魔女は悪魔であるヒトラーが見守る中、Bを線を引いて消し、Hitlerと書き直した。頬が紅色に深く染まっっていくのを悪魔的に見据えていたヒトラーの視線に気付き、その色は更に深みを増した。

喝采の拍手が地図室を優しく包み込む。

ヒトラーはエヴァの青色のドレスの前に跪き、天を仰ぐようにして見据えた。その光景を見ていた2人が去りゆくに際し、別れ際にたつぷりとエヴァとの関係を見せてやったのだ。

ゲッベルズとボルマンは最後にもう1度、ヒトラーとエヴァを見た。

そして、ゲッベルズが去った。

まもなくして、ボルマンも去った。

残された2人は手と手を取り合い、互いに見つめた。口元は自然と吸い寄せられ――。2人は永遠とも思える時をその地図室で過ごすように思った。しかし、その狭間にはワルサーPPkがあり、青酸カリがある。少なくとも24時間以内には――死ぬ。

――流れた時間は、10秒？10分？10日？
それとも……10年？

この静謐の部屋において、時は意味を成さない。結ばれし2人はそう感じた。この時が永遠に続くことを――2人は心より願った。だが突然、彼の脳裏に記憶が形をなして押し寄せた。

「……死なねばならん」

ヒトラーは呟き、抱き締められた33歳の女は、一筋の涙を頬に流した。

その光景に、ヒトラーはいちどきに考え始めた。幾つもの案が……鮮明で決心を塗り替える映像が全身を駆け抜ける。それが意味することヒトラーは知っていた。

激痛が走る。

筋肉が収縮し、右拳に力が入る。

ワルサーPPkの銃身がゆっくりと上を向き、彼のこめかみへと銃口が押し当てられた。エヴァはそれを横目で見ていたが、大量の涙を流している。

ヒトラーは生涯、結婚相手はドイツだと思って……この死亡劇も1人地図室に佇み、自身の鮮血によって第3帝国の地図を染め、自らの命でドイツを加護する……という美しい死を望んだ。とはいえ、それが難しいことはブラウン嬢の表情を見ただけで感じた。

引き金を握る……指から力が抜けていた。

ヒトラーは思わずワルサーPPkを落としてしまった。床に鈍い

物音が響く。

そして、運悪きことにその銃はエヴァの足元へと流れるように向かい、エヴァはそれを手に取って——自身の頭に銃口を押し付けた。

「……止めろ」

P P kの銃身は未だ微動だにしない。「無意味だ！そんな事をするな」

彼女は首を左右に振り、笑顔を浮かべてヒトラーの目を見た。

「無意味ではありません。私にとっては貴方こそ、人生の意味に相応しいのです！」

ヒトラーは前に進み出た。エヴァは思わずたじろいたが、不気味な静寂は続いた。ヒトラーはP P kのスライドを掴み、銃をエヴァの右手から持ち上げて取り除いた。

「ここで」エヴァは言った。「ここで終わっていいのですか？」

エヴァの言葉はヒトラーの耳に響き、彼は——深き眠りに着いた。

「——決断しろ」

ヴァシレフスキーの渋い声が響き、ヒトラーは我に帰った。昔の夢を見るとは……。

ヒトラーは目を鋭くした。さあ、始めよう。

「神である我輩に忠誠を誓うか……それとも……死か？」

——決断の時は急接近した。

高橋は前に歩み出た。腰元の9 m m拳銃に手が伸びる。

「……無駄だ」

ヴァシレフスキーは告げた。奴は全てお見通し……ってわけか……

……。「何故？」

「分かるだろう？ここは陸の孤島だ。第3帝国の外縁部とはいえ、SSの本拠地みたいなものだからな。お前がやろうとすることをすれば、どうなるか分かるだろう？」

高橋は首を振った。「何故だ？アンタは日本政府と取引してたはずだろ？」

ヴァシレフスキーはしばし黙して目を閉じ、告げた。「単純明快だ。ドイツ側が非常に有益な条件を出してきたから新たな業務に着手したのだ」ヴァシレフスキーは言った。「俺には金が要るんだよ。理想の国家を生み出す為にな」

「我輩と意志が一致したんだよ」ヒトラーは詰め寄った。「第3帝国崩壊はユダヤ人とソ連のクズ共のせいだ。ソ連侵攻の際には、この男のコネクションが非常に役に立つ」

「ソ連侵攻を諦めていないのか？」横峰は言った。

「言っても無駄だぞ。スターリンは絶対に信じないし、逆に手を出されるからな」

ヴァシレフスキーは告げた。

「何でもいい、これが俺の決断なんだ！」

9mm拳銃が手元に近付いた時、背筋に悪寒が走った。ベルンフリートとヴァシレフスキーが拳銃を手に3人の海軍少佐へ照準を合わせているのだ。思わず高橋の手も止まった。

「……決裂か」

ヒトラーは哀しげに言った。「お引き取り願おう」

3人の帝国海軍少佐は睨みを利かせたが、それも長くは続かなかった。目的は達したとして、高橋は9mm拳銃に伸びた手を戻して、席を立つ。

ベルンフリートが扉を開け、3人は縦に出口へと向かった。

3人が歩を進める中、ムッソリーニの暖炉の薪から漏れる音と共にヒトラーの声が響いた。

「……お望み通り、三国同盟は破棄だ」

第3章 『三国同盟崩壊』 完

第21話 決断の時（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第4章『国際復帰への道』第22話 日米講和

第22話『日米講和』

1941年12月1日02:01PM

アメリカ合衆国／ワシントンD.C.

ホワイトハウス

ワシントンDCのオーバルオフィスから眺めるザ・エリプスは息を呑む美しさだった。建国の父達がこの陰湿な沼地にわざわざ首都を置いた理由の1つなのだろう。窓の外に見える紅葉の海が過ぎし日のハイドパークやハーバードで歩き回っていた時の風景を思い起こさせ、第32代大統領フランクリン・D・ルーズベルトは眼鏡を外し、ただひたすら外を見た。生きているだけでもありがたいのは分かっていたが、やはり満足出来なかった。虚しさが消えることはなく、冬風がいつもより冷たく感じられた。

「大統領、日本側の要求です」

コーデル・ハル國務長官はそう言い、1枚の書類を卓上に置いた。ルーズベルトはスタッフの手を借りて車椅子を動かしてもらい、虚空から現実へと舞い戻る。

1. 満州国の独立を承諾し、国際的に呼び掛けること。
2. 米国による日本への経済制裁の全面解除。
3. 中華民国、満州国の治安維持の為、銃器・航空機・艦艇等武器貸与。
4. 日米英間の不可侵協定締結。
5. 石油資源等の安定供給。

これが提示されたのは今日の午前11時のことで、ハルはそれをルーズベルトに提出した。10月頃から動きが活発化しつつある日本に対し、ルーズベルトは警戒心を抱いていたが、それがこの結果であった。乙案として提出されたこの案はそれまで米国が提示していたハル・ノート案の“南部仏印撤退”、“中国撤退”、“中国国民党承認”、“平和維持に反する協定の破棄（三国同盟に相当）”等、大半の条件をクリアしていた。さらには満州国にソ連経由で脱出を図るユダヤ人の為の自治区設立と米英資本の為の経済特区設立も約束した。

3番目の武器貸与は海軍の提案で、治安維持を名目に満州国や中華民國に關東軍が駐在するのを防ぐため。そして、陸軍全体の戦力を増強する意図があった。具体的にはM1カービンやガーランド、M3戦車やP-40の類を示していた。

「何を考えているつもりなのだ？ ジャップは」

ルーズベルトは肩をすくめた。脳裏には疑念と不安の思いしかなかった。

「ですが大統領、これはチャンスです。中華民國の軍備を大手を振って拡張出来ますよ」

「うむ」ルーズベルトは唸った。「しかし、最近蒋介石が我々から離れているような気がするのだよ。日本の手厚い優遇で反日意識が薄れていっているせいだろうな」

とはいえ、運命は自分の手の届く所に中国權益を掴むチャンスを置いた。それを見過ごすのは、当たりくじを引きながらも換金せずにいるのと同じ気がする。三国同盟を脱退した今、弱小国日本などどうとでもなること等、誰でも知っている。

そして、誰もがこう言うだろう……。

“アメリカン・ドリーム”を掴め、とな。

「すぐにでも話し合いの場を作ろう」

ルーズベルトは金の亡者から第32代大統領へと立ち戻り、窓へ

と身を寄せた。12月の冷ややかな外気は薄汚れたルーズベルトの身体を清めてくれた。

――7日後。

『……ワレ交渉ニ成功ス』

アメリカ、ワシントンDCより放たれた電報が届いた瞬間、『きい』の乗員達は歓喜した。何しろ本来、12月8日は真珠湾攻撃の符号が飛び交っていたはずなのだから無理はない。6日間に渡る協議の末、アメリカは条件を呑むことを決定し、経済制裁は一時的に解除された。

――これから日本は変わる。

1人、艦橋に佇んでいた艦長吉岡はそう思い、天を仰いだ。

「この選択の違いが、後に力と効を持つだろうな」

吉岡は背後に歩を進めていた高橋に告げた。「……よくやったと褒め称えるよ」

「これで何回目ですか？もう褒め称えられるのは恥かしいですよ」高橋は言った。

「4回目だ」横峰は唐突に現れて呟いた。

「経済制裁も解除されれば、再び資源類も確保できることでしょう」

第4章『国際復帰への道』第22話 日米講和（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第23話 ユナイテッド計画

第23話 『ユナイテッド計画』

1942年1月25日05..19PM

横須賀港

港の縁から眺めると、茜色の夕陽が水平線の真上にかかっているのが分かった。

西に沈もうとしているその夕陽は空を黄昏色に染め、1日の終わりを告げていた。そして横須賀の海の暗い海面に沿って輸送船やタンカーや巡洋艦から成る輸送船団が桃と杏と金色の光の帯を引きながら、低速で横須賀に入港しようとしている。港湾中の人々が詰め寄り、そのさまを見ていた。

山本五十六大將もその内の1人だった。彼は一時とはいえ、国交回復が果たされ、堂々とやってきた米国輸送船団を見て、心の平安のようなものを覚えた。

あの輸送船団はリバティ船から編成されたもので、鋼鉄から石油まで資源という資源が満載された船団であった。船団は、12月末期の米国議会で経済制裁解除が表明されてから最初にやってきた船団で、後ろからは2つの船団が全速力で追いかけていた。

「壮観だな」

山本長官は資源満載の輸送船団を見て、呟いた。右斜め後ろに立つ横須賀工廠長の都築伊七は低い声で同調の意を述べ、小さく頷いた。「当面は安泰でありますね」

山本は目を大きく見開き、周囲を見渡した。「第6船梁はいつ見ても大層なものだな」山本の柔らかな目線は空母『信濃』の鎮座する第6号ドックに定められていた。その端部には、早期から空母へ

の改装が進められている『大鯨』が垣間見える。

そして、その2隻が座する地点の彼方には――改装中の1つのドックがあった。

「あれかね？『ユナйтеッド』の船梁は」

「そうです長官、5月完成を目指していますが……」

山本は首だけを横に向け、肩ごしに都築に言った。「米英友好の形であるからな。まあ……そう肩に力を入れず、気長にやってくれ」

1月25日06・11PM

呉港／『きい』専用船梁

「一体、ユナйтеッドとは何だ？」

高橋三等海佐は不思議そうに首を傾げ、同伴する桐野少佐に訊いた。

桐野は首を振った。「それは空母ですよ。日米英合同の……」

「合同開発とは……」

「ええ、ユナйтеッド（United）は“協力した”、“連合”の意味を持ちます。艦自体は中華民国への貸与艦で、正規空母並とか……。艦は米国のエセックス級が基で、英国の伝統溢れる建造技術と米国の先進性、日本の独創性を含めた空母となる予定です」桐野は言った。「もっとも、中国にやっても宝の持ち腐れでしょうが」

桐野の目から、嘲るような感情が伺えた。

ユナйтеッドは米英日の合同空母であり、日本が国際的に信頼を取り戻し始めた印でもあった。提案したのが日本側であったことも功を奏し、建造は横須賀の船梁で行われることとなった。これは地理的な観点が影響してのことでもある。また、独ソの連携を恐れている米国は、一刻も早く中国の軍備を整えたかった。今や仮に限り無く近いとはいえ同盟関係を締結した日本に資金や人材等を与えて

素早く造らせ、1日も早い中国への貸与を米国は望んでいるという目論みがあった。

また、米国が顧問等を送って日本の技術力を偵察するという意図もあった。

今日、横須賀へと来航した輸送船団も、このユナイテッドの為の資材運搬が主任務なのだ。

高橋は眉を顰めた。「上手くいけば、空母が1隻確保出来るんじゃないか？」

「上手く……ですがね」桐野は告げた。「この米英との仮初めの同盟は短命なもの。日本は未だ国際包囲網が敷かれている訳で、満州国のこともありますから。来年辺りにも太平洋の平和維持と銘打って米国が宣戦布告してくるやもしれませんし……。そうなれば、始まってすぐには戦力への追加は出来ないでしょう」

「戦争だけは避けたいがな……」

高橋は眉間に皺を寄せ、静かに呟いた。

第23話 ユナイテッド計画（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第24話 満州油田事情

第24話『満州石油事情』

1942年1月26日01…04PM

満州国／大慶

帝国石油株式会社／大慶油田事務所

北満州の大慶は、肌を裂く程の寒さで、肺から漏れる息は絶えず白色に染まっていた。営業所責任者の菊澤は氷海に沈んだような外から南国の事務所内へと舞い戻り、思わず胸を撫で下ろした。頬の疼痛と自然に震える歯茎が全てを物語っている。

1人の職員が菊澤の前に歩み寄ると、茶色のクリップボードを提示してきた。

酷く冷たい右腕の震えを必死に抑え、彼はそのクリップボードに視線を投げかけた。1枚、また1枚と捲られていく書類には、困難極まる大慶油田の現状が記されていた。

「……中国人も少しはやるみたいだな」

彼が感嘆を放ったのは、最後の書類の内容。大慶油田第3区画のことだ。蒋介石は、必要以上の人海戦術で数万人単位で油田採掘を進めていた。史実での大慶油田でも、欧米諸国の支援を受けずに中国は油田採掘を成し遂げたが、今回も目を瞠るものがあつた。日本陸軍のボーリングが到達していないにも関わらず、中国人は相当の深さまで掘り進めていた。大慶油田は手掘り出来る訳だ。

「油田採掘が何時の事になるのやら……」

「気を落とさずに」

菊澤が気を落としたのを見て、職員は慰めた。

彼が嘆くのは当然の事であった。

1941年11月上旬、大慶・遼河・勝利の3箇所で帝国石油と日本陸軍の管理下の中、採掘が始まった。中国側も、もうものは何何でももらうと言わんばかりに人海戦術を駆使して採掘を進めたが、それも限界があった。

例え採掘が進んだとしても、大慶の原油は硫黄と重質分が多いので、現在の日本の石油精製技術ではあまりにも荷が重過ぎた。特に必要となる航空用揮発油に必要な高オクタン価油を精製するためには接触分解、接触改質、アルキル化等の技術が必要となるが、日本の技術では負荷が大き過ぎた。また、大慶から日本へと送るためのパイプライン、タンカー、貯蔵タンク、製油所を24時間加熱し続けなければならないが、そうなると大規模な発電施設が必要となってくる。

現在、火力発電所がインフラ整備も兼ねて建造されているが、完成は遠い。

菊澤としては米国資本から精製・採掘技術を入手し、共同開発にでもすれば大慶油田は使えないことはないと考えていた。しかし、日本国内——特に大元の日本陸軍は経済特区の設立させ半分認めていない状況にあり、折角見つけたこの油田をみすみす手を汚してもいない欧米人の手に委ねれば日清・日露に死んでいった先人達に申し訳がつかないと反対した。

一方の米国側も、政府が企業に接触を避けるよう圧力を掛けている。それも無理はない……と菊澤は思った。何しろ、日本は今現在石油輸入する中で8割を米国に頼って生きている。もし、大慶・遼河・勝利の3拠点が石油製造が量産にでも進めば、完全に石油事情が変わってしまう。それこそ、輸入完全停止どころか世界第3位の石油輸出国としての座に着いてもおかしく無いのだ。政府が言わずとも、石油市場で新たなライバルが生まれることを企業が恐れているのが見て分かる。

ある専門家によれば、量産は最低でも10年は掛かると言う。

日本陸軍が足を引っ張るな……。

菊澤は思わず心の中で呟いた。世論は米国との戦争回避で海軍にその心を寄せていた。反米意識は確かに強いが、経済ともなれば話が変わるのだ……。10日前、彼は中国の重慶へと出掛けていたが、そのことが痛感出来た。

昨今の重慶は5万丁に及ぶM1ガーランド貸与の見返りとして、米軍の軍事拠点に使われていた。貸与で贈られた大量のM3戦車が軒を連ね、みすばらしいトタン家を軍事色に染めていた。フライイングタイガースは未だ健在で、P-40Cトマホーク戦闘機が編隊飛行で空を駆けている。そんな光景がごく当たり前だったが、それも米国の思惑の1つだった。日本としても陸軍の暴走や兵站・訓練による財政への負担を防ぐべく、地元兵の訓練の多半を米軍に任せていた。しかし、その代わりとして日本はインフラ整備に金を掛けたので、重慶の都心部はさながら明治時代の文明開化といった光景に包まれていた。電気や上下水道、道路の整備。結果として煉瓦造りの街々が重慶中心部を彩った。

中国人の中には、そんなインフラ整備の恩恵を受けた人間が多く居る。腐敗役人はアヘン売買を仕切ってブラックマーケットは肥大化し、人身売買も公衆で平然と行われている。

と言っても、腐敗役人という言葉は最早存在しない――ほぼ全員がそれに該当するのだ。中国史では、いわば1つの文化として、アヘンは売買されている。過去からアヘン売買は今でいう薬局で風邪薬を買うのと同じように正当に行われていた。アヘンは駐在する米兵達の間でも蔓延し、そこで生まれた『アヘン成金』達が派手な服で街を闊歩している。

それが現実。

この現実日本にとっても都合が良かった。富裕層を狙い、自転車や二輪車を売ったが、これが飛ぶように売れ、嗜好品類もやはり

売れ始めている。

……経済は全てを変えた訳だ。

第24話 満州油田事情（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第25話 暗躍する者達

第25話『暗躍する者達』

1942年6月2日PM06:04

ソビエト社会主義共和国連邦／モスクワ

MKVD（内務人民委員部）本部

剥き出しのコンクリートに、シンプルなオークのU字型机。その周りを取り囲む形で10人程度の男達が並び、椅子の前で敬礼を果たす。その眼差しの先には、1人の男が座る光景があった。

男――MKVD長官、ラヴレンチー・ベリヤは異質な静寂を保っている。彼は数枚の書類に目を通し、それをぞんざいに卓上へと放り投げた。「……出て行ってくれ」ベリヤは軽く頭を動かして、扉の方を指し示した。「分かるな？」

一同は静かに頷き、踵を返して扉へと進んだ。

「ちよつと待て、最後尾のお前だよ」

MKVDの機関員、アレクセイ・ニコラエヴィッチ・ヴァシレフスキーは9人が出て行った直後、呼び止められて後ろを振り返った。ベリヤの顔色は常時の平静とは欠けていた。

「……何の御用で？同志ベリヤ」

「口を挟むな」青褪めた唇を締めながら、ベリヤが囁く。

ヴァシレフスキーは嫌悪感で歯を食い縛った。

ベリヤは吐息を漏らし、ゆっくりと目を閉じた。そして不気味な程穏やかに、背を向けて両腕を組み、ゆっくりと言葉を発した。

「お前だな？同志フィルビーの死を報告したのは」

ヴァシレフスキーは一層歯を食い縛った。ベリヤはほくそ笑み、ゆっくりと目を開けた。

「何故……です？」

「簡単な事だ。それよりも何故報告書に実名を出さなかった？」

「出す必要が無いと判断した為です」

……そう、必要は無い。何しろ、此処に居る奴等に言う義理等与える価値も無いからだ。それに、なるべく目立ちたくなかったという意図があったが、かの英雄キム・フィルビー——現在M I 6に潜入している男が死んだともなれば、その事実を隠す事は難しい。これでM I 6の情報を失ったソ連は、英国に対する疑心暗鬼が蔓延し、同時にバルバロッサ作戦の情報を流した人物達は願わくばM I 6のスパイと疑われ——いや、疑わしき事がなくとも、逆に疑いが造られるのだが……仲良く粛清される。

「同志フィルビーの死因は？」

「……何らかの毒物によるものです。恐らくは青酸カリウム」

ベリヤは薄笑いを浮かべ、またしても静寂に部屋を包んだ。

「それが事実ならば、お前も私も仲良く粛清される」ベリヤの眼鏡は光に輝いた。「……これはなかったという方が……都合が良いと思えないか？」

2人は互いの顔を見ながら、微笑んだ。

1942年6月3日PM 03:21

アメリカ合衆国／ワシントンD.C.

ホワイトハウス

「久方振りだな。ドノヴァン少将」

ルーズベルト大統領は微笑みながら言った。「いや……“ワイルド・ビル”か？」

大統領直属の情報調整官にして、ウォール街の敏腕弁護士でもあるウィリアム・J・ドノヴァンは先月5月まで英国ロンドンを拠点

に活動していた。彼は史実でCOI（情報調整局）設立に力を貸し、その結晶たるOSSが生まれた事は有名な話である。COI——別名『“ワイルド・ビル”ドノヴァン機関』は1941年7月に誕生した。

第2次大戦前、米国の諜報機関はタコ足的に分散していた。米国陸軍は各1個大隊ごとにS2と呼ばれる諜報機関を持ち、海軍も名高きONI——海軍情報局を持っていた。

しかし、それがあだとなって情報錯乱や事実情報の分散による効率性の低下が深刻な問題として具現化されていた。

それに答えるための諜報情報統合機関こそ、COI（情報調整局）であった。

1942年6月、COIは改組されて『OSS』と名を変える。今物語においても、ほぼ同時期であるこの6月にドノヴァンの元、改組が実行された。彼はその為、数ヶ月前から英国との調整を進めるべく、単身ロンドンへと渡り、そこでいくつかの手土産を受け取った。

「土産の葉巻です」

彼をそう言うと、1つの木箱を取り出して卓上に置いた。ルーズベルトがその箱を開けると、10本程度のボリビア産が犇めき合って詰められていた。

「ふむ……」

ルーズベルトは年代物のシガーカッターを手に取り、先端を切り取った。ルーズベルトは煙草を保護作物にするという政策さえ考えた程のヘビースモーカーであったが、どちらかと言えば紙巻き派である。

「中々だな……流石はチャーチルの愛蔵品という所か」

ルーズベルトが関心する中、ドノヴァンは言った。「もう1つ、土産があるので」

ドノヴァンは再度、告げた。

「……
“重要”な土産が」

第4章 『国際復帰への道』

完

第25話 暗躍する者達（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第5章『英国本土戦線』第26話 予兆

第26話『予兆』

1943年――冬

1943年の冬は、英国にとっては厳しい冬となった。地中海艦隊を失い、エジプトを奪われた英海軍は度々その的として指差される事しばしば。Uボートはスエズ運河がドイツの手中に収まった事により、インド洋まで幅を利かせていたし、船団は更なる通商破壊作戦を受けて壊滅したため、英国国内の資源は乏しいものとなっていた。燃料の節約が叫ばれ、暖を取る事が出来なくなった。そして案の定ロンドンの街の裏通りは凍死体に埋め尽くされ、国内生産能力も低下した。

日独伊三国同盟破棄によって参戦の夢が潰えた米国は支援のみしか出来なかった。

Uボートは連合国船団を全精力を注いで滅ぼす気なのだ。とチャーチルは国民に告げた。ころなしに彼のVサインが弱っているように見えてしまい、事態の深刻さを物語る。

そんな矢先、スコットランドの英海軍の拠点、スカパー・フローで事件が起こった。

1943年1月15日PM10..51

1月のスカパー・フローは低気圧がのしかかり、厳寒な地と化していた。春先ともなればこの寒さが終わりを告げ、少しはましになるであろうと海軍兵の1人は考え、壁付きのベッドに潜り込んだ。

毛布がほのかな温もりを溜める中、鋭いサイレン音が毛布を吹き

飛ばす。

海軍兵はベッドから転げ落ち、慌てて左右を見返した。空襲警報のサイレン音は他の兵達も強引に叩き起こしていたようで、一同は顔を見合わせて外へと飛び出した。

刹那、JU88夜間爆撃機のJumo221エンジンの鋭い音が東から近付いてきた。英国空軍のレーダー網は既にそれを捉えていた為、ただちに迎撃機が飛ばされた。4機から成る夜間爆撃機編隊は途中、3機のブリストル・ボーファイター夜間戦闘機によって行く手を阻まれはしたが、護衛のBf110による援護の元、劣悪な環境の最中で奮戦した。

「……！！」

唐突に巻き上がった爆音と水柱は兵士達に畏怖を与えた。

500キロ爆弾の巨大な水柱が、戦艦デューク・オブ・ヨークにのしかかった。主砲の36.5cm4連装砲塔の1つが割り箸のように根本から真っ二つに裂け、黒い血と紅蓮の花卉を咲き乱した。

4機の内、2機が墜落した事を受け、残りのJU88は爆弾を落として去っていった。残ったものと言えば、湾内で大破を遂げる戦艦1隻に小破の駆逐艦数隻である。

チャーチルが事態の深刻さを実感したのはそれから2日後であった。

1943年1月16日

東京／海軍省

「ほう……英国のスカパ・フローに……」

たまたま海軍省を訪れていた山本五十六大将がそう言うと、嶋田繁太郎海軍大臣は苦面を浮かべながら彼に目を向けた。

「三国同盟を結んでいれば、即開戦でしような」

「かもな。しかし山本君、大日本帝国もこのままでは無事では済まないと言い切れまいか？」

「その穴埋めは済ませますよ。ドイツとて、二正面戦闘は難しいでしょう」

嶋田は目を丸くした。「二正面とは？」

「ソ連と我が大日本帝国です」山本は渋面を浮かべて言った。「これがもし……言い切れはしませんが英国本土戦の前触れだとすれば……勝利したとなれば次はソ連。欲が進めばインドまで手が伸び、最終的には我が国にも……」

「うむ。戦争は御免だが、三国同盟の事もある」

嶋田は告げた。あの破棄を契機に日独間は不可侵条約を結んだが、未来の歴史に習えばドイツは高確率で破棄するだろう。唐突とも言える破棄にヒトラーも憤慨しているはずなので、そこも考慮せねばならない。

「ところで、空母『信濃』は？」

山本は訊いた。

「既に9割方完成していると聞く。3～4ヶ月後には就役予定だ」
「これでとりあえずは間に合いますな」

そんな山本の言葉に、嶋田は俯き呟いた。

「……うむ、信濃を使うその機会が来ない事を祈ろう」

1943年1月16日PM11:08

フランス／サン・ナゼール軍港

サン・ナゼールのUボート・ブンカーは昨年改修を受けたばかりで、非常に堅牢な防壁を誇っていた。50に渡る前世を持つ海軍寄りの総統ヒトラー命令の下、潜水艦隊司令カール・デーニッツは新鋭レーダーや戦略転換によって改変されたUボート艦隊の再編にた

ずさっていた。

Uボートが今作戦に大量投入される事をデーニッツは知っていたが、彼はあえてそれを切り出す事は無く、淡々と事務作業を続けるばかりだった。

1942年にエジプトが陥落して以降、Uボートの活動拠点は広がった。インド洋に展開するUボートは本国艦隊に再編される東洋艦隊の艦艇を少しでも足止めしようと狩りを始め、競うように新型艦艇を撃沈していった。彼等の最大の標的と言えば、戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』であるが、流石に新鋭戦艦を不用意にインド洋に展開するのを恐れているのか、一向に姿を見せなかった。この頃、42年の冬には既にドイツ国内でソナーが完成している。

そして1943年、遂にドイツ海軍の本領発揮。

アレクサンドリア港を根城とするドイツ海軍第1機動部隊が発進し、潰えた夢に見えた英国本土上陸作戦、いわゆる『シーライオン（アシカ）作戦』を始動させようとしていた。

サン・ナゼールのUボートとその乗員達はシーライオン作戦の障害となる大西洋方面からの邪魔者を排除すべく、送り出される。それはUボートが浅いドーバー海峡では力を発揮するのが困難だったからだ。エジプト方面のUボート艦隊も、その大半がスエズ運河でインド洋へと向かい、東洋艦隊からの本土への増援を防ぐべく、哨戒任務に務めた。

第5章 『英国本土戦線』 第26話 予兆（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第27話 第2次バトル・オブ・ブリテン（前書き）

・ジェット戦闘機『Ta183フツケバイン』性能諸元

全長…11.68 m

全幅…10.6 m

全高…3.5 m

翼面積…25.10?

空虚重量…3.736 kg

運用重量…6.875 kg

エンジン…ターボジェットエンジン

最高速度…1,100 km

巡航速度…954 km

巡航高度…15,000 m

航続距離…3,000 km

兵装

固定兵装…30 mm MK108機関砲×4

ロケット砲…55 mm R4Mロケット弾×30

ドイツ軍初の実用型ジェット戦闘機。クルト・タンク博士考案の『プルキ?』戦闘機を基に改良を加え、完成した。メッサーシュミット社のMe262はこの機のエンジン技術を取り込んでおり、初期型ジェットエンジンの出力不足を解決したきっかけを作った機でもある。海軍仕様の機も存在。

第27話 第2次バトル・オブ・ブリテン

第27話『第2次バトル・オブ・ブリテン』

1943年1月17日AM06・51

ドーバー海峡

A級駆逐艦『アカテス』は先日スカパーフローで勃発した空襲騒動に先立ち、海峡哨戒任務に務めていた。乗員達は何時にもなく不安げな顔色を浮かべ、英国国内で湧き上がっている1つの“噂”がデマである事を祈った。

それは厳密に言うところ――“第2次バトル・オブ・ブリテン”で、前の様に無数のBf110が悪魔の急降下爆撃機JU87を引き連れてやってくる……というものだ。それに加えて、今回は度胸も残酷性も備えた兵員と新型戦闘機でこった返す数隻の独海軍空母も連れてやってくるというのだから益々不安に駆られてしまう。

普段のウィリアム・ヒギンス一等海曹は、海では常に平常心を保ち、甲板に立ちのぼる潮の香りや、蒸気ノズルから降りてくる霧越しに曙光が煌めく様に心が洗われる。だが今夜は、東の水平線に広がる紅蓮の光の帯に戦慄を覚えた。1月の、それも早朝の海上だといふのに体中汗みずくになり、歯茎や背筋を伝う不気味な疼きを抑えようと、身をよじった。

駆逐艦『アカテス』はポイントの前後を行きつ戻りつしながら、蒸気を吹かす。

「……7時だ」

ヒギンスはぼんやりと時計を見つめ、呟いた。

突然、乗員の1人が弾かれた様に背筋を伸ばした。急に何かに気付いたらしい。「おいおいおい……これはヤバ過ぎるぞ、ウィ

ル！」ヒギンスに向けた顔は蒼白だった。

「何がヤバいつて？」

ヒギンスの言葉に一瞬、意識喪失した後、きっぱりと言う。「軍艦だよ軍艦！」

仲間の言葉にヒギンスは当惑し、外を見据えた。そこには、これまでに見た事もない程多くの艦艇が犇めき合う光景があった。その中には、“噂”に過ぎなかった筈の空母の姿さえあった。敵大艦隊は曙光によって何とも不気味に海へと投影されている。

「あれは地中海艦隊を殲滅させた空母だぜ」

「嘘だろ……」

ヒギンスは目を落とし、そこから艦隊の姿をもう1度見た。気が変になりそうだ。

クラウド・エアクラフトキャリアー

「キャベツ空母か……」と彼は言った。

ほんの少し前、英仏海峡は機雷等により、海上封鎖された。その結果——独海軍艦隊は接近し、本土までの攻撃圏内へと向かった。中核を担うのは、ドイツ海軍第1・第2機動部隊である。第1機動部隊は2年の間に昇級を遂げたアルブレヒト・ベルンフリート海軍中将の指揮下となっている。

空母『グラーフ・ツェッペリン』は30ノット程の速度で猛進しており、その前に大半の航空機を空に飛ばしていた。大抵はエル・アラメイン沖海戦以降、空母艦載機主力として不動の座に着くBf 109Tであったが、その中にはJU87爆撃機の大編隊も含まれている。更には今回、新鋭ジェット戦闘機のTa183も含まれていた。

このTa183——愛称『フツケバイン』は史実では未完成に終わった機体だったが、クルト・タンク博士やそのプロジェクトチームの大半が1960年までヒトラーが生き残ったという前世の記憶を潜在的に持っていた為、フォッケウルフ社はメッサーシュミット

やハインケルよりも早くジェット機開発を進める事が出来ていた。

航空爆撃は午前7時より始まった。

ドイツ空軍の戦略爆撃隊はフランスやドイツ国内より来ていたが、そこにはTa183の姿もあった。機動性に優れながらも航続距離の大きいTa183はレーダー網を頼りに待ち構える敵迎撃編隊を粉碎する等、大いにその戦果を上げた。

爆撃はまずレーダー網から始まり、警戒システムは寸断された。英空軍上層部はあまりにもレーダー網の位置が知られている事から、その後にスパイが国内に潜伏していたのではないかという疑念を抱くことになったが、それは未来情報を基にした成果である。レーダー監視網が寸断されると、空軍は面白いように国内へと侵入し、主要な航空基地や湾岸施設や産業地帯に爆撃を集中化させた。

一度、大地は炎に包まれた。

第27話 第2次バトル・オブ・ブリテン（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第28話 英国大艦隊出現(前書き)

・補助航空母艦『イエーデ』性能諸元

排水量 基準…18,160 t

満載…23,500 t

全長…203.0 m

全幅…27.0 m

吃水…5.10 m

機関

ワグナー式オールドギアードタービン×2基

(26,000 hp) 2軸

最大速力…19ノット

乗員883名

兵装

65口径10.5 cm連装高角砲×4基

83口径3.7 cm連装高角砲×6基

20 mm 4連装機銃×8基

艦載機

Bf 109 T

Ju 87 D

計24機

貨客船『グナイゼナウ』を改装した軽空母。本来の史実と異なり、前世の余波を受けたヒトラーの名により、第2次大戦勃発初期に改装が開始、1942年1月上旬に完了した。正規空母の直衛艦としてシーライオン作戦に参加している。

・補助航空母艦『エルデ』性能諸元

排水量 基準…18,160 t

満載…23,500 t

全長…203.0 m

全幅…27.0 m

吃水…5.10 m

機関

ジーメンス・シュツケルト式タービン×2基
(26,000 hp) 2軸

最高速力…19ノット

乗員900名

兵装

65口径10.5 cm連装高角砲×4基

83口径3.7 cm連装高角砲×6基

20 mm 4連装機銃×8基

艦載機

Bf 109 T

Ju 87 D

計24機

貨客船『ポツダム』を改装した軽空母。『グナイゼナウ』姉妹艦の1つで、シーライオン作戦では正規空母『ペーター・シュトラッサー』護衛を担っている。

第28話 英国大艦隊出現

第28話 『英国大艦隊出現』

1943年1月27日AM09・54

ドーバー海峡

戦艦『キングジョージ5世』を旗艦に戦艦8隻、巡洋戦艦2隻、空母4隻、重巡洋艦5隻、軽巡洋艦4隻、駆逐艦35隻から成る英海軍本国艦隊の一大艦隊は、ついに機雷源を突破し、英仏海峡に侵入した。この頃、地中海艦隊は消滅し、緊迫するヨーロッパ戦線の事を考え、本国艦隊は大規模な増強が施されていた。その為、史実よりも強大な艦隊として名を馳せていた。

英仏海峡の入口に差し掛かった頃、突如としてレーダーが大艦隊の存在を知らしめた。

キング・ジョージ5世級戦艦『キング・ジョージ5世』は、ただちに前部煙突右舷の航空機格納庫からウォーラス水陸両用偵察機を発艦させた。

「報告します。敵は戦艦3隻、空母5隻、重巡2隻、駆逐艦多数との事……」

「空母5隻？」艦長は啞然とした顔で言った。「経験も無しに5隻を……」しかも短期間だ。最初の正規空母『グラーフ・ツェッペリン』が出現して以来、立て続けに4隻が就役したとでも言うのか？Uボート依存症になりがちなドイツ海軍にしてみれば信じられない事実だ。

「対潜、対空警戒を厳とし、戦闘準備を進めろ」

この間、独海軍総司令官のエーリヒ・レーダー元帥は、空母『グラーフ・ツェッペリン』を主軸とするドイツ海軍第1機動部隊、空母『オットー・リリエントール』を主軸とする第2機動部隊に対し、英海軍本国艦隊を迎え撃つ様、下命した。

これと同様に、ドイツ空軍総司令官エルンスト・ウーデット上級大将も、近辺に展開していた第4航空艦隊の部隊に迎撃を下命した。史実では、ウーデットは1941年11月17日に自殺している。しかし、6月のヒトラー達に起こった前世の記憶の復活により、『kaiser-house』の一員で愛国心の強いベルンフリートは、無能で生きる価値もない、穀潰しのヘルマン・ゲーリングを死刑にする事を望んだ。しかし、ヒトラーはそれが軍全体の士気低下や国際面でのイメージ低下に繋がるとして否定し、代わりの案を出した。

1941年9月。ゲーリングは総統命令で長期間の療養を言い渡される。

それはある噂——同性愛やスパイ疑惑によるもので、ヒトラーは現状把握までオーバーザルツベルクの自身の別荘にモルヒネ中毒の療養も兼ねて滞在するよう伝えられた。ゲーリングは自身の嫌疑を頑なに否定していたが、ヒトラーは半ば聞き流した。

それも無理はなかった。何しろ噂を流したのはヒトラーだったのだ。ゲーリングは拘留されながらも、休暇を楽しめるものと信じていたようだったが、そんな事は無かった。彼はバイエルンバイエルンでも、第110化学防護中隊のある施設——へと運ばれた。

そこは中隊隷下の新設部隊『精神小隊』の施設——陸軍洗脳研究所。所長はあのホッカー神父だった。

ヒトラーは1960年まで生きた前世で、ホッカー神父がアルゼンチンの新生第3帝国で行っていた洗脳実験にゲーリングを参加させた。神父は、薬品や過酷な実験の副作用で自殺や衰弱死に陥るかもしれないと警告したが、ヒトラーは逆に笑みを浮かべた。

精神薬・洗脳・自己暗示の3つから成る実験は着実に成果を出し

た。最初は自身の危機を悟り、脅迫や罵倒を飛ばしていたが、それ
もすぐに止んだ。自身が過去の栄光ばかりを欲するモルヒネ中毒の
急降下爆撃依存症の肥満体ではなく、未来の航空戦術を知り、海軍
の能力にも敬意や賞賛の意を示す、ヒトラーに絶対の忠誠を誓った
健康体のドイツ空軍元帥であると暗示を掛け、洗脳を図った。

1943年になっても、洗脳は続いていた。なるべく暗示を長引
かせる為だった。その結果だが、9月に拘留されて以来、ゲーリン
グに近いエアハルト・ミルヒの影響力を削ぐべく、対立関係にある
ウーデットがゲーリングの兼任を任され、今に至る。

独海軍艦隊は空母『グラーフ・ツェッペリン』、『ペーター・シ
ュトラッサー』、『オットー・リリエントール』計3隻の正規空母
に加え、『イエーデ』、『エルデ』という2隻の補助空母を加えた
機動艦隊となっていた。他には戦艦『ティルピッツ』、巡洋戦艦『
シャルンホルスト』、『グレイゼナウ』、重巡洋艦『アドミラル・
ヒッパー』、『プリンツ・オイゲン』、駆逐艦25隻という戦力で、
数から言えば、圧倒的にドイツ海軍が劣勢だ。

とはいえ、Ta183といった新型兵器もあり、未来で英海軍の
戦術を学んでいたベルンフリートにはぬかりがなかった。

——戦艦8隻といっても、詰まる所は時代遅れの鉄屑の山なのだ。

第28話 英国大艦隊出現（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第29話 上陸緒戦

第29話 『上陸緒戦』

1943年1月27日AM11:08

英国／ダウニング街10番地

ロンドンの政治拠点、ウェストミンスター地区のダウニング街は不気味なまでに人けがなかった。前方には、ドイツ空軍大編隊が無数の影を投げかけてくる。頭上からは、雪に混じって人形や降伏勧告のビラが降ってきた。

ナンバー10に居座るサー・ウィンストン・チャーチル英国首相は、ヒューヒューと吹き付けてくる北風と共に響く、Ju87急降下爆撃機の轟音に嫌気が差しており、不機嫌そうにボリビア産の葉巻を吸い続けた。チャーチルは上を向くと、椅子から立ち上がり、壁に沿って歩き出した。壁に取り付けられたランプの明かりがぼろりと柔らかい光を放ち、ジョージ2世の肖像画を不気味に照らした。初代首相、ロバート・ウォルポールにこのナンバー10を与えた人物だ。

心なしか、チャーチルは肖像画のジョージ2世が機嫌悪そうに見えた。

「ハレルヤ！（主を褒め称えよ）我が大英帝国に戦艦を与え下さり感謝致します」チャーチルは笑みを浮かべ、天を仰いで叫んだ。

「ジョージ5世の鉄槌に感謝！」

チャーチルは不敵な笑みを浮かべ、本国艦隊司令長官のブルース・フレージャーに顔を向け、首を振った。「奴等にはいい気味だよ。戦艦8隻には到底及ぶまい」

敬礼のような動作を行い、フレージャーは苦面を浮かべた。

「首相、油断は大敵です。制海・制空権は未だ奴等の手の中。正規軍の配備と空軍・レーダー網の再建も進まない状況にありますので……」

「それは海戦次第だろうな」チャーチルは言った。「まあ……、この海戦にデューク・オブ・ヨークとプリンス・オブ・ウェールズが居ないのは残念だね。2隻が居れば、キング・ジョージ5世級勢揃いで見物だったろうが、そこを責めるつもりはないよ、司令長官」

今や、大英帝国の問題は9個師団の上陸部隊だけだとチャーチルは確信していた。

1943年1月26日AM08:03

英国／ケント州

ロムニーマーシュ

ほぼひとりで、私の右手がポケットに潜り込んだ。私は震えていたが、南東に近付くにつれ、吹き付けてくる風はより冷たくなっている。

C軍集団のブランデンブルク師団落下傘大隊に所属するシェール少尉は、眼下に広がるリム飛行場に目を瞠りながら、1歩を踏み出した。途端に身体は宙に浮き、背中のストラップがきつく締めかかってきた。シェールは両手にラインメタルFG42自動小銃を抱え、腰元のホルスターに収められた拳銃1丁とナイフ1本という脆弱な装備を余儀なくされていた。これは降下猟兵の宿命的問題だったが、ラインメタルFG42だけでも持つて行けたのは奇跡的だった。未知を知るヒトラーに初期問題を指摘されている為、ある程度は改良されているが、その投入数が数少ない。精鋭のブランデンブルク師

団にも、支給された量は左程無く、大半は将校達の手に渡った。
着地すると、彼はすぐさま部下の兵達の元へと駆け寄った。

「……あれだ」

シェールの視線の先には、リム飛行場の姿があった。日本にも似た田園風景の中、飛行場からは6分置きのペースで戦闘機が飛び立ち、攻撃に徹していた。シェール少尉率いる部隊の任務は、この飛行場の制圧にあった。

銃撃戦は間髪入れずに始まり、シェールはFG42を抱えて飛行場へ乗り込んだ。内陸部まで展開していたJu88爆撃機の猛攻により、土塵が飛び散り、空からは轟音が響いた。

シェールは姿勢を立て直してFG42を持ち上げ、煉瓦張りの地面を進み始めた。降下兵用に投下されていたコンテナはお粗末にも1軒の民家へと降り立っていた。その家は大規模な空襲の余波か、屋根の半分が崩壊していて室内の姿を晒していた。シェールはドアノブに手を掛け、扉を開けると銃口を掲げながら歩を進めた。

コンテナはリビングのダイニングチェアを粉砕して床に降り立っていた。

「回収しろ。すぐに向うからな」

兵士達は自動小銃満載のコンテナを漁り、急いで銃器をチェックした。降下によって問題等起きていないかを確かめるためだ。

その後、ブランデンブルク落下傘大隊が集結するまでには時間を要した。前代未聞とも言える大規模な空挺作戦のせいかどうかは分からなかったが、一同は焦っていた。この先にはロンドンが控えているし、陸軍上陸部隊を航空攻撃から守るには時間が足りないのだ。

英国本土上陸は制空・制海権掌握の下、始まった。

ドイツ軍はハリスからポーツマスに至る長大な海岸の各所に9個師団を一斉に上陸させた。英空軍は既に70%に及ぶ損害を被って

いたため、迎撃だけでも手一杯でとても対地攻撃など行える余力はなかった。しかし、チャーチルはそれを許さず、独軍上陸妨害が始まる。

上陸用舟艇が、軽装備で上陸するのは流石にヒトラーの誤算だった。あまりにも英軍を軽視していたのか、時間を急ぎ過ぎたのかは定かではないが、上陸は困難を極めた。

水陸両用の三号潜水戦車は相当数が配備されており、海底を潜行し、海から出るとそのまま英軍防衛隊の排除から始めた。しかし、使い勝手が分からず、混乱も多かった。ドイツ軍は500両の戦車が上陸を行えると考えていたが、予想以上に高低差の激しい英仏海峡の海底は英軍の攻撃よりも多くの戦車を破壊した。

ともあれ、上陸はとりあえず成功したのだった。

第29話 上陸緒戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第30話 本国艦隊VS航空艦隊

第30話『本国艦隊VS航空艦隊』

1943年1月27日AM10:23
ドーバー海峡

「第4航空艦隊の復讐劇だ」
ルフトフロッテ4

アルブレヒト・ベルンフリート中将は空母『グラフ・ツェッペリン』艦橋に座し、静かに呟いた。背後では、スツーカー・リードが逆巻きながら、流れていた。

ベルンフリートは立ち上がった。頭を仰け反らせ、蓄音機に負けじと、美しい声色で高らかに歌い始めた。

黒鷲の大群は征く

陸と海を空高く越え

彼等の姿が現れるや

敵は慌てて逃亡するのだ

黒鷲は急降下をかける

高空から大地目掛けて

彼等は敵の心臓部へ

鋼の鉤爪を打ち付けるのだ

我等は天空の黒き騎兵

スツーカー スツーカー スツーカー

出撃のある時 我が準備は万端

スツーカー スツーカー スツーカー

天空から降下し猛撃を加えるのだ

我等は地獄も恐れず 息つく暇も必要としない

最後に敵を地に葬り去るまでは

イギリスを イギリスを イギリスを打ち破るまで

スツーカーよ スツーカーよ スツーカーよ！

海峡の彼方から、唸りを上げて飛ぶJu87急降下爆撃機が視界に飛び込んできて、回転翼の音が艦橋に反響した。こちらを目視すると、操縦士は精一杯手を振って任務の意気込みを示した。キャノピーが開いていて、頭巾を被った中柄な男、第4航空艦隊所属のベツカート少尉は笑みを漏らした。

英仏海峡の高度2,000m地点まで降り立ったベツカートは、まるでレイピアの様に細くて鋭い英国の陽光に目を瞬いた。無数の編隊が濫座する中、奥まった位置に、彼等の編隊は待った。

Ju87大編隊は排気音の反響する空域に滞在すると、Bf109のエスコートを受けながら、英海軍本国艦隊の防空圏内へと突入した。

先陣を切ったのは、この編隊の指揮官、ハンス・ウルリッヒ・ルーデル中尉。独ソ戦の英雄、撃破王と呼ばれた男だ。彼は終戦後、アルゼンチンへと渡っており、1960年までヒトラーが生きた前世においては、新生第3帝国の新鋭爆撃機搭乗員として招き入れられる予定だった。その為、彼には2400回余りの出撃経験や、戦車519両・艦艇80隻に渡る撃破の潜在記憶があった。

「1隻残らず叩き潰してやれ！」
ルーデル中尉は無線越しに叫ぶとスロットルを絞り、敵艦隊群に突っ込んだ。

英独戦闘機計170機が入り乱れる中に入ると、淡い灰藍色の光がかすかに操縦席内へと差し込んできた。前方ではこの世のものと

は思えない数で作られた戦艦の群れが蠢き、煙突から絶えず黒煙を吐き出していた。

『各員、我々が潰すべきはあのキング・ジョージ5世だ』

雲を頂く煙突は、幻にあらず。あの英仏海峡に浮かぶ海獣は敬意を込めて、潰してやろう……。40mm連装ポンポン砲が上下均等の取れたテンポで銃弾を放つ中、ルーデル中尉はJu87を目一杯急降下させた。

——絶叫し、身を振じらせる。

防風ガラスの面の中でそれは響いた。ジョージ5世からだ。既にルーデル中尉の身体は垂直となり、身軽になった機体の体勢を立て直していた。煙が黒い血の様に艦体を伝い、その合間からは——尖塔の様に、或いは噴水の様に、赤や橙や黄色の炎は蒼天の空に向かって伸び上がっていた。ルーデルの背後からは、むせび泣くようなサイレン音が絶えず響いた。

爆撃は2番砲塔に直撃し、砲塔と艦橋前部を崩壊させた。背後を飛び、旋回してその光景を見届けたルーデル中尉は、気が付くと、安堵と満足感からの吐息が漏れていた。

「……さらばジョージ5世、これからは第3帝国ヒトラー総統閣下の時代だ」

食い残されたか、それとも病気で弱っているのか。

まるで食物連鎖の下位に位置する草食動物の様に、かのキング・ジョージ5世は英仏海峡に蹲っていた。中央部にポツカリと開いた穴は、かつて存在した第2砲塔と艦橋の存在を消し去っていた。垂涎する獅子に悉く食い碎かれたジョージ5世はJu87の大群に襲われ、その跡すら残っていなかった。

「他愛無い……」とベツカート少尉。ゆるゆると後ろへ過ぎて行く艦艇群は、キング・ジョージ5世に起こった悲劇をただ指を咥えて見るしか出来ていなかった。旗艦を失った本国艦隊は烏合の衆、この間、やるのが筋というものだろう。

『各員、随時艦艇を撃沈せよ。第2目標は――アンソン』

既にベッカート少尉の照準器の十字線は、キング・ジョージ5世の姉妹艦『アンソン』を捉えていた。了解――と、ベッカートは胸の中に呟き、500キロ爆弾の投下準備を進めた。

微動する十字線は固定され、床部に衝撃が走った。途端に、潮の香の混じった爆風が吹き上がって、機体は大きく持ち上げられた。眼下では、アンソンの鋼鉄がまるでシルクのように引き裂かれ、グニャリと第4砲塔と艦尾が湾曲していた。大破は一目瞭然だ。

不意に起こった畏怖を宥めつつ、ベッカートはアンソンの頭上を駆け抜けた。

第30話 本国艦隊VS航空艦隊（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第31話 誤算

第31話『誤算』

1943年4月27日PM05..49

英国／バークシャー州

ウィンザー

英国の南東部、バークシャー州の都市の1つであるウィンザーには、壮麗な城が聳えていた。英国王室所有のウィンザー城は、現在、英国陸軍最高司令部として使用されている。現代の騎士である近衛歩兵連隊と、周囲を囲む石壁によって守られたこの城には、サー・ウィンストン・チャーチルやその他英国内最高権力者や、王室一家が滞在している。

――3ヶ月前。

英国存亡の分かれ道と言われた英仏海峡海戦は、ドイツ海軍機動艦隊の勝利に終わった。

あの日、戦艦4隻、空母2隻、重巡3隻、軽巡1隻、航空機160機近くを一気に失った本国艦隊が独海軍に与えた損害と言える損害は護衛空母『エルデ』、巡洋戦艦『シャルンホルスト』を撃沈した事ぐらいだった。正規空母に対しては『ペーター・シュトラッサー』を小破させたぐらいである。戦艦8隻の内、4隻を僅かな時間に失った事は、チャーチルにとっては大きな誤算だった。

今日はあの海戦からちょうど3ヶ月。チャーチルは実行すべき事項をある人物に伝えようとしていた。装飾の施された扉のドアノブに手を掛け、捻る。音も無く開いた扉に足を踏み入れると、1人の女性が玉座に座している。1日の最後の光を浴びる彼女の顔は、黄昏色に染まって哀しげだった。

「……王妃、頼みがあります」

膠着した声でチャーチルが告げると、彼女は凜とした顔で困惑したチャーチルの顔を見た。

「ロンドンから逃げ、イーストエンド（貧困層・移民層の人々）を見捨てた私に……、これ以上何を望むつもりです？」エリザベス王妃は、チャーチルの胸を突き刺すような声で尋ねた。

サー・ウィンストン・チャーチルは真剣な表情で身を乗り出した。「……カナダにお逃げになって頂けませんか？」

——彼女は怯まない。

彼女は屈しない。

彼女は絶対に反対するだろう。

チャーチルはそれを覚悟しながら、王妃エリザベスに告げた。第2次大戦中、例え空襲が起ころうとも人々を励ます為ならばと爆弾の雨の下を走り、住家であるバッキンガム宮殿にV2ロケットが直撃しても彼女は逃げなかった。1ヶ月前のロンドン陥落時にも、彼女は自らチャーチル達が居る首都防空司令部に来訪したのだ。ブラックフライヤー橋付近に位置する防空司令部は、既に壊滅した早期警戒レーダー網のごく1部の生き残りを駆使し、廃棄寸前の旧式戦闘機で新鋭ジェット戦闘機を撃墜するという組織である。ロンドンはこの組織と、子供老人中心の郷土防衛隊によって守られていた。

「あなた方全員を家族の元へとお帰しすることを約束致しますから、家族の為に頑張ってください」と兵達を励ましたのだ。彼女は本当に英国を愛しているのだろう。

王妃は頑なにだんまりを決め込んでいた。呆れているのだろう。チャーチルはため息をついた。「貴女はこの国の希望なのです。そんな貴女がここでドイツ軍の捕虜ともなれば……」

「嫌です」

王妃は首を傾げてチャーチルを見つめた。「まだ取り残された人

々が居ます。彼等が全員、最低でもヨークに到着しない限り、私はここから出る訳にはいきません」

「分かっています」

「ならば……」

王妃は何かを言おうとしたが、口を噤んだ。軍服を着た1人の女性が無礼な態度でやってきたからだ。金色のショートヘアに凛々しい風貌を持つのは、近衛歩兵連隊第1連隊名誉隊長で女子国防軍の少尉、エリザベス・ウィンザーだ。

——後の女王、エリザベス2世でもある。

「私も首相に賛成です」

彼女は2人の顔を見回した。立ち位置となる扉前から、奥に玉座が1つ。王妃エリザベスとチャールスは向かい合うように立っている。若くて、自由奔放で、威厳と沈思を備える声色は鋭角ながらも優しさに溢れ、部屋中に響き渡っていた。

「米国はスカーパラに10万人の避難民を救助出来るだけの艦艇を送ると言っています。ここは彼等を信じ、逃げた人々を米陸軍到着まで励ます事が貴女の責務では？」

王妃は信じられない顔で娘の顔を見つめた。「……言うようになったわね」

ウィンザー少尉は首を振った。「その言葉は記憶に閉まって鍵を掛け、カナダまで持って行って下さいませんか？」彼女は笑みを浮かべ、母の顔を静かに見つめた。

『……目標地点は確認出来たか？』

無線が耳障りな音と共に息を吹き返した。A軍集団司令部の通信官はやや焦り気味の声で告げてきたので、ルーデル中尉は顔を顰めた。「出来ている。城がよく見えるぞ」

この3ヶ月間、戦車や艦艇相手に戦ってきたので、空襲と言うのはやはり嫌だった。特に王室の潜伏している可能性が高いと言われるウィンザー城を無差別空爆するなど、絶対にやりたくはない、と何度となく自身に怒鳴り、胸に誓ってきた。だが、国の為ならやるしかなかった。

ウィンザーはロンドンから日帰り出来る程近い。これまでA軍集団司令部が攻撃対象になかったのはただ単に無意味だという理由である。しかし、王室国外逃亡の情報を聞きつけ、司令部も考えを見直したらしい。

「いいでしょう」気が付くと、そう答えていた。

Ju87急降下爆撃機はTa183のエスコートを受けながら、茜色の空を進んでいた。自分でもあっさりと承諾した事が信じられなかったが、城の姿が見えてきてからは意志が固まった。

兵士達が夕陽の照りつける中庭に集まってきた。空襲のサイレン音がけたたましく鳴り響き、QF3インチ20cwt高射砲射撃手が酒瓶を投げ捨て、銃座に飛び乗った。不意に10個の黒点が黄昏の空に姿を現す。兵士は喉を伝う吐き気を押し殺した。

Ju87が1機、物凄い速度で急降下してきて射撃手は目一杯、空に花火を打ち上げた。

対空砲火が空を彩る中、ルーデル中尉はそれをも簡単に避けていた。500キロ爆弾が投下されたのはそれから間もなくの事であり、強固な石壁は崩れ落ちた。

夕暮れの地平線。西を覆う赤い帯の上に、3号戦車の姿が浮かび上がっていた。3インチ16cwt対戦車砲はそこに集中砲撃を繰り出した。

1日の終わりに玉座に座っていたエリザベス王妃は、突如響いた爆音に動じなかった。チャーチルとウィンザー少尉は慌てて王妃を連れ、城の地下へと駆け降りた。

「……まずいな」

チャーチルは告げ、ウィンザー少尉も頷いた。「ですが、地下道で逃げ切れるはずですよ」彼女はそう言い、石壁を叩いた。その地下道は、かつてチャールズ2世とネル・グウィンが密会する為に作ったと言われる代物で、ウィンザーの街まで繋がっているという。現在、ウィンザーはチャーチルが王室を逃がす脱出点として、秘密裏に兵力を拡大して守っている街だった。そこでヨークまで逃げればいいとチャーチルも考えていた。

3人は王ジョージ5世と合流し、地下道を進んだ。爆撃に揺さぶられていたが、強度は十分で逃げるのに支障はなかった。

1943年5月2日AM10:38

大西洋

U-123艦長のラインハルト・ハーデガン少佐は3ヶ月の間、大西洋上で米貨物船団に対する通商破壊任務に就いていた。寂しい場所で、船団にとっては危険な時間帯でもある。数分前、潜望鏡に1隻の船影が見えたので、Uボートは速度を上げ、潜望鏡深度を保ちながら進んでいた。

目標船の航跡は大きく、搭載されたソナーにも映っていた。30度近く回頭しつつ、後を追う。

「注水開始！」

ハーデガンの声は艦内に轟く。

潜望鏡の把手をしかと握り締め、水平線に浮かぶ船影に十字線を定めた。G7e電池魚雷は鮮やかな航跡を刻まず、一直線に駆け抜けた。発射数は2本、最後の2本だ。

ハーデガンと乗員達は俯き、待った。直撃することを祈りながら

……。2本のG7e電池魚雷の内、1本の爆発音が艦壁を揺さぶり、鈍い音を響かせる。ハーデガンと乗員達は沈黙の中で静かに笑みを浮かべ、密やかに喜んだ。

「……当たったな」

ハーデガンは呟きながら潜望鏡を見た。船は無事で、こちらに気付き、徐々に近づいてきたのだ。ハーデガンは愕然とした。目標が輸送船でなく、軍艦である事が明らかになった。だが、驚くべき所はそこではなかった。

突然、軍艦後方から5機の航空機が飛び立ったのだ。

……。何だあれは。

その戦艦の姿を見て、彼は愕然とした。それは軍艦にして軍艦にあらず。航空母艦にして航空母艦にあらずといった代物。

——氷塊から造られし戦艦『冰山戦艦』だった。

第31話 誤算（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第32話 ノアの方舟作戦（前書き）

・防空戦艦『エル・ドラード』性能諸元

排水量 基準1,100,000t

満載1,200,000t

全長300.0m

全幅50.1m

吃水25.0m

機関

ディーゼル・エレクトリック式タービン×8基
(240,000hp) 4軸

冷却システム

最大速力24ノット

乗員1,500名

兵装

38口径127mm砲×20基

56口径40mm対空砲×160基

70口径20mm対空砲×158基

533mm5連装魚雷発射管×10基

艦載機

PBY

TBF

F6F

計20機

氷山空母『ハバクック』計画中、開発された試作艦を実用化した

もの。数々の問題を解決し、氷山防空戦艦として誕生した。空母としての能力も兼ね備えており、右舷に飛行甲板を持っている。

名前の由来はアンデス奥地に存在するという伝説の黄金郷『エル・ドラード』から。

第32話 ノアの方舟作戦

第32話 『ノアの方舟作戦』

1943年5月3日AM08…20

英国／スカーパラ

スカーパラ沖

第1機甲軍団司令官のジョージ・S・パットン少将は、北海に展開する重巡洋艦『オーガスタ』甲板上で奇怪な艦艇に目を瞠っていた。氷結したかに思われた艦体は氷そのものであり、無数のボフォース40mm対空砲とエリコンFF20mm機関銃が甲板を固めている。

「何なんだろうな……あの氷の塊は……」ヒューイット少将は冷ややかな眼差しで言った。

「海軍共の玩具だよ」パットンは言った。「知っているか？あの艦の名前」

「USSエル・ドラードー」

“黄金郷”……とはよく言ったものだよ。実態は凄いで。E1—Doradoはスペイン語で「金箔を被せた」って言うらしいんだが……あれと同程度のモンタナ級戦艦全面に24金の金箔を張り付けただけの費用がああ艦に掛かっているらしい」パットンは笑みを漏らした。「まさに“黄金”、とんだ金喰い虫だよ」

「あんなのに予算を奪われちゃ堪らん」ヒューイットは憤慨して言った。

オーガスタが高波に晒された時、通信官の聞き慣れた声が無線機から雑音に混じって聞こえてきた。『パットン少将、『ノアズ・アーク作戦』第1ラインを完遂しました』

パットンは、双眼鏡で港湾都市スカーパラを見据えながら、無線の声を聞いた。合計戦力35,000人の救援任務部隊は海岸に無事上陸し、防衛線を確保したという。不戦を貫く米国は、複数の制約を米陸・海軍に付けていた。制約は、現在の自衛隊のように救援活動のみ実行し、独軍との交戦は行わない。独軍の攻撃を受けても極力戦闘を控えることの2つである。

無論、英雄願望を持つパットンは反対したが、制約は絶対だった。

1943年5月10日PM08:03

英国／ヨーク

第1難民キャンプ

用心深く隠された扉を開けると、背を向けるエリザベス王妃の姿があった。

サー・ウィンストン・チャーチルとエリザベス・ウィンザー少尉の2人に、質素で人けの無い個室に座する王妃は小さく頷き、立ち上がった。杖を持ち、夫ジョージ6世の傍に寄り添い、薄汚れた洗濯物やゴミが乱雑する石畳の裏通りを抜けると、無数の松明の光が視線に流れ込んできた。そこは難民キャンプの広場であった。

チャーチルは短いスピーチ用紙を王妃に手渡した。彼としては、演説に深入りして時間を無駄にしたくなかった。避難時間は極力抑えられているが、王妃と王は最後の難民の1人がヨークから出たら、自分達も逃げると言った。その為、米軍の第1・2次避難計画には参加せず、今回の第3次避難計画でようやく参加する気になったのだ。しかし、空襲は激しく、ヨークも攻撃の目標として空襲を受けるようになってきた。最早、一刻の猶予も無い。

短めのスピーチを終えると、王と王妃は、米兵に先導され、トラックに乘せられていく避難民の姿を見送った。

——氷山戦艦『エル・ドラード』

日米英不可侵条約から、大西洋への危険性を重視した米海軍により大西洋方面に配属されたレイモンド・A・スプルーアンス少将は、世界初の試みとなる氷山戦艦に将旗を掲げていた。歴史の異変の波紋が世界中に広がっていく中、人命救助活動——いわゆる『ノアの方舟』は出航の時を迎えようとしていた。

ほんの数日前のように、氷山戦艦と彼は出会った。その戦艦——エル・ドラードだの何だの——は陸軍はおろか海軍内にも疑問視され、忌み嫌われていた。少なくとも、太平洋戦争の不発で大艦巨砲主義は生き残っていた為、艦砲を持たない戦艦というのはおかしい話だった。始めのうち、しばらくは皆そう思っていた。

5月2日、Uボートの魚雷攻撃を受けたエル・ドラードだが、ダメージは少なくともあった。しかし、僅か4～5時間でエル・ドラードは完全に——復旧したのだ。材料は海水である。

氷山戦艦・氷山空母最大の強みは——回復能力である。無限に広がる海水は冷却装置で凍らせれば、戦闘中にも自動で復旧出来る訳だ。氷山戦艦エル・ドラードは気温35度の環境で10時間航行が可能であり、北方であればより柔軟な運用が可能となっている。大西洋想定で開発されたエル・ドラードはこの作戦の中で、『Uボートハンター』として、1つの道が開けたのだ。

5月19日、ノアの方舟は出航する。

艦艇に乗せられた人数は5万人。避難計画のじつに半分となる人数しか救助出来なかったのは、米軍の失態だった。王室一家や政府関係者は戦艦『マサチューセッツ』へと乗せられた。

背後に迫る洪水を前に、ドイツ軍ノアの方舟は出航した。

第32話 ノアの方舟作戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第33話 英国亡命政府樹立

第33話 『英国亡命政府樹立』

1942年8月8日AM09…44

カナダ／アルバータ州

パトリシア湖はその湖面に鮮やかなピラミット山を映し出していた。豊かな自然に囲まれた閑静な湖畔にはこの日、10000人を超える米海軍の艦艇開発チームが集結し、今か今かその時を待ち侘びていた。研究者達の視線の先には長さ18m、幅9mのボートがあり、それが徐々に湖から湖畔へと、輸送用舟艇で運ばれた。ボートは滑るように湖面から引き揚げられ、歓声が上がった。人々は湖岸に詰めかけ、その様を見ていた。

ルーズベルト大統領もその1人だった。大統領の右隣には、1人の白衣を着た男が立っていた。

男は無精髭に黒縁眼鏡という、いかにも科学者な風貌を漂わせていた。彼は顎をさすり、しきりに笑みを浮かべて頷いていた。「これがたまらんだ」

5日前、OSS創立者のウィリアム・ドノヴァンは言った。「もう1つ、土産があるので」彼はチャーチルの葉巻を咥えるルーズベルトに言った。「……重要な“土産”が」

「何だ？」

ルーズベルトは首を傾げ、尋ねた。「OSS英国支部設立の為の予算のせびりか？」

「……いえ、『ハバクック計画』についてです」ドノヴァンは言った。「英国政府は予算を7000万で建造中の第1試作船成功の暁には、既に開発が始まっている氷山戦艦と氷山空母に大規模な要

員と予算を組んで貰いたい……と言っています」

ルーズベルトは唸った。「ううむ……2隻をか？」

「はい、USセル・ドラードは既に40%近く建造が完了している訳ですし、早期の貸与はOSSの諜報活動の自由化や外交カードとしても使えます」

「仕方あるまいな……」ルーズベルトは呟いた。

ユダヤ人のジェフリー・N・パイクは氷山空母の実現が近いことを悟った。第1次大戦期、ドイツ軍に捕らえられ、監獄から命からがらの大脱走を遂げたパイクは、これがドイツへの復讐だと考えていた。

開戦当初、Uボートによる被害激しかった英国は、対抗策が欲しかった。艦底を貫き、鋼鉄の船を死に陥らせる魚雷を弾く手段として、彼はパイクリートと呼ばれる素材の開発に至った。銃弾は貫通せず、斧でも切断出来ない強靱さを誇る上、理論上は気温35度で10時間は耐えきられるという。何より優れていたのは、強靱さもさることながら、損壊部分に冷却水をかけるだけですぐに修復可能な面だ。

試作船完成から8ヶ月、夏を過ぎながらも溶けずにいた試作船は引き揚げられた。湖に置いたのは1月なので、この船は8ヶ月の間、溶けなかった事になる。結果は成功だった。2隻の艦艇、戦艦を模した氷塊『エル・ドラード』、空母を模した氷塊『ハバクック』はこの日を境に、完成が急がれることとなった。

1943年6月7日AM06..51

カナダ／ノバスコシア州

ハリファックス軍港に入港した戦艦『マサチューセッツ』は歓声と割れんばかりの拍手に包まれて、無事入港を遂げた。航海中は、

Uボートの脅威と王室の護衛という2つの重圧に乗員達は潰されそうになった為、港が見えた頃には、マサチューセッツ内でも歓声が上がっていた。『59』と文字が描かれた艦腹が港を向くと、オーケストラのファンファーレが湾内にこだました。マサチューセッツは速度を下げ、完全に停まった。

「陛下、お先に」

ジョージ6世はチャーチルの言葉を受け、妻のエリザベス王妃を連れてタラップを降りた。手すりを滑らせ、王妃をエスコートして、ジョージ6世はカナダへの1歩を踏みだした。

「……とんだ災難でしたな」

王と王妃の2人が降りた後に続くチャーチルは、タラップの出口で野太い男の声に足を止めた。

「大統領、我々は完全にドイツをなめきっていたんです」チャーチルは言った。「これは天罰ですよ」艶やかに磨かれた手すりから右手を離し、曙光に照らされた埠頭の上に立った。

「何か力を貸せる事があれば……」

「いや、いいですよ」チャーチルは言った。「何もかもうんざりした」

チャーチルは目を半眼にして、水平線の彼方に視線を差し向けた。「とはいえ、彼方に居座るナチ共を何とかせねば腹の虫が収まらない」

「――我々は絶対に屈服してはならない。絶対に、絶対に、絶対に、絶対に……」

チャーチルは手にしていた独軍爆撃機の残骸を大西洋目掛けて投げつけた。残骸は空中で1部分裂し、海に落ちて波紋を広げた。

「まだ東洋艦隊も居るから、何とかなるでしょう」ルーズベルトは笑みを浮かべて言った。「ひとまずは、出方を見ながら戦力を増やせばいいです」

英国は決して滅んではいなかった。植民地のインドには東洋艦隊が残っているし、『ノアの方舟』作戦で大量の兵と艦艇が逃げ延びた。米国は引き続き貸与を続け、英国を見捨てはしない。

チャーチルはカナダに『英国亡命政府』を樹立し、ナチス・ドイツと戦う構えを示した。

第5章 『英国本土戦線』 完

第33話 英国亡命政府樹立（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第6章『贈り物』第34話 大事な荷物（前書き）

・ジェット爆撃機『Horten Ho-18』性能諸元

全長…19.0 m

全幅…40.0 m

全高…3.4 m

エンジン…HeS 001改ターボジェットエンジン×4基

最高速度…850 km

航続距離…12,000 km

兵装

30 mm MK 108機関砲×4

ペイロード×9 t

ドイツ空軍初の実用型ジェット爆撃機。米本土用爆撃機で、原爆搭載も可能。優れたステルス性を持つ。開発者のホルテン兄弟は戦後、アルゼンチンに渡り、秘密裏に新生第3帝国と接触、新鋭爆撃機の開発に励んでいた為ヒトラーに近く、過去の記憶を潜在的に備えている。

・原子爆弾『UG1』性能諸元

全長…3.12 m

直径…0.75 m

総重量…5 t

核出力…15kt

材料…ウラン235

コードネーム…ミヨルニル（英語名…トールハンマー）

第3帝国製の原子爆弾。リトルボーイ原爆に酷似した構造を備え、ガンバレル型原爆である。名前の由来は北欧神話に登場する最強の戦神“トール”が使ったとされる鎚。ミヨルニルは古ノルド語で『打ち砕くもの』を意味している。

第6章『贈り物』第34話 大事な荷物

第34話『大事な荷物』

1943年11月16日AM01:02

英国／ホニントン空軍基地

ハンス・ウルリッヒ・ルーデルは唐突に鳴り響いたベル音を合図に、柔らかいベッドから突き上げられ、夢現のまどろみから引き戻された。彼は先日付けで大尉となっていた。ベルの鋭い音が響く中を突き進み、やがて1機の航空機の前へと辿り着いた。

「ルーデル大尉」背後から、男の甲高い声が聞こえた。「『ミヨルニル』を頼む」

52歳の理論物理学者、ヴェルナー・ハイゼンベルクは、原爆開発計画の主任研究者である。史実とは違い、原爆開発に積極的なヒトラーの後援やノルウェーの重水工場が爆撃されなかった事が幸いし、自らが原爆開発に必要と言った年数(約2年)で完成させたのは、奇跡だった。ウラン型原子爆弾UG1―コードネーム『ミヨルニル』は、並行して開発が続いていたH0―18ステルス爆撃機に積み込まれ、爆発の時を今か今かと待ち侘びていた。

「本当に頼む。女性をエスコートする様に優しく、野獣の様に獰猛に扱ってくれ」ハイゼンベルクは言った。「キングコングの様に考えればいい」

ルーデルは苦笑した。「分かりました。エンパイアステートビルを教訓とすればいいんですね？」

ハイゼンベルクは笑みを浮かべながら頷き、握手を果たした。ルーデルは操縦席に座すと、エンジンを吹かし始めた。

HeS001改良型エンジンが唸りを上げ、白煙を漏らし始めた。

動き始め、車軸が鈍い音を響かせた。操縦席に滞留する11月の冷たい空気に背筋を震わせ、ルーデルは体勢を整えた。H〇ー18が大きく弧を描きながら滑走路の端に到達し、ルーデルは息を吞んだ。「……最終離陸体勢」

ブーメラン型のすらりとした機体が矢のように飛び出し――空に上がった。

第2次大戦時、英軍の主要飛行施設であったホニントン空軍基地には、理論物理学者のヴェルナー・ハイゼンベルクが取り残された。H〇ー18が飛び立つと、彼は息をのんで回想に深けていた。

――5ヶ月前。

リビア砂漠の独軍原爆実験場は、異様な程に静かだった。砂漠を駆る3台の18tハーフトラックには24名のユダヤ人が乗せられており、彼等は独兵が抱える露骨なMP40短機関銃の銃口に怯えていた。ユダヤ人のラザラスはおでこに焼印で付けられた『10km』と書かれた烙印の後を擦り、これから何が起こるのかと不安になっていた。飛行機で10時間も揺られながらやってきた彼の他、全員が疑問と不安の中に包まれていた。彼等はポーランドのルブリン強制収容所の一員で、ガス室や銃殺による虐殺行為をよく知っていた。正直、SSとドーベルマンの姿が見えなくなって彼等は胸を撫で下ろしていた。

18tハーフトラックが停車すると、ユダヤ人の1部が降ろされた。ラザラスはその1人で、降りると『10km』と書かれた自身と同じ烙印を付ける3人を発見した。同じくユダヤ人の男性2人と女性1人である。車内では『100m』、『1km』の烙印を付けられた者がいたが、同じ人間はいなかった。別のハーフトラックの人間なのだろう。

3台の18tハーフトラックは動き出した。MG40の銃口はな

おもラザラス達を捉え、離さない。『10 km』と記された看板の前に到達すると、ラザラスと3人はそこに立たされた。

「……10 km地点、配置完了しました」

兵士の1人が無線越しに言うと、気味の悪い笑みを浮かべた。黄ばんだ歯はゾツとさせるものがあり、ラザラスは嫌な予感がした。それは見事的中する。

25 km地点。

コンクリート製の掩体壕に入室した4人、開発主任ハイゼンベルク、研究者ハーン、軍需大臣シュペーア、総統ヒトラーは立ったまま、刮目しようとしていた。4人は保護ゴーグルを掛けた。

「……30秒前」

ハイゼンベルクはレバーを握り、強化ガラスの向こう側を見据えた。

「20秒前……10秒前……」

10秒前、後10秒で全てが変わるのだ。

「9、8、7、6、5……」

赤色ランプが点灯し始め、けたたましいサイレン音が響き始めた。10秒前の警告音だ。

「5、4、3、2、1……」

レバーが勢いよく引かれると共に、実験塔最上部に備え付けられていた原子爆弾UGO——コード・ネーム『ヌル（ドイツ語で0）』は、激しい衝撃波と砂嵐を生み出した。刹那、4人の居る掩体壕は凄まじい風音と砂嵐に揺さぶられた。

ハイゼンベルクが思わず後ずさりする最中、ヒトラーは乾いた笑い声を漏らしていた。

「素晴らしいじゃないか……美しいというべきか？」

総統の視線の先には、天高くまで立ち昇っていく1つのキノコ雲があった。鼠色がかったキノコ雲は地平線の彼方に見えた。

——キノコ雲が昇る。

爆心地から10km地点に立たされていたラザラスは、1筋の涙を頬に伝わせ、呆然と見据えていた。僅か数十分前まで知っていた現実は塗り替えられ、畏怖の中の畏怖が記憶に更新された。突如、前触れもなく閃光が走り、轟音が外気を切り裂いた。凄まじい熱気が身体を襲う。まるでオーブントースターに押し込まれたかのような熱さだった。

数分の間は思考停止していたが、はっとして地平線の彼方を見ると、もくもくとあがる鼠色のキノコ雲にすっぽり覆われていた。

そうだったのか……。

自身の『10km』、そして『1km』や『100m』は——立ち位置だったのだ。あの爆心地から……。

——100mや1km地点の人々はどうなったのか？

ラザラスは考えるのを止めた。

第6章『贈り物』第34話 大事な荷物（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第35話 グラウンド・ゼロ

第35話『グラウンド・ゼロ』

1943年11月16日PM03:37

アメリカ合衆国／バージニア州

エリザベス川の西岸に位置し、川向こうにノーフォークが面しているポーツマスは、全面積中の4分の1が水面にある。1767年にノーフォーク海軍造船所が設立して以来、この地域は米海軍最大級の工廠として機能し続けており、第2次大戦期には6000隻以上の艦艇を建造している。現在、3万人に及ぶ従業員とその家族達がこのノーフォーク海軍造船所近辺に居を構えている。

大西洋抑止力の1つとしてノーフォークに停泊するエセックス級空母『ボノム・リチャール（2代目ヨークタウンの本来名）』の輪郭がやや目視できる地点で、操縦士のハンス・ウルリッヒ・ルーデル大尉は、無線通信の内容に耳を澄ましていた。H0-18戦略爆撃隊隊長のテオドル・オステルkamp大佐が話すその内容は、「我々が運んでいるのは5tの通常爆弾ではなく、5t級の原子爆弾だ」というものであった。それまで米国本土爆撃に興奮していた、偵察・護衛目的でルーデル機に伴っていたH0-18の乗員達は、突然効かされた衝撃の事実により、その士気は更に上がっていた。

司令機『オーディン』、気象観測機『タングリスニ』、護衛機『タングニョースト』計3機を随伴したルーデル搭乗機、コードネーム『トール』はポーツマス上空に展開し、爆撃の時を待ち侘びていた。原爆投下の全権を担うのは、隊長オステルkamp大佐。オステルkampは第1次大戦からの生え抜きで、第2次大戦でも6機を撃墜したエース・パイロットだ。

『——中高度の雲量は10%、高高度は異常なしだ……』

『“コードIIヨートゥーン”を提案する』

気象観測機『タングリスニ』は2つの報告を放ち、それはオステルキャンプの元に届いた。コードIIヨートゥーン——は“攻撃有効”を意味しており、爆撃が出来るという事を示唆している。

因みに、攻撃中止は『コードIIヨルムンガン』である。

この気象情報は司令機オーディンから爆撃機トールへと伝えられ、予定投下地点への爆撃が決定した。トールは針路を目標地に向けた。

午後3時50分。

トール機はポーツマス港湾施設を目視で確認し、上空に到達していた。高度9000m、攻撃始点に達した為、ルーデルの背後で爆撃手が新型爆撃照準器に高度・対地速度・気温・湿度を入力し、投下地点をノーフォーク海軍造船所に合わせた。投下目標の中心に合わせられたのはあの『ボノム・リシャル』だ。

『……投下用意』

オステルキャンプは言った。静寂が走る。

運命の瞬間——それは間を開けずに訪れた。

『投下!』

1943年11月16日PM03:54

世界初の原子爆弾UG1——『ミョルニル』は——投下された。

4機のH0-18は投下後、衝撃波から逃れるべく、155度の旋回と急降下を行った。尾部の安定翼が空気を掴み、ミョルニルは美しい放物線を描きながら落下する。

48秒後——閃光と衝撃波が造船所を包み込んだ。

高度600m地点で核爆発を起こしたミョルニルは、雷の一撃を造船所に叩き落とした。熱風と衝撃は周囲500m地点を瞬滅、空母ボノム・リシャルは転覆し、灰と化した。その場に居た米軍関

係者1000人以上も。木製建築物は発火し、大地は燃え滾り、熱線が人の肌を焼き尽くした。衝撃波は人を数mから数十mまで吹き飛ばし、建物をドミノのように倒していく。唯一、不幸中の幸いと言え、日本とは違って煉瓦造りやコンクリート造りの建物が多かった事。広島では爆心地近くは木製建築物が過密していた為、半径2km以内で9割の家屋が焼失していたが、今回は4割程度で済んでいる。

核爆発のキノコ雲を背に、4機のH〇ー18は命からがら逃げ出していた。機内では歓声上がり、第3帝国のメッセージが無事伝えられた事を祝った。

『諸君、良くやった。ミヨルニルの一撃は確実にアメリカ人の心を打ち砕いたはずだ』

オステルキャンプが乗員達を称える中、キノコ雲は空高くまで立ち昇っていた。

この核攻撃は、米国に対する第3帝国の宣戦布告から5時間後の事である。ヒトラーは5時間前、午前10時、対米宣戦布告を表明した。ドイツとの宣戦布告の大義名分が欲しかったルーズベルトは即座に了承し、米国も対独宣戦布告を表明していた。

しかし、その5時間後に核攻撃は起こった。

核攻撃から2時間後、別隊のH〇ー18飛行編隊はワシントンD.Cとニューヨーク上空に到達し、無数のビラをばら撒いて逃げ去った。それはある意味核攻撃よりも恐怖を与えるものだった。何しろ、首都の防空網がドイツ空軍爆撃機を捉えることが出来なかったのだ。これは同時にドイツの科学力の高さを物語らせた。ビラには『貴国のB-29が単一の任務で積載する爆弾2000個分に匹敵する力を、我々の持つ原子爆弾が持っている。あなた方の大統領が降伏宣

言をしなければ、それを最悪1ヶ月に1回の頻度で落とす事になるだろう……』等と書かれていた。このビラが2都市に与えた恐怖は計り知れない。政府の情報統制の網をくぐって真実を見た者や、アインシュタインといった科学者達は降伏することを提案した。

しかし、ルーズベルトは要求を吞まず、代わりに原爆開発を進めさせた。この答えは結果としては正しく、ドイツ国内には予備の原子爆弾が残っていなかった。最終調整中の1個と開発中の2個のみで、ビラ通りの行動を起こせるには至っていない。

こうして米独間の戦争が始まる中、東方ではもう1つの戦争が幕を開けようとしていた。

第6章『贈り物』 完

第35話 グラウンド・ゼロ（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第7章『四国沖海戦』第36話 海戦前夜の奇跡

第36話『海戦前夜の奇跡』

1943年11月16日AM02:08

高知県／室戸岬沖

高橋三等海佐は、護衛艦『きい』の甲板、第1砲塔右舷に佇んでいた。この2年間の事――時空転移の発端からの事を思い出し、澁面を浮かべた。この2年は21世紀同様、平和な人生を歩んでいた。戦闘の無い人生、戦艦を戦艦として扱えない人生を。この艦との絆でも確かめ合うように、高橋は背後の第1砲塔を仰視した。

こうして、護衛艦『きい』が海を駆っているのには訳がある。

――2日前。

突然、英国亡命政府が大日本帝国に対し、宣戦布告を表明した。

英国は最早、独領の1部に過ぎなかった。それを危惧した米大統領ルーズベルトは、手っ取り早い英国再建計画をチャーチルに具申した。それが『中国侵略』である。

中国はかつてから米英が狙いを定めていた。満州国で油田が発見されたことが知られてからはさらに魅力的なものとなっていた。2国が結託し、中国の権益を独占してアジア世界の市場を掌握するというのがルーズベルトの考えだった。障害となるのは日本だが、その過小評価は相変わらずで、ドイツがやってのけた『5ヶ月』という侵略期間で十分だと考えたルーズベルトの考えにチャーチルは同

意。1943年11月14日、英領香港の英国人の安全保障とアジア世界の恒久平和を名目に、英国亡命政府は大日本帝国に宣戦布告。同時に米国も宣戦布告を表明した。

そして翌日、日本近海太平洋東方面の哨戒任務に就いていた特設監視艇の1隻が正体不明の大艦隊の存在を確認、それを知る所となった日本海軍は即応部隊を編制し、迎撃行動に移った。

そして事は『きい』に戻る。

海軍内で英艦隊出撃の理由について、様々な憶測と罵倒が飛び合う中、呉の上空を1機の航空機が飛び交っていた。機種は中型爆撃機――B-25と推測されたが、それは爆弾の雨を降らさず、旋回した後、中国へ逃げ去った。これが1つの謎――『何処からB-25が現れたか』という謎を生みだした。

ともかく、事態の深刻さを悟った連合艦隊司令長官山本五十六は、予めトラック諸島に配備していた南雲機動艦隊に真珠湾攻撃を命じ、きいを始めとする本土の艦艇を迎撃に向かわせる事にした。

月夜に煌めく46cm砲は荘厳だった。主砲の最大射程は42kmで、砲塔1基の重量が駆逐艦1隻に相当する。その艦砲が打ち出す衝撃波は凄まじいものだと言うが、高橋はそれを体験した事がなかった。今回のリムパック演習でその力の程を実感するはずだった。乗艦して間もない頃は、それを子供の様に待ち侘びていたものだ。高橋が第1砲塔を仰視しながら耽っている最中、砲塔の天井部分に人影が見えた。

不思議に思った高橋は、注意深く眺めた。……人だ。

「何してる？ 危ないぞ！」

唐突に響いた声が響くと、第1砲塔の上の人影が蠢いた。そして――飛んだ。

「おいッ!？」高橋は第1砲塔右舷を駆け抜け、落ち行く人影を受け止めようとした。しかし、時既に遅し、その人影は甲板に着地した。

……………。

其処に居たのは――女性。1人の少女。

壮麗な月灯りに煌めく彼女は、年端行かぬ1人の少女だった。外見上から察するに17～18歳。長身の身体と金色の髪、そして碧眼は日本人とは似ても似つかぬ風貌だ。深紺色の作業服は幹部支給用の服装だが、そもそもこの艦には女性士官は1人も乗っていない。故に男尊女卑と批判される事もしばしばだが、そんな事はともかくと、高橋が最も驚いた事と言えば、両肩に鎮座する三等海佐章である。威風堂々と構える彼女は重力を感じさせずに第1砲塔の上から降りると、前方に突っ立つ高橋の元へつかつかと歩を進めた。腰元ほどある豊かな金髪は夜風に当たって妖しげに揺れていた。

2つの碧色の瞳が中心点を捉えつつも、視線は常に変わっていた。高橋は凝視してくる彼女の顔から、物哀しげな心境を感じ取っていたが、それが何を意味するのかは結論に達していない。

「こんばんは」とりあえずは第1砲塔で何をしていたのかは聞かず、声を掛けた。

「……成程」彼女は高橋の顔を見据えながら、暗黒の海面を一瞥して言った。「見えるのね」

「まあ分かるんだよ、最初は怖いってな。でも自殺したって何も変わらない」

彼女の手がポケットをもしかしげに探っているのを、高橋は注視した。PTSD病患者が何をするのか分かったものではない、と高橋は考え、ポケットから拳銃が出て、彼女自身の頭に向けられてしまふ事がないように祈った。

高橋の読みは外れ、彼女はポケットから何も出さなかった。出たものと言え、暖かみのある握手だった。

「高橋三等海佐だ」

「よろしくね。私は……何て言えばいいのか……」

彼女はぎこちない足取りで高橋の前を通り抜けると、光の帯に包まれてその姿を消した。そして、高橋から右斜めの地点に忽然とその姿を現したのである。

「何なんだ!？」高橋は声を荒立てた。

「……私はこの艦自身なのよ。名前は……『きい』とでも」

「『きい』……本当なのか？俄かには信じられないな」

「誰でもそういうでしょうね」彼女は顔を顰めながら言った。「でも事実なのよ。“護衛艦に宿る魂”とでも言うのかしら」

第1砲塔から手を引き抜き、彼女は哀しげな顔を浮かべた。

「護衛艦に宿る……いや、戦艦か。“艦魂”……とでも言えばいいのか？」

「それで構わないわ」彼女は言った。

この世界で最も大きく、この世界で最も進んだテクノロジーを備えた戦艦の魂——それが今、目の前に居る少女だと言われても高橋は混乱するばかりだった。『きい』は旧日本海軍から受け継いだとは思えない地中海人種特有のオリーブ色の肌を持っていた。無造作に垂らしたままの豊かな金髪は腰元ほどもであり、気品のある優雅な容姿をしていた。

「米軍はこの艦を建造する際、ギリシヤ系アメリカ人技術者に設計図の変更を命じたの。だから私は設計者の血を大きく受け継いでいるのよ」

高橋の心の内を見透かしたかのように彼女は言った。

「突然で悪いけど、頼みたい事があるの」

「何だ？」

少し間を開けて、彼女は口を開いた。「彼女……大和に伝えてほしいのよ。未来を」

「未来を？」

高橋は首を傾げて言った。

「そう」きいは言った。「未来は確かに変わったけど、そう簡単に運命の軸は変わらないのよ。彼女が辿った悲しい運命よりも過酷な運命が待っているかもしれない。だからこそ、本来の歴史を伝えてほしいの」

「君が伝えればいいんじゃないか？」

「そう出来ればね……」きいは右手を掲げ、小指を立てた。それを注意深く見ると、1本の煌めく金色の糸が巻き付いていた。1本の糸を目で追っていくと、やがてその先は甲板上になったが——そこには、甲板全体に蜘蛛の巣状に広がる金色の糸が見て取れた。

「これは“魂の緒”。幽体離脱って聞いた事は？」

高橋は頷いた。

「西洋じゃアストラル投射とも言っただけど……“魂”と言うのはこの魂の緒を塊にしたものだって言うらしいの。それが肉体からある程度抜けるのが幽体離脱」彼女は息をついた。「そして魂の緒が切れた時は肉体が死を迎える——言わばこの『きい』が死を迎えるのよ。そして、この魂の緒の幽体離脱で肉体から解き放たれる長さには制限があって……人間よりも短いの」

「当てようか？ 艦を1歩でも出れば——」

彼女は静かに頷いた。

「私が自由を求めれば……肉体が終わりを迎える」

魂の緒は彼女の足元から蜘蛛の巣状に艦中へと広がっている。それは壁や床を這い、至る所へと根を生やしていた。それが1本でも断ち切れれば、連鎖的に切れるのだと彼女は言う。沈没や解体によって魂の緒は断ち切られ、肉体はその命を終えるのだ。

彼女はしばらく黙っていた。「分かったでしょ」

「ああ、分かった、この戦いが終わったら君の望みを叶える」

「ありがとう」彼女は微笑んだ。「……Good luck」

瞬く間に彼女は光の帯に包まれて——消えた。やがて朝陽がその

顔を覗かせ、漆黒の空は青みを増し始めていた。赤みを帯びた水平線は3つのおぼろげな艦影を浮かび上がらせている。

高橋は終始、温もりの帯びた右手を見つめ――再び第1砲塔を仰視した。

――前夜の奇跡。

第7章『四国沖海戦』第36話 海戦前夜の奇跡（後書き）

初めて艦魂を扱わせて頂く事となりました。初の試みです。

正直悩んだのですが、この小説のシナリオを考えていた頃から艦魂を使おうと思っていたので、恐縮ではありますが書かせて頂きます。

艦魂の設定については、今回は基本的に艦魂同士が会えないというルールを作らせて頂きましたが、個人の設定としてですので、一般の艦魂設定を愛する読者様方にはお詫び申し上げ、不愉快と思われるばご退室頂きたいと思えます。

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第37話 戦闘開始（前書き）

・氷山空母『ハバクック』性能諸元

排水量 基準…2,200,000t
満載…2,300,000t

全長…600m

全幅…91m

吃水…60m

機関

ディーゼルエレクトリック式タービン×26基

冷却システム

最大速力…10ノット

乗員…2,000名

兵装

56口径40mm機関砲×88基

70口径20mm機関銃×85基

艦載機

B-25

シーランカスター

F6F

SBD

計200機（通常艦上機のみであれば最高300機）

米英加3国共同研究の『ハバクック計画』完成艦。全長600m級の飛行甲板を持ち、双発・四発爆撃機の運用を可能とした空母だが、その鈍足という欠点から機動部隊運用には向いておらず、洋上

基地としての役割を担っている。英海軍籍及び米海軍籍を持ち、共同作戦を行っている。

・護衛戦艦『セント・ジョージ級』性能諸元

排水量	基準…48,500 t
	満載…53,000 t
全長	…270.4 m
全幅	…32.98 m
吃水	…11.58 m

機関

バブコック&wamp;ウィルコックス式重油専焼ボイラー×8基
(21,200hp) 4軸
最大速力…34ノット
乗員…1,601名

兵装

50口径40.6cm3連装砲×2基
38口径12.7cm両用砲連装×14基
56口径40mm4連装機銃×20基
70口径20mm機銃×70基
水上機×3機

アイオワ級第3番艦『ミズーリ』以下同級艦を曳航仕様艦に改造した戦艦。空母『ハバック』を迅速に曳航させるべく、特別仕様の曳航ロープを搭載、第3番砲塔を取り外し、速力アップに繋げて曳航速度を上昇させた。場合によっては海戦中も曳航し、速度合成をさせて機動戦に組み込むという構想も存在している。通常は同級

型1隻ないし2隻により、曳航する。

名前の由来は連合王国の1国、イングランドの守護聖人『セント・ジョージ』。

・三式夜間爆撃機『夜光』性能諸元

全長…12.117 m

全幅…16.980 m

全高…4.56 m

エンジン…火星25型改×2基

最高速度…600 km

航続距離…3,500 km

巡航高度…5,500 m

兵装

20 mm機銃×2

7.7 mm機銃×1

ペイロード…800 kg (爆弾ないし魚雷)

夜間攻撃機『月光』をベースに開発された海軍機。未来よりもたらされた情報を基に造られたレーダーとエンジンにより、次世代機の1つとして期待されている。四国沖海戦では、英艦隊攻撃の先鋒陣として初投入される。

第37話 戦闘開始

第37話『戦闘開始』

1943年11月16日AM03:04

高知県／室戸岬沖100キロ

――払暁。

第1番砲塔の上に座り込んでいた彼女――艦魂きいは、その様を見ていた。

無数の対空砲火が空に漆黒の帯を生み、複数の黒点が西の彼方に沈む。室戸沖の暗い海面に空母や戦艦が並ぶ大艦隊の端には、1隻の巨大な艦影が見え隠れしていた。

「……とんだ茶番劇ね」

幻の大和級第3番艦としてか、人の心境としてか。海に浮かぶテクノロジーの塊に乗って見物していた彼女は、不満そうに小声で言った。頭上を4機の航空機『夜光』が駆り、対空火砲と爆炎に染まった英侵略艦隊へと向かっていった。2発の火星エンジンは唸り上げ、警戒用レーダーが不気味から放たれる不気味なエネルギーのさざ波を彼女は肌を感じ取った。

『――見えるか？あれが英国のフネだ』

きいの耳――に大日本帝国海軍の無線通信文が轟いた。艦が傍受したらしい。

『見えますよ。戦艦ですね』

2人の操縦士が目を瞪る戦艦――は2基の40・6cm砲を備える戦艦だった。後方部には砲塔が無く、代わりとして対空兵器が配備されていた。

『敵艦隊発見。突撃せよ』

「話と違うな……」

敵接近の報を受け、英海軍太平洋艦隊司令長官、ブルース・フレザー大將は苦面を浮かべながら、キンメルを呪った。彼がキンメル大將から聞いた日本軍は——雑兵の寄せ集め。

しかし、それは大きな間違いだった。第1波となる夜間爆撃は艦艇を多数沈め、冰山空母にも軽傷を与えていた。1日どころでは無い……この戦いは長くなりそうだ。冷えた艦橋から、夜空を舞う敵の双発爆撃機を見て、フレザーは思わず身震いした。温かな湯気を立たせるコーヒーを飲み干すと、鋭い視線を再び敵機に投げ掛けた。

「何とか振り払うしかないか……」

彼の乗る冰山空母『ハバクック』は全長600m、全幅91m、排水量2,200,000tにも及ぶ怪物空母だった。元は英海軍が恐れ戦いていた『Uボート』に襲われても沈まない洋上輸送拠点を作るべくして生まれた計画だった。『ハバクック計画』——特殊素材『パイクリット』を用いた空母の開発計画は無事に完成し、対日戦力の中核を担う事となる。

未曾有の巨大空母の今作戦の目的は——爆撃拠点。ハバクックは双発機さえも運用出来る空母である。かつて米軍が行った帝都爆撃の際、空母『ホーネット』が持つ200m弱の滑走路でB-25を飛ばすというとうんでもない事をドウリットル達はやってのけていた。そもそもB-25は500m級の滑走路を必要とする。その点から言えば、600m級の飛行甲板を持つ空母ハバクックから中型爆撃機を飛ばすというのは容易な話ではあった。

米英海軍は共同で米陸軍のB-25や英空軍のアブロンカスターを改造し、軽量化と脚部強化を図って離着陸可能な機体を作り始めていた。今作戦では、1部だがそれが含まれている。

英軍構想の日本侵略はこの冰山空母『ハバクック』を用いた大規

模空襲で工業地帯や軍事施設を根絶やしにし、10個師団の上陸部隊で短期攻略するというものだった。

ともあれ、爆撃が滞りなく始まれば、呉に明日は無かった。

1943年11月16日AM04:28

『きい』CIC

深紺色の作業服に身を包んだ高橋三等海佐は、先刻から忙しなく鳴り響いている広域搜索レーダーに視線を合わせ、上部に輝く5つの点に目を合わせた。「対艦戦闘用意！」と下命をし、「MK・143用意！」を付け加える。MK・143装甲ボックスランチャー——通称『ABL』は外部露出型のトマホーク武器システムの1つであるが、近年はMK・41垂直発射システム——『VLS』に取って代えられようとしている。とはいえ、きいには重要な発射システムの1つである。

「MK・143で攻撃！対艦戦闘用意！MK・143用意！」

電測員長の喜田一等海曹は、甲高い声で告げた。

「MK・143発射用意よし！」

CIC要員の1人が言い、喜田がそれを繰り返して言った。高橋の視線はモニター画面に絞られた。甲板右舷付近では、1基のMK・143ABLが空を向き、補給員の1人がそれを見守っていた。4連装の装甲の塊はトマホークを包むが故に必然的に大きかった。

「てえー！ー！ー！ー！！！！」

トマホークがMK・143ABLから『スポン』と間抜けな音を響かせながら飛び出すと、空中で体勢を立て直して遙か上空彼方まで昇っていった。『きい』乗員はもちろんの事、日本軍艦隊の全艦

艇乗員が詰め寄り、その光景を目の当たりにした。

近代の巡航ミサイル技術は優れたものだが、その中でもトマホークは非常に秀でていた。ともあれ、速度は最高でマッハ0.75なので、遅かった。誘導装置にも不具合があり、飛行ルート上で砂漠といった平坦な地形や昼間、視界良好等の条件が整えば、小火器でも撃ち落とす事が出来るぐらいである。しかし、その有効射程は1000kmを軽く越えてしまう為、広く重宝された。

湾岸戦争では、戦艦『ミズーリ』がトマホーク28発による対地攻撃を行っている。

翼を羽ばたかせたトマホークはそのまま速度を落とさず、日本軍艦隊と英艦隊の中央を駆け抜けた。ジェットエンジンから漏れる燃焼ガスは、朝陽の煌めきと共に、美しく空中を照らし続けた。

——その頃には、トマホークは既に護衛戦艦『セント・ジョージ』に狙いを定めていた。

第37話 戦闘開始（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第38話 呉空襲ヲ阻止セヨ

第38話『呉空襲ヲ阻止セヨ』

1943年11月16日AM04…38

高知県／室戸沖100キロ

その時海面の向こう側から、空を突き破るような轟音が響き渡った。護衛戦艦『セント・ジョージ』艦橋は爆発して崩れ落ち、残り火を燻ぶらせる灰まみれの瓦礫の山と化したのだ。突然、熱風が吹き上がって渦を巻き、黒い煤を一面に舞い散らした。

フレーザーは乾いた吐息を漏らし、愕然としていた。

「B-25の発艦急がせろ！」

暗い不信感が顔に浮かぶ。今考えると、この作戦には穴が多過ぎた。せめてB-25が呉に何かしらのダメージでも与えてくれないと、護衛戦艦1隻の代償は補えないだろう。艦橋よりフレーザーが目を向けたハバックク飛行甲板には、既に17機近くのB-25が鎮座していた。大半が着艦不可機であった為、迎撃火器の一切が取り外された状態にあった。今回、この空母には100機近くのB-25が配備され、同時に100機の護衛機が艦載されている。単純計算で言えばB-25全機に護衛が行き渡る事になるが、不慣れな米国製兵器や未熟な戦闘経験が災いし、実際に稼働するのは80機程度だった。

辺りの空気を震わせるような轟音が海面に広がり、左手の方から空に向かって煙が上がったかと思うと、火花が噴水の様に噴き上がった。B-25の群れが大きく揺れて、呻きを漏らし、甲板の端へとひたすら駆けて行く。R-2500サイクロンエンジンが熱気を上げようが火花を飛ばそうが、パイクリートに溶けるといふ兆しは

無かった。40度の湯に浸しても溶けなかった氷だからこそ当たり前前の事だった。

B-25の1機が飛行甲板から飛び上がった時、乗員達の中で喝采が上がった。

「成功ですね」

参謀の1人がそう言い、フレーザーは静かに頷いた。その間にも、無数のB-25が空に舞い上がっていた。「とりあえずは……だがな」

英軍の第1次爆撃隊が空に上がる中、護衛艦『きい』では後部甲板でハリアー？の発艦作業を進めていた。飛行長の西川一等海尉は神経を尖らせながら、垂直に上がるハリアー機内から空を舞うB-25の編隊を見据えた。彼は第1次迎撃隊の隊長として5機のハリアー？を率いる。

垂直蒸気噴射をしながら舞い上がったハリアー？は空中で体勢を整えると、その速度を増して空を駆け始めた。

『西川一尉、調子はどうだ？』

CICの高橋の声を聞き、西川は笑みを漏らした。

「順調です。最高速度のマッハ1.2だって狙えますよ」

通常機はマッハ0.89だが、日本独自開発のハリアー？はマッハ1.2まで出せる。海自ではたった1種しかないという貴重な存在である戦闘機だからこそ、優先して開発された成果だった。2010年には後継機としてF-35が配備されるが故、このハリアー？も『きい』と同じ運命を辿るはずだった。

マッハ0.8に到達した頃、沈没を前に脱出を余儀無くされた護衛戦艦『セント・ジョージ』直上に差し掛かった。1隻の駆逐艦が横付けし、避難活動を行っている。

そこから5～6キロ先に、目を疑うような艦船の姿があった。B-25の編隊も見えた。

「——こちらクロスジャック1。敵航空機が存在を確認」

『クロスジャック1、誘導兵器使用は最小限にしてみたい』
ラジャー
「了解」

第1次爆撃機隊長、ヘンリー・ロウ大佐はB-25操縦士の1人として、呉攻撃を任されていた。6ヶ月前、英国からの脱出を果たしていた彼は、空母ハバック乗員となり、初の試みに挑んでいる。

また通信機越しに敗北の報せが届く。『セント・ジョージ大破！
曳航不可能』

「やれやれだな……」彼は惨憺たる護衛戦艦の体軀を見て、悲しげに呟いた。「後方に展開している米海軍の奴等は何をしてるんだ？」

「今は待機してるらしいです。我々に全て任せる気ですよ」無線士のコリンズ少尉は、呆れた様子で言った。

「使えないヤンキー共——」

一糸乱れぬB-25編隊の運命が決したのはその時だった。ロウ大佐の愚痴が飛び出した瞬間、背後から激しい衝撃が伝わり、銃座手の1人が機床に転げ落ちた。機体はごく1部製造された空母帰投の可能機だったので、多数の迎撃兵器が配備されていた。銃座手は慌てて中央銃座へと戻り、機関銃を回転させた。

「敵襲か!？」

「ジャップの攻撃機です! 凄い速さだ……」

中央銃座手は啞然とした様子で告げた。彼の視界には、炎を上げながら落ちて行くF6Fヘルキャットの姿が流れ込んできた。目にも止まらぬ早さで次々とF6Fが落ちて行った。

『よし、B-25は零戦に任せろ』

西川は手を止め、回転するGAU-12Uイコライザーの銃身が止まった。マッハ0.8で巡航するハリアー?の背後からは、岩国海軍航空隊の零戦編隊が迫っていた。未だ未知数だったゼロファイ

ターの鋼の洗礼を受けたB-25編隊は、20mm機銃の銃撃で次々と撃墜された。

「四方に分かれろ！後で合流して編隊を組み直す」

ロウ大佐は無線機越しに怒鳴りながら操縦桿を目一杯引き上げ、上空7000mまで上昇した。眼下からは20mm機銃とイコライザーの銃撃音が虚しく聞こえ、下らないもののように感じた。ロウ大佐は厚い雲間に沿って機体を駆り始めた。後部銃座手は背後の左手から追ってくる白色の塊の姿を捉え、叫んだ。「敵機接近中！」湿った風を頬に受けて、ロウ大佐は身を震わせた。何とかしないと……。

——GAU-12Uイコライザーが咆哮を始める。

無数の25mm弾がB-25の機体に襲い掛かり、鋼の翼を引き裂いた。

——太陽に近付き過ぎたイカロスが如く、B-25は翼を失い、下へ下へと堕ちて行った。

1943年11月16日AM05:19

『きい』CIC

「第1次爆撃隊は防ぎ切れたようだな」

艦長吉岡一等海佐が言い、高橋は頷いた。きいと岩国海軍航空隊により編成された第1次攻撃隊は、ハリアー？5機と零戦28機から成る迎撃隊だった。呉攻撃の第1波を防いだ日本海軍は、ここから大規模な反撃に打って出ようとし始めていた。

現在の日本海軍艦隊編成は以下の通り。

＞連合艦隊＜

旗艦…『大和』

第1戦隊

護衛艦…『きい』戦艦…『長門』『陸奥』

第11航空戦隊

空母…『端穗』『千歳』『千代田』

＞第1艦隊＜

第2戦隊

戦艦…『伊勢』『日向』

第9戦隊

軽巡洋艦…『北上』『大井』

第3航空戦隊

空母…『鳳翔』『瑞鳳』

駆逐艦…『三日月』『夕風』

第6駆逐隊

駆逐艦…『雷』『電』『響』『暁』

第22駆逐隊

駆逐艦…『春風』『子日』『初霜』『若葉』

第27駆逐隊

駆逐艦…『有明』『夕暮』『白霜』『時雨』

第3水雷戦隊

軽巡洋艦…『川内』

第11駆逐隊

駆逐艦…『吹雪』『白雪』『初雪』

第12駆逐隊

駆逐艦…『叢雲』『東雲』『白雲』

第19駆逐隊

駆逐艦…『磯波』『浦波』『敷波』『綾波』

第20駆逐隊

驅逐艦 .. 『天霧』
『朝霧』
『夕霧』
『狹霧』

英艦隊の出現と同時に米国も宣戦布告した為、事態は急を要した
きい初の実戦となった今回の海戦も、いよいよ中盤へ差し掛かって
いる。

「46cm砲の有効攻撃射程に到達しました」

第1分隊員の1人が告げ、高橋の目がモニター画面に向けられた。

「対艦戦闘用意！46cm砲を使用！第1、第2砲塔砲撃用意！」

少し間を空け、第1分隊の隊員の声が飛び交った。「第1、第2

砲塔砲撃用意よし！」

第1、第2砲塔の6門の砲身は既に敵戦艦『ハウ』に差し向けられていた。

「てえー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ッ
！！！！！」

大地を揺るがす爆震と激し過ぎる咆哮が轟き、甲板作業をしていた乗員達は思わずたじろいた。九一式徹甲弾6発が秒速475mで駆け抜け、30km先のキング・ジョージ5世級戦艦ハウ左舷艦腹を貫通した。ハウは悲鳴を上げて悶え苦しみ、艦体が左に傾いた。

『きい』の主砲発射システムは独自に開発したシステムを採用している。その結果、百発百中とはいかないものの、その命中精度は『大和』『武蔵』に比べれば格段に向上していた。

因みに米軍の改裝されたアイオワ級の主砲發射システムは第2次大戦時と変わらない。

ハウ存亡の最中、ハバクツクの第2次爆撃隊は既に発艦の時を迎えていた。

第38話 呉空襲ヲ阻止セヨ（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第39話 英艦隊撤退

第39話『英艦隊撤退』

1943年11月16日AM05:33

高知県／室戸沖110キロ

――轟、ドカン！

46cmの九一式徹甲弾は雷鳴の様な音を立てながら飛び出すと、戦艦『ハウ』の左舷艦腹を貫通した。各所の壁をぶち抜いた徹甲弾は、炸裂して爆発した。火は弾薬庫に飛び散り、誘爆する。刹那、ハウは真つ二つに寸断され、室戸沖の海に沈んだ。

第1砲塔上部に佇んでいた艦魂きいは、9mm拳銃に弾倉を装填し、再び銃身を掲げる。

「……轟！！」

きいは言った。静かな声だが、力強さが感じられた。第1、第2砲塔の6門は途端に爆音を轟かせ、45口径の砲口が長い炎を舌なめずりした。6発の九一式徹甲弾は、秒速475mで空を駆ると、英海軍の空母『イラストリアス』飛行甲板に直撃した。甲板は絹の如く切り裂かれ、艦載されていたF6F数機が数十mも宙を舞った。きいはゆっくりと銃を降ろし、左を振り向いた。B-25の大編隊が空を駆けていた。

彼女は斜め前に足を踏み出して、それを見据え続けた。

ハリアー？が2機、轟音を鳴らして英海軍の第2次爆撃隊の直上を通り過ぎる。洋上を漂流するB-25の残骸にしがみ付いていた第1次爆撃隊長、ヘンリー・ロウ大佐は傍らで無線士のコリンズ少

尉が第2次爆撃隊が撃ち落とされるのを見て、息をのむのが聞こえたが、彼は何も言わなかった。ロウ大佐はそんな光景をただ呆然と見つめるしか出来なかった。

「B-25が……」コリンズがハンカチを顔に当てながら、かすれた声で言った。

岩国海軍航空隊の零戦編隊はB-25を執拗に追い回すと、20m機銃で翼を撃ち抜いた。大半のB-25はドゥリットル隊の様に迎撃火器を備えていなかった。ロウ大佐の搭乗する機体のように、ハバクックに着陸する措置が行われていなかった為だ。そういった機は呉を空襲した後、中国国内に点在する米軍基地に着陸するよう言われていた。

唯一の対抗策であるF6Fといった護衛機も、正体不明の戦闘機に撃墜され続けていた。敵機はあまりにも速過ぎて、気付けば攻撃を受けているという具合だ。

塩辛い味が口の中に広がり、ロウ大佐は顔を顰めた。頭がくらくらするような感覚に襲われる。火の粉と鋼鉄と人間で構成されたB-25の雨は降り止まず、視界に焼付いた。

唯一生存した2人の英兵は、ただ友軍の敗北を観覧しながら待つしかなかった。

——艦橋に衝撃が広がった。

「何を言うんです？ 正気ですか長官」

参謀の1人が半ば怒鳴るような声でフレイザーに言った。

フレイザーは頷いた。「勿論だ。第2次爆撃隊の損失は甚大過ぎる。制空権が相手側の手にある以上、空襲は無意味だろう……。この艦隊も徐々に包囲されつつあるしな」

一瞬の間があった。

「しかしですね長官……」

「黙れ、撤退は決定事項だ。護衛戦艦が1隻も居なくなったらこの空母は逃げ切れない」フレーザーは目を上げた。「『セント・デイヴィッド』が撃沈されたら何もかもお終いだ」

空母『ハバクック』はセント・ジョージ級戦艦2番艦『セント・デイヴィッド』の曳航により、海域から急速離脱した。今時点までの英艦隊の損害は甚大なもので、戦艦1隻・護衛戦艦1隻・空母1隻を失う所となり、B-25に関しては半数以上が失われていた。結果的には英側の大敗北と言える。

しかし、爆撃隊の1部は呉や周辺地域に進出し、甚大な被害を与えたのも確かだった。呉で建造中だった空母1隻が空襲により、被害を受けていた。

四国沖で1つの海戦が終わりを告げる頃、もう1つの海戦が太平洋で始まるうとしていた。

第7章 『四国沖海戦』 完

第39話 英艦隊撤退（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第8章『真珠湾攻防戦』第40話 復讐の時（前書き）

・三式艦上噴進戦闘機『旭光』性能諸元

全長…11.1m

全幅…11.9m

全高…4.2m

翼面積…31.26㎡

自重…5,992kg

エンジン…ターボジェットエンジン

最高速度…1,090km

実用上昇限度…14,300m

航続距離…3,200km

兵装

固定兵装…九九式20mm機銃×6

副兵装…55mm噴進弾×10

爆弾…1,400kg

大日本帝国海軍の実用型ジェット戦闘機。FJ-4『フューリー』を基に改良を加え、完成した。高度な技術故、量産能力は低い。名前の由来は航空自衛隊がF86に付けていた愛称『旭光』より。

第8章『真珠湾攻防戦』第40話 復讐の時

第40話『復讐の時』

1943年11月19日AM01…30
アメリカ合衆国／ハワイ近海

突如米英豪加4国から宣戦布告を受けたのは4日前……という実感を未だ乗員達は実感していなかった。あまりにも唐突過ぎたせいか、それとも呆気なく始まったせいか。誰もがそんな事を考えていたが、トラック諸島に配備されていた南雲機動艦隊には猶予はなかった。第1航空艦隊司令長官の南雲中将は、手元に届いた『ニイタカヤマノボレ一一九』の下命を受け、艦隊をトラックから出航させた。こうして、南雲機動艦隊は復讐の為、太平洋艦隊本拠地の真珠湾へと向かっているのだ。

その艦隊編成は……。

＞第1航空艦隊＜

第1航空戦隊

空母…『赤城』 『加賀』

第2航空戦隊

空母…『蒼龍』 『飛龍』

第5航空戦隊

空母…『瑞鶴』 『翔鶴』

第6航空戦隊

空母…『信濃』 『三河』

第3戦隊

戦艦…『比叡』 『霧島』

第8戦隊

重巡…『利根』『筑摩』

第1水雷戦隊

軽巡…『阿武隈』

第17駆逐戦隊

駆逐艦…『谷風』『浦風』『浜風』『磯風』

第18駆逐戦隊

駆逐艦…『陽炎』『不知火』『秋雲』『霞』『霰』

第10駆逐戦隊

駆逐艦…『夕雲』『卷雲』『長波』『卷波』

第2潜水隊

潜水艦…『伊19』『伊21』『伊23』

第1補給隊

油槽船…『極東丸』『健洋丸』『国洋丸』『神国丸』

第2補給隊

油槽船…『東邦丸』『東栄丸』『日本丸』『誠心丸』

第3補給隊

油槽船…『力行丸』『賽山丸』『金鈴丸』

特殊潜航艇5隻

空母の内、『信濃』『三河』『瑞鶴』『翔鶴』は噴進戦闘機対応型に飛行甲板が改装されている。その4隻には三式噴進戦闘機『旭光』が計138機艦載されている。旭光は米海軍のジェット戦闘機であるFJ-4『フューリー』を基に開発された機で、1943年にしてみれば驚異的な存在だ。第1世代戦闘機の傑作機を基に開発された現独軍の主力戦闘機の『Ta183』とほぼ互角の性能を持っている。

——午前1時30分。

旭光90機、零戦42機、天山83機、彗星92機……計307機から編成された第1次空中攻撃隊は漆黒の闇の中、発艦作業を始めていた。第1次攻撃隊の指揮を任された淵田中佐は、九七式艦攻の後継機である天山に思わず目を瞞っていた。

普段の淵田はこの機の翼に煌めく陽光を見て心が洗われていたが、この時ばかりは不安と緊張を隠しきれなかった。

「淵田君」

背後から声を掛けられ、振り向くと南雲司令長官が居た。

「……山本長官は今回の戦闘で完膚無きまでに真珠湾を叩き潰すよう仰った」淵田の肩に手を置き、南雲長官は続けた。「復讐だ。呉の戦友達に恥じぬような成果を期待してる」

2度でもやってやるわ、と淵田は胸の中に呟いた。「皇地を汚した代償は必ず報いさせます」

「うむ。だが……まあ深追いもしてくるな……とでも言うべきか」南雲は口ごもりながら言った。「草鹿君も宇垣君も言っている事だがな……“第1撃で戦闘中止し、第2撃は割愛”と」

「1撃で……ですか？」

「そうだ。山本長官曰く、8隻の空母を沈める訳にはいかんだ」淵田は深く考え込んだ後、静かに頷いた。

なんや……やっぱあかんのかぁ……。

第1次空中攻撃隊総隊長の淵田は天山に乗り込み、関西弁で呟いた。彼は親友の源田の故郷の敵討ちがしたかったのだ。源田実は第1航空艦隊参謀で広島出身、淵田とは52期の同期で、今作戦の総隊長に選んだのも源田だった。彼としては親友の故郷を蹂躪した英軍と協力関係にある米国に一泡吹かせてやろうと思っていた。1撃だけでは事足りないと彼は呟いていたが、天山は既に飛び立っていた。

1943年11月19日AM07:40

戦時中だと言うのに、迎撃機も無ければ対空火炮も無い。

第1次空中攻撃隊総隊長である淵田中佐は確信した。奇襲は成功した……と。攻撃は隠密下で行われていた。米軍は未だ日本近海に点在していたが、帰投は時間の問題だった。2機の噴戦偵察機からもたらされた情報によると、真珠湾内の泊地には戦艦の姿がさほど見当たらず、代わりに空母の群れがいるのだという。なんで戦艦が居やへんのや……と淵田は胸の中に呟いた。真珠湾に停泊していた老齢戦艦の大半は、ハバクック（英艦隊）護衛と対地支援と艦隊殲滅の為、大半が出払っていたのだ。代わりに残っていたのは旧式空母となったヨークタウン級やエセックス級であった。

淵田は第1空中攻撃隊の各機に『ト・ト・ト……』を送り、続いて機動艦隊の旗艦である赤城に『トラ・トラ・トラ』を打電した。

こうして、壮大な復讐劇が幕を開けた。

第8章 『真珠湾攻防戦』 第40話 復讐の時（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第41話 第一波

第41話『第一波』

1943年11月19日AM07:55

アメリカ合衆国／ハワイ準州

――信号弾が昇る。1発だ。

第1集団特別攻撃（雷撃）隊指揮官の村田少佐は、淵田機から立ち昇った1発の信号弾を見据え、呟いた。操縦席のガラス越しに、湾内に居座る8隻の空母を確認出来た。バックはホノルルのラジオ局が流す大衆音楽、村田はBGM代わりに使っていた。

くぐもった音が聞こえる。

『……これは演習ではない。繰り返す、演習ではない。真珠湾は攻撃を受けた』

これまで有益な気象情報と、乗れる音楽を提供してくれたホノルルのラジオ局は米軍に掌握されたようだ。焦りの混じる声色がラジオの無機質な雑音と共に響いていた。

天山が唸りを上げ、急降下した。総数40機が参加する雷撃隊は湾内泊地に停泊している8隻の空母にそれぞれ狙いを定めていた。

空母『赤城』特1攻撃隊は――『エンタープライズ』

空母『加賀』特2攻撃隊は――『ヨークタウン』

空母『蒼龍』特3攻撃隊は――『ホーネット』

特4と続く攻撃隊は周囲を囲う駆逐艦群や、カサブランカ級護衛空母を狙った。奇襲攻撃は雷撃、水平爆撃、急降下爆撃の順序で続く。

村田は自分が震えているのに気付いた。

凄まじい音と共に、機体下部の魚雷が落とされた。両肩に鋭い痛

みを感じつつ、操縦桿を腕で掴んで引き起こし、自分の手で立て起こした。1本の航空魚雷はやがて2本となり、4本となる。扇状に広がりながら音を立てて海中を突き進んだ魚雷群は——エンタープライズの艦腹を貫通した。

計10本、その内8本が左舷付近に直撃し、何万ガロンもの海水を艦内に流れ込ませた。残りの2本は、そのまま海中を駆り、駆逐艦の1隻に直撃、大破させる。

左に大きく傾いたエンタープライズは見る影も無かった。乗員達は死体を含めて海面を漂流しているが、映画の様に機銃掃射を受ける事は無かった。これは山本長官の命令で、憤りを感じている第1次攻撃隊の隊員達はやりきれない気持ちだった。時には命令無視をして銃撃を加える機もあった。艦内では消火活動が行われていたが、時間稼ぎにもならなかった。

そして——エンタープライズは最期を迎える。

空を突き破るような轟音が響き、2つの爆発が艦内を襲った。破れた飛行甲板からは、紅蓮の炎の刃が立ち昇り、東より昇ったばかりの太陽と重なった。

散り散りになった艦隊を照らすのは、金と杏の光の帯を持つ太陽と——もう1つの太陽。

無論、それは日本が創った太陽——エンタープライズが松明^{トーチ}である。

1943年11月19日AM08:11

第1集団水平爆撃隊を隷下に置く第1次空中攻撃隊総隊長、淵田中佐は沈没の道を辿ろうとするエンタープライズの姿を目視で確認し、感嘆した。

8時3分、赤城特1攻撃隊の天山が航空魚雷を投下。

8時5分、8本の航空魚雷が左舷直撃。

8時10分、武器庫に誘爆。

8時11分、沈没。

ものの数分で着いた一連の攻撃は水平爆撃隊を驚愕させ、歓喜させた。轟沈するエンタープライズからは、尖塔の様に、あるいは噴水の様に、赤や橙や黄色の炎が空に向けて伸び上がっていた。その合間から漏れ出す煙は、エンタープライズが流したかのような黒い血にも見えなくなかった。

史実における戦艦『アリゾナ』の最期に似てはなかった。

刹那、周囲の空気が震え、轟音が海面に広がり、火柱が噴水の様に噴き出す。空母『赤城』の第1攻撃隊による水平爆撃が始まったのである。

「……一世一代の大博打を成功させるで」

淵田中佐は急遽目標を変更、湾内に眠る唯一のエセックス級空母『エセックス』に向かう。

攻撃を逃れていたエセックス飛行甲板からは、既にF4F『ワイルドキャット』が飛び立っていたが、制空隊の三式噴進戦闘機『旭光』はF4Fを逃がさなかった。6挺の20mm機銃は火を噴き、F4Fの機体は穴だらけになってしまった。

第1攻撃隊は対空砲火と迎撃機の包囲網を潜り抜け、水平爆撃を開始する。

——激しい爆撃の末、エセックスは大破した。

ヨークタウン級空母『エンタープライズ』『ホーネット』沈没。
カサブランカ級護衛空母『カサブランカ』『リスカム・ベイ』沈没。

駆逐艦2隻沈没。

計6隻の艦艇を一瞬で失う中、太平洋艦隊司令部が動き出したのは第1次攻撃中盤からだった。ハズバンド・キンメル大將はオアフ

島の司令部で青ざめる。

そんな中でも、日本軍の攻撃は止まなかった。

第3集団第1制空隊隊長の板谷少佐は噴進戦闘機『旭光』を駆り、急降下爆撃隊によるフォード・ヒッカム飛行場攻撃に随伴した。地上機を機銃掃射し、邪魔な障害を排除した。第1制空隊が空中で迎撃機を蹴散らす中、急降下爆撃隊は湾内に到達していた。

第41話 第一波（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第42話 第二波

第42話『第二波』

1943年11月19日AM08・55

アメリカ合衆国／ハワイ準州

第1次空中攻撃隊撤退の折を聞き取る中、第2波空中攻撃隊総指揮官の嶋崎和重少佐は、天山の操縦席でぼかんと口を開けて眼下を眺めた。真珠湾が燃えている。黒煙が渦を巻いて上空を覆っていた。空母に至ってはもっとたくさんの煙が噴き上がり、呻きと炎を漏らしながら沈もうとしている。第1集団水平爆撃隊長でもある嶋崎少佐は追い打ちを掛ける様に沈み行く空母の1隻『ヨークタウン』への水平爆撃を開始した。嶋崎少佐は緊張からの目眩と闘いながら、じっとヨークタウンの甲板を見ていた。飛行甲板の真ん中辺りで、港湾施設と艦船の火災から来る白光がガラス越しに差し込んできて、思わず爆弾を投下してしまった。250kg爆弾は水面に当たって砕け散りながらも、ヨークタウンの艦体にダメージを与えていた。250kg爆弾が順次炸裂して、しぶきを上げた。と、その時、背後でかすかな音がした。何か鈍い音……象か鯨の呻き声のような音だ。第6感が働き掛け、不気味な熱い感触が背筋を伝った。嶋崎少佐は思わず背後を振り返った。

それは、F4F―『ワイルドキャット』だった。重厚な機体が売りの鈍足戦闘機だ。

突然、時々訓練の時に聞いている音が響き渡った。火を噴く7・92mm機銃の咆哮。嶋崎少佐は降下し、ヨークタウンの艦橋直上を通過した。水面にさざ波が立った。F4Fを探すべく、彼は振り返ったが、その姿は艦船群から立ち昇る黒煙に隠されていた。

7・92mm機銃を操る遠藤二等飛行兵曹も迫り来るF4Fを未だ見つけられずにいた。見えるのは赤や橙や黄の混じった業火と黒煙だけだ。漆黒に目を凝らしてみたが、F4Fは完全に動きを一定に保っていて、音も少ない———というか、そもそもF4Fが居るのかどうかすら分からなかった。すぐに出てくるだろう。多分……。

下の方の海面に近い所で何かが動いた。何かが擦れるかすかな音が聞こえたかと思うと、F4Fの瑠璃色の機首がその姿を現した。それが天山に近付いてくる。

鋭い銃撃音と共に、7・92mm機銃が火を噴いた。遠藤二飛曹はひたすら瑠璃色の塊に鉛玉を焚き付ける。水がそれまでとは違う音を立て始めた。銃弾が海面を鋭く叩いたのだ。F4Fが他の音を全て掻き消すような凄まじい音と共に近付いてきていたが、程なく、操縦士が速度を落とし、静かになった。その直後、激しい閃光と爆音が嶋崎少佐の乗る天山に流れ込んできた。

鋼鉄の輝きが見える。

無数の破片——翼から座席に至る全てが宙を舞い、曙光に輝いた。

「もう大丈夫です」遠藤二飛曹が叫んだ。「飛ばしてください」

嶋崎少佐が頷き、操縦桿を操作した。「危ない所やったな」天山が大きく弧を描きながら旋回し、帰投の道を歩んだ。

1943年11月19日AM09・01

『艦爆の神様』で知られる、第2集団急降下爆撃隊隊長の江草少佐は、真珠湾上空に居た。彼の乗る彗星は他の隊員達の目にもつき易いようにと、黄色の虎縞模様が描かれている。これは同時に敵の目にも捉えられ易く、地上に配備されていた対空火砲は一斉に攻撃を加えた。

高度4000mからダイブした江草少佐はその照準を空母『エセックス』に合わせていた。既に大破し、壊滅的被害を受けていたエセックスは執念で湾内脱出を行おうとしていた。眼下に捉えられた

エセックスの飛行甲板からは、炎に彩られた煙の柱が噴き上がっている。逆落しに急降下した彗星は唸りを上げながら、250kg爆弾を投下した。

——エセックスが悲鳴を上げる。

彗星は体勢を立て直して機首を持ち上げ、海面をかすめる様にして空を駆け抜けた。江草少佐は後ろを振り返った。火の粉が輝きを散らしながらゆっくり降り注ぐ黒煙の下に、完全にうちのめされたエセックスの残骸が横たわっていた。

どうだ、これが帝国海軍の底力だ、と江草少佐は『必勝』と書かれた鉢巻を振り乱しながら、黒煙に覆われつつあるエセックスの骸に想いをぶちまけた。

その後、1時間に渡る攻撃の末、護衛空母1隻、重巡2隻、駆逐艦1隻が湾に沈んだ。難を逃れて脱出出来た空母はカサブランカ級空母『コレヒドール』『コーラル・シー』2隻。空母8隻中6隻を失い、港湾施設や航空施設に甚大なダメージを与えられたというこの事態に対応出来なかったとしてキンメル大將は更迭処分を受ける事となる。

第2次空中攻撃隊は目標達成したという南雲長官の考えに従い、9時24分をもって撤退。

こうして、南雲機動艦隊は帰路に着く事となったのである。

第42話 第二波（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第43話 報告

第43話『報告』

1943年11月20日AM07:24

アメリカ合衆国／ワシントンD.C.

ホワイトハウス

ワシントンDCのホワイトハウス周辺には無数のビラが絨毯の様に敷き詰められ、犇めき合っていた。これは4日前のH0ー18戦略爆撃隊による襲撃でばら撒かれた物だった。ワシントンDCの空襲は中心地、ナショナル・モールを拠点に行われており、その中心はホワイトハウスだった。レジデンス南側に広がるサウス・ローンからザ・エリプス、エレノア夫人の菜園に至るまで、ホワイトハウスの周囲を取り囲むように大量のビラが撒かれ、未だに撤去が済んでいなかった。フランクリン・D・ルーズベルトは眼鏡越しにサウス・ローンを占拠するドイツのビラに憤りを覚えつつ、職務に務めていた。

「忌々しいよ」ルーズベルトは霜に覆われた広大な芝生を見据えながら、呟いた。

「……忌々しいと言えば、ジャップの事もありますね」第46代米海軍長官、フランク・ノックスはオーバル・オフィス越しにサウス・ローンを見ながら言った。

「それはな」ルーズベルトの口調が鋭くなった。「役立たずのキンメルを降ろせばいい。目下の最優先事項は、ドイツの非人道的な反応兵器攻撃に対して一刻も早く報復する事だよ。太平洋は戦力の再編成を行い、新鋭戦艦のモンタナ級を投入すれば事足りる。それに、黄色人種を100万人殺しても、ナチ1人の死にも満たないん

だ、マスコミや世論としてはな」

ノックスは呆然と見返し、10枚の書類を手渡した。

＞米海軍太平洋艦隊被害＜

＞航空母艦＜

エセックス級空母『エセックス』沈没

ヨークタウン級空母『ヨークタウン』『エンタープライズ』『ホーネット』沈没

ーネット』沈没

カサブランカ級護衛空母『カサブランカ』『リスカム・ベイ』沈没

『コレヒドール』『コーラル・シー』中破

＞重巡洋艦＜

ニューオリンズ級重巡『ニューオリンズ』『サンフランシスコ』

沈没

＞軽巡洋艦＜

セントルイス級軽巡『ヘレナ』中破

ブルックリン級軽巡『フェニックス』小破

＞駆逐艦＜

ウィックス級駆逐艦『ワード』沈没

アラガット級駆逐艦『アラガット』『デューイ』沈没

『ハル』『モナハン』小破

空母8隻中、6隻が沈没するという報告書をノックスが手渡すと、ルーズベルトも流石に焦りを見せ始めていた。ただでさえドイツの核攻撃で錯綜しているこの時期だ、重要な情報も報告が遅れていた。6隻の喪失は衝撃的なものだった。

「……酷いな」

ルーズベルトの口調は恐ろしげだった。「6隻もか？」

ノックスは頷いた。「はい、事実です」1人の職員が掃除に励むサウス・ローンに彼の視線が向かった。「今回の1件は重く受け止める必要があります。ノーフォークの件もあります……」

「勿論だ」ルーズベルトは言った。「当面は大西洋中心の戦略を立てていこう」

1943年11月20日AM08:56

アメリカ合衆国／ワシントンD.C.

曙光がカーテン越しに漏れ入ってくる。チェスター・ニミッツ少将はワシントンDCの自宅で朝の儀礼に取り掛かっていた。コナ産コーヒー豆を手で挽く作業、キッチンにはハワイアンな香りに包まれ、ニミッツの顔は綻んだ。背後では、蓄音機からクラシック音楽が鳴り響き、その狭間でラジオが真珠湾の日本軍奇襲攻撃を忙しく告げていた。

「コナ産が一番なんですよ」

4月上旬、コーヒー好きのレイモンド・A・スプルーアンスにそう言われ、コナ産コーヒーを勧められたニミッツは、その頃からコーヒーにはまりだしていた。ニミッツがコーヒーに1口舌鼓していると、突然、驚いた事に扉をノックする音が響き渡った。朝の8時だと言うのに……誰だ？

洗面を浮かべ、扉を開けると、そこには海軍長官ノックスの姿があった。

「おはよう」ノックスは告げた。

「長官……一体何の用ですか？」

蓄音機のレコードの楽曲が『エロイカ』に代わる中、ニミッツはノックスを招き入れた。相変わらず、ラジオは真珠湾の悲劇を伝えていた。2人は椅子に腰掛け、互いに見据えた。

「大統領は新たな太平洋艦隊司令官に君を強く推しているんだ」

「成程、そうですね……」

「そうなんだ」ノックスは言った。「君にその職の興味があるか知りたくてね」

ニミッツは頷いた。「興味があります。実の所、情けないと思います
ましてね」

ノックスは深く息をついた。「空母6隻を失ったのだ、戦艦を失
わなかっただけでも良かったが……それでも、ハワイは酷い有様だ。
こんな時こそ、卓越した指揮官が必要となる」

1943年11月21日AM10:24

ドイツ／バイエルン

特務精神施設

幻想はいつも同じ様に始まる。

ヘルマン・W・ゲーリングは落ちていた……後ろ向きのまま、漆
黒の渦と紅蓮の業火が燃え滾る溪谷の深淵の底……ひたすら落ちて
いく。崖の上では、1人の男の無情な闇黒の瞳が見下ろしている。
落ちていくにつれ、何故かその顔が——光の下に晒されて——姿を
現した。

……俺……なのか……？

途端、1筋の雷光と共に——全てが、世界が真っ白になった。ま
るで天国の如く。

そして、渋い声色が耳に轟いた。「……未来を刮目せよ」

激しい雷鳴と白煙が周囲をたなびき、渦巻いた。

刹那——世界が反転した。

「ゲーリング元帥」

無垢な2つの瞳は声の方向へと焦点を合わせた。ゲーリングは胸
を伝う吐気をそのまま口からぶちまけ、純白の衣服を汚す。彼は透
明な箱状の部屋に閉じ込められ、囚われの身だった。表向きは『被
験体ヌル』として呼ばれていたが、それも今日で終わりを迎える。

「……総統閣下」

ゲーリングは2本の脚を奮い立たせ、歯を食い縛った。

「うむ」ヒトラーは唸った。「気分はどうだね？」

「良いです……まるで生まれ変わったような……」

ヒトラーは笑みを浮かべた。「容疑は晴れた。貴殿には復帰してもらいたい」

「感謝致します」

ゲーリングは深々と頭を下げ、告げた。

ヒトラーは首を横に振った後、部屋から退室した。部屋を出た先には、施設責任者にして『Kaiser-House』の一員でもあるホッカー神父が肩をすくめ、苦面を浮かべながら立っていた。ホッカー神父は長い時間を掛けて、ゲーリングを治療してきていた。1960年まで存続する新生第3帝国の洗脳実験の責任者だった彼は、その経験を活かした治療法を施した。数ヶ月もするとゲーリングの体からモルヒネが抜け、身も癒えて、ゲーリングはかつての栄光を取り戻した。最早ゲーリングはモルヒネ・急降下爆撃中毒の肥満体ではなかった。適度な運動と計算された食事、副作用の強い薬品による嘔吐によって大きく痩せ細らせ、アナボリックステロイドでベン・ジョンソンのような身体を手に入れたのだ。かつての脂肪は筋肉となり、第1次大戦時のような解放感を得ていた。

そこから洗脳を続け、ゲーリングは既に操り人形と化していた。

「いつまで隠し続けられるか……」ホッカー神父はゲーリングの居る部屋を一瞥した。「自我を取り戻せば、脅威になりえませんか……」

「まだ記憶があるのか？」

ヒトラーは唸るように訊いた。

「奥底の記憶領域にです。外部ショックで思い出す可能性も捨て切れません」

ホッカー神父の問いに、ヒトラーは呟いた。「……厄介だな」

第8章 『真珠湾攻防戦』 完

第43話 報告（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第9章『MO作戦』第44話 大和訪問（前書き）

一『第1機動艦隊』艦隊編成一

＞主力部隊＜

旗艦…戦艦『大和』

第1戦隊…護衛艦『きい』

戦艦『陸奥』『長門』

空母『鳳翔』

駆逐艦『朝霜』

第3水雷戦隊…軽巡『川内』

・第11駆逐隊…駆逐艦『吹雪』『白雪』『初雪』

・第12駆逐隊…駆逐艦『叢雲』『白雲』『秋月』

・第19駆逐隊…駆逐艦『磯波』『浦波』『敷波』『綾波』

・第20駆逐隊…駆逐艦『天霧』『朝霧』『夕霧』『狭霧』

給油艦4隻

＞機動部隊＜

第1航空戦隊…空母『赤城』『加賀』

第2航空戦隊…空母『蒼龍』『飛龍』

第5航空戦隊…空母『翔鶴』『瑞鶴』

第6航空戦隊…空母『信濃』『三河』

第3戦隊…戦艦『比叡』『霧島』

第8戦隊…重巡『利根』『筑摩』

第1水雷戦隊…軽巡『阿武隈』

・第10駆逐隊…駆逐艦『夕雲』『卷雲』『長波』『巻波』

・第17駆逐隊…駆逐艦『谷風』『浦風』『浜風』『磯風』

・第18駆逐隊…駆逐艦『陽炎』『不知火』『秋雲』『霞』

霰』

第2潜水隊…『伊19』『伊21』『伊23』

給油艦11隻

真珠湾攻撃を行った第1航空艦隊を基に再編された艦隊。世界最大の機動艦隊であり、独立型艦隊でもある。基本は護衛艦『きい』中心に4～6隻の空母編成といった具合。司令長官は南雲中将だが、実質的な主導権を握っているのは旗艦『きい』艦長、吉岡一等海佐である。『真珠湾攻撃』↓『MO作戦』↓『MI作戦』と短期間に続く戦略行動の予定を持つことから、海軍内や世間一般では『電撃艦隊』の愛称で呼ばれている。

第9章『MO作戦』第44話 大和訪問

第44話『大和訪問』

1943年11月21日PM07…13

トラック諸島／泊地

設備投資の施されたトラック諸島には、現在多数の浮きドックが配備されている。本国までの曳航の手間をある程度、省くという目的があったが、それでも十分とは言えなかった。少なくとも工作艦『明石』に全部を任せるという訳では無かった。高橋三等海佐はSH-60Jの機窓から8万ト級超大型浮きドックの姿に目を瞞っていた。SH-60Jが唸りを上げ、後部甲板から飛び立った時、高橋は胃が落ちるような感覚に襲われた。SH-60Jは大きく傾き、想像した以上の勢いで速度を増していく。このヘリコプターの行き先は、泊地に停泊する戦艦『大和』である。艦魂『きい』の約束を果たす為だ。

出発する前に、彼女は高橋の耳元に顔を近づけて囁いた。「気を付けてね」

高橋は背後に佇む母艦を見かえし、微笑んだ。ようやくSH-60Jの機体が水平に復して、第1戦隊の艦船群の姿が見えてきた。窓の外では日が既に沈んでいたが、穂高の連峰さながらに水平線に聳え立つ、世界最大の戦艦『大和』の勇猛なシルエットがまだ見てとれた。戦艦『大和』はこの“第1機動艦隊”の中心であり、大日本帝国海軍の象徴だ。普段見慣れている46cm砲も、神々しく感じた。

GE社のT700-IHI-401C双発エンジンが低く単調な音を立てる中、SH-60Jは機体を水平に保ち、徐々に地上へと

降りて行った。鈍い音が響き、車輪と大和後部甲板の擦れる音が聞こえた。扉を力強く開け、高橋は大和へと降り立った。

「……久方振りだね」渋い声の主は、山本五十六司令長官だった。高橋が視線を上げると、腰元まである黒髪を靡かせ、甲板上を歩く1人の少女の姿が見えた。純白の軍帽の下から、漆黒の髪がはみ出している。高橋はもどかしげに手を振り、押し殺した声で呼び掛けたが、山本長官が首を傾げるだけだった。

「どうかしたのかね？」

山本の問いに高橋は答えた。「いえ、何でもありません」

少女は後部甲板から、第3砲塔を横切り、第2砲塔へと向かっていった。そこには眩く輝く照明灯が光を集め、照らしていた。艦首方向に向かっているんだな。

「司令長官、ぶしつけですが……」高橋はためらったが、告げた。「大和を見させて頂けませんでしょうか。出来れば1人で見学させて頂きたいのですが……」

山本は頷いた。「許可しよう。私はここで“未来”を見させて頂くよ」

「では長官、私もご一緒させて頂きます」そう告げたのは、SH-60Jに同乗していた護衛艦『きい』仲介係にして大日本帝国海軍の桐野少佐だ。

——46cm砲第1砲塔付近。

真正面に聳える大和の象徴、月光で妖しげに照らされた46cm砲は、莊嚴にすら見える。日の下に見える時とは訳が違った。背後の艦橋からは光が漏れ、乗員達の楽しげな声が聞こえてきた。

第1砲塔を抜けてきた高橋が、艦首の沈黙を破った。

……彼女だ。「すみません」声を掛けてみた。

高橋は、凛々とした黒髪の少女が艦首付近に座しているのを見つけた。その少女はかなり小柄で、腰元まで垂れた漆黒の髪が印象的

だった。妖精を思わせる目鼻立ちをしている。年は13～14歳程。新品に近い、ほんの少しだけ淀んだ第2種軍装を身に纏い、腰には1本の軍刀が備えてあった。彼女は振り返り、高橋に顔を向けて、月光の中で目を凝らした。「……何者だ？」その無垢な瞳の奥底には、悔りがたい力が轟めいていた。

高橋が息を整えながら言った。「海上自衛隊の高橋三等海佐であります」彼女の肩元に座する階級章に視線を向けながら、高橋は言った。

「ほう」彼女はいぶかしげな顔を浮かべる。「噂に聞く所の“未来”の海軍人か」

「仰る通りです」高橋がそう言うと、少女の顔に憂いが差すのが月明かりの下で見えた。少女は腰の軍刀の柄に添えていた手を離し、哀しげに空を見上げた。高橋は歩み寄り、プリントアウトした数枚の白黒写真——『大和の最期』を見せた。

「それだけ？」

「まだあります」高橋は言葉を切った。「1つ伝えるよう頼まりました」切実な気持ちで。

彼女は身を乗り出した。「何を？」

「……我が母艦の魂——彼女は貴女に“未来”を伝えるようにと」高橋は間を置いた。「全てをです。貴女の最期だけではない、世界の行く末をです……未来を真に変革する為には、未来に目を向ける必要がある」と彼女は言っていましたね」

月の薄明りを浴びて幽霊の如く闇夜に浮かび上がるSH-60Jに目を瞠りつつ、2人の大日本帝国海軍の兵は、60年以上も先のテクノロジーに改めて感嘆していた。海軍特務機関、通称『きい機関』に所属する桐野少佐は、SH-60Jを何度も見た事があり、既に全体の大まかな構造を理解している。

「山本長官……高橋三佐についてですが……」

桐野は口ごもりつつ、言った。「彼は最近妙なようで……C I Cでは左右を振り向き、時々何かに話し掛けていたり、甲板に出ては誰も居ない所へと度々足を運び、独り言を話している始末です。今もそうですが、彼には精神疾患のきらいが見えます」

「その位にしておいた方がいいぞ」山本長官は言った。

「失言でしたか——」

「いや、正しいと思う。初の実戦だ、流石の高橋三佐も無理がたたったのかもな」一旦、口をつぐむ。「先の優先問題と言えば、『日米早期講和』にある。手っ取り早くはハワイ攻略だが……まあ先を急ぐ事はあるまい。ともあれ、M O作戦は1週間後には始めるつもりだが」

山本長官は思わず笑みを浮かべた。海自の情報を基に作成された戦略は、まったく抜かりが無かった。第1段が真珠湾攻撃による太平洋方面の米海軍戦力の低下とハワイ攻略の為の視察。第2段が満州国の石油生産安定化までの資源確保の南方作戦と、早期の米豪遮断。第3段がハワイ攻略の布石としてのミッドウェー攻略。戦力次第では並行してF S作戦、又は先にF S作戦。そして第4段にハワイ攻略と続いている。M O作戦はその第2段階に当たる。

M O作戦は真珠湾攻撃を行った南雲機動艦隊をそのまま本土へと帰還させずにトラックで補給を済ませ、1週間足らずでポートモレスビーになだれ込むといったものだった。最高6隻の空母を投入して航空戦力を殲滅し、制空・制海権を確保。陸軍を上陸させるといった計画である。潤沢な技術力と無限の戦術こそが連合艦隊の強みだが、潤沢な資金と世界中の資源、大規模な人員・工場、それら資源や物資を運べるだけの輸送手段を持つのが連合艦隊の強みであり、太平洋戦争の勝因だった。そこから、その一部を遮断する今作戦が最善の策であると山本は考えた。M O作戦成功の暁には、機動艦隊の損害状況を見定めて、作戦終了から1ヶ月以内にミッドウェー攻略、又はF S作戦を考えている。

「時は金なりと言うだろう？」

山本は水平線の彼方を見つめて告げた。「MO作戦が成功すれば、大幅な時間短縮が出来る。今や太平洋に居る米英空母は少ないからな。本土防衛も考えなければいかんが、その点は新鋭戦闘機や新鋭防空レーダー網がなんとかしてくれるはずだ。問題は相手に復活の隙を与えんことだよ」山本は続けた。「英国はともかく、米国は巨大過ぎる。対独戦をしているとはいえ、それでも有り余る戦力を補充する事は容易く出来るのだからな」

「リメンバー・ハンプトンローズ、或いはリメンバー・ポーツマスと言われているそうだが、米国民はこの太平洋の戦争を望んでいない。だからこそ今回は講和の糸口が開けると思わんかね？」

山本は微笑んだ。

「未来技術で造った『富嶽』が完成すれば、ハワイから本土爆撃が出来るようになる。その時が講和の合図だろうな」

「富嶽……あの怪物機ですか？」

「ジェット機仕様の8発爆撃機とかいう話だ。6発でも驚くのに8発とはな」山本は忍び笑いをした。「航続距離15,000km、実用上昇高度15,000m、最大爆弾搭載量は20t。45年かその後に完成を予定しているらしいから、怪しいものではあるが……夢はある」

山本長官は目を爛々と輝かせ、空を見据えた。月が妖しげに輝きを放っていた。

——艦首。

戦艦『大和』の先端付近に堂々と立つ少女は、何も言わなかった。

「……未来はご覧になりましたね」

「ええ」哀しげに言う。「何かが欠けた未来ね」とはいえ、いかなる世界も何かが欠如していることは分かっていた。この世界も例外ではない。しかし、矛盾に秘めた自衛隊と呼ばれる軍隊なのか救

助部隊なのか、はたまた飾りだけの軍隊なのか——理解に及ばなかった。

「未来への道を指し示してくれて、本当にありがとうと彼女に……」

「感謝の意は責任を持ってお伝えします。長く山本長官をお待たせしてもいけませんので、今宵はこれで——」

そこで声は途絶えた。

彼女は既に姿を消していたのだ。

未来への道——。

少女、大和の艦魂の言葉が、己が精神の中でこだました。

未来への道——。

妙な気分、妙な感触、それが己の答えだった。全ては既に始まったが、それに同調していないのか。平和ボケのせいかな、はたまた弱き精神のせいなのか。

背後に聳え立つ大和の連峰を仰ぎつつ、高橋は天を見据えた。

……闘いは始まった。

第9章『MO作戦』第44話 大和訪問（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第45話 ポートモレスビー空襲

第45話『ポートモレスビー空襲』

1943年11月26日AM07..32

珊瑚海

南太平洋の戦略の要衝、トラック諸島から出航した第1機動艦隊は、ニューギニア東端のジョマード水道を通過、珊瑚海に突入して一路、ポートモレスビーを目指していた。この頃、日本海軍は『作戦暗号D』――米軍諜報機関で言う所の『JN-25』の不備を海自の未来情報から周知しており、新たな暗号と適切な運用方法を取っていた。結果、この方面に機動艦隊が展開しているのを米英は知らなかった。

5日前、トラックを出発した護衛艦『きい』は、2機のハリアー？を展開し、空中哨戒任務を行わせていた。

空中哨戒部隊の西川一等海尉は俯いて、天蓋に映った自身の顔を見据えた。頬がこけ、疲れが滲んでいる。注意深く守ってきた第1機動艦隊は、南方の激戦地に出陣しながら唯一手つかずの艦隊だった。この艦隊は辛抱強く待ち続けてきた……そして今朝、遂に初陣となる。

今すべき事に意識を戻し、眼下を見下ろした。

「ここまで見つからずに来れたのは奇跡だな……」

護衛艦『きい』艦長、吉岡一等海佐は深く安堵した声で言った。きいのリーダー網には、敵艦の姿は認められなかった。既にCICには、ハリアー？から届いた映像が光の滝の如く、暗闇の部屋を流れながら明るく照らしている。

「第1次攻撃隊は間も無く発艦との事です」

高橋三等海佐は頭蓋骨を揺さぶるインカムの声を聞き、告げた。護衛艦『きい』は指揮拠点と対空警戒の要を担っていた。情報の多くは機動艦隊の各艦艇から伝わり、きいがその情報を精査し、旗艦『大和』と随時連絡を取りながら、艦隊全体に適格な情報を伝えていく。

それは、事実上の旗艦である事を意味した。

——水平線の直上、空に朝陽が光雨に降り注ぐ払暁の空の頂に黄金色の煌めく光点が浮かび上がっている。輝く頂点にはたちまち無数の航空機が照り映え、機首のアルミニウムが先端から光を放った。光が篝火となって、長い影に覆われたポートモレスビーの街は浮かび上がった。首都は東から差し込んでくる曙光に照らし出されていた。

噴進戦闘機の不気味な轟音が上空の大気を震動させた。

背後の水平線から太陽が徐々に顔を覗かせるにつれ、ポートモレスビーを照らす光が下へゆっくりと広がっていく。

その光景を見据えながら、第1次攻撃隊第3集団制空隊隊長の板谷少佐は不変の軌道を辿りながら、虚空を進む第1集団の彗星の動きを感じ取っていた。1週間前の真珠湾上空での高橋少佐の雄姿が目に浮かぶ。そういえば、あれは過酷しかった。

日差しが力強くなり、黄金色の光が飛行場のP40十数機を包み込んだ。整備員達が水平爆撃隊の機影越しに漏れ入ってくる光を浴びていた。それから光と機影は滑走路を少しずつ下り、毎朝繰り返ししている下降を始めた。天が地に近付き——250kg爆弾がP40と人塊に結びついた。爆風と閃光が滑走路に迸り、大地を揺さぶった。

隣の噴戦が機体を震わせながら、板谷少佐機に体を寄せてきた。

55mm噴進弾が飛行機格納庫に直撃、炎上した。旭光の編隊は搭載していた55mm噴進弾で対地攻撃を続行する。板谷は鮮やかな光筋を描く噴進弾を一瞥しつつ、この旭光の心臓部たるターボジェットエンジンのトラブルが起きない事を祈った。機体には、希少な高オクタン価ガソリンが注ぎ込まれていたが、エンジンは出力不足で墜落することがしばしばあった。1週間前にも、瑞鶴航空隊所属の噴戦1機がニイハウ島に墜落、パイロットが行方不明になっている。噴戦旭光パイロット達は墜落した場合、捕虜となる前に機体を破壊する事が義務付けられている。とはいえ、恐らくはニイハウ島の機は米軍に鹵獲されたに違いない。

上の空の最中――炸裂音が響き渡った。

とっさに板谷はエンジンスロットルを引き絞り、本能的に旋回した。対空砲の炸音と黒煙が視覚と聴覚を蝕み始めていた。急旋回した後、板谷はゆっくりと頭を戻し、正面に顔を向ける。自らを呑みこまんとして1匹の蛇――P39『エアコブラ』が迫っていた。

……優美な螺旋を描きながら、旭光は蛇を翻弄する。

P39の背後に回り込むのは容易く、残っていた55mm噴進弾が蛇の尾を切り落としたく武者震いしているが如く、低く単調に震動していた。板谷は微笑み、引き金を引いて噴進弾を畳み掛けた。白煙と光筋が蒼天のキャンバスへ鮮やかな彩色を刻む中、P39の尾部が粉碎された。機はバランスを失い、機首を正面に飛行場へ派手に墜落してしまった。

ポートモレスビーは狂ったように響く空襲警報のサイレン音に包まれた。

対空砲に飛び乗った兵士達は頭をもたげ、上官の指示に従った。大半は過小評価で配備された雑兵ばかりで、喉元にナイフをあてがわれた人質が如く、ただひたすら従順でいた。或いは怠ける。

飛行場では、航空部隊が使えるだけの戦闘機を発進させていたが、

P39・P40辺りの旧式機が中心であり、新鋭機は1機も含まれていなかった。迎撃機は空に上がると同時に撃ち落とされ、人家や軍事施設に被害を出すばかりだった。淵田中佐率いる第1集団水平爆撃隊が到着した頃には既に各軍事拠点は甚大な被害を被っており、制空権を掌握する立場にあった。

淵田中佐の背後では、ポートモレスビー攻略部隊を乗せた輸送船団が展開している。

短期決戦を想定した結果、ポートモレスビーは弱小戦力によって守られていた状態だった。フィリピン方面を主軸にしている米陸軍航空隊の戦略もあったが、既存である暗号傍受を知った帝国海軍がそれを利用して情報操作を行った結果でもあった。1週間前の真珠湾攻撃でも、海軍はわざと嘘の情報を流し、それを米軍に傍受させていた。

第2波空襲は軍事拠点を完膚無きまでに叩き潰した。

日本軍は制海・制空権を完全に掌握した。

第45話 ポートモレスビー空襲（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第46話 電撃艦隊の初陣

第46話 『電撃艦隊の初陣』

ポートモレスビーは首都と言っても、片田舎に過ぎなかった。欧米の洗練された集合都市体の様なものは存在せず、複数の町々の集合体——悪く言えば集落の寄せ集めとでも言うべきだった。熱帯気候にあるため、カンガルからワラビー、クスクスといった有袋類。また、史実でも日本軍陸路部隊に猛威を振るったクロコダイルやパイソンの類も生息している。

11月27日、上陸作戦開始。

前日、大規模な空襲を被った豪軍は、既に壊滅寸前だった。保有していたP40数機を空に飛び立たせ、迎撃に向かわせたが、その相手となる第3集団制空隊は新鋭噴進戦闘機『旭光』含めた122機余りであった。当然、制空隊が迎撃機を殲滅した。

その頃、豪軍はパガ岬を中心とし、海岸線に防衛線を敷いていた。標高167mのトアグバ・ヒルには、重迫撃砲が配備されており、パガ・ヒルにも同様の迫撃砲陣地を築いた。

相手となるのは『大和』『きい』『陸奥』『長門』計4隻。45口径41cm砲8基、45口径46cm砲5基の艦砲が海岸線に狙いを定め、砲弾の嵐が吹き荒れることとなる。上陸前に行われた数時間に及ぶ艦砲射撃は、パガ岬の全生命を絶ち切った。上陸部隊が荒波や抵抗攻撃に難儀する事なく上陸用舟艇で到着すると、そこは漆黒に染まっていた。人の姿は一切合財存在しない。塹壕は見るも無残に崩れ去り、大規模な戦闘を予見してか配備されていたM3戦車の類は、灰と化していた。

こうして、史実では失敗したポートモレスビー攻略が成功した。

1943年12月5日AM03..40

珊瑚海

米海軍第17任務部隊指揮官、フランク・J・フレッチャーは旗艦ヨークタウンの艦橋で腕組みをして参謀に疑惑の目を聞きながら、今聞いた話を値踏みした。「……ジャップの機動艦隊が真っ向から対決する気だ？」辛辣な視線が参謀に貫いた。

参謀は力なく肩をすくめ、頷いた。「ONIからの通信傍受情報です」

「1度は奇襲を許しただろう？」拳を握り締め、北の水平線の彼方に目を向ける。ONI―アメリカ海軍情報局は真珠湾攻撃時にも偽の暗号を掴まされてこのフレッチャー艦隊を振り回していた。当初、南方に空母主体の大規模な艦隊を送るという情報を傍受したONIはその情報を太平洋艦隊司令部に報告、ハバックク旗艦支援に随伴していた第17機動艦隊をフィリピンに向ける事を検討し、ミッドウェーで補給を済ませた後、すぐに派遣するつもりだった。

しかし、その間にMO作戦が発動、これまでの暗号が意図的な情報と悟らせない為に、あえて帝国海軍は珊瑚海に大規模な機動艦隊が展開していることを垂れ流し、また操作した訳である。これは米機動艦隊を殲滅する意図の下、行われたことである。

「……まあいい、一泡吹かせるチャンスなのだからな」

フレッチャー少将は窓際に歩み寄り、指を海に指し示して言った。「だからこそ、ここはONIの情報で先手を取らせて貰おうではないか。遙々南国の海までやってきたんだ。我々合衆国海軍と粗暴な日本海軍の差が紙一重ではなく、天と地ほどにも違うことを示すためにな」

艦左舷に横たわるMK・143装甲ボックスランチャーの背後に

立って脚を伸ばしながら、艦魂きいは歩み寄る高橋の顔を見据えた。艶やかな月光が右頬を照らし、徐々に顔全体を染め上げた。19日程前の四国沖海戦前夜において、漆黒の空の上から2人を照らしていたのと同じ月だ。

高橋は生暖かげな外気に包まれながら、MK・143の左端に立った。

「史実ではここで翔鶴が恐ろしい目に遭っているんですよね」

闇夜に染め上げられた海に目をやり、彼女は呟いた。今現在、空母翔鶴はこの第1機動艦隊の主力として組み込まれている。かつて失敗したMO作戦を成功させ、次はフレッチャーの機動艦隊を殲滅すべく、その雄姿を見せようとしているのだ。かつての史実を知るきいの表情は曇っていた。

生か死か。考えながら、きいはMK・143に背を着けた。

「周囲の制空・制海権は掌握している」高橋はため息を漏らした。「この艦隊から1人でも多くの死者を出さない為に俺は全力を尽くすよ」

――私も。

不意に、これまでの人生で経験した事のない清澄な感覚を覚え、自分の運命の全てがはっきりと見えた。“護衛艦”としての責務を全うする……全身全霊を持って……。

心の準備は出来ていた。

『きい』CIC

CICの中で、珊瑚海の直上を低空飛行するSH-60J哨戒ヘリコプターから送信される画像を見据えながら、高橋三等海佐は腕時計に目をやった。敵艦隊との接触まであと僅か。高橋は息を大きく吐き、水平線で輝きを見せる戦艦『陸奥』をプラズマ・ディスプレイ越しに眺めた。燦然と煌めくその戦艦の偉観は、珊瑚海に浮か

ぶ大和にも引けを劣らない。艦には乗ったことは無いが、陸奥の記念館には行ったことがある。14cm単装砲の遺骸が脳裏に浮かび上がった。

「艦長入られます！」

第1分隊員の1人が甲高い声で告げた。

吉岡一等海佐が中に入ると、淡い灰緑色の光がかすかに瞬いていた。プラズマ・ディスプレイの1つが明るい光を吉岡にぼうつと投げ掛けている。その脇には、深紺色の帽を被って分厚い眼鏡を掛けた中年男の顔が浮かんでいる。電測員長の喜田一等海曹だ。横には、おっとりとした表情を浮かべ、白髪がやや目立つ吉岡艦長の姿が見える。

「敵艦隊の位置はおよそ30km。敵は米海軍第17任務部隊と推測されます」

「第17任務部隊……史実の珊瑚海海戦と同じか」

ここで米空母を撃沈すれば、講和がそれだけ進む。吉岡は胸の中に呟いた。

1943年12月5日AM07・10

護衛艦『きい』CIC

「対空・対水上戦闘用意。レーダー監視を厳となせ！」

艦長吉岡は冷静に告げた。

「主砲を使用。第1、第2砲塔用意！」

CIC要員達はやや驚きと緊張を交えた顔を上げる傍ら、その職務に全うするだけの熱意を備えていた。電測員と砲雷員達が互いに連携を取り、目標を捉えた。

「第1、第2砲塔用意よし！」

『きい』前方に聳える46cm3連装砲塔は、旋回して砲身を天に掲げていた。プラズマ・ディスプレイ越しに見える6門の砲は、

光を浴びて煌々と輝いていた。

艦は右に回頭して砲撃体勢を整える。

「主砲、撃ち方始め！」

高橋が甲高い声で告げ――第1、第2砲塔の1・2番砲が鈍い声を轟かせ、炎を舌なめずりした。4発の砲弾が空を駆け抜けた。CICの外側の扉を揺さぶり、間を空けて壁が悲鳴を上げる。高橋は身を固くした。プラズマ・スクリーンを見据え、駆けていく砲弾の位置を確認した。

「撃ち方始め！！」

「撃ち方始め！！」

15秒間隔で『大和』、『陸奥』が咆哮を上げ、砲弾を放つ。フレッチャー率いる第17任務部隊との距離は30km。戦艦陸奥艦橋では、頸椎骨折で死を迎えるはずだった三好艦長が艦砲射撃を命じ、砲弾の雨を米機動艦隊に降らせていた。

新型電探と『きい』の誘導により、発射された4発中2発が駆逐艦『フェルプス』の艦体に直撃、引き裂かれたフェルプスの肌からは、暗紅色の黒煙が流れ出ている。

間も無く、フェルプスは海底で深き眠りに着くこととなる。

「大成功……といった所か」

三好大佐は呟き、ハンカチを取って額を拭いた。陸奥は煙突から平然と煙を吹かしていた。41cmの8門の砲身は注意深く調整され、第2波を第17任務部隊に浴びせる準備を進める。

「陸奥も本望でしような」

参謀の1人が告げ、三好は静かに頷いた。同時に主砲射撃準備完了を知る。

「撃ち方始め！！」

旗艦『ヨークタウン』艦橋。

『オールド・ヨーキ』の愛称で呼ばれるその空母は、第17任務部隊中央に鎮座し、艦載機の発艦作業を着々と進めていた。度胸と技術を要する空母の発艦作業は、7時12分から始まり、既にF4Fを10機ほど発艦させている。

B&W社製ボイラーが低く単調な音を立てる中、指揮官のフレッチャー少将は戦闘開始と共に艦隊内の甚大な被害報告を聞き、憤りを覚えていた。

「何をしているんだ？」

フレッチャー少将が参謀の1人を叱咤する最中、頭上から断絶音が響いた。艦橋が大きく揺れ、危険なほどの距離で業火を滾らせる重巡洋艦『ミネアポリス』の姿が浮かび上がる。フレッチャー少将の他、艦橋や飛行甲板で作業をしていた面々の多くは、空を猛スピードで駆う1筋の白矢の姿を確認していた。それはミネアポリスの頭上に到達すると、意志を持ったように精密な攻撃を食らわせた。

——そんな馬鹿な。

重巡ミネアポリスの変わり果てた姿を見て、フレッチャーは呟いた。

「……………」

沈黙、そして痛感。

これがジャップの実力か。

ミネアポリスを一瞥し、呟く。

——こうして、フレッチャー機動艦隊対電撃艦隊の闘いが幕を開けた。

第46話 電撃艦隊の初陣（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第47話 電撃艦隊VSフレッチャー艦隊

第47話『電撃艦隊VSフレッチャー艦隊』

1943年12月5日AM08…58

珊瑚海

第1機動艦隊旗艦で帝国海軍の象徴、戦艦『大和』は激しい咆哮を轟かせ、敵機動艦隊を圧倒していた。46cm砲9門が斉射すると、激しい衝撃と爆音が大和を包み込まれた。9つの砲弾は第1射で行われた試射で誤差修正により、射撃性能を向上させていた。優美な放射線を描き、第17任務部隊の重巡洋艦『アストリア』に襲い掛かる。

——蒼穹を切り裂く3つの水柱。

——鋼鉄を切り裂く6つの火柱。

はるか上空を駆る30機の天山、その先頭を行く村田少佐は太い弧を描きながら、荒風と砲火の摩擦の中を縫うように進撃し、米海軍巡洋艦の最期に目を向けていた。

天山の列が揺れて弧を描き、空母の1隻——『レキシントン』を囲んでいく。駆逐艦と重巡の群が鼠色の翼のように波打っていた。第1集団雷撃隊は50口径機銃の鋼の抵抗を受けながら、必死に機体を動かして視界に映る空母を沈めにかかった。

怒涛の如く輪形陣に押し入ってきた日本機を落とすべく、F4F計23機が抵抗を始めた。が、既に野良猫は噴戦『旭光』の射撃圈内の中に居た。

「1機でも落として、呉の恨みを晴らしてやれ！」

40機の旭光を率いる板谷少佐は、無線越しに叫んだ。旭光は後部から燃焼ガスを噴き乱しつつ、空を飛び交っているF4Fの群れ

を蹴落とした。

と、その時、2発の航空魚雷がレキシントン左舷部を貫き、艦内に爆音を轟かせた。扇状に広がる魚雷の群れは途切れず、その後も柔らかなレキシントンの艦体を切り裂いていった。

彗星の250kg爆弾の雨が始まる頃には、消火活動は断念され、既に退艦命令が出されていた。

第17任務部隊司令官、フランク・J・フレッチャー少将は、旗艦『ヨークタウン』の窓から煙を吐き出す『レディ・レックス』の姿を眺めていた。地獄の底から響いているような轟音が響いたかと思うと、上空に一筋の火柱が立ち昇った。

陽は――いや、ジャップの機は落ちないのか。

空を駆る忌々しい敵機の姿を一瞥し、フレッチャーは哀しげに呟いた。世界最高峰の海軍がこれほど無様な負け方などすれば、国家の威信に影響する。

「少将、私は撤退……最低でも一旦後退し、再編することを具申致します」

参謀長は失意の表情を浮かべながら言った。

「撤退を……」フレッチャー少将は呟いた。「撤退……か……」

既に第17任務部隊は駆逐艦1隻、重巡洋艦2隻、空母1隻を失い、重巡の大半が大破されて珊瑚海を漂流している状態にあった。艦載機の大多数は旭光といった噴戦に撃墜され、陸上航空支援も持たない状態にある。ラバウルは2隻の正規空母を主体とする第2機動艦隊の支援もあり、比較的早期に制圧されていた。

――これ以上、空母を失う訳にはいかない。

「撤退だ。撤退を開始する」

そう告げたフレッチャー少将は、日本軍機動艦隊が居るであろう水平線の彼方に視線を向け、拳を握りしめた。

第10章 『MO作戦』 完

第47話 電撃艦隊VSフレッチャー艦隊（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第10章 『南方作戦』第48話 マレー作戦（前書き）

・三式戦闘機『飛鷲』性能諸元

全長…9.8 m

全幅…11.3 m

全高…4.17 m

翼面積…21.7?

エンジン…アリソンV-1710-81エンジン改×1

最高速度…704 km

巡航速度…443 km

航続距離…3600 km

実用上昇限界…12.770 m

固定兵装…20 mm機銃×4

副兵装…55 mm噴進弾×10

米陸軍航空隊のP51Aをライセンス契約した陸軍機。未来技術で非力なアリソンエンジンや機体の強化を図り、P51D並の性能まで引き上げられている。脚部強化や軽量化を施した海軍機『海鷲』も存在する。

・三式双胴戦闘機『双鷲』性能諸元

全長…12.93 m

全幅…15.62 m

全高…4.22 m

翼面積…37.9?

エンジン…アリソンV-1710-81改×2

最高速度…752 km

航続距離…3600 km

実用上昇限界…12,770 m

固定兵装…20 mm機銃×6

爆弾搭載量…1,900 kg

大日本帝国陸軍の双胴・夜間戦闘機。F82を基に開発された機で、改良されたアリソンエンジンや機体構造により、史実よりもやや優れた性能を誇る。新型レーダーを備え、飛鷲よりも大型にはなっているが、劣らぬ機動性を持っている。

第10章 『南方作戦』 第48話 マレー作戦

第48話 『マレー作戦』

――事は9月から始まっていた。

9月上旬、米英は満州国拒否宣言を発令し、大日本帝国に対して経済制裁を開始。資源輸出を停止し、米国内の1億ドル以上の日本資産を凍結する。現在、満州国の油田供給が進んでいない日本は石油の輸入量7割を米国に依存しており、国内資源枯渇は必至だった。東条内閣は帝国国策遂行要領を外交を交えて再審議し始め、陸海軍は各地の戦力を増強し始めた。

そして11月14日……英国宣戦布告。同時に米豪加3国も日本に対して宣戦布告をし、軍事力を持つてして侵攻を始めたのである。2日後の11月16日、御前会議で帝国国策遂行要領が承認され、密かに米英の暗号を傍受して動きを掴んでいた陸海軍は、大規模な戦力を南方・太平洋方面へと進出させていく。

『あ号作戦』

東南アジア侵攻作戦は蘭領インドシナの石油資源を獲得する作戦である。今作戦は、障害となる英領マレー、米領フィリピンの制圧から幕を開ける事となった。史実では11師団・600機以上の航空戦力によって作戦は遂行されていたが、日中講和が締結している為、その戦力は増えている。

今戦争において、中華民国は中立国である。41年から武器貸与法と復興支援で再生の時を迎えている中国――蒋介石は国力衰退を避けるべく、戦争を回避したのだ。彼としては戦争終盤に差し掛かった頃には、優勢にある側へとその身を置こうと考えていた。日本が劣勢になれば史実のソ連のように満州や本土に侵攻し、土地を占

領。米英側が劣勢に立てば、武器貸与法の代償に提供している米軍基地を攻撃し、戦後交渉で多額の賠償金を頂くという寸法である。いわゆる“漁夫の利”を狙っている訳だ。が、やはり満州という餌は米英のそれよりも旨味が多いのは事実であり、中国軍は随時、満州との国境に配備されていた。

そして11月19日、マレー方面に展開している第25軍は、急襲体勢に入っていた。

1943年11月19日AM01…30

マレー半島／コタバル沖

陸軍特殊船の1隻、あきつ丸は第18師団歩兵第56連隊を運ぶ役割を担っていた。全通した飛行甲板と航空機格納庫を備えた空母型船型を持つあきつ丸は革新的だ。あきつ丸に乗っていた歩兵第56連隊の面々は、乗艦していた辻正信参謀の演説に耳を澄ましていた。

「――諸君」辻は渋い声で言った。

「諸君。米英の鬼畜共が何をしたか……覚えているな？」

彼は悪意のこもった笑みを浮かべて頷いた。それから、ゆっくりと兵の一同に視線を滑らせた。

「今や呉の街は帝国海軍が自らの名誉を守る為の戦場の跡地と化している」

皺と憎しみの入り混じった表情を振り撒き、透き通った声をあきつ丸に連なる3隻の輸送船に轟かせた。辻は興奮し、高らかに告げられた声は艦中に響き渡る。

「ここで、我々は帝国軍人としての在り方を貫こうではないか……戦争を仕掛けてきたのなら、こちらもそれで答えよう。チハを並べ、M3を撃ち抜け。飛鷲を飛ばし、鯉節を落とせ。味方の迫撃砲

で米兵の四肢が砕け散るのを見て血肉を躍らせろ。戦友の1人の四肢が砕け散れば、2人の米兵に同じ仕打ちを与えてやれ。手が使えなくなったら足を使い、足も使えなくなったら腰を使い。戦車の最後の1台が失われれば、戦場を駆け抜けて敵の戦車を奪い、1人でも多くの米兵を轢き殺せ」

目には目を、というのが彼の主義だった。目には目を、急襲には急襲を。

「分かったな諸君……お国の為に……だ」

兵士の一同は沈黙を貫いていたが、1人が身じろきを始めた。拍手が上がる。しばらくすると、周囲は拍手と喝采に包まれた。いつの間にか、一同は辻に惹きつけられていた。

シンガポールは日英同盟の破棄後、イギリスによって防御陣地の強化がなされていた。故に『東洋のジブラルタル』等と称されている。海に面する南側には38cm砲を初めとする重砲群とトーチカ群が構築され、難攻不落の要塞と化していた。一方北側はマレー半島が天然の要塞となっている。

史実では、歩兵第56連隊は準備砲爆撃も無しに、急襲上陸を与儀なくされていた。しかし、今回は英側の防備も固くなっていると考えられ、艦砲射撃と空襲を計画した。

先鋒は陸軍新鋭機『飛鷲』である。

『飛鷲』はP51Aを基に改良を加えた機である。日米講和後、満州国と中華民国の治安回復という名目から新鋭戦闘機を欲し、結果として求められたのが米陸軍航空隊のP51Aである。

当初、米陸軍は日本陸軍を蔑んだ。P51といえば『ムスタング』で知られ、第2次大戦期の最優秀戦闘機等と呼ばれているが、当時の初期型にあたるP51Aは平凡機だった。非力なアリソンエンジンは機の性能を活かし切れず、軍部は機の性能を疑問視した。そこに日本陸軍のライセンス契約の話である。日本陸軍の面々は「最高

の戦闘機」等とわざと誇大に賞賛し、契約を求めた。そこで米軍部は日本に対する過小評価を高めることになった。陸軍はそのまま使わず、未来情報と技術を基に改良、傑作機に値するP51Dまで性能を引き上げた。

つまり、情報機密と日本の過小評価を高める意図があった訳である。

完成したP51A改良型は『飛鷲』と名付けられ、派生機となる『双鷲』も生まれた。また、艦載機仕様にされた海軍機『海鷲』も存在している。

第10章 『南方作戦』 第48話 マレー作戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第49話 コタバル上陸戦（前書き）

・三式中戦車『チヲ』性能諸元

全長…7.82 m
全幅…3.39 m
全高…2.97 m
重量…52 t

エンジン…V型12気筒ディーゼル（若しくはミーツエアエンジン改）

最高速度…35 km

航続距離…450 km

装甲厚…152 mm

乗員…5人

主砲…三式64口径84 mm戦車砲×1（若しくは105 mm砲）

副武装…九七式7.7 mm車載重機関銃×3

英陸軍第1世代MBT『センチリオン』を基に開発された新鋭戦車。新型リーダーを備え、優れた機動性と破壊力を持つ。運用・整備・エンジン面の問題が多く、量産が進んでいない状況にある。

第49話 コタバル上陸戦

第49話 『コタバル上陸戦』

1943年11月19日AM01:30

マレー作戦が実行された背景には、第3帝国と大日本帝国の利益も関係している。日本が英国の根拠地の1つであるシンガポールを攻略することで、ドイツは英政府の力を削ぐ事に繋がる。それによって両国が得をし、同時に経済的な同盟関係を築くドイツに借りを作る事にもなっている訳だ。

『東洋のジブラルタル』——シンガポールまでは約1000km。そこに至るには多くの難関が待ち構えている。

その1つが、コタバル上陸だった。

——0020時。

上陸開始1時間10分前。

2対の体躯を持つ異形の戦闘機『双鷲』は、漆黒の闇の中を猛然と駆っていた。コタバル海岸を貫くように配備された英印第8旅団のトーチカ群が見え、操縦士の緒方一等飛行兵曹は、喘ぎながら苦しげに息をした。機体が震動し、漆黒の空に金属の缶らしきものが出現した。缶のラベルには、『油脂焼夷弾』と記されている。

タンクが閃光を発し、オレンジ色の炎が空を飛ぶ双胴の怪物の姿を明るみに出した。

何だ。あれは！

目にしたものを理解出来ない内に、第8旅団の英印兵達は裸で膝

を突いた。炎の広がった大地は1000度近くもあり、まるで地獄の釜の中のようなだった。兵士達の皮膚は黒く焼き爛れ、灰と化する。

瞬時にして炎の筋が現れ、虚空の奥へと勢いよく伸びていく。戸惑った緒方は視線を前面に戻したが、既に紅蓮の怪物は空を駆るこの2対の体躯の怪物が理解するに至らない程の範囲まで体を伸ばしていた。紅蓮の怪物は夜の闇――その外縁部へ滑り出ようとしていた。

炎は遙か奥の海原にまで達し、巨砲聳え立つ戦艦を照らし出している。大和型戦艦第2番艦――『武蔵』である。

その刹那、海岸の全てが光に包まれた。

「撃ち方始め！」

砲術長の声と同時に3基の46cm砲は海岸に牙を剥いた。衝動音と爆震は漆黒に染め上げられた海原を揺るがし、零式徹甲弾5発は海岸の防御陣地へと一直線に進んでいく。ナパーム弾の雨から命拾いし、塹壕から這い出てきた英印兵達は、第6感を働かせる前に死を迎える事となる。神を乞う声が響き渡る最中、不意に周囲の空気が気味悪く震動している事に気付いた。何かが……何かがやってくる……。

その刹那、海岸の全てが光に包まれた。

61.7kgの炸薬が閃光と爆炎を放ち、火球が大地を覆い尽くした。零式通常弾の火球は真上に噴き上がり、漆黒の空を切り裂いて、数百mもの高みへと膨張する様を、大半の英印兵は見届ける事は無かった。そして、コンクリートや、小銃や、戦車が溶けた破片となって降り注ぐ空も。

『こちら射撃指揮所、主砲射撃準備よし！』

報告を受け、『武蔵』艦長朝倉大佐は静かに頷いた。

「撃ち方始め！」

砲術長が連呼し、命令を下すと、3基の砲塔は唸りを上げ始めた。それから左程間も開けず、5発の零式通常弾が勢いよく飛び出していく。

北に向かう緒方一飛曹の双鷺のバックミラーに、突如閃光が映った。夜気を震わす重々しい轟音を一身に受けながら、右のフットバーを踏み込み、機体を空に滑らせる。

……海軍式の荒々しい花火だな。

背後に注意を戻したが、ナパーム弾と零式通常弾によってコタバルの海岸は見えなくなっていた。空には螺旋を描いて立ち昇る黒煙と眩いオレンジ色の火球が交わり、重々しく滞留していた。黒煙と火球が木々の上へ昇っていった。

1943年11月19日AM01…30

「コタバル海岸——上陸に適す。天候は曇天」

「上陸用舟艇降ろせ！」

『淡路丸』『綾戸丸』『佐倉丸』『あきつ丸』計4隻から成る船団は、それぞれの上陸用舟艇を降ろして上陸体勢を整えていた。海はやや荒れており、時折波がさざめきを放っている。史実のように2mを越える高波では無かっただけ、良くはあった。

大発動艇、小発動艇が海原を掻き回しながら駆け抜ける。辻参謀の演説に上陸部隊の士気は上がっていた。肩に担ぐM1ガーランドは満州国治安維持という名目で米国から頂戴した品の1つだった。大半は関東軍に配備されている。他にもM1カービンにM3軽戦車と、米製兵器が多数投入されていた。

上陸は比較的容易だった。『飛鷺』、『双鷺』の通常爆弾・ナパーム弾投下攻撃に加え、絶大な破壊力を備える戦艦『武蔵』主砲の艦砲射撃により、英印第8旅団は壊滅していた。地雷が厄介な問題ではあったが、その点も抵抗銃撃に比べれば微々たる問題であった。崩落したトーチカや、焼き爛れた英印兵を跨ぎ越え、ジャングルへと歩を進めた。

灰緑色のM3軽戦車が海岸に並べられた姿は滑稽だった。隣には、

退役間近の九七式中戦車『チハ』が揚陸されていた。両者を並べてみれば、滑稽でやや体付きの良い小人スチュアートを、チハが嫌悪感を浮かべながら睨み付けているように見えた。

その左端——海岸に乗り付けた海軍の戦車揚陸艦から、両者を遙かに上回る巨人が姿を現した。

上陸部隊の兵士達はそれを見守っていたが、ただ仰天するしか無かった。『チヲ』——と呼ばれているその戦車は巨軀でコタバルの大地を踏み締めた。刹那、地が揺るいだ。

「三式中戦車……“中”とは言えんな」辻参謀は顔を顰めて呟いた。「隠された知恵が存在していたとしても、これが本当に帝国陸軍の戦車とは信じられん……」

辻参謀は黙したまま、チハにじつと腰掛けていた。背後を見れば分かる……現実が。前を見れば分かる……空想の様な現実が。やがて深く息をつき、チヲ中戦車の栄華たる84mm戦車砲を見据えながら、その堂々たる巨軀を舐め回すようにして瞠った。

三式中戦車『チヲ』——は、英陸軍MBT第1世代『センチュリオン』の情報を基に開発された戦車である。海自は影響力の増大を図る為。また、陸海間の不毛な権力争いに終止符を打つべく、海軍に歩み寄りの1歩を指し示した。それは海軍が優位を誇っていた『石油精製技術』を与える事である。いざとなれば海自のデータを直接渡すと告げた為、反感が湧き上がっていながらも技術は陸軍に伝えられ、それに添える様な形で『センチュリオン』のデータと、海自の技術的専門家が送られた。

チヲは試作段階の戦車故、配備される台数は限られていた。マレ——戦に配備されたのは7台で、その内3台は整備の済んでいない状況にあった。全てを変える程には進んでいないという訳である。搭載予定の105mm砲は開発途中で、車体向けのディーゼルエンジンも開発が進んでいない。現在は日米講和後、英国から輸入して改良を加えたミーツィアエンジンを使用している状態にある。ガソリンエンジンはリスクが大きかったが馬力等の事を考えれば手っ取り

早く、ディーゼルエンジン完成までは使用していく方向で進められた。

辻は立ち上がり、ゆっくりと歩き出した。3台の戦車全てが視界に入る様、後ろへと下がった。左から『チヲ』、『スチュアート』、『チハ』といった具合に並べられていた。重厚なチヲは2台を圧巻するだけの迫力を備えていた。

——滑稽だな……。でも、悪くはない。

悠久の時を此処で過ごしたかのような哀愁を漂わせるチハに目を向けながら、辻は払暁の曙光に煌々と輝くチヲの雄姿に敬意を示し、心の中で呟いた。

第49話 コタバル上陸戦（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

第50話 マレー沖海戦(前書き)

・三式陸上攻撃機性能諸元

全長…22.5 m
全幅…33.1 m

エンジン…火星25乙型空冷複列14気筒×4
最高速度…510 km
実用上昇限界…9100 m
航続距離…5900 km

固定兵装…13 mm機銃×12
ペイロード…6,400 kg

一式陸上攻撃機を4発式に改造した機。元の四発試案と未来技術を基に完成した。一式陸攻の教訓から、防弾性能の向上が図られている。

・三式噴進重爆撃機『天河』性能諸元

全長…32.9 m
全幅…35.4 m

エンジン…ターボジェットエンジン×6
最高速度…945 km
実用上昇限界…12000 m
航続距離…6437 km

固定兵装…12.7mm機関砲×2
ペイロード…9,000kg

大日本帝国陸海軍初の実用ジェット爆撃機。B-47『ストラト
ジェット』を基に開発されており、両軍統括の『統合戦略航空隊』
設立のきっかけにもなっている。計6基のエンジンを持つ。

第50話 マレー沖海戦

第50話 『マレー沖海戦』

1943年11月20日AM06..25

マレー半島東方沖

——払暁。

英国東洋艦隊Z部隊、旗艦『プリンス・オブ・ウェールズ』は、鋼鉄の輝きを振り撒きながら、海原全体を掻き回しているかの様な凄まじい音を立てて駆っていた。プリンス・オブ・ウェールズは艦首をもたげ、海面を押し潰し、外気を切り裂きながら進み続ける。その周囲を囲う様にして、駆逐艦5隻がZ部隊旗艦にして東洋艦隊旗艦たるキング・ジョージ5世級2番戦艦を防衛する。

東洋艦隊司令官のトーマス・フィリップス大將はプリンス・オブ・ウェールズ艦橋で苦面を浮かべ、重い吐息を漏らして俯いた。

2日前。

シンガポール軍港から出航したZ部隊は直後に攻撃を受けた。

相手は『奇跡のUボート』の異名を持つ???型。ベンガル湾で大規模な通商破壊任務に就いていた。日独は軍事同盟は組んでいなかったが、インド洋は大英帝国の国力を削ぐ重要な戦略の1つだった為、多数のUボートが配備されていた。凄まじい音とともに、Z部隊に随伴していた空母『インドミタブル』は轟沈した。

フィリップスはその光景を刮目した1人であった。

啞然とする中、プリンス・オブ・ウェールズ艦長ジョン・リーチは告げ始めた。「司令長官、退却しましょうか——」

「結構だ。空母はまだ1隻残ってる」

そう言い、水平線に艦影を示す英空母『イラストリアス』を見据えた。1943年1月末に勃発した英仏海峡海戦の影響から、英海軍では航空戦力の重要度が認識され始めていた。対空火器の見直しと、航空機を用いた機動戦略が徐々に浸透してはいた。

1943年11月20日AM07・55

南部仏印／タンソンニャット村

1930年代、フランス植民地政府によって建設され、日本陸海軍航空基地となっていたサイゴン飛行場では、1度駐留軍の大部分が撤退していた。しかし10月、新たな航空機を引っ提げた駐留軍が舞い戻っていた。滑走路上では、10分置きに飛鷲や双鷲が飛び盛っていた。

飛行場の一角で、『統合戦略航空隊』第1航空戦隊に属する帝国海軍第22航空戦隊元山航空隊の前田中佐の乗る三式陸上攻撃機は離陸の時を迎えようとしていた。4発の火星25乙型エンジンは大きく唸りを上げ、飛び立った。

元山航空隊は三式陸攻26機、双鷲8機、飛鷲18機から成る編成で、三式陸攻は16機が雷装、10機が爆装だった。三式陸上攻撃機は双発式爆撃機『一式陸攻』を4発機に改良した重爆撃機である。航続距離5900kmは、似た流れを組む英空軍のアブロンカスターより大きい。

三式戦闘機『飛鷲』が護衛を務める。

11時13分、索敵機第3番機が駆逐艦『テネドス』を発見。

第3番機——三式陸攻は3t程度の爆弾を搭載した機で、今朝6時頃から索敵攻撃が下命が出されていた。これは敵艦の正確な位置を確認する目的を担っていた。

数分後、第1番・5番索敵機も加わり、計3tの爆弾が五月雨式

に降り注いだ。背後に展開するプリンス・オブ・ウェールズでは、フィリップス大將が胃を締め付けられるような感触に襲われていた。轟音と衝撃波が肌を伝う。はっとして水平線の彼方を見ると、線上の1部がもくもくと立ち昇る黒煙にすっぽり覆われていた。

「イラストリアスから攻撃隊を出せ！」フィリップスは叫んだ。
「直にだ。伝えろ！」

『――1145、敵主力見ユ。北緯4度、東経103度55分、
針路60度』

11時45分、第3番索敵機に乗る元山隊帆足少尉は、渴望していたZ部隊の主力を見つけ、満足げな笑みを浮かべながら電文を打電した。更に航行序列と天候報告の電文を発信する。

最中、大気を震わせるような轟音が響き渡り、海面が隆起した。2、3、4と多数の水柱が、紺碧の洋と蒼穹を叩き付けた。海面は荒ぶり大きく揺れて、呻きを漏らし、波紋を刻み込みながら巡洋戦艦『レパルス』の艦首の方へ押し寄せていく。三式陸攻と命を絶たれたテネドスの骸も一緒に運ばれていった。蒼穹に広がりし雲海の上では、戦艦にも巨人にも似た爆撃機が、護衛の任に就く三式戦闘機を追い越しながら進んでいた。三式噴進重爆撃機『天河』である。戦略爆撃機の天河は昨日、シンガポールで目覚ましい成果を挙げたばかりだった。10機編成の爆撃隊は、夜間爆撃で計50tの爆弾の雨を降り注がせ、シンガポール市民と英軍の士気を叩き潰した。今回は待機中だった1機が急遽、援護に送られていた。

12時45分、主力発見から1時間。

高度7000m地点から、天河は爆弾の雨を降り注がせていた。高度4000m地点では、三式陸攻が500kg爆弾を投下する。高度3000mでは、雷撃を放った三式陸攻が轟音を響かせながら駆け抜ける。巡戦レパルスは放たれた8発の雷撃を全て避けていた。
「イラストリアスからの増援はまだか!？」

レパルス艦長、テナント大佐は鋼鉄の大地を揺さぶる爆撃に声を

震わせながら叫んでいた。頭上を三式陸攻の不気味な振動が駆け抜ける。

と、その時、辺りの空気を震わせるような轟音が海面に広がり、左に艦が大きく傾いた。頭上に無数の黒点が見え隠れしたかと思うと、爆炎が噴水の如く第1砲塔付近から噴き上がっていた。紅色の業火とともに、黒煙が立ち昇った。

数十分後、汗みずくになった乗員達は背後の業火から逃れるべく、両舷に駆け寄った。後ろを振り返ると、乗員達を追い立てる様に火の手が迫っている。

その人群の中には――テナントの姿もあった。

テナントは左舷の縁に立ち、外界を見据えた。前は全てを呑みこむ紺碧の海、後ろは全てを焼き尽くす紅蓮の海か……。退路は既に立たれている。

――翼さえあればと、テナントは頭上を旋回する海鳥を悔しげに見て呟いた。

第50話 マレー沖海戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第51話 シンガポール陥落（前書き）

・『統合戦略航空隊』

統合戦略航空隊は、陸海軍合同の航空部隊である。主に三式陸攻や天河を用いた戦略爆撃や近接航空支援等を行い、2軍を支援している。実質的に空軍の位置にある。

・三式弩級爆弾『雷』性能諸元

全長…6.35m

直径…38in

重さ…5,443kg

弾頭…2,358kg

炸薬…トールペックス（若しくはHBX爆薬）

統合戦略航空隊の戦略爆弾。英軍の5t爆弾『トールボーイ』を基に開発されている。小型爆弾では効果が無い地下施設や、巨大コンクリート構造物を破壊する目的が主で、高い爆破能力と貫通力を備えている。海軍中心の開発だった事もあって、弩級という造語が付けられている。

・三式回転輸送機『雲雀』性能諸元

全長…10.80m

全高…2.60m

ローター直径…10.70m

最高速度… 161 km

上昇限界… 4, 150 m

ホバリング限界高度… 3, 259 m

航続距離… 350 km

乗員… 1名

搭乗者… 2名

ベル47を基に開発された大日本帝国軍初の実用型ヘリコプター。
観測・偵察・輸送目的で陸海両軍に配備され、南方作戦では陸軍が
大規模投入した。

第51話 シンガポール陥落

第51話『シンガポール陥落』

1943年11月20日PM02:03

マレー半島東方沖

あの巡洋戦艦は逆に撃退された訳だ……。

Z部隊旗艦『プリンス・オブ・ウェールズ』艦橋で、トム・フィリップス大將は碎け散り、炎獄に囚われた巡洋戦艦『レパルス』を哀しげに見つめていた。レパルスからは紅色の炎と黒煙が噴き出し、混じりながら空を駆け昇っていた。

途端に不安がこみ上げてきた。「航空支援は？」

「イラストリアスのマートレットMK.？とセンバワン飛行場のスピットファイアが——」

「ああ……成程な」と、とげとげしい声がフィリップスから返ってきた。「結構だ艦長、この艦がそれまで持つとは思えないのだな」腹立たいしい事に、航空戦力は乏しいものだった。マートレットはF4Fが基の機で、スピットファイアを要請したのは数十分前だ。

「マートレットが頼みの綱だな」

「はい——」リーチ艦長が告げようとした最中、背景の音がくぐもった。

——空は5発の爆弾、海は12発の魚雷。

大気は震え、大地は揺らぐ。

リーチが叫び、紅蓮の花が咲き誇る。

鋼鉄の壁がシルクの如く引き裂かれた頃、フィリップスとリーチは愕然として身に迫る危機を感じ取っていた。

プリンス・オブ・ウェールズの最期。

14時5分、高度3000mから5発の500kg爆弾が降り注いだ。内3発が命中し、艦首と第1砲塔を吹き飛ばした。

フィリップスは艦橋からその光景を見ていた。第1砲塔があった部分からは煙が噴き出していた。煙の色は濃くなり、灰色に、そして漆黒に変わって噴き上がった。一陣の風がそれをとらえて煽り立て、煙柱の中心に不吉な赤がまたたいている。乗員達は一刻も早く消火するべく、プリンス・オブ・ウェールズのデッキを駆けていた。

「クソッ！」

フィリップスは空を見上げ、苦々しい顔を浮かべながら、空を駆けるマートレットMK・？を見据えた。機は三式戦闘機『飛鷲』に圧倒されていた。「何をやってるんだ！」

リーチ艦長の声が外気を震わす中、空に無数の紅色の華——マートレット——が咲き乱れていた。またリーチの声が聞こえてきた。怒鳴っている。「馬鹿野郎！早く撃ち落とせ！戦艦が掛かって……」フィリップスの軽蔑染みた眼差しをリーチは感じ、口籠った。

「……大英帝国も廃れたな」

太陽の沈まない国——第3帝国の本土占領以後、大英帝国の太陽は沈んでいた。だが、それは欧州の盟主たるドイツだからこそその事だと思われていた。しかし今、その太陽の1片——アジアに現存する栄光のキング・ジョージ5世級は黄色人種の手によって完全に沈められようとしている。

「……総員退艦命令を出せ」

1430時、プリンス・オブ・ウェールズ沈没。

乗員1620人中1239人が救出されたが、責任を感じたりリーチ艦長とフィリップス大將は艦に留まり、自ら艦と運命を共にした。空母イラストリアスはフィリップス大將の命令と旗艦沈没に伴い、撤退した。この海戦を期にマレー作戦の主導権は日本側が掌握した

のである。

コタバル上陸、ジットラライン突破、ジョホール・パル到達は比較的スムーズに進んだ。英側は空陸軍共に戦力増強がなされており、新型の戦車や航空機が多数配備されていたが、それを日本軍は更に優れた兵器と戦術で圧倒した。チハ戦車は電気溶接やAPBC（仮帽付き徹甲弾）技術等である程度の改良が加えられており、少数配備のチヲ戦車は慣れない運用ながら、英軍戦車を圧倒した。日本軍初のヘリコプター、三式回転輸送機『雲雀』は輸送・偵察目的に使用され、多くの人命を助けただけでなく、日本陸軍に多彩な戦術をもたらした。

中でも活躍したのは、統合戦略航空隊である。

統合戦略航空隊は実質的な空軍だった。三式陸攻や天河を用いた戦略爆撃は多くの軍事拠点を破壊し、敵側戦力を軟化させるのに大いに役立つ。

また、統合戦略航空隊には目玉兵器——『雷』が配備されていた。三式弩級爆弾『雷』は、英軍の大型爆弾『トールボーイ』を基に開発された爆弾で、5tもの重量を誇る爆弾だ。雷は高張力鋼で铸造されていて、目標建造物を貫通し、爆発する能力を持っており、徹甲爆弾としても高い貫通力を誇っていた。多くはマレーやフィリピン戦線に使われた。

この雷だが、フィリピン方面では特に際立った活躍を見せている。海自から米軍の戦略情報や新兵器を受け取った日本軍は猛攻を受けながらも史実通りマッカーサーを窮地に追い込み、籠城するコレヒドール島の地下要塞や湾岸砲陣に雷を多数投下、雷は地面を貫き、爆発して地下施設を壊滅させた。

これにより、ある程度の被害を日本軍は防ぎつつ、順に占領していった。

こうした新兵器や統合戦略航空隊の活躍もあり1944年1月22日、シンガポールは陥落した。

第10章 『南方作戦』 完

第51話 シンガポール陥落（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第11章 『MI作戦』第52話 両洋艦隊の思案

第52話 『両洋艦隊の思案』

1944年1月14日PM07:06

アメリカ合衆国／ハワイ準州

真珠湾攻撃から2ヶ月、灰と化したパール・ハーバーは、不死鳥の如く蘇えろうとしている。

オアフ島に座すアメリカ合衆国海軍太平洋艦隊司令部では、新任の司令長官、チェスター・W・ニミッツ大将が幕僚達を集め、米海軍の戦略見直しを検討していた。ニミッツ達を取り囲む長机の上には、膨大な量の報告書と海図が積み上げられていた。

「一言で言えば、短期攻略という戦略は既に破綻していますね」
太平洋艦隊参謀長、チャールズ・H・マクモリス少将は言った。

「時間的にも間がありません。太平洋方面に展開する我が方の正規空母は4隻……内1隻は、大統領命令でサンディエゴに足止めですから」情報主任参謀、エドウィン・T・レイトン中佐は煩わしそうに身を振じらせて言った。彼はキンメルが更迭された後、ニミッツに駆逐艦艦長の職を頂きたいとの希望を告げていたが、彼の情報能力を評価していたニミッツは取り止めさせた。「奇襲はちよつとスムーズに行き過ぎましたからね」

「君の言いたい事は分かる」ニミッツは不服そうなレイトンの顔を見据えて言った。「キンメルは日本軍に反抗する能力は無いと思っていたからな」

「フィリピンもしかりですが、パール・ハーバーは真っ先に考えられるターゲットですよ。無数の対空防衛陣地と熟年の兵が何万人か居てしかるべきだったんです」

「……だが居なかった」

壁に凭れ掛かり、沈黙を貫いていたウィリアム・F・ハルゼー中将は、怒気と嫌悪感を顔に滲ませながら、眉を顰めていた。彼は近くの窓を開け、生温い風を部屋に取り込んだ。1週間分の埃が天井の白熱電球の光を浴びて、黒い霧の様に舞い上がった。「今となつては議論の余地があるだろうな」

「かも知れない」ニミッツは頭を上げた。「ワシントンの連中が過小評価し過ぎた——大英帝国海軍が宝の共有を拒み、船だけ持っていた——理由を上げればきりが無い」

「ジャップを殺す……ただそれだけが理由に答える方法です」

ハルゼーは唸る様に言った。

「……中将の言う通りです、司令長官。身分——それから人種の違い——奴等は下等な——とは言い過ぎでしょうが、脳の出来が違うのですよ。必ず勝てます」

珊瑚海で敗北を喫したフランク・J・フレッチャー少将は、吠え立てる様に言った。

「だから何だ？黄色猿の戦艦に引つ掻き傷を与えただけだろう？」ハルゼーが噛み付いた。フレッチャーは珊瑚海海戦で、第1機動艦隊の戦艦『陸奥』を小破させ、駆逐艦を1隻撃沈させただけの成果しかだせていなかった。途端にフレッチャーは俯いた。

「少しは口を慎んだ方が良いと言うものだぞ、中将」ニミッツはハルゼーを睨み付けた。「噂では、とてつもない能力を秘めた怪物フリック・バトルシップが敵方に居るといではないか」

「司令長官、その事です……」

レイトンはニミッツの前に歩み寄り、1枚の写真を革靴から滑らせる様に取り出してニミッツに差し出した。写真には鼠色に染め上げられた1隻の戦艦が映っていた。比較的高い高度で撮影されたと思わしきその写真に映る戦艦の後部には、巨大な飛行甲板と、そこから垂直に飛び上がった1機の航空機が刻まれていた。

「それはONIが通信傍受で発見した通称——『K i i』と呼ば

れる艦です」

「例の……航空戦艦という奴か？」ハルゼーは興味津々に言った。「これはTomだな」そう言い、彼は指で垂直離陸する戦闘機を差した。海自のハリアー？には、“Tom”と呼ばれるコードネームが付けられていた。

「どうやらKiiを含む機動艦隊が移動しているようです……ミッドウェー方面に」

レイトン中佐は渋面を浮かべて言った。

「最初にも言った通りですが、今使える正規空母は3隻——『ヨークタウン』『ワスプ』『サラトガ』です。氷山空母『ハバクック』はサンディエゴで待機命令が出されていますから無理ですし、護衛空母は2隻のみとなっておりますので……」マクモリスは言った。

「敵は6隻単位で攻撃を仕掛けてくる」ニミッツは唸った。

「ですが、戦艦は残っています」戦艦『アリゾナ』艦長、アーサー・ペイン大佐は拳を掲げ、血気盛んに宣言した。「戦艦部隊を用いれば勝てない訳ではないでしょう」

「しかしだ、英仏海峡の海戦は知っているだろう？」

マクモリスの言う、戦艦8隻対空母5隻の闘いは誰もが知っていた。

そして——勝者も。

キッドは静かに頷いた。

「じゃあ、望み薄か……」

ニミッツは写真を手を取った。「大西洋方面の戦いも始まったばかりだからな、ワシントンから増援を要請する訳にはいかん。ミッドウェーが落とされれば、ハワイは攻撃圏内に入る」彼は頭を上げた。「この劣悪な状況に対処する唯一の方法は、3隻の空母を送る事しかないな」

ニミッツの言葉に、幕僚達は同意した。

1944年1月15日AM11..12
アメリカ合衆国／ワシントンD.C.

ポーツマス核攻撃後、残留放射能の危険性からワシントンDCに遷移された大西洋艦隊司令部では、英国本土奪還作戦に対する最終調整が進められていた。小奇麗な会議室には、合衆国艦隊司令長官兼海軍作戦部長のアーネスト・J・キング大将、大西洋艦隊司令長官ロイヤル・E・インガソル大将、冰山戦艦『エル・ドラード』を旗艦に持つ第20任務部隊司令官で大西洋艦隊参謀長のレイモンド・A・スプルーアンス少将等、層々たる顔触れが集まっていた。

「英国本土海岸部には、大規模な防衛線――アトランティック・ウォール『大西洋の壁』が聳えています」スプルーアンスは言った。

『大西洋の壁』は、フランス・ベルギーに設置された海岸防衛線で、英国本土のものはその延長線だった。ヒトラーはこの壁の設置を重要案件とし、砲台とコンクリート製のトーチカを設置、800万個程度の地雷を海岸に敷き詰めさせていた。

また、海洋では、多数のUボートが文字通りの『大西洋の壁』として機能していた。

「上陸が非常に大変になるのは確かだろうな……」
キングは唸った。

「1番の問題はUボートです。ドイツ海軍はソナー探知もされないUボートを開発したとの事ですし、今やエニグマも使用が停止されている状況にあります」スプルーアンスは言った。「新たな戦略のせいで迂闊に艦隊を動かせないのです」

「海に潜む脅威は取り除くべきだな」インガソルは顎を擦った。
「護衛空母とエル・ドラードでハンティングチームを作るべきでしょう」

「……空母の数はどうだ？」キングは訊いた。

「正規空母は6隻。全てがエセックス級です」スプルーアンスは言った。

「ボノム・リシャールとレンジャーはあの核攻撃でやられたから……地球の裏側では、既に正規空母が4隻しか残ってないらしい」キングは苦面を浮かべた。「つまり、合衆国海軍には正規空母が10隻しか無いという事だ。ハバクツクの航空機運用数（通常艦載機のみ満載の場合、300機）を考慮しても、12～13隻分しか無い訳だ」

「その点は大統領に請願して頂きたいです」インガソルは苦しげな表情を浮かべて言った。

「護衛空母の数も聞いておきたい」キングは再度スプルーアンスに尋ねた。

「現在は10隻です。訓練中の艦もありますし、建造中止となっていたが再度建造が決まった艦もありますが、真珠湾の惨劇後は順次進められていると聞いていますので補充は問題ないでしょう」

「核攻撃時に被害を受けた艦もあるだろう？」

「ええ……」スプルーアンスの顔は険しくなった。「攻撃を受けて横倒しになったものが多数。私とエル・ドラードは大西洋哨戒任務で無事でしたがね」

「それでもよしとしよう」キングは胸を撫で下ろしながら言った。「大統領と政府機能が西に退避する前に聞けて良かったよ」

「西に……ですか？」インガソルは哑然とした表情で言った。

「そうだ。ドイツ空軍の長距離爆撃機が存在する以上、ワシントンが次なる攻撃に晒されるのは見えた話だからな」

その話に関して、一同は大まかな事を知っていた。国家の機密情報であるが故、キングもその位置を知らなかった。世間に広がった噂では、シカゴ・デンバー・ロサンゼルス of のいずれかに移転すると言われ、それが一種の地下防空壕のようなものと囁かれていた。

デンバーに至っては、ロッキー山脈に大きな横穴と縦穴を掘り、コンクリートを流して巨大な地下要塞を建造するという話だった。

また、アラスカに拠点を移すという話まであったが、これは信憑性が薄く、あまり話されていなかった。アラスカは合衆国本土から

あまりにも離れている上、日本の攻撃圏内にあり、尚且つソ連や中華民国とも面していた。ヒトラーは、ソ連との戦争を対米戦争決着まで延長するべく、この噂にあやかったかどうかは定かでは無いが、スターリンに『西と東』構想を提案した。

『西と東』構想とは、米国・カナダ・南米を分断し、西をソ連、東を第3帝国によって分けるというものだった。これは日本の存在を除外している為、具体性は無かったが、スターリンはこの頃から『アラスカ侵攻計画』を軍部に考案させ始めた。計画は、ドイツ若しくは日本の優勢が不動のものとなった場合に発動され、大規模な上陸部隊をアラスカに送るというものだった。この計画を具体付ける為、ヒトラーは比較的先進的な造船技術をソ連に寄与し、信頼を築こうとしていた。

また、中華民国もその構想に加わろうとしていた。

第11章 『MI作戦』 第52話 両洋艦隊の思案（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第53話 ミッドウェー空襲

第53話 『ミッドウェー空襲』

1944年2月26日AM01…27

アメリカ合衆国／ハワイ準州

“試みの無い所に、成功のあった試しは決して無い”

ホレーショ・ネルソン

空母『飛龍』艦橋に佇む49歳の大日本帝国海軍少将の頭の中には、その言葉が常に浮かんでいた。彼は両手を後ろに組み、艦橋から外界を見下ろした。飛行甲板は旧式戦闘機で満たされている。飛龍は噴進航空機対応型に改修されていないので、それは仕方が無い事だった。飛び立つ3～4機の零戦の翼の間から、またたく星の光が見えた。

零戦達——天空の雄姿の列が揺れて弧を描き、1つの島を囲んでいく。下では、無数の艦船が妖しげに蠢いていた。

天空の雄姿の伸びた影に隠れ、5隻の母艦は息を詰めて見守っていた。

「緊禪一番、励んで貰いたい」

舞い落ちる粉雪の様に穏やかな声で、山口多聞少将は言った。

「無論です」飛龍艦長、加来止男大佐は力を込めて言った。「MIは成功させます」

例に漏れず、2人は共に歴史の行く末を知っていた。悲劇的な惨事が起こったはずのミッドウェーはその事を知れば、嫌になるのは仕方無い。歴史が大きく変貌したとはいえ、全てが変わっただけで

は無かった。その事は多くの者が周知の事実だった。

「うむ、既に事は始まったのだ。やるべき事をやっていこう」

——ミッドウェー島。

ハワイ北西に位置する6、2？のこの島は、元は珊瑚礁だった。環状の礁に囲まれ、各島々には丘陵と呼ばれる地形は存在していない。その島の中でも比較的大きい2つの島、サンド島とイースタン島には、米軍の駐屯する基地があり、そこには大量の航空機が並べられていた。

その1機、海兵隊のSBDドーントレス急降下爆撃機を撮影すべく、コダック社製シネコダック16mm映写カメラを肩に担いでいた海軍少佐ジョン・フォード（本名シヨン・A・オフィーニー）は、来月付で欧州方面へと撮影班を引き連れて向かう予定だった。来たるべき英国本土奪還作戦が絵になる事など、想像しなくとも周知の上の事実であった。思わず笑みが浮かぶ。

フォードは映画監督で、11月の真珠湾攻撃以後、軍に志願してOSSへと入った。

活動はいわゆるOSS——つまりはスパイ組織が行いそうな、米政府の有益な情報工作、『戦争映画』を造る事だった。プロパガンダに塗られた映画である。フォードはその事に不満を覚えていただけでなく、日本に宣戦布告した事にも疑念を抱いていた。国内では、既に10月頃から中国近海の米国輸送船が日本の艦艇によって妨害工作——つまりは故意な衝突や、でっち上げの罪で逮捕するといった事が続いていると、各メディアは言っていた。ニューヨーク・タイムズやワシントン・ポスト紙にも、沈没した船の写真が一面に載っていた。

実際の所、何が事実かどうか、フォードは全てを疑っていた。最前線という訳にもいかなかったが、日本海軍が救助活動に励んでいるという事実は知っていた。

プロパガンダというパイ生地でリングという真実を包んでいる……。

俺の映画はそんな所だろう——その中身のリングも腐っているかもしれないが。

自身の映画を合衆国を象徴するアップルパイになぞらえて皮肉を漏らす中、けたたましい空襲警報が耳を激しく揺さぶった。手慣れた形で塹壕に潜り込むと、16mm映写カメラの先を漆黒の空に向けた。照明は50～60万カンデラのサーチライトの光があったので、殆ど必要が無かった。

無数の対空砲が漆黒の空に狙いを向ける中、1筋の閃光が背後のレーダー施設を貫いた。

「姿が……見えない……」フォードは猛スピードで駆けて行った戦闘機に唾然としていた。対空火砲も大幅なタイム・ラグの中で無駄弾を放っていた。

「Gismo! (米海兵隊が正体不明機に使うコードネーム) あれは何なんだ?」

「じゃあJim (旭光コードネーム) だ」

「いや……Jimはあんなスピードは出せないぞ」

深く掘り下げた塹壕に屈むフォードの耳には、漠然とした恐怖に襲われる海兵隊員達の声が響き渡り、頭の中で反響した。

そんな最中、再びあの航空機が姿を見せる。

耳をつんざくエンジン音が辺りの大気を揺るがす中、対空火砲の照準は定まっていなかった。レーダー施設が破壊され、この基地は大規模な敵航空機の侵入を許す状態にある。

一振り、そして崩壊。

先程まで撮影していたSBDドントレスが粉々に碎け飛び、破片が四方八方に飛び掛かった。16mm映写カメラと対空火砲が周りをキョロキョロと見渡している中、真の恐怖は既に迫っていた。

『Jim』——彼は真珠湾攻撃の立役者。

日本軍初の噴進戦闘機は超速度で空を駆け、無数の機銃と噴進弾で全てを掃除する。その速さ故、未だに撃墜されたという記録は殆ど無かった。

一部にはあるが、それも最終的にはエンジンの不具合によるものと推測された。

推測——というのも、未だNACAや軍部ではその日本軍の新鋭機に関しての研究が進んでいない。あまりにも技術的に差があったという事がその要因だった。真珠湾攻撃時、ニイハウ島に不時着した機体も、殆ど無傷のエンジンを入手していたが、その構造を完全には把握出来ていない。

三式噴進戦闘機『旭光』は、破れたレーダー網の穴を潜って基地上空に展開していた。即座に20mm弾と噴進弾の雨が基地へと降り注ぎ、あらゆる施設を破壊した。

野戦撮影班OSSを指揮するフォード少佐も、危険を認識し始めていた。既にその身は激戦地の中に浸かりつつある。

そして、間を開けず、Zeke（零戦）が爆弾と20mm弾を地上に叩き込む。

最中、更に緊迫感溢れる映像となるべく、安全を手に入れるべく、フォードは塹壕から飛び出していた。滑走路を駆ける中、彼は右方から迫り来る零戦の1機をカメラ越しに捉えた。

——腿を貫く数発の凶弾。

紅色の鮮血が飛び散り、フォードは叫んだ。

フォードは16mm映写カメラを抱きかかえながら倒れ込み、再度叫んだ。右腿を滴り落ちる血液は大地に辿り着き、月光を浴びて艶やかに輝いた。鮮血と月光が地面に溜り、氷の様に見える。手にした16mm映写カメラは無事で、異常も無く、鈍い音を立てて作動していた。

第53話 ミッドウェー空襲（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第54話 神の見える手（前書き）

・満月型駆逐艦性能諸元

排水量 基準…3,400 t

満載…4,390 t

全長…144 m

全幅…15.8 m

吃水…4.6 m

機関

COGAG方式2軸推進
(72,000hp)

艦本式ガスタービンエンジン×4基

最高速力…38ノット

乗員…355人

兵装

65口径12.7cm連装高角砲×6基

25mm連装機銃×5基

13mm単装機銃×4挺

61cm5連装魚雷発射管×1基

爆雷投射機×2基

システム

射撃管制装置

レーダー

汎用搜索電探×1基

水中搜索電探×1基

ソナー

艦首聴音機×1基

曳航式水中聴音機×1基

海自技術を十二分に投入して完成した新鋭駆逐艦。大日本帝国海軍初のガスタービン動力艦で、護衛艦からの造船技術を用いて造られている。海自出現後、未来技術を考慮して発足した『改マル5計画』では、改秋月型駆逐艦に代わり、10隻程度が秋月型駆逐艦と共に建造が予定されている。

第54話 神の見えざる手

第54話『神の見えざる手』

1944年2月26日AM01:48

アメリカ合衆国／ハワイ準州

CICから通路を隔てた扉が音を立てて開くと、艦魂『きい』が壁に凭れて脚を伸ばしながら、高橋三等海佐の退室を待っていた。

「……君は夜が好きなんだな」

高橋はちらりと腕時計を見やった。

きいは当惑のこもった表情を浮かべている。「自身の意志じゃないの、神の意志よ」

「神の意志ね……」

高橋は渋い顔を浮かべた。「神と言えば、1つ言いたい事があったんだ」高橋は低い声で言った。「これまでの歴史改変について……」

「何かあったの？」

きいは首を傾げ、当惑染みたく目を高橋に向けた。

不意に、今夜何故自身が神の意志によって闖入したのは、高橋三佐が何か重大な行動でも起こすのではないかという疑念が高まった。彼女は神の元、拘束でもされたが如く、安易にこの艦内を進む事は出来ない。必ずと言っていい程、魂が具現化するのは夜が多く、それ以外は殆ど意識のみが生きている様なものである。つまり、肉体が無い訳だ。

きいは探る様な紺碧の瞳を輝かせて歩み寄った。「何かする気なの？」

「いや、そういう訳じゃないよ。意見を述べたいだけなんだ」

高橋は吸い込まれそうな紺碧の瞳を見据えながら言った。

「そう」高橋は口を開いた。「全ては真珠湾からだ。史実では8隻の戦艦が停泊していたが、改変後は8隻の空母が停泊した。珊瑚海にはフレッチャー艦隊が来て、マレー沖では空母『インドミタブル』がまたもやプリンス・オブ・ウェールズを支援出来なかった――」

「なるほど」きいは当惑した顔を浮かべた。「それで……？」

「結論から言えば、史実の再来だよ」

高橋は人差し指を立て、天に掲げた。「約2年の時間差が生じているのに、多くの物事が史実に似通った方向へと向かっている」高橋は言った。「暗号で情報操作して、史実に似せたシチュエーションを作って勝とうとしてるが、空母の数や沈没までは操作出来ない」高橋は渋い顔を浮かべた。「まあ、出来ない事は無い……“神の見えざる手”ならな」

――神の見えざる手。

アダム・スミスが『国富論』第4編2章に登場させた一節で、経済における『需要』と『供給』はこの見えざる手によって操作されているが如く、自然に調節されているという考えである。高橋はこの『需要』と『供給』に起こる様な事が改変から生まれた変化に現れていると考えていた。

「似た様な考えに“時間の自己修復作用論”ってのがあるらしい。これは、川を塞ぎ止めて局所的に流れも変えても、下流では水は元の流れに戻ってしまうというのを例えてるんだが、タイムトラベルもこの様に過去を大きく変えても、時間は元の流れに戻ろうとして、結局別の似通った史実が生まれてしまうという事らしい」

「つまり……それになっていると？」きいは言った。「見えざる手が時間の川を戻そうとして、水路か何かを造ってるっても？」

「考え過ぎだとは思う」高橋は渋い顔を浮かべて言った。「でも、川が元に戻ろうとしているって事なら、このミッドウェーが分岐点

なんだよ。ここで全てが決まると言ってもいいと思う」

ため息が漏れる。

「貴方の親友、航海長の言葉を借れば『歴史に抗え』よ」きいは言いながら、CICの扉の前に進み寄った。「今はただ職務に全うすればいいと私は思う。中途半端で単純な答えだと思うけど、時には単純明快な答えもいいのよ」

きいは高橋の顔を見据え、軽くウインクして見せた。

——巨大なレーダーアンテナの下、夜闇が墨の如く海面を漆黒に染めていた。

大日本帝国海軍初のレーダーピケット艦、新生満月型駆逐艦第1番艦『満月』艦長桐野少佐は茫洋の前に腰を下ろし、艦橋から差し込む月光に神秘性を感じていた。本艦が就役した今月9日は、満月の夜だったが、今は月が欠けていた。

特務組織『紀伊機関』に属する桐野少佐がこの新鋭艦に配属されたのも、親しくなった山本長官の御意志だった。桐野はそれに感謝すべく、遙か彼方——遠洋へと続く不透明な水平線へと視線を向け、天を仰いだ。長官は今、戦艦に乗艦している。

『大和』でも『武蔵』でも、『きい』でもない。

戦艦『陸奥』——かつてのビックフー——だが、今は呉軍港のドックで修繕中だ。

連合艦隊司令長官が負傷した戦艦——それも本土に居るともなれば兵達に示しは付かなかったが、最高司令官がそう易々と海戦に参加するのも如何なものか海自やそこに近い海軍内の面々は考えていた。死亡以上に士気の下がる事は無い。

満月型第1番艦『満月』を賜った桐野も山本長官の身を優先する面々の1人だった。

「……最高の性能ですよ」

新型電信は未来からもたらされた技術の1つだった。

『満足して頂いたのなら、嬉しい限りです』

相手は護衛艦『きい』艦長、吉岡一等海佐だ。

満月型駆逐艦は『マル5計画』で16隻の建造が予定されていた『改秋月型』を更に改良したものである。全長144mと大型になっているが、その最高時速は38ノットと優れた機動性を誇っている。

その高速性能を支えているのが、海自情報で開発されたガスタービンエンジンであった。

また、電探・ソナー類も完成し、非常に優れた性能を誇る駆逐艦として完成したのである。

「まるで……護衛艦——ですかね」

桐野は笑みを浮かべながら言った。対空・対潜戦力の他、通信拠点としても機能する桐野指揮下の満月は、『大日本帝国海軍の護衛艦』とでも言うべき存在だった。

『護衛艦ですか……それはまあ正しいですね。基は『きい』から形造られた訳ですから』吉岡は言った。『未来の技術を取り入れるとはいえ、十分に注意下さい』

「分かりました、御武運を」

第54話 神の見えざる手（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第55話 ヨークタウンの危機（前書き）

・伊600型潜水艦性能諸元

排水量

満載…1540 t

全長…62.1 m

全幅…8.2 m

吃水…6.7 m

機関

ディーゼルエンジン×2基

電動モーター×1基

最大速度

水上…19ノット

水中…17ノット

水中航続距離528 km／6ノット

水上航続距離20,650 km／12ノット

兵員…60名

兵装

25 mm…連装機銃×2挺

53 cm…魚雷発射管×6門

レーダー

汎用搜索電探

ソナー

艦首水中聴音機

曳航式水中聴音機

ドイツ海軍のUボートXX?型や、米海軍のアルバコア型潜水艦を基に開発された通常動力潜水艦。流線型の船体は水の抵抗を極力減らし、水中速度は従来の2倍以上を誇っている。50隻程度の建造が計画されている。

第55話 ヨークタウンの危機

第55話『ヨークタウンの危機』

1944年2月26日AM05:05

アメリカ合衆国／ハワイ準州

第16任務部隊旗艦『ワスプ』

中核を担っていた2本の柱を失い、崩壊の最中であつた第16任務部隊を支えるこの補柱は現在、ウィリアム・F・ハルゼー中将の下にあつた。彼は不服そうな表情を浮かべ、全身の関節を打ち鳴らしながら、艦橋の外を見据えていた。

「シヨータイムは何時始まるんだ？」

ハルゼーは目を半眼にして、右隣のマーク・A・ミッチャー大佐を睨み付けた。

チェスター・W・ニミッツ大將は、ハルゼーとフレッチャーに、ミッドウェー島海域で待機し、敵機動艦隊の接近を待つ様にと命じていた。

これは奇襲攻撃を目論んだものである。空母戦力では圧倒されているので、素早く敵の位置を把握し、乾坤一擲の攻撃を仕掛け、空母を1隻でも多く沈めるしか他に手は無かつた。氷山空母が居れば話は別だが、大統領命令でサンディエゴに足止めされている。

またニミッツは、3隻の空母を嚴重に扱い、戦況が悪くなれば島を放棄して、戦線離脱せよとの通達も出していた。

これは4隻しか存在していない太平洋の正規空母の保全を考えたからである。

ハバクックは通常艦載機のみであれば300機も搭載出来る艦だが、正規空母による護衛を随伴していなければ、ただの洋上基地に変

わりはない。空母が無ければ太平洋は日本海軍に支配され、氷山空母やハワイや西海岸に対する危険性が増すのは当然の事だった。

仕方の無い考えではあったが、ハルゼーとしては不満に尽きるものだった。

第17任務部隊旗艦『ヨークタウン』

『敵主力部隊発見。空母4、戦艦2、巡洋艦・駆逐艦25隻から成る……』

PBYカタリナ飛行艇からもたらされた情報に、第17任務部隊司令官のフランク・J・フレッチャー少将の心境は複雑だった。当初、ONIの暗号解読情報によれば、敵艦隊は6隻基幹の大機動艦隊だった。それが2隻ほど減っているのは、米機動艦隊と上陸支援部隊の2隊に分けられていたからだ。

とは言え、フレッチャーにとっては都合の良い情報だった。敵は2倍の戦力を誇る機動艦隊では無く、同等並だった訳である。

彼の関心は通信員の兵1人から、甲板の無数の男達に向けられた。F4FやSBDが轟めき、蒸気を吹かしながら待機中である。

暗い海面から少しだけ顔を覗かせつつある朝陽を全身に浴びながら、フレッチャーは目を爛々と輝かせ、艦橋の窓に詰め寄った。少なくとも、今回は心楽しめるものを感じられるに違いない。フレッチャーは鋭い目で水平線を見据えていると、多数のF4F戦闘機が甲板を強く蹴って、飛び立った。F4Fは飛び散って珊瑚色に染まりつつある空に、豹の毛皮の様な斑点模様を付けた。

刹那、ヨークタウンは艦首を持ち上げ、海面を掠める様にして速度を増しながら進み始めた。鋼鉄の大地が外気と海原に震わされる中、SBD急降下爆撃機が発艦した。

「爽快だな」フレッチャーは呟いた。「実に爽快だ」

1944年2月26日AM06:41

広範囲の海域を仰視出来るディスプレイ画面は、壮麗な明り光を放ちながら漆黒に包まれたC I Cを艶やかに染め上げていた。レーダー画面には複数の斑点が浮かび上がり、F 4 FとS B Dから成る米海軍飛行隊の到来を告げている。

「撃ち方始め！」

ディスプレイに視線を注ぎながら、吉岡一等海佐は低い声で言った。

刹那、左舷のM K・143装甲ボックスランチャーが咆哮した。1本のトマホークミサイルは天高くまで駆け昇ると、金色の光の帯を引きながら――降下し始める。

F 4 F『ワイルドキャット』操縦席から、ヨークタウン第1次飛行隊長のオスカー・ペダーソン中佐は外縁部から放たれ、眼下を突き抜ける一筋の光線に愕然としていた。一体何だ？ 白色の円柱型飛翔物体は第1次飛行隊の編隊を容易く通過し、一直線に空を駆け抜けた。

ペダーソンは何気無く後ろを振り向いたが、にわかに凍り付いた。

――狙いは“オールド・ヨーキイ”か！

動きの止まった長い一瞬の後、飛翔物体は滑らかな曲線を描いて――母艦に堕ちた。

……時間が凍結す。

第17任務部隊――その中核に位置する空母ヨークタウンの頭上付近に現れた飛翔物体。

艦橋に居た一同がレーダー員の報告に対し、死刑宣告でも受けたかのような様子でいる中、フランク・J・フレッチャー少将は即座に向きを変えてドアに走り、その最中に大声で指示を出した。「退避しろ！ 敵の狙いは艦橋だ！」

セント・ジョージ……ミネアポリス……。

2隻に共通する事――は艦橋を一撃で破壊された事である。意志を持つ飛翔物体――『トライデント』は太平洋艦隊司令部でも協議

され、多くの報告から艦橋の破壊が目的だと結論付けられていた。

『トライデント』というコードネームは、ギリシア神話に登場する海神ポセイドンが使用する三又鉆から来ている。

指揮所を飛び出し、すり減った階段を2段飛ばしに駆け降りた。

点滅する白熱電球の照明に照らされた通路は、まるで空母の滑走路の様だった。飛び立つ飛行機はフレッチャーと幕僚達だ。最短でこの建物を出たければ、通路の先の扉まで辿り着くしか無い。

……先に脱出出来る。

臆病者と呼ばれても良い、生きてジャップを1人でも多く殺せば良いのだ。

前に伸びる閑散とした廊下を駆け抜け、奥の扉に到達して開けた。年配の水兵が1人、上半身裸で通路をぶらついている。足取りの悪さから、酔っている事が伺い知れる。

「失礼！」フレッチャーは大きな声を上げてその男に駆け寄った。

「直ちに退避しろ」

水兵は困惑顔で視線を上げた。「ええ……は……はい……？」落ち着かない様子だった。

30秒後、出口から囊れ顔のフレッチャーが湿った外気の中に出た。F4FやSBDの類を交えた、喧騒溢れる飛行甲板――普段通り。

だがそこには、混沌が満ちていた。

ボフォース40mm4連装機関砲は耳をつんざくような爆音を立てながら、無数の弾丸を天空に撃ち続けていた。兵士達が大きな弾薬箱を急いだ様子で運んでいる。

刹那、水平線の間際に眩い光が煌めいた。

「さあ」フレッチャーは肩に力を込めて言った。「鉆を叩き落とすぞ！」

40mm4連装機関砲、20mm機銃が爆音を放ちながら、銃弾を1点に注いだ。

「的だ！あの光源を撃ち抜けばいいんだ！」40mm機関砲から

漏れ出す橙色の炎の閃光に、フレッチャーの顔はおどろおどろしく浮かび上がった。「1発でいい、1発でいいから――」

その刹那――鋼鉄の大地は轟いた。

1944年2月26日AM06…25

ミッドウェー島北東250哩。

「電探に感あり」

伊600型潜水艦『伊号第600潜水艦』艦長の横田稔中佐は、石原航海長の報告を聞き、洩面を作った。「偵察機の報告だと、空母だったかな？」

「そうです艦長」

石原は答えた。

「うむ。両舷停止、潜航準備」

「両舷停止、潜航準備」

「潜航急げ」

横田は不意に周囲の空気が震動していくのを感じた。

「潜望鏡上げ」

伊600が潜航し終えた中、横田は潜望鏡を注意深く覗いた。新型の潜望鏡に、海原を大きく揺るがす重々しい艦船が1隻、周囲に護衛の駆逐艦を付けて航行していた。

「潜望鏡下げ」

横田はいぶかしげな表情を浮かべ、石原に視線を向けた。

「……宜しい、勝機は我々にある」

数分後、報告が石原の下に届いた。「『水測より司令、水中聴音機の探信音を捕捉』」

聴音距離に到達した伊600に、敵駆逐艦の探信音が鈍くこだまする。

横田は黙したまま、直立不動でずっと前方に視線を向けていた。やがて不承不承深く息を吐き、慎重に話し始めた。

「伊600は優れた艦だ」

横田は笑みを浮かべ、嬉々として石原に呟いた。

「潜望鏡上げ」横田は空母に照準を合わせ、言った。「魚雷発射用意」

「発射用意よろし」

水雷長が告げ、横田は鋭い眼光で空母射すくめた。

「発射用意……発射」

横田の声が轟く中、4本の酸素魚雷が力強く海中に飛び出した。海原を掻き乱し、航跡を残さずに空母『ヨークタウン』へと直進していく。

「急速潜航、深度70」

敵駆逐艦の攻撃を逃れるべく急速潜航する中、魚雷直撃までの秒読みが開始される。

「……41、42、43、44、45」

数十秒後、甲高い金属音が鈍く轟いた。横田は笑みを浮かべ、周囲の面々も思わず微笑を漏らしていた。「とりあえずは……成功……か……?」

潜望鏡に映るヨークタウンは——業火に包まれていた。

鋼鉄の大地は揺るぐ。

背後から、空を突き破る様な轟音が響き渡ったかと思うと、更にもう1つの爆発が轟いた。それは、誰もが撃墜に躍起になっていた謎の飛翔物体による攻撃である。艦橋は崩れ落ち、甲板に激しい熱風が吹きこんで渦を巻いた。

「Shit!」

熱風と共に、そんな言葉も巻き上がった。

右舷を貫いた3本の魚雷は爆発し、ヨークタウンを揺るがした。爆発は甲板を貫き、朝陽に向かってまがましい炎の刃を突き立て

ていた。

——フレッチャーは愕然として、終焉の時を迎えていた。

第55話 ヨークタウンの危機（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第56話 ミッドウェー海戦

第56話『ミッドウェー海戦』

1944年2月26日AM07:03

ハワイ準州／ミッドウェー沖

F4F機内。

啜り泣きとも笑い声ともつかない呼気が、ヨークタウン第1攻撃隊隊長オスカー・ペダーソン中佐の口から漏れ出した。その時、水平線の彼方から一筋の黒煙が立ち昇っていた。何年もの間、我が家同然に聳えていた航空母艦が、一瞬の内に……そう、死んでしまった——なんて、信じられない。顔を埋め、寒くも無いのに震えていた。

——ジャップを皆殺しにしろ。

内なる声に突き動かされ、ペダーソンは背中を起こした。何も言わずに一度だけ首を振った。

“オールド・ヨーキイ”は死んだ。

『——敵航空機発見』

無線機がノイズ混じりの濁声を発した。喉に焼ける様な感触を覚え、徐々に視界が晴れてきた。空の彼方、燦々と曙光が輝く先には、複数の機影が投影されていた。

『——敵は……“Jim”と思われる』

三式噴進戦闘機『旭光』——米軍コードネーム『Jim』は米兵達にとって、最も遭遇したくない相手の1つだった。想像を超えた、今までに経験した事の無い速さには着いていけないからだ。

運の良い事に、ペダーソンは過去に1度、珊瑚海海戦時に一戦交えた事があった。その時は完全に相手側に主導権を握られた状況で、

完膚無きまでに叩き潰されていた。今のペダーソンにしても、正氣に戻らざるを得ない存在だ。

ジムは編隊を作り、猛スピードで空を駆っていた。サラトガのF6Fが先頭、ヨークタウンのF4Fが後方に展開、戦闘態勢に入る。F6F『ヘルキャット』は、P&W R-2800エンジンで唸らせ、荒々しく旋回しながら、四方八方に分散した。刹那、白煙をたなびかせながら、55mm噴進弾がジムの翼下から飛び出した。白煙の中で、突発的に強くなった火が一筋の輝きを見せていた。その向こう側では、逃げ遅れたF6Fの1機が蠅の如く、当惑を滲ませながら周囲を飛び盛っていた。

機は55mm噴進弾の攻撃を受け、姿を消した。

ペダーソンは見た。紅蓮の輝きを放ちながら、F6Fは鋼鉄のねじくれた残骸と化していた。まがまがしい橙色に包まれている。着々と焼き尽くされながら、火の付いた花弁の様な火の粉を散らしながら舞っていた。火球は、不気味な明りを空に投げ掛け、米海軍兵達の行く手を照らしてくれた。

不意に轟音が聞こえてきた。同時に、雲海の下から後退翼やノーズ・インテイクによって洗練された機体が銀の矢の様に飛び出してきた。

——ジムだ。

洗面を浮かべながら気を保ち、レバーを操作した。機体が鈍く疼き、P&W R-1830-86ツイーンワस्पエンジンが咆哮した。『ジム等と戦闘する際は、余分な装備を減らして機体を軽くする』という様な米海軍からの勧告に則り、ペダーソンは出来る限り機の重量を減らしていた。

しかし、ジムは圧倒的な速度で、ペダーソンの後ろを取っていた。——このままでは、自分は死ぬ。

ペダーソンは絶望の淵に立たされた。

F4Fペダーソン機は背後をジムにつかれた形で飛行を続けた。機体を振り、速度を調節しながら照準が合わない様にして飛び続けた。が、ジムの素早い動きに圧倒され、最早打つ手すら無かった。ペダーソンは憎しみを覚えながらも、その理性は脱出装置に手を伸ばしていた。

背筋に悪寒が走った。

「くそッ！ジャップめ！」

悪態を吐き、ペダーソンは天空に身を羽ばたかせた。

第16任務部隊旗艦『ワスプ』艦橋では、ウィリアム・F・ハルゼー中将が憎悪を滲ませ、拳を握り締めながら、参謀の報告を聞いていた。

「第1次攻撃隊は壊滅、空母ヨークタウンは既に……」

壮絶なる最期を迎えようとするヨークタウンに哀悼の意を述べながらも、ハルゼーはその不機嫌そうな顔を崩さなかった。「マシな報告は無いのか？」悪態を1つ、溜め息を1つ漏らした。

「残念ながら……」

「分かった」ハルゼーは言った。「次の一手、惨めな敗走の旅路に着くしかないという訳だ」

『トライデント』の一撃と3発の魚雷攻撃。

「勇気を出せ、我々は負けていない！」轟……と断続的に響き渡る爆音を背に、フランク・J・フレッチャー少将は甲高い声で叫んだ。フレッチャーは甲板上を進み、やがて壁にぶち当たったかのように、立ち止まった。艦橋が鋼鉄の屑に還ったか……。フレッチャーの視界には、煤と灰に塗れ、深紅の火を燻ぶらせる瓦礫の山が広がっていた。

艦橋の頭上には、煙がたなびいていた。煙の色は徐々に濃くなり、灰色から漆黒に変わり、噴き上がった。一陣の風がそれをとらえてあおり立て、煙柱の中心は紅蓮に輝いている。フレッチャーが見下ろすと、甲板が煤を被って黒く光っていた。

下からは海水が迫り、上からは火の粉と灰が雪の様にゆっくりと降ってくる。

こんな状況が戦時下では常識なのだと、フレッチャーは呟いた。艦は今にも滑り落ちそうな程、大きく傾いていた。

駆逐艦の1隻が横付けを始める中、フレッチャーは呻きにも似た声を漏らした。

第56話 ミッドウェー海戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第57話 ワスプの危機

第57話 『ワスプの危機』

1944年2月26日AM07..29

ハワイ準州／ミッドウェー沖

3ヶ月間、ジョン・S・サッチ中佐はじっと待っていた。そして今ようやく、その時機が到達しようとしていた。彼が操るF6F『ヘルキャット』戦闘機は、第16任務部隊旗艦『ワスプ』を飛び出した。第2次攻撃隊長を務めるサッチは多数のF6FとTBF『アベンジャー』雷撃機を率いる。

F6F達の列が揺れて弧を描き、三式噴進戦闘機『旭光』——またの名を『Jim』を囲んでいく。瑠璃色に染められたF6Fの機体が曙光に輝いて、薄く透き通った南洋の海のように波打っていた。TBFは天空に伸びたF6Fの影に隠れ、両者の戦闘が始まるの氣息を詰めて見守っていた。

と、規則的に伸びていたF6Fの波に亀裂が生じた。

サッチの部下、ペイジ大尉が編隊を抜け、やがて全機が散開した。ジム1機あたりに2機程度でチームが結成され、1機が囷として駆り出される。囷はその旋回性を活かして初撃を回避、囷に次の攻撃を放つべく、旋回を行い、減速した敵機をもう1機が仕留めるというものである。これは旋回性で勝るF6Fの長所を活かした戦術で、考案者はサッチだった。

1943年11月19日、彼は空母『エンタープライズ』艦橋に居た。

新型戦闘機F6Fパイロットとして、飛行隊長として乗艦していたサッチだったが、真珠湾攻撃時には何も出来ず、気付けば沈没す

る艦から命からがら逃げ惑っていた。

ペイジ大尉がジムの初撃を抜け、華麗に旋回。優美な弧を描きながら、相手を翻弄した。ジムは旋回、速度は落ちている。

P&am p; W-R-2800エンジンが咆哮し、鈍い音を響かせた。サッチは瞳の奥底に炎を赤く燃え立たせ、軽く膝を伸ばして身を解した。

「パールハーバーのリベンジだ」サッチは冷やかに不快感を露にしていた。

サッチは旋回し、減速する敵機の姿を捉えた。照準が合い、12.7mm機銃が甲高い声を上げた。と、その最中で――ジムはオレンジ色の火達磨と化す。F6Fの囲む輪の中で、赤や黄や橙色の炎の焚きつけとなったジムが落ちて行く。

これで復讐は遂げられた。サッチは笑みを浮かべた。

つかの間、敵機の動きに若干の変化が見えた。サッチは奴等の気が挫けたのだと思った。

――天空の侍の勇氣は萎えなかった。

F6Fパイロット達は確実に成果を伸ばし始め、戦術に慣れつつあった。サッチにはこの戦術の他にも、もう1つ勝機を確信していた。

それは、日本兵の訓練不足である。

僅か数ヶ月前、完成したばかりのジェット戦闘機のパイロットの多くは零戦のパイロットから成り立っており、初歩的な操縦技術の獲得はなんとか出来ていた。

しかし、それが命取りでもあった。パイロット達は零戦操縦の経験から、旋回性やドックファイトに大きな自信を持っていた。だが、旭光はレシプロ機の周囲を高速でスムーズに飛び回り、あらゆる角度から攻撃を仕掛ける事が可能で、一撃必殺が戦法だった。

戦法、機体性能、かつての零戦の難のある旋回性等によって若干のズレや違和感が生まれ、パイロットの多くが操縦の中で無意識の内に零戦操縦の癖を出していた。

1944年2月26日AM07・31

F6Fと旭光が熾烈な空戦を繰り広げる最中、『きい』からハーブーンミサイルを搭載したAV-8B――ハリアー？は第16任務部隊旗艦『ワсп』攻撃に向かっていた。飛行長の西川一等海尉は操縦席に寄り掛かってヘッドマウントディスプレイを付けた頭を後ろに反らし、硬くなった首を解す。そして大きく息を吸い、生温かげな空気を肺に詰め込んだ。

後部甲板より飛び出した5機のハリアー？は、雲間より海上に広がる巡洋艦と駆逐艦群を発見した。その中央には、手厚く守られた空母『ワсп』の姿があった。

「こちらクロスジャック1、接触 Contact」

つかの間の沈黙。

『……こちらレムナントフォース（護衛艦きいコードネーム）、交戦許可』

了解、命令実行
「Wilco」

機首に備え付けられたAN/APG-65（V）2レーダーは空母『ワсп』を捉えた。液晶ディスプレイに投影に目標が映り込んだ。西川はサイドスティックで高度を維持しつつ、液晶ディスプレイを指で触れてハーブーン攻撃準備に移行し、座標を合わせた。

「FOX1!!」

その途端、鈍い音が機内に響き、床上に衝撃が走った。右翼のハーブーンミサイルが空中に放り出され、真っ逆さまに落ちていく。少しして、テレダイン社製J402-CA-400ジェットエンジンが空中で点火、飛行を開始した。

ハーブーンミサイルは、海面近くまで降下、紺碧の海の上をマッハ0.85近くのスピードで駆け抜ける。背後に白い尾を引き、鈍い咆哮を上げながら進んだ。安定翼が空を切る。

ワсп艦橋。

ウィリアム・F・ハルゼー中將は浪面を浮かべ、参謀の報告を聞いていた。この時、ハーブーンミサイルは最終段階に移行し、アクティブ・レーダー・シーカーを作動させ、捕捉目標に近付いていた。甲板に居る作業員が1人、また1人と水平線の彼方より迫りつつある不気味な閃光に気付く。

「既に『ヨークタウン』が沈んでいるんだ。一矢報いなければ割に合わん……」

ハルゼーは苦しげに言った。「……何とかせねば」

刹那、暖かな曙光とは違う、鋭くとげとげしい光を纏った一筋の輝きをハルゼーは見つけた。水平線のやや上に掛かる光源は、明らかに空母ワспへと迫っていた。

光源であるハーブーンミサイルは鈍い作動音を響かせ、一気に急上昇した。目標を捕捉し、攻撃段階に移行したのである。

そして――急降下。

淡い黄色色の光の帯を投げ掛けながら、ハーブーンミサイルはワсп艦橋の傍、甲板の中央を貫いた。艦橋の脚が怒濤の如く崩れ落ち、まがまがしい炎刃が空に突き立てられた。煙が噴水のように噴き上がり、空を黒く染めた。

突如、爆風が艦橋を突き抜ける。

――ハルゼーは背中から壁へ叩き付けられ、意識を失った。

第57話 ワスプの危機（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第58話 ミッドウェー島陥落

第58話 『ミッドウェー島陥落』

ウィリアム・F・ハルゼーはゆっくりと目を覚ました。

幾つもの顔が見下ろしている。ここは？

次の瞬間、今何処に居るかを思い出した。駆逐艦『エールウィン』だ。ベッドから腰を上げ、静かに体を起こした。

「目が覚めましたか？」

空母『ワस्प』艦長のマーク・A・ミッチャーは不安げな顔を浮かべて言った。

「どうなったんだ？」横付けされた駆逐艦に担架で運ばれた場面が断片的に頭を駆け抜ける。最後に刻まれた記憶はそこで途切れていた。

「……沈みました」

ハルゼーは力なく枕に頭を落とし、天井をじっと見つめた。

「……最低の気分だよ」

拳を握り締め、ベッドを叩き付ける。

「これから如何いたしますか？」

「既に2隻の空母を失ったんだ。ハワイに帰るしか無いだろ」ミッチャーの薄れた声が響く中、ハルゼーは身を起こして言った。「もっとも、ニミッツに何を言われるか分からんが」

日差しが力強くなり、黄金色の光が46cm砲塔の全体を包み込んだ。帝国海軍の精神が黎明の光を浴びている。光が篝火となって、薄闇に覆われた海岸を照り映える。

「撃ち方始め！」

砲術長の声がこだまする。3基の46cm砲は爆音を轟かせ、海岸を震わせた。

ミッドウェー島では、その後1時間に渡って鋼の洗礼が行われた。輸送船団が近付き、大発動艇が列を作り、リーフの上を進んだ。

そしてその上を、三式回轉輸送機『雲雀』が駆け抜ける。

それ以前までも行われていた艦砲射撃と空襲の結果、上陸した歩兵第28連隊基幹の一本支隊が最初に見たのは――漆黒に染め上げられた砂浜だった。砲台やトーチカという設備は既にその姿を留めず、大小形を留めない凹凸の地形が代わりにできていた。戦闘機も無く、唯一の装備といえば少数の野砲や小銃ばかりだった。

ミッドウェー防備の任を負う海兵隊第6海兵大隊は、3000名を超す戦力を有していたが、機動艦隊の損失を前に、米海軍が全面撤退するという報を受けて退却の姿勢をとっていた。航空基地に戦闘機が1機も無く、既に正規空母が1隻の状況では適切な判断といえた。

激しい戦闘の末、ミッドウェー島は陥落した。

第58話 ミッドウェー島陥落（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第12章 『英国奪還作戦』第59話 SAKガス（前書き）

・『SAK』神経ガス特性

化学式… $C_{11}H_{26}NO_2PS$

分子量…267.4

密度…1.00083g/mL

沸点…300℃

融点…-39℃

揮発性…10mg/？

IGファルベン神経ガス研究チームが開発した神経ガス。一般に言うVXガスで非常に毒性が強い。琥珀色をした油状の液体で、揮発性は低く、無味無臭。皮膚から吸収されて毒性を発揮する為、ガスマスクだけでは防護出来ない。

名称の由来は開発者の3人の姓の頭文字、ゲルハルト・シュラーダー（Gerhard-Schrader）のS、エトヴィン・アイヒンガー（Edwin-Aichinger）のA、リヒャルト・クリーン（Richard-Kuhn）のKより。

第12章 『英国奪還作戦』 第59話 SAKガス

第59話 『SAKガス』

1944年2月3日PM01…01

ドイツ／東プロイセン州

ラステンブルクの東約8kmの森林の奥にひっそりと建つヴォルフスシャンツェは、東部戦線の作戦指揮を行うべく建造された総統大本営の1つである。ヴォルフスシャンツェの施設は、居住棟・厚生棟・管理棟等が40棟、コンクリート製大型掩体壕が7棟に小型の物は40棟と、見事なまでに洗練された防衛意識の元に設計されている。掩体壕のコンクリート厚は6mから8mもあった。

本来、独ソ戦を想定して造られたこの施設が何故今だに使われているかという、ヒトラー自身が身を案じての事だった。ベルリン等、此処に居るぞと叫んでいるような場所では暗殺される確率が増すだろうとヒトラーは考えていた。ヴォルフスシャンツェには2200名もの保安要員が常駐し、付近には専用の発電所や引き込み線の駅、2つの飛行場、郵便局と何から何まで揃っていた。

そんなヴォルフスシャンツェの管理棟の1室には、層々たる顔触れが集まっていた。

海軍機動艦隊の全指揮を担い、元帥階級を近々頂戴する予定のアルブレヒト・ベルンフリート大将もその1人だった。会議室に向かうまでの通路には、SSのセキュリティ・チェックゾーンが設けられている。総統命令により、大将だろうが誰だろうが、そのチェックを拒めば、即座に拘束される。SS隊員の顔を注意深く覗き込みながら、ベルンフリートは両腕を広げて沈黙した。

「結構です」SS隊員はベルンフリートの顔に視線を向けて言っ

た。

ベルンフリートは頷いた。「すまないね」

トレーに置いた愛銃、ワルサーPPkを一瞥し、SS隊員の前を通り過ぎて会議室に入った。kaiser-House6のメンバーと言えど、銃器の持ち込みは禁止されている。

宣伝相ヨーゼフ・ゲッベルズ、SS総司令ハインリヒ・ヒムラー、空軍元帥ヘルマン・ゲーリングを中心に、Kaiser-House6の一員であるマルティン・ボルマン、英国本土防衛の任を受け、北アフリカを離れているエルヴィン・ロンメル元帥、海軍元帥エーリヒ・レーダー等、軍の中心的人物達が列を成し、巨大なテーブルに腰掛ける事となる。大将面々の中にベルンフリートは混じり、長い長いテーブルの先に視線を合わせた。

——ハイル・ヒトラー！！

SS大佐の甲高い声が会議室内にこだまし、一同は腰を上げて敬礼する。ヒトラーは手を下し、着席を指示した。

「……では、英国本土防衛についての今後の戦略を図りたいと思う」ヒトラーは言った。「米軍の上陸は決定的だろう。諸君等には全精力を注ぎ、これを阻止して貰いたい」

「総統閣下」ヒトラーの近くに座っていたゲッベルズは言った。

「まずは議論されてきた懸案の1つ、“毒ガスの使用”について話し合うべきかと……」

「分かっている」ヒトラーは言った。「使うべき時が来たようだな」

会議室内にどよめきが起こった。これまで、ヒトラーは頑なに毒ガス使用を拒み続けてきたからだ。史実において、ドイツはタブン・サリン・ソマンといった化学兵器の開発を行い、その技術は他国を圧倒していた。しかし、ヒトラーは第1次大戦時の経験から、ユダヤの技術である核兵器同様に嫌っていた。

結果、国内に貯蔵されていた7000t以上のサリンは、パリやニューヨークのような大都市を30回以上は壊滅させられる能力を

秘めていながらも使われず、米国やソ連の手に渡った。

ゲッベルズやヴィルヘルム・カイテル陸軍元帥といった側近の多くが勧めながらも、使われなかったサリンの類は、アルゼンチンの第3帝国でもヒトラーには嫌われ続けていた。しかし、帝国滅亡の危機的状况を打開する為にも、多少の妥協はしなければならぬとして、敗戦以前に新生第3帝国へと渡ってきていた科学者達は、毒ガス研究を行える事となっていた。

IGファルベン社研究員、ゲルハルト・シュラーダーはヒトラーに呼び出され、歩み出た。

ゲルハルト・シュラーダーはかのサリンガスの開発者で、戦後はバイエル社で働いた。新生第3帝国設立以後は一度も接触した事が無かったが、潜在的記憶は持ち合わせていた。

「前年、我々IGファルベン研究チームが完成させた神経ガス——“SAK”については皆様ご存知かと思われます」シュラーダーは言った。「SAK——正式にはO-ethyl. S-diisopropylamine methyl phosphonothiolate (O-ethyl-S-ジソプロピルアミノエチル-メチルホスホチオラート) ですが、これはサリン等と違い、長期間に渡って残留する物質です。皮膚又は呼吸器からの吸収により、感染します。感染者は2~3分程度で死亡、条件次第では1週間近く、このガスは残留し続けます」

「解毒薬は？」ロンメルは訊いた。

「現在は開発途中の段階です。アトロピンとプラリドキシムヨウ化メチルを合成した試作品は出来ていますが、人体実験では、投与したユダヤ人10名全員が効果薄で死亡しました」シュラーダーは苦面を浮かべて言った。「ですが、実験の積み重ねによりガスマスクと防護服は完成しています。とはいえ、私の意見としまして、SAKガスの投入は現実的とは言い難いです。マスクが機能しても、それで安心して兵士の多くは危機意識が薄くなり、残留したSAKで死ぬことでしょう」

「徹底しても駄目か？」ゲッベルズは言った。

「例え徹底しても、必ず誰かは感染して死ぬはずです」シュラーダーは言った。

「ですが、米国本土に撃ち込めば十分運用出来ます」そう言ったのは、沈黙を続けていたベルンフリートだった。「フォン・ブラウ博士の大陸間弾道弾——『V3ロケット』であれば英国本土からの東海岸攻撃が行えます。それにSAKガス入りの弾頭を搭載し、ニューヨークを攻撃すれば、圧倒的な科学力を前にアメリカは屈服するでしょう」

ベルンフリートの言うV3ロケットはA9/A10『ニューヨーク』と呼ばれる二段型ロケットで、中距離弾道ミサイルである。航続距離は5000km、無線誘導で精密な攻撃を可能とする一大構想である。ロケットは1940年から開発が始まり、史実では1942年に中止されているが、この世界において計画は海軍に移譲され、後世記憶を持つブラウンの力と新生第3帝国の科学者、ベルンフリートによる環境整備により、開発は順調に進んでいた。

「では、大西洋の壁付近にはサリンをばら撒くのが定石でしょう」ゲーリングは静かに言った。「海岸一杯に敵を誘い込んで化学兵器を搭載した榴弾、及びH0-229からの化学兵器爆弾投下を行えば、密となった敵兵を一網打尽にする事が出来るでしょう」

「それが良いだろうな」ヒトラーは言った。「何も気付かず、米兵は命を落とす事だろう」

ヒトラーが毒ガスに好意的なのは、何も新生第3帝国における意識変わりだけではない、かつてやられたように、彼は毒ガスを使った場合の連合国の報復を恐れていた。サリン等を使えば、かつての第1次大戦さながらに毒ガスで毒ガスを洗う戦いに発展するとヒトラーは考えていたが、実際連合国にはドイツに勝る程の化学兵器など存在しなかったし、既に一定の勝機——核兵器の開発と実用化に——一早く成功していた事もあり、ヒトラーは強気に出た訳である。

「結論は出た訳だ」

ヒトラーはそう言うと、卑屈な笑みを浮かべた。「戦略としては、太平洋の壁以前にサリン等神経ガスを散布、太平洋の壁に配備された兵士は銃撃を行い、守備の構えを崩さない」ヒトラーは言った。「単純明快だが、一度間違えれば全体の壁が崩れる事となる。注意を怠らぬように」

第12章 『英国奪還作戦』 第59話 SAKガス（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第60話 イタリア海軍遣米艦隊（前書き）

・航空母艦『ジュゼッペ・カリバルティ級』性能諸元

排水量 基準…25,675t

満載…32,105t

全長…275.5m

水線幅…26.0m

吃水…8.87m

機関

専燃缶×8基

タービン×4基4軸

(160,000hp)

最高速力…34ノット

乗員…1,660名

兵装

40口径12.7mm連装高射砲×8基

20mm連装機銃×12基

艦載機

F i a t - G 8 1

F i a t - G 5 5

R e . 2 0 0 2

計80機

イタリア海軍初の航空母艦。ドイツからの技術・物資寄与によって完成した。翔鶴級空母を主体として開発されており、ジェット戦闘機『G81』に対応する飛行甲板を備え付けている。名称の由来

は19世紀の軍事家、ジュゼッペ・ガリバルティより。

・『Fiat-G81』性能諸元

全長…11.3 m

全幅…11.4 m

全高…4.5 m

主翼面積…26.7?

エンジン…ターボジェットエンジン

最高速度…1,050 Km

実用上昇限度…14,300 m

航続距離…1,026 km

兵装

固定兵装…12.7 mm機銃×6

ロケット砲…55 mmロケット弾×20

爆弾…900 kg

イタリア軍初のジェット戦闘機。F86ジェット戦闘機を基にクルト・タンク博士によって描かれた設計図が寄与され、ドイツ軍技術者の協力を得ながら完成した。空母が少ない等の諸問題により、少数配備に留まっている。

第60話 イタリア海軍遣米艦隊

第60話『イタリア海軍遣米艦隊』

1944年2月13日AM09・16

英国／ハンプシャー州

大英帝国海軍——『ロイヤル・ネイビー』の拠点の1つであったポーツマスはワイト島の風陰にある天然の良港で、英海軍最古の基地でもあった。市街地には19世紀の建物が点々と聳え、軍港の後背地に位置するサウスシーは閑静な住宅地で、独海軍将校の一部が家族を迎え、住んでいる。1943年2月以降、この地は第3帝国防領となり、ドイツ海軍英国方面軍の中央拠点として利用されていた。冷たい雨の中、アルブレヒト・ベルンフリートは荒模様の海原に目を見張っていた。第3帝国本土の内陸部、ラステンブルクからやってきたばかりの彼の目には、微笑ましい光景だった。海こそが私の第2の故郷であり、骨を埋めるべき地である。そう呟きながら海を見た。水平線には、灰色に湿った純白の綿が積み上がっているように見え、いかにも息苦しい感じがした。頭上にも灰色の綿が溢れかえっていて、稲妻と疾風の轟音が轟音が増していく。そんな騒々しさも、水平線から頭を見せる一粒の黒点を視界に捉えれば、殆どどうでもいい事のように感じた。

雨の雫が傘を滴り落ち、轟音が響いた。優美な弧を描いて1隻の艦船が湾内に侵入する。それに付属して、数隻の艦船も侵入した。

これは……確かにすごい。

『ローマ』は史実では、5ヶ月程前に沈没の運命を遂げた戦艦である。誘導爆弾で死を迎えたこの艦は、今世界においては今だ、イタリア海軍の下、責務を全うしている。

55分後、ベルンフリートは『ローマ』の中に通された。艦内に入ると、艦隊司令官のカルロ・ベルガミーニ海軍大將が迎えてくれた。

「決意の程は如何かな？」

しばし沈黙が流れた。「到底不安が大きいですな、我々は地中海でこそ――」ベルンフリートの視線が気になり、口籠った。「……だが、私は軍人だ。口応えはしない方が良いと見える」

「しかし、欲しいものの為ならと、首相閣下は承諾致した」振り向くと、ベルンフリートは周囲を見渡した。「この戦艦――その名前を冠した『ニュー・ローマ』が首相閣下の所望する品でありましょう、名は『ワシントンDC』……ですが」

“新しいローマ”です」ベルガミーニは言った。

「アメリカ合衆国の首都、第2のローマ帝国のね」ベルンフリートは続けた。「……そして閣下は第3のローマ帝国を建国しようとしてらっしゃる」そう言うと、ベルンフリートは微笑してベルガミーニの顔を見据えた。「第3帝国と第3ローマ帝国か、我々は思った以上に似た者同士だった訳だ」

「首相閣下の大いなる政策です」ベルガミーニはいかぶるように目を細めた。「我々、遣米艦隊は東海岸の占領を主任務とする。陸のイタリア・アメリカ派遣軍も同様の理念を抱き行動する事は、理解している上の事だと存知て頂いていると信じるばかりです。我々は息吹のように前進し、電光石火で敵を討つ」

“来た、見た、勝った。”――の信念ですね」ベルンフリートは言った。

「地中海から英海軍という疫病が去っている以上、実戦での機動艦隊運用は初めてとなります。私としては、1つ助言や支援を受ければと思います」

「提督、あれは“鋼鉄の絆”を示すものですよ」

「鋼鉄の絆……ですか？」

「そう、日本との間の切れない絆を示したもののなのですよ……」

1942年6月7日

後世、新生第3帝国の誕生するこの世界において、その日は日本軍がミッドウェーで敗北を喫した日であった。山本長官は事態の重要性を重く受け止め、ある1つの提案を海軍上層部に促した。

いわゆる『遣独潜水艦作戦』――の追加案である。ドイツはこれまで、ゴム・モリブデン・ボーキサイトの類の資源と自国の技術の交換を行っていたが、更なる技術を山本は求めた。結果、その見返りとして差し出そうと考えたのが――『技術』であった。

1944年、1隻の伊号潜水艦がフランス軍港に到着し、これまでに総統ヒトラーでさえ大半が秘匿として見せられなかった『大和級戦艦』の設計図があったのである。これは同級戦艦『紀伊』の存在が大きく関わっているが、それは後述する。

そんな技術貸与は日本海軍側の関係者の1人が『鋼鉄の絆作戦』と命名していた。

そしてベルリン陥落時、ヒトラー随伴の海軍関係者達はこの作戦において入手した空母や大和の設計図を手にも、アルゼンチンの新生第3帝国へと渡り、ベルンフリートがその管理、実用化に取り組んでいた訳である。

今世界において、その設計図は強く記憶が残ったヒトラーやベルンフリート、新生第3帝国の技術者らの手によって再び描かれ、イタリアやソ連に寄与された。ソ連に関しては空母設計図は無かったものの、大和級に関しては既に渡され、拙い建造技術の下、開発が進んでいる。そしてムツソリーニは複数の技術・物資貸与の見返りとして遣米軍を編制し、こうしてイタリア軍が英国に集結している訳である。

戦艦『ローマ』と共にやってきた空母『ジュゼッペ・カリバルティ』も、そんな『鋼鉄の絆』の恩恵を受けた艦船の1隻である。

「提督、首相閣下にお会いしましたらぜひ“シーザーも良いですが、キンキナトウスも1つの道ですよ”と、お伝えください」

第60話 イタリア海軍遣米艦隊（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第61話 オーバーロード作戦（前書き）

・『バイエルン級航空母艦』性能諸元

排水量 基準…45,000 t
満載…60,000 t

全長…296 m

全幅…34.4 m

吃水…10.5 m

機関

蒸気タービン×4基4軸

(212,000 hp)

最大速力…33ノット

乗員…4,220名

兵装

40 mm機関砲×84基

20 mm機関砲×68基

艦載機

Ta183

Ar234

計120機

ドイツ海軍の正規空母。新生第3帝国時代、秘密裏に入手したミッドウェイ級航空母艦の情報が基となっている。ジェット航空機に対応した甲板を備える上、7～8 cm近くの装甲厚を誇る。V2ロケット・ヴァッサファル（C2）の運用プラットフォームでもある。開発が遅れているミッドウェイ級航空母艦を除けば、現時代最大

の空母で、一気に120機近い航空機を運用出来る事から、ドイツ海軍機動艦隊の中核を担っている。

第61話 オーバーロード作戦

第61話 『オーバーロード作戦』

1944年2月24日AM06..56

英仏海峡

冰山戦艦『エル・ドラード』は、米海軍第20任務部隊の旗艦だった。110万tに及ぶ排水量を誇り、多少の荒波はもともしない。艦全体に配備された無数の40mm対空砲と、20mm機銃によって護られている。艦後方部には特殊な飛行甲板が備えられており、PBY『カタリナ』はもちろんの事、F6F『ヘルキャット』や、TBF『アヴェンジャー』といった通常艦載機も運用出来る。

「……諸君、ナチに我々が英国人とは訳が違う事を見せてやろう」第20任務部隊司令官のレイモンド・S・スプルーアンス少将は、コナ産コーヒーの立たせる温かな湯気と、曙光の心地良い光の温もりを感じつつ、艦橋の一同に宣言した。冰山戦艦である以上、暖気を取るのは宿命のようなものだった。2月の北海の外気を含め、内部に搭載された数十基の冷却装置からくる冷却ガスにより、室内温度は常時1度。それでも高い方で、時には氷点下に達する事もある。乗員の多くは、コーヒーやそれらの類によって暖を取るしか方法が無い訳だ。

「最初は徐々に……」スプルーアンスはコーヒーを飲んだ。「十分に身体を暖めたら本番だ」ハワイアンな香りが鼻孔を駆け抜けていった。

アルブレヒト・ベルンフリート海軍元帥は、バイエルン級航空母艦第1番艦『バイエルン』艦橋に佇んでいた。Ta183『フツケバイン』が唸り声を上げ、翼を羽ばたかせた。第2次バトル・オブ・ブリテンでも活躍したTa183は、ドイツ海空軍の主力戦闘機として、Me262を超える数が生産されている。両翼の翼下面には、Me262と共に史実で大活躍を示したR4M『オルカン』が搭載されている。翼片側に15発、計30発を搭載。

Ta183と肩を並べるアラドAr234には、フリッツXが備え付けられていた。

ドイツ海軍第1機動艦隊旗艦であり、第3帝国の科学力の粋が集結したバイエルンを中心に、前級グラーフ・ツェッペリン級航空母艦が8隻、軽空母が2隻、イタリア海軍のアキラ級及びジュゼッペ・ガリバルティ級を含めると、総勢12隻近くの空母が独伊側の戦力である。

一方、連合軍側は16隻の空母を用い、ノルマンディー上陸作戦以上の数の艦艇が奔めいていた。大半は米軍から構成されており、復讐心に燃える者ばかりだ。

陸の防衛はエルヴィン・ロンメル元帥が担い、空はゲーリング、海はベルンフリートといった具合になっていた。

陸上はサリン・ソマンの類がばら撒かれる為、戦力差等も問題は無い。

空はゲーリング率いるHö-229ステルス爆撃軍団、通称『幽霊艦隊』が陸上・海上支援攻撃を行い、Ta183やMe262が制空権を掌握する。

一方、海は空母中心の機動艦隊と、Uボートが丸となって戦う。が、氷山戦艦『エル・ドラード』や米海軍の対潜戦略により、危機に晒されていた。

Ta183とF6Fが接近する。

双方は照準を合わせ、戦闘態勢を整える。

F6Fの操縦席、パイロット達は、今作戦の全指揮を担うドワイ
ト・D・アイゼンハワー大将のくぐもった声が、無線機越しに響き
渡った。

『諸君、祖国——合衆国に災厄をもたらしたドイツに対し、最善
の攻撃を与え、最善の成果を出して貰いたい。』一旦、声が切れる。
『私は願おう、英国の地がナチスドイツの手を離れる事を。私は願
おう、1人でも多くのナチスの兵士が死ぬ事を』若干の間が開く。

『そして、私は願おう——諸君の検討と幸運を』

アイゼンハワーは一息つく。『——合衆国と諸君に幸あれ』

大君主作戦——Operation Overload（オーバ
ーロード作戦）は、幕を開けた。

第61話 オーバーロード作戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第62話 ロケット巡洋戦艦（前書き）

・『ハインリヒ・ヴィルヘルム・アーダルベルト級巡洋戦艦』性
能諸元

排水量 基準…38,540 t
満載…42,100 t
全長…252 m
全幅…28.50 m
吃水…9 m

機関

中央軸…ワグナー式重油専焼高温水管缶×4基
左右軸…MAN式ディーゼルエンジン×8基8軸
蒸気タービン×1基1軸
(計187,000 hp)
最大速度…34ノット
乗員…2200名

兵装

47口径38cm連装砲×2基
65口径10.5cm連装高角砲×4基
54口径127mm単装速射砲×18基
50口径70mm連装速射砲×12基
20mm連装機関砲×12基
324mm対潜迫撃砲×2基
62.2mm3連装魚雷発射管×2基
C-2ヴァツサファル艦対空ミサイル4連装発射装置×12基
ヘンシエルHs117艦対空ミサイル4連装発射装置×24基

A4-TV誘導広域哨戒・攻撃ミサイル3連装発射装置×24基

航空兵装

水上機×2機

システム

射撃管制装置

レーダー

広域搜索レーダー

ミサイル誘導レーダー

ミサイル位置測定発信装置

TVアンテナ

ソナー

艦首ソナー

曳航式ソナー

ドイツ海軍初のロケット巡洋戦艦。新生第3帝国の科学力を十二分に詰め込んだ革新的艦船。複数のミサイル発射設備に加え、ミサイル誘導レーダーを備えている。A4-TV誘導ミサイルにより、A4ミサイル先端部のTVカメラに映った映像がそのまま艦内のテレビモニターに映される等、現代技術を先取りしたアイデアが複数取り入れられた実験艦でもある。O級巡洋戦艦が基となっている。名称の由来は、プロイセン王国の海軍大将、ハインリヒ・ヴィルヘルム・アーダルベルトより。

第62話 ロケット巡洋戦艦

第62話『ロケット巡洋戦艦』

1944年2月24日AM07・24

英仏海峡

『――合衆国と諸君に幸あれ』

ドワイト・D・アイゼンハワー大将の声が途切れる。

第20任務部隊航空母艦『イントレピッド』第1次攻撃隊隊長、フランク・アンダーソン中佐は眼前に迫る無数の黒点を捉えた。円型に展開したR4Mロケット弾は、まさに暴風そのものだった。空戦用に開発されたR4Mの55mm弾頭は、ほぼ1発の命中で撃墜を保証する。史実では、Me262を駆使し、敗戦1ヶ月前までに500機程度の連合軍爆撃機を死に至らしめた。

それが今、6発間隔での斉射をした形で襲い掛かってきていた。ドイツ海軍側のTa183は12機。全機が1斉射したので、本来重厚な巨人の体躯を貫く為のそれが72発も迫っている事になる。

「こちら隊長機、散開しろ!!」

アンダーソンはF6Fの機首を持ち上げ、急上昇した。機腹を掠めるように、直下を72発の暴風が駆け抜けた。急旋回し、アンダーソンは背後を振り返った。誰も居ない。Ta183は編隊を崩さず、F6Fを追いかけなかった。何故来ない……。

刹那、一筋の閃光が空を駆け抜けた。胃がきりきりと締め付けられるような気がした。曙光に煌めく空を駆ける閃光は、1機のF6Fに狙いを付け、背後を追っていた。

アンダーソンの背後で、轟音がキャノピーを切り裂いた。はっとして後ろを見ると、あのF6Fは紅蓮色に染め上げられていた。あ

の閃光は既に消えている――煙のように。F6Fの断絶音が、苦悶に呻く地獄の亡者の声のように、渦を巻いて響いていた。

「一体何なんだ……あれは……」

F6Fを駆り、アンダーソンはぼやく。ちくしょう。背後で断絶音が響き、アンダーソンは振り向く。何機ものF6Fが炎の渦を巻いて、墜ちていく。

アンダーソンは見た。まだ曙光に照らされていない薄闇の中に、一点の光がちらほらと飛び交っている。

それは既にアンダーソンに迫ってきていた。距離が狭まり、正体は徐々に解明されていく。

それはいわゆる矢――だった。矢羽は背後から煌々と光を滾らせていて、鏃は丸くなっているが、それぐらいしか例える物が無かった。全く未知の存在だったのだ。

不意に、アンダーソンの脳裏でV2ロケットの存在が浮かび上がった。対ナチスのプロパガンダにおいて、V2ロケットは恐怖の殺人兵器として、耳にたこが出来る程、聞かされていた。

しかし、これはそれ以上の兵器だった。何しろ意志を持つ兵器なのだ。

Ta183C――複座式仕様のこの機は、ヘンシェルHS298――と呼ばれる空対空ミサイルを無線誘導すべく開発された機だった。MCLOS（手動指令照準線一致誘導方式）方式で、初期型ミサイルとしては非常に優れた性能を誇っている。誘導方法は、発射と共にミサイル後端に装着された曳光弾とマグネシウム式のフレアの光を目印にし、後部のオペレーターが肉眼を頼りにミサイルをジョイスティックで操作するというものである。通常は神経反射が追いつかず、限界を迎える為、決して優れた誘導方法では無い。しかし、驚異的速度を誇るTa183であれば、通常のレシプロ機に比べれば多少オペレーターの苦労も軽減されている。更に、HS29

8の射程は1800mなので、遠距離攻撃が出来ない分、オペレーターもミサイルを見失わずに済むという訳である。

この他、Ta183にはRk344——通称『ルールシュタールX-4』と呼ばれる空対空ミサイルも搭載される。Rk344は、史実ではMe262の主力兵装として運用される予定だったが連合軍の爆撃により工場が破壊され、実戦には投入されていなかった。このRk344は小型の液体ロケットエンジンを動力とし、4本の安定翼と操縦翼を持ち、2本のワイヤーで誘導するという先進的なものだった。射程距離は3200m、ワイヤーは3キロにも及ぶ。

F6Fの1機を捉えたオペレーターは、Hs298の誘導装置を手を持ち、視線をF6Fに合わせた。曳光弾とマグネシウムの煌々たる輝きを目で追い、ジョイスティックを巧みに操る。Hs298の射程は1800mなので、逃げ切られる可能性も高いが、目で追いつきやすいという利点も併せ持つ。Ta183のターボジェットエンジンが唸りを上げ、マッハ1のスピードで空を駆るHs298を追いかける。F6Fはきりきりと旋回し、陽光に煌めきながら、雲間へとその姿を押し込めてしまう。

これが目視の限界点であった。ジェット戦闘機に乗り、MCLOM方式で敵を追っていたHs298のオペレーターは憤慨して罵った。俯いた後、翼下に備えられた別のHs298の誘導に移った。

——巡洋戦艦『ハインリヒ・ヴィルヘルム・アーダルベルト』

第3帝国の科学力の粋を集めたこの艦は、現時点で護衛艦『きい』の次に優れた艦船である。O級巡洋戦艦から後部38cm主砲等を取り除き、巨大なレーダーアンテナを複数取り付けたという、この時代の人々からしてみれば、奇妙な戦艦だと言わざるを得ない。しかし、洗練された建造技術の下、開発されたハインリヒ・ヴィルヘルム・アーダルベルトには、一点の無駄も存在しない。

艦橋、そこには現代でいう『CIC』に相当する施設が併設されていた。そのCICには、この巡洋戦艦の司令官、エーリヒ・バイ少将が佇んでいた。史実ではシャルンホルストと共に戦死した人物だが、歴史改変により、死を免れて新鋭巡洋戦艦の指揮を拔擢された。

バイの視線の先には、テーブル上に並べられた複数のテレビモニターがあった。白黒の画面には、空と米軍機と第20任務部隊の旗艦『エル・ドラード』が映っていた。

「あれが噂の——氷山戦艦……」

A4-TV誘導広域哨戒・攻撃ミサイルから受信された映像を見て、バイは啞然とした。噂程度に聞いていた存在だったが、『Uボートハンター』というあだ名は、ドイツ海軍にとって憎むべき名である。これまでに10隻程度が狼の如く群れを成し、襲い掛かったが返り討ちに遭っている。

「司令、燃料容量が限界値に達しました」

モニターを監視し、ジョイスティックを操作するオペレーターの1人が甲高い声で告げた。A4ミサイルはHS298同様、MCLOM方式である。その最大の難点である“目視”の問題を解消するべく開発された結果がA4である。先端部に搭載されたTVカメラが映像を撮り、それが母機、母艦——のモニターに送信され、その映像を見ながらオペレーターが操作する。実際、史実でもこれに該当する試作品が実験に成功していた。このA4は、その実験や新生第3帝国の技術を用いて完成したものである。

「よし、お手並み拝見という……A4-12番機は映像を撮っておいてくれ」

12番機のオペレーターは頷き、テレビ画面に視線を戻す。12番の映像画面には、別のA4ミサイルの姿が映り込んだ。V2ロケットを2回り程小さくしたような外見は、巡洋戦艦用に射程を伸ばすべく搭載された燃料タンクの為で、実際に多数運用されているものは、航空機に搭載出来る小型版である。映像に映されたA4は弧

を描きながら、エル・ドラードの甲板に直撃した。そのA4の映像はその時点で途切れ、担当のテレビモニターには砂嵐が走っていた。しかし、A4の炸薬は元々少なく、エル・ドラードの分厚い艦体には無力だった。

「……こんな所だろう、とりあえずはな」バイは言った。「我々は耐えるだけでいい、『魔法陣』の加護はこの第1機動艦隊全体を包み込み、航空機からは護ってくれる」

魔法陣——『ベルンフリート魔法陣』と呼ばれる対空防衛陣は、アルブレヒト・ベルンフリートが考案した。この対空防衛陣は、改装して対空火器・巨大な目標位置測定レーダー・ミサイル誘導レーダーを搭載した巡洋艦・駆逐艦を円形に展開、その中央に空母・巡洋戦艦等を置くというものである。駆逐艦等の目標位置測定レーダー・ミサイル誘導レーダーは航空機を捕捉、ミサイル誘導レーダーが追尾・誘導ビームを航空機に放ち、それを赤外線ホーミングでC-2ヴァッサファル艦対空ミサイルが追尾、撃墜するというものである。C-2は完全自律式の誘導ミサイルで、地対空ミサイルとして史実でも完成していた。この防衛陣はただ敵にミサイルを誘導できるだけではなく、付属の防空レーダーで周辺海域に早期警戒網を張る事が出来るのだ。

現在、C-2を搭載出来るのは、魔法陣を形作る駆逐艦・巡洋艦、少数のUボート、バイエルン級航空母艦、そしてハインリヒ・ヴィルヘルム・アーダルベルトである。

第62話 ロケット巡洋戦艦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第63話 第2次英仏海峡海戦（前書き）

・『Horten-Ho-229A』性能諸元

全長…7.47m

翼幅…16.76m

全高…2.81m

翼面積…50.20?

自重…4,600kg

エンジン…ターボジェットエンジン

最高速度…997km/h

航続距離…1,300km

上昇限度…16,000m

上昇率…22m/s

乗員…1名

兵装

固定兵装…MK213C/30×2基

ロケット砲…R4M55mロケット弾×30

爆弾…500kg×2

Ho229はドイツ空軍の全翼型ジェット戦闘爆撃機。ホルテン兄弟による特殊な機体設計により、高度なステルス性能を誇る世界初のレーダーステルス機でもある。その優れた性能と独特の外見から生まれたステルス性能から、ドイツ空軍航空艦隊内では、『ゲシユペンスト』（幽霊）の愛称を持っている。

第63話 第2次英仏海峡海戦

第63話『第2次英仏海峡海戦』

1944年2月24日AM08..45

英仏海峡

巡洋戦艦『ハインリヒ・ヴィルヘルム・アーダルベルト』のCIに相当するロケット指揮統制室では、エーリヒ・バイ少将が指揮を執り、粛々淡々と米空母艦載機をあしらっていた。魔法陣の核――を担うこの巡洋戦艦は、周辺に展開した駆逐艦、巡洋艦からのデータを集積、艦載されたミサイル誘導レーダーから追尾・誘導ビームを発信して、空を駆る航空機を駆逐する。このシステムは、配備された駆逐艦等のレーダーから追尾・誘導ビームを発信し、糸を繋ぎ合わせるようにして各艦のビームを組み合わせる事で、長距離のミサイル運用を可能としている。だが、実際はさほど上手くいく訳では無いので、このシステムで運用されるC-2ヴァッサファルミサイルは、ヘンシェルHS117艦対空ミサイル同様、ハインリヒ・ヴィルヘルム・アーダルベルトの個艦防空兵器として用いられる事が多い。

このように、魔法陣も決して完璧という訳では無い。そもそも、MCLOS方式は無線通信等による電波妨害の影響をもろに受け易かった。A4やHS117といったMCLOS方式を取るミサイルは、一度間違えば使用不可能な状態にさえ追い込まれてしまう可能性がある。C-2の誘導システムで用いられる駆逐艦のミサイル誘導レーダーは、15~30km圏内で最大効果を発揮する為、ミサイル到達時には既に駆逐艦に甚大なダメージが与えられるという可能性も高い。この問題を解決すべく、魔法陣を担う各駆逐艦・巡洋

艦にも――C-2が艦載されている。唯一の艦対艦ミサイルであるA4-TV誘導ミサイルも、元の炸薬量が少ない為、せいぜい駆逐艦や輸送船にしか対抗出来ない。

とは言え、これらのミサイルが決して役に立たない訳では無い。C-2は既に大多数の艦爆機を撃ち落とし、米機動艦隊に甚大なダメージを与え、A4は哨戒任務で大きな成果を上げていた。Hs17、Ta183搭載のヘンシェルHs298、Rk-334は無数のF6Fを海の藻屑に変貌させた。

また、Ta183はこの他――リボルバーカノン砲を搭載している。

MK213C/30――はマウザー社が開発したリボルバーカノン砲で、Me262の主力兵装になろう存在だった。リボルバーカノンは、砲身が1本だが薬室が円形に複数並ぶシリンダーを持ち、回転させて速射する機関砲である。重量75kg、30mm弾を使用し、初速530m/秒、発射速度は1200/分を実現している。史実、開発されたMK213C/30だが戦争中に完成は間に合わず、戦後西側諸国に接收されてしまっている。

Ta183の大半はMK213C/30か、20mm弾のMG213Cが搭載され、今戦争に臨んでいた。頑丈さが売りのF4FやF6Fさえ、このリボルバーカノンの前では危うかった。実際、海戦開始と同時に、Hs298やRk-334に引けを劣らないだけの成果を出していた。

――MK213C/30を搭載した一機、ドイツ空軍のHo-229は米護衛空母を脅かしていた。Ho-229は兄ヴァルター・ホルテン、弟ライマール・ホルテンの2人――いわゆるホルテン兄弟によって開発された画期的戦闘爆撃機だった。極薄型の全翼機で、垂直尾翼、円形の胴体等、レーダー波を反射する突起物を持たない

流線状の機体構造は、荘厳さと共に優れたステルス性能を備えている。また、内部構造にも無駄がなく、銅管のフレームに炭素粉を混ぜた接着剤でベニヤ板を組み付け、塗料にも炭素粉を用いていた。木製ベニヤは、レーダー波を透過させ、接着剤に使われた炭素粉は、レーダー波を反射させる。また、表面に塗られた炭素粉も、レーダー波を吸収した。H〇ー229のステルス性能は、英米軍のレーダーでは発見出来ない程に優れていたのだ。史実では結局実用化されなかったこの機だが、歴史改変されたこの世界ではドイツ空軍の主力爆撃機である。

Uボートの宿敵であり、米国の工業力を象徴するカサブランカ級航空母艦第7番艦『マニラ・ベイ』は、F4U『コルセア』艦上戦闘機を盛んに飛ばし、魔法陣を形作るドイツ海軍の駆逐艦を脅かしていた。

ハンス・ウルリッヒ・ルーデル少佐は、H〇ー18からH〇ー229に移り、任に就いていた。

アメリカ合衆国一ポーツマス核攻撃から3ヶ月、彼はその成果を認められ、少佐に昇級していた。現在、彼が乗るH〇ー229には、2発の500kg爆弾が搭載されていた。本来は、米英の戦艦を叩くべく搭載されていたのだが、カサブランカ級が予想以上に魔法陣を脅かし始めていたので、急遽この爆弾が使われる事となった。

ルーデルは目を凝らし、眼下を見下ろした。強力なターボジェットエンジンのおかげで、H〇ー229は高度16,000mという高高度まで飛ぶ事が出来る。その為、ルーデル以下H〇229のパイロット達は、特殊な高高度与圧スーツを着用している。与圧スーツは宇宙服を連想させるデザインで、全方位を見る事が出来るヘルメットとブカブカの服、やや大きめの手袋から構成される。

「……目標発見」

無線越しに告げるルーデルの声は寂しげだった。それも無理は無かった。1年程前まで、ドイツ空軍で急降下爆撃を行っていたルーデルは、突然水平爆撃に戦闘スタイルが変わった事により、若干の

違和感を覚えていた。かつての血肉踊る感覚はH〇ー18やH〇ー229に乗った事で薄れ、急降下により得られていたアドレナリンは感じられなくなった。

いわば——零戦から旭光に乗り換えたパイロットのドイツ版である。これまで、急降下爆撃中毒だったヘルマン・ゲーリングの下、空軍内に形造られていた急降下爆撃体質が突然消え失せ、180度方向転換された事により、昔堅気の急降下爆撃気質を植え付けられた古参のドイツ空軍パイロット達は、Ar234やH〇ー229に乗る事で違和感を覚えるのだ。ただ零戦パイロットとは違って1年程掛けて経験を積んでいるので、精神面の問題だけで操縦面には問題はあまり無かった。ただ、ルーデルのように急降下爆撃というこれまでのスタイルを奪われたパイロット達は、ジェット爆撃機からの水平爆撃を味気なく感じ、モチベーションがあまり上がっていない面もあった。

F4U16機とTBMアヴェンジャー12機から構成される攻撃部隊は、既に発艦していた。大半は出撃と共に、Ta183のリボルバーカノン砲とHs298によって撃ち落とされていた。H〇ー229はそのステルス性で忍び寄り、マニラ・ベイの直上に到達した。高高度を駆るH〇ー229に対し、艦載された16基の40m機関砲の鋼鉄の洗礼は少なかった。

Ju87なら、今頃は蜂の巣を突いた勢いで反撃されるんだろうがな……。

ルーデルは操縦桿を握り締め、H〇ー229は咆哮を上げる。搭載された500kg爆弾が風を切り、一直線に飛行甲板を貫いた。閃光と火炎が海面に当たって砕け散った。辺りの空気は轟音に揺るがされ、朝陽に向かって黒煙が上がったかと思うと、火炎が噴水のように噴き上がった。呻きを漏らし、末期の声をあげると——海面に波紋が広がった。

H〇229爆撃編隊は任務を終え、次の目標を探し求めた。
水平線の彼方——曙光が漏れる先。

ルーデルは——興味を示すべき存在を——見つけた。

「——A4—15番機、敵戦艦の存在を確認しました」

巡洋戦艦『ハインリヒ・ヴィルヘルム・アーダルベルト』ロケット指揮管制室。オペレーターは振り向き、背後に佇むエーリヒ・バイ少将に報告した。

「何だと？」バイはロケット指揮管制室の中枢部——テレビモニターが立ち並ぶ先端設備の小区画へ——歩み寄った。バイはオペレーターの肩越しに画面を眺めた。白黒のテレビモニターには、対空火砲を無数に備えた重厚な戦艦が海面を駆っている。「アイオワ級か……」

モニターに映るアイオワ級第2番艦『ニュージャージー』は、第20任務部隊に所属する戦艦だった。重厚な50口径40.6cm3連装砲は、最大射程38,720mで、戦艦として一戦交えれば、アウトレンジの面や数で、最大射程36,250mのハインリヒ・ヴィルヘルム・アーダルベルトは危うかった。ただ、レーダーやコンピュータ、A4の哨戒情報を基にすればその距離や数を補う事は可能だ。

急ぎ足で廊下を進む中、バイはニュージャージーと一戦交える事を決意していた。この巡洋戦艦に搭載された兵装において、唯一対抗出来るのは38cm主砲かA4—TV誘導ミサイルだ。しかし、後者は強力な破壊力を備えず、決定力に欠けていた。

艦橋に到達すると、先頭に立ち、艦長の横に歩み寄った。

「敵戦艦との距離、4万5千ヤード！」電信員が声を張り上げ、報告した。

魔法陣が食い千切られるな……恐れていた事態だ。バイは呟いた。

「空軍の爆撃隊に支援を要請、座標を送信！」

あらゆる面において、ハインリヒ・ヴィルヘルム・アーダルベルトはニュージャージーには勝てないとバイは考えていた。本来、こ

の巡洋戦艦は機動部隊の支援を位置付けられていた。多数のロケット――ミサイルを艦載しているのも、艦船ではなく航空機に対抗する為の意義が強い。

――戦艦など空軍にくれてやる。

悔しげな想いを噛み締めつつ、バイは胸に呟いた。

H Oー229が雄叫びを上げて――天空を駆る。

いわゆる現代のBー2『スピリット』――に相当するその外観を持つH Oー229は『ゲシュペンスト』――幽霊という愛称を持つ。このゲシュペンストは同時に『魂・精神』といった意義も持っている。

アイオワ級第2番艦『ニュージャージー』は砲撃戦を行うべく、ドイツ海軍機動艦隊との間合いを詰めていた。T a183やA r234が事態収拾に努めようと近寄っていたが、周囲には氷山戦艦『エル・ドラード』の姿があり、無数の対空砲火で、ニュージャージー周辺に防壁を形成していた。

「こちら隊長機、米海軍に俺達の実力を見せてやれ!!」

ルーデルが吠え立て、H Oー229のターボジェットエンジンを駆り立てた。戦艦直上は対空砲火の雨が降り頻っていたが、米軍最先端のリーダーもあてにはならなかった。

500kg爆弾の巨躯が――ニュージャージーに覆い被さった。

眩い閃光が海間を切り裂き、第3番砲塔が甲高い悲鳴を上げて碎け散った。地の底から沸きあがったかのような轟音が英仏海峡に響き渡った。その音は徐々に止んでいく。ニュージャージーの艦尾から、炎に彩られた煙の柱が噴き上がっている。刹那、艦橋の一部が爆発して崩れ落ち、鋼鉄の破片と炎と灰の山に化してしまった。

「よし、決まったな」

ルーデルは笑みを浮かべ、軽く息を吸った。「急降下爆撃程の興奮は無いが、それでも……地上勤務よりは良い」身軽になった機体を引き上げつつ、ルーデルは呟いた。

黒煙を上げるニュージャージーに対し、Ar234が怒涛の如く群った。爆弾と機銃掃射の雨が降り注ぎ、同部隊のHo-229もそれに加勢する。

「完璧に潰してやれ、それだけの価値があるからな」

ルーデルは熱っぽさを見せて声を張り上げた。

轟！轟！！轟！！！！

ニュージャージーの50口径40・6cm第1、第2砲塔6門が咆哮し、海面を砲弾が駆け抜けた。魔法陣を形作る一点――1934A型駆逐艦『ヘルマン・シェーマン』は激しい閃光と衝撃を受け――撃沈した。轟音が外気を切り裂いて、火の粉が空に降り注いだ。黒煙が渦を巻いて乱れ、艦橋が煙の中に包まれる中、衝撃がニュージャージーの艦体を揺さぶった。両舷に水柱が立ち昇っている。戦艦『ティルピッツ』、巡洋戦艦『ハインリヒ・ヴィルヘルム・アーダルベルト』の砲撃だ。赤や黄や橙色の炎が立ち昇る戦艦ニュージャージーは、艦体を大きく揺さぶられた。次の瞬間、艦首が大きく浮いたかと思うと、巨大な水柱がニュージャージーを包んだ。艦橋よりも高い水壁が聳え立つその中、一筋の閃光が壁面に煌めいた。

刹那、周囲に眩い閃光と轟音が駆け抜ける。

一瞬の内、4発の38cm砲の鋼の洗礼を受けたニュージャージーは、爆音と悲鳴を上げた。

断絶音が轟いて――引き裂かれたニュージャージーは――英仏海峡に散った。

第63話 第2次英仏海峡海戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第64話 天空の壁

第64話 『天空の壁』

1944年2月24日PM11:49

英国／サウスエンド・オン・シー

C-47『スカイトレイン』機内。息を絶え絶え、米陸軍第82空挺師団のスコット・エバン一等兵は、機窓から眼下に広がるのサウスエンド・オン・シーの町々を一瞥した。サウスエンド・オン・シーは一面光のベールに包まれていて、幻想的な光景だった。一方、漆黒に包まれた空には、眩く輝くC-47とCG-4が集まっていた。

サウスエンド・オン・シーは英国北部、ロンドンから東約65kmに位置する都市で、海岸に面する。

第82空挺師団はこのサウスエンド・オン・シーを制圧すべく、アイルランドから送り込まれた先遣部隊だった。アイルランドは中立国だが、英連邦の一国であった。1943年の秋頃より、アイルランドは米英に防衛協定を結ばされ、飛行場といった軍事施設の保有が認められている。他に米陸軍第101空挺師団、英陸軍第1・6空挺師団も参加している。これらの空挺師団の主任務は、『大西洋の壁』を破壊する事である。C-47等米陸軍の輸送機を用いれば海岸からでなく、内陸から意表を突く事ができ、尚且つ反撃を被る確率も抑えられた。

しかし、英国内の防空網は頑強だった。根幹を成すのは優秀な対空レーダーから形成された早期警戒網で、地对空ミサイルのC-2ヴァッサファルが大量配備された。

地对空――ドイツ陸軍のC-2ヴァッサファルは、海軍用のもの

より利便性に優れていた。『魔法陣』のように駆逐艦や巡洋艦にリーダー誘導ミサイルといった重い足枷を付ける事無く、元は陸軍のミサイルだった事もあり、大西洋の壁伝いに大規模な数が配備された。

他に、ライントホターR-?と呼ばれる地対空ミサイルも配備されている。

ライントホター（ラインの乙女）は固形燃料式地対空ミサイルである。このミサイルは、ラインメタル社が1942年11月から開発を開始した。シリーズ中最後に開発されたR-?型は、無線指令式、全長10.3mの胴体に100Kgの炸薬を搭載、2段階のロケットブースターを燃焼させる事により、マッハ5という驚異的な加速を実現し、発射された。

ただし、到達高度は6000mと低く、史実では大規模な実用化に至らなかった。歴史改変後、R-?を基にアルゼンチンの新生第3帝国時代開発された『R-?』は、到達高度の解消と性能向上が図られている。R-?はR-?同様、レーダー・ステーションから無線で遠隔操作された。

更にV-7『ファイヤーリリー』、Hs117シュメッターリンクといった地対空無線誘導ミサイルと、対空砲陣地による徹底した防空意識により、大西洋の壁の空にも『壁』構築されていた。

C-47の大群が天空のに聳え立つもう1つの『大西洋の壁』に突き当たったのは言うまでもない。英国本土の領空に侵攻して以後、既に半数以上が撃墜された。海岸沿いに備えられたC-2、R-?、V-7、Hs117の類の地対空ミサイルにしてみれば、鈍足で肥満体の旧式貨物輸送機等、相手にもならなかった。カーティス・E・ルメイ率いるB-24『リベレーター』、B-17『フォートレス』、B-29『スーパーフォートレス』の爆撃隊も同様。ロンドン侵攻までの露払いを行うべく用意された5~6000Kgの爆弾は、

初出撃を果たした超空の要塞と共に、使われる事無く役目を終えた。サウスエンド・オン・シーまで到達したC-47の一団は、残り少ない護衛機の助けを借り、空挺降下の準備を始めた。第101空挺師団の空挺兵達のパラシュートが闇夜に見え隠れし始めていた。地平線の上、閃光と衝撃轟かすその先には、十数機かで編成されたB-25の編隊が居た。無数の対空砲火と、C-2ヴァッサファルの煌々とした輝きに照らされた空は、サフラン色に染まっている。B-25はそんなサフラン色の空に、異様な黒い斑点を付けていた。斑点は空を一直線に落ち、紅蓮の華を大地に咲き誇らせた。

「諸君、遊覧飛行はここまでだ」

C-47機内にこだまする声。

第82空挺師団、エバン一等兵の所属部隊の部隊長、ギル・クルーズ軍曹は立ち上がり、甲高い声で告げる。俄かにC-47機内に緊張が走り始めた。機窓には、絶えず護衛のP-51C『ムスタング』の翼を？がれ、炎を漏らしながら墜落する様が映っていた。

この状況で飛ぶのは危険という意識を超えている……。エバンは胸に呟いた。エバン達はクルーズ軍曹同様に腰を上げた。

――扉が開かれる。

猛烈な突風が機内を駆け抜けた。C-47の両翼が軋む音、B-25の爆弾投下音、C-2ミサイルの甲高い咆哮、対空砲火の爆音、護衛戦闘機や別のC-47から響く断裂音……。様々な音が耳に入ってきては、エバン達の不安を駆り立てた。

1歩――2歩――3歩……。身体が宙を浮く。

幻想の如く、C-47に居た過去は通り過ぎ、代わりに眼前には天空が広がっていた。肌を差す2月の夜風は冷たかった。別れを惜しまず、あのC-47は一目散に退っていた。プロペラが空を切る音が響く中、エバンの耳には――もう1つの音が駆け抜けた。

轟！！！

C-47は左翼を？がれ、炎上する。

炎に照らされるC-47のシルエットの横に、もう1つのシルエ

ットがある事をエバンは気付いた。

Ba349『ナッター』。

1944年10月、エーリッヒ・バツヘム博士による設計の元、開発されたこの航空機は空軍の迎撃戦闘機である。機体は重要な戦略物資の使用制限から木製、エンジンはヴァルター式液体ロケット機関を動力源とし、77mm無誘導ロケット弾24発か55mmロケット弾33発を装備する。垂直に設置されたレールから4基の固体ロケットブースターで発進し、無線誘導で敵機に接近、機首に装着したロケット弾で攻撃するというものだった。パイロットは実際に操縦は行わず、無線誘導で生じる微妙な方向のずれを調節、修正・維持と攻撃の引き金を引くという操作のみに限定される。

優れた迎撃機ではあったが、航続距離が極端に少なかった。その為、パイロットは燃料切れと共に外部へと脱出、機体もパラシュート降下させ、貴重なエンジンを回収出来るようになっていた。

C-47を攻撃した機は、航続距離の向上を図ったB型の改良版、C型である。C型は更なる航続距離の向上と、パイロットの安全の保障を焦点に開発されている。

エバンはパラシュートを広げ、風に乗った。

Ba349は漆黒の空を駆り、無数の光の弾を発射した。残り少ないC-47はそれで壊滅した。Ba349は遙か彼方まで駆けていくと、パラシュートを開いて降下を始めた。

無数の純白の華が咲き乱れる中、徐々に華がその姿を消していった。第82空挺師団兵達は無事、地上へと到達したサインだった。しかし、既に降下時点で半数が消えていた。

——クルーズ軍曹の姿が視界に映る。クルーズ軍曹は手を振った。数分後、エバンは大地に両手を付いていた。土の味を噛み締め、地面から顔を離す。

エバンがふと、空を見上げると、既にC-47らしき姿は無かった。撃墜されたか、緊急離脱したか、どちらかの道を取ったのは確かだった。代わりに、無数の軍用グライダーの姿があった。

第2波の奴ら……やっとな追いつきやがったか……。

エバンはCG-4の大群を見据え、笑みを漏らした。

第64話 天空の壁（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第65話 空挺師団の危機

第65話『空挺師団の危機』

1944年2月25日AM00..24

英国／サウスエンド・オン・シー

漆黒の空を埋め尽くすCG-4軍用グライダーの大群を見据えていた第82空挺師団スコット・エバン一等兵は、サウスエンド・オン・シーの町々を一瞥し、彼方に見える重厚な大砲の輪郭に目を引かれた。サーチライトの漏光に照らし出されたその大砲は、冬の暗い空を背景に輝いて、計り知れない力を放っている。

「……あれが俺達の標的だ」

第82空挺師団のギル・クルーズ軍曹は言った。

クルップK5。クルップ社によって開発された列車砲クルップK5は、史実大きな成果を上げた列車砲だった。1944年のアンツィオでは、数発の攻撃で海岸堡を壊滅に追い込んだ。ドイツ陸軍C軍集団を統括するエルヴィン・ロンメル元帥は、海岸で連合軍上陸部隊を壊滅すべく、サウスエンド・オン・シー栈橋鉄道にこのクルップK5を配備した。その破壊力は史実同様、有り余る破壊力を前にすれば米軍の猛者であろうと命の保証は無かった。破壊するには艦砲射撃・航空爆撃が必要だが、海洋の『魔法陣』や陸上の防空網の前には、2つの攻撃が実現する手立ては無かった。

第82空挺師団の任務は、このクルップK5の破壊である。

「問題ありません」

エバンはコンテナを開けて言った。中にはM1ガーランド、トン

プソンM1、M1A1バズーカ、そしてC2爆薬が満載されていた。C2爆薬は可塑性を持つ混成爆薬で、第2次大戦時には重宝された爆薬である。RDXを主成分として造られた新型プラスチック爆薬のC2は、現在でもSWAT等で使用されている。

クルップK5の配備されたサウスエンド・オン・シー栈橋鉄道は、その名の通りサウスエンドピアの栈橋に敷設された鉄道である。全長2.1Kmに及ぶ栈橋に敷設された鉄道網は海沿いに敷かれ、最大射程6万2000mを記録するクルップK5の砲であれば、沿岸に展開した艦船でさえ対抗出来る。周辺地域はC2ヴァッサファルの誘導レーダーと発射装置が配備されていて、航空機も迂闊には近付けない。更に栈橋のみならず大地にも線路が増設されている。

「栈橋は補強されているだろう。元は軽便路線だから」クルーズは言った。「だが、C2爆薬を栈橋の基礎部に設置すれば、破壊する事が出来る」

「了解しました」エバンは答えた。

クルーズは頷き、クルップK5に再び視線を向けた。「上手く行けば、あのデカ仏もろとも海に沈める事が出来るかも知れん。C2を多く持って来て置いて良かったな。奴は上陸部隊に即時対応する為、あえて栈橋に居座ってる」クルーズは渋面を浮かべた。「だが、あの図体だ。奴は長時間栈橋に居る事は出来ない筈、直に作戦を実行に移した方が良さそうだ」

M1ガーランドを掲げ、2人は歩を進め始めた。後ろからはCG-4で強襲突入してきた空挺兵達が追って来ている。英陸軍第1空挺師団の空挺兵達も近くに居た。総勢からすると圧倒的にサウスエンド・オン・シーのドイツ陸軍に負けている。第82空挺師団に至っては半数が壊滅した状態だ。

サウスエンド・オン・シーの町に突入すると、漆黒の中からドイツ兵の姿が唐突に現れた。

樹木に隠れると、エバンはM1ガーランドライフルの銃口を立て、照準を合わせた。「ファイア！」銃口から30-06スプリング

フィールド弾が解き放たれ、ドイツ兵の胸元を貫通した。

「やった！」エバンは歓喜の声を漏らした。「リメンバー・ポーツマス」だ」

力無く崩れ落ちた兵士の背後には、既に別の兵達が迫っていた。圧倒的軍勢だった。

「これはまずいな……」クルーズは渋面を浮かべた。漆黒を身に纏い、重厚な鉄兜を被り、精度の高い技術力の結晶が如き自動小銃を抱える兵士達。それは第2SS装甲師団だった。

第2SS装甲師団『ダス・ライヒ』は精鋭揃いのSSの中でも、特に優れたエリートが集まった部隊だった。ソビエト・ノルマンディ・アルデンヌといった主要戦に幾度も参加、大きな戦果を出していた。歴史改変後、英本土上陸戦の中盤から終盤に掛けて師団は投入されており、米英空挺師団に比べて圧倒的な経験と戦力を備えている。

第2SS装甲師団の兵士達は黒みがかった迷彩服に重厚な鉄兜、そして不気味なガスマスクといういでたちをしていた。その姿は地獄の騎士とでもいった具合だ。異様な感触をエバン達は覚えたが、それが対サリン・ソマン用の特殊ガスマスクとは知る由も無かった。

1944年2月25日AM00…39

サウスエンド・オン・シーの町の一角、第2SS装甲師団『ダス・ライヒ』野戦司令部では、重大な戦略攻撃の有無の判断を待っていた。第2SS装甲師団師団長、ヴァルター・クリューガー中将は無線機の前に座り、ただただ命令を待つ間、戦略攻撃について考えていた。

第2SS装甲師団には、サリン・ソマンという2種類の大量虐殺兵器が配備されている。これは殺傷能力が非常に高く、摂取量によ

つては数分で症状が現れる。その2種類は弾に詰められ、ネーベルヴェルファー等で発射するという具合である。第82、101空挺師団が英国本土領空に姿を見せた時、攻撃目標とされたサウスエンド・オン・シーでは既にネーベルヴェルファーが配備され、発射用意が整えられていた。現在、全機が発射可能だが、それを良く思わなかったのがロンメルであった。ロンメルは第2SS装甲師団のみの戦力で対応出来ると考え、逆にサリン・ソマン使用が師団を壊滅させかねないとして危惧した。治療薬、ガスマスク等が未熟なのを考慮しての事だ。

しかし、それに陸軍将校達が不快感を示し、ヒトラーに具申した結果、化学兵器使用は一時停止されてしまった次第だ。こうして、米英空挺師団の侵入は成功してしまった。

クリューガーはロンメルの意見には賛成していた。化学兵器は取り返しの付かない事態を生み出してしまいう危険性がある。むやみに使えば、自分の首を絞める事になるだろう……。しかし、総統の命令があらば絶対だ。

クリューガーは苦面を浮かべ、無線機に視線を戻した。

1944年2月25日AM01:03

サウスエンド・オン・シー上空。

DH・98『モスキート』夜間戦闘機は黒塗りの空を一直線に駆け抜ける。

英空軍のジョン・カニング中佐は、強烈な閃光に一瞬視界を奪われた。英空軍のエース・パイロットである彼は動じず、冷静に機体を操って対空砲火を逃れた。DH・98のAI-Mk.？機上レーダーが震動を発し、V型12気筒液冷レシプロエンジンが唸り上げる。

機体にダメージは無かったが、背後を続くアブロンカスターの

数機が落とされ、カニングムは渋面を浮かべた。英第1、6空挺師団を援護すべく到着したこの爆撃編隊は、既に攻撃を行ったB-25同様、多数の機が撃墜されるという事態になっていたが、その数はB-25よりは少なかった。理由はDH-98のエスコートが優れていた為である。

元々、DH-98は木製である為、レーダーに察知され難いという利点や機動性に優れているという利点を備えており、Me262程度であれば状況によっては勝利する事も出来た。

カニングムの眼前には、サウスエンド・オン・シーの町々が広がっていた。無数の光柱が大地から漆黒の空へと聳え立っている。また、町から唐突に現れたTa183やBa349といった迎撃機の姿も確認出来た。Ba349は高速で爆撃編隊に接近していた。

Ba349のパイロットの多くは、英国に新設された傀儡政府の政府空軍兵である。Ba349は無線操縦式なので、熟年パイロットも必要としないが、エンジントラブルで墜落するという事故は少なくなかった。例えば脱出したとしても、生き残るという確証も無かった。

そこで考えられたのが、死亡しても何ら影響の無い傀儡政府空軍——言わば英国の裏切り者や、元英空軍だった捕虜達をパイロットとする案だった。これなら人的資源を損失を防ぐ事ができ、更には無謀な戦闘に参加する事も出来た。

Ba349は迫る。

DH-98からその光景を見たカニングムは、渋面を浮かべる。背後のアブロンカスターの編隊が乱れ始め、恐怖が伺い知れた。町はすぐそこだった。V型12気筒液冷レシプロエンジンが唸りを上げ、木製の機翼が鈍い音を立てた。英第1空挺師団や米第82空挺師団が乱戦を繰り広げる地点が見え、カニングムは空挺師団の危機を悟った。

DH・98の機影が見え隠れする空の下、サウスエンド・オン・シーの町の中では、第82空挺師団と第2SS装甲師団『ダス・ライヒ』との熾烈な戦闘が繰り広げられていた。ろくな対戦車兵装を持たない第82空挺師団の前には、パンター戦車が聳え立つ。

？号戦車——『パンター戦車』の名称で知られるこの戦車は、ドイツ陸軍の新型戦車である。新生第3帝国時代に開発された改良型を基に再開発されたパンターは、ガソリンエンジンからディーゼルエンジンに転換され、主砲は88mm戦車砲が搭載された。足回りの問題もある程度解消されているが、やはり幾つかの問題は否めない。とはいえ、M4程度の戦車であれば軽くあしらえた。

そんなパンター戦車を前に、第82空挺師団のエバンはM1A1バズーカで対抗しようとしていた。M1の実戦投入は数ヶ月前、アイスランドで行われた米独間の戦闘が初だが、第82空挺師団で使われた事はまだ一度も無かった。その為、M1A1から放たれた60mm弾はパンター戦車を大きく逸れた。

パンター戦車は——その砲身を第82空挺師団の兵士達に定めた。

第65話 空挺師団の危機（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第66話 沿岸列車砲ヲ破壊セヨ

第66話『沿岸列車砲ヲ破壊セヨ』

1944年2月25日AM01…36

英国／サウスエンド・オン・シー

第82空挺師団のスコット・エバン一等兵の心臓は今や早鐘を打っていた。驚愕し、M1A1バズーカの砲身は震えていた。再び手を伸ばして60mm弾を掴み、素早く傍へ寄せた。その眼前に迫っていたパンター戦車を信じられない思いで見つめる。

――倒せるのか……。

エバンは手を止め、呆然と戦車を見据えた。

「おい、何してる!？」部隊長、ギル・クルーズ軍曹はエバンの肩を揺さぶり、強引に身体を引き起こした。「一時撤退だ」パンター戦車の88mm戦車砲から逃れるべく、塙伝いに駆け抜ける。

「英雄になるのはまた次の機会だ」壁を警戒の目で睨みつつ、クルーズは言った。

エバンは頷いた。心臓は今だ早鐘を打っている。戦場となった広場から、逃げ遅れて張り付けにされている第82空挺師団の兵達が抵抗を続ける銃声が響いていた。後ろからは部隊の仲間が3人続いでいて、彼等も同様にパンター戦車の猛攻から難を逃れていた。

5人ともしばし無言で立ちすくみ、一様に壁脇から広場を覗いていた。

ブーン……ブーン……。

耳に響く微かな振動音。何を意味するのか、エバンは悪寒を覚えた。

ブーンブーン……。

連続する振動音、音量が少しずつ増していた。何かが近付いている。

ブーーーーーーン！！

5人は何が起こっているのかに気付いた。恐る恐る上空を見上げた。漆黒の空は無数の対空砲火の火花とサーチライトの閃光に照らされていて、闇に蠢く数十機の航空機の姿を見つけた。周辺に布陣していた英陸軍第1空挺師団の面々がそれに気付き、歓喜を漏らし始めていた。

「DH・98『モスキート』、英国人の考えた夢の戦闘爆撃機」クルーズは空を見上げながら言った。「白アリにとっては……だろうが」

それは爆撃編隊のエスコートを担うDH・98だった。Ta183やBa349からアブロランカスターを守るべく、周囲に張り付いている。

その内3機のDH・98は低空飛行を始め、戦場となる広場に迫っていた。米第82、英第1空挺師団と第2SS装甲師団『ダス・ライヒ』との間に機銃の嵐が吹き荒れ始めた。4門のイスパノ・スイザHS・404機関砲が咆哮を上げ、石畳の大地に無数の20mm弾を打ち付けた。砕けた破片は宙を舞い、埃が立ち昇る。20mm弾はパンター戦車の装甲にも叩き付け、引き裂いた。

パンター戦車が悲鳴を上げる。

夜気を震わす重々しい轟音が響いた後、88mmの主砲は湾曲していた。

「やったぞ！」米英空挺兵達は雄叫びを上げ、パンター戦車の末期の声を聞き取った。戦車内部から燃烧が生じ、第2SS装甲師団の黒焦げになった迷彩服が姿を見せた。全身が黒く焼き爛れたその姿は、顔面を覆うガスマスクや漆黒の迷彩服と合間い、まるで影のようだった。

続いて、D H・ 9 8 の 7・ 7 m m ブローニング機関銃が炸裂する。背後に展開していたパンター戦車は D H・ 9 8 の攻撃に耐え切れず、後退を開始していた。旋回する D H・ 9 8 は再度、ブローニング機関銃で攻撃し、第 2 S S 装甲師団兵を牽制した。

「やるじゃないか」クルーズは笑みを漏らし、D H・ 9 8 を見据えた。「大したものだよ」広場中央、パンター戦車を中心に燃え盛る炎は巨大な壁を形成し、第 2 S S 装甲師団を阻んでくれている。米第 8 2、英第 1 空挺師団に撤退の機会を造るチャンスが出来た訳だ。両空挺師団は一時撤退した。

1944年2月25日 A M 0 4・ 0 9

暁。空に紅色の帯が生じ始める。

D H・ 9 8 に率いられたアブロ Lancaster 爆撃編隊の航空支援により、クルップ K 5 までの道は既に出来ていた。サウスエンドピアの栈橋鉄道までは数キロの距離で、クルップ K 5 は今だ栈橋に健在だ。第 8 2 空挺師団は英第 1 空挺師団と協力し、クルップ K 5 破壊作戦の遂行を開始した。

「よし、そろそろ始めるぞ。腰を上げろ！」

第 8 2 空挺師団の各部隊を束ねるウィルソン大尉の声が唐突に響き、夢現の中からエバンは起き上がった。M 1 ガーランドを抱え、視線を町の反対側に向ける。爆撃を受け、大半の住居は崩壊していて炎は今だ燃えていた。

何か変だ。

撤退から 2 時間、第 2 S S 装甲師団は何の攻撃も与えて来なかった。米英 2 個空挺師団とはいえ、敵の戦力は圧倒的優勢な筈だ。むしろあの広場の時のように戦車を投入し、潜伏先の建物に張り付けた方が得策では無いだろうか……。エバンは嫌な予感を感じた。第 8 2 空挺師団の他の兵達も、エバンのように妙な胸騒ぎを感じ取

っていた。

刹那、その胸騒ぎは現実と化した。赤い帯を纏った空に複数の黒点が現れたのだ。黒点は徐々に大きくなっていく。一定時間空中で弧を描くとやがて地上に――落ちた。

それは一種の弾で、尾に白煙をたなびいていた。筒状の形態から迫撃砲か何かの弾だとは分かるが、それ以上には理解出来なかった。発射された弾は全部地上に着弾しても爆発しなかったので、空挺師団兵達は全員不発弾だと思い込んだが、それは大きな間違いだった。

SS第2ロケット発射機大隊。

大隊の兵士達の前、横一列に並べられたNbW35は、10cm口径の化学戦用迫撃砲である。有効射程は3,025mで、史実では化学兵器が使用される事は無かったが、歴史改変のこの世界においては、第3帝国としては初めて使用される毒ガス発射兵器として、その名を歴史に刻む所となる。

NbW35から次々とサリン搭載弾頭が放たれ、それが空中で弧を描きながら第82空挺師団や第1空挺師団に降り注いだ。

サリンは呼気のみならず、皮膚からも吸収される。

危険を覚え、第2SS装甲師団兵の顔から抜き取ったガスマスクを着けようが、毒ガスとの接触を避ける事は出来ない。それどころか、米英空挺師団はほんの序盤攻撃を受けているに過ぎなかった。

第2波として、NbW35に装填されたのは『ソマン』だった。ソマンは過去ドイツで開発された毒ガス兵器のタブンやサリンよりもその毒性が強い。肝心の解毒薬であるPAMも、ソマンの性質上から数分の内に投与しなければ意味を持たない。

第2波となる毒ガス弾が米英空挺師団を襲った頃、既にサリンの症状が兵士達に現れていた。

目眩や頭痛、腹痛といった軽症は後方展開した兵士達に現れた。エバンやクルーズはその部類に位置する。中等症――軽症とともに顔面蒼白、錯乱、興奮状態に陥った兵士達は中間に展開していた者

が圧倒的数を占めていた。

最後に、先頭を行っていた、自ら砲弾に触れた兵士達は――皆一様に倒れた。失禁、呼吸困難、意識混濁、昏睡、全身麻痺といった具合に症状が現れ、行軍不能状態に陥った。第82空挺師団を束ねるウィルソン大尉も例に漏れず昏睡状態に至った。

この状態では撤退止むを得ず……だったが、そこそが狙いだっただ。背後から第2SS装甲師団兵達が唐突に現れたのだ。複数のパンター戦車を引き連れていた。漆黒のガスマスクと特殊な防護服は、この異常事態の真実を物語っていた。

「両方……挟みうちだ」

第2波の砲弾の雨と、黒服のSS装甲兵達を交互に見ながら、MK2手榴弾を握り締めるクルーズは言った。パイナップルの愛称で知られるMK2を32m先へ投擲した。爆音が周囲に轟く。

破片が防護服を切り裂き、知らず知らずの内に第2SS装甲兵の一部は曝露してしまった。

パンター戦車の接近を察知し、クルーズはエバンを連れて駆け出した。

「ここからは単独行動と行こう」クルーズは言った。「別部隊が生きてたらいいが……指揮系統も崩壊した今でも、部隊が機能していたら――の話だが」

第2ロケット発射機大隊は任務活動を停止した。主要目的の大部分を果たしたからだ。後は戦車連隊や装甲擲弾兵連隊が相手をしてくれる。初期行動は完璧な奇襲攻撃となり、無知な米第82空挺師団及び英第1空挺師団は大規模の曝露者を生み出す事となる。

しかし、これで終わりでは無かった。サリン・ソマンといった化学兵器のデータを多くでも報告されないよう、米英空挺師団を殲滅する必要性があった。

サウスエンドピアの栈橋。

第4装甲擲弾兵連隊の蠢くその地点には、少数の生き残りから成る第82空挺師団の姿があった。クルーズ主体の爆破部隊である。既に曝露し、戦力的に考えてもサウスエンド・オン・シー占領は夢のまた夢であった。彼等もその事には薄々気付いていた。

サウスエンド栈橋鉄道には、クルップK5の姿があった。21.5mの長さを持つ重厚な砲身は海を向いている。米英空挺師団撤退後、一時栈橋から離されていたが、師団の状況や海の様子の変化を受け、指定の持ち場へと戻って来ていた。

「C2を無駄にするなよ」

クルーズはそう言い、咳込んだ。顔は白掛かり始めている。部隊は間に合わせとはいえ、数はある程度揃っていた。その為、陽動と爆破の2班に分けて作戦を実行する事になった。クルーズ、エバンらは爆破チームである。

クルップK5は栈橋に居座っている。今がチャンスだ。

陽動班の銃声が轟き、戦闘が始まった。爆破班も急いで栈橋へと駆け寄る。

刹那、クルーズのM1ガーランドが咆哮す。30-06スプリングフィールド弾は装甲擲弾兵を襲い、再起不能にした。

栈橋を駆け降り、基礎部の僅かな足場にエバンは両脚を着けた。ありったけのC2を基礎部に巻き付け、海面へとダイブする。他の兵士も各基礎部にC2を取り付け、海に逃げる。

瞬時にして炎の筋が現れ、閃光が煌めいた。

その刹那――クルップK5は光に包まれた。

RDXが膨大な火炎を生み出して噴き上がり、栈橋を突き破って空に舞い上がった。栈橋はドミノ式に崩れ、海の藻屑と化す。そんな光景を、エバンは見る事が出来なかった。

最中、クルップK5は運行を開始した。崩れ落ちる栈橋を目の前にし、車体を軋ませながら徐々に陸地へと脚を伸ばしていく。

そんな栈橋の下、クルーズは海を泳いで何とかクルップK5の直下まで到達した。C2が湿って使い物にならないよう右手で天高く

掲げ、必死に片手と両脚を駆使して、執念で辿り着いた。基礎部にC2を貼り付け、海面に身を投じ、間合いを計って――起爆した。陸地へ向かうクルップK5に、突如閃光が走った。足場が音を立って崩れ落ちる。

200t以上の巨体が海面を叩き付け、高波と波紋が生じた。爆発と轟音の末――クルップK5は――最期を迎えた。

第82空挺師団はその時、終焉を迎えていた。

クルップK5破壊任務には成功したものの、圧倒的戦力差と指揮系統の崩壊を受け、壊滅した。町制圧を中心に動いていた米陸軍第101空挺師団もまた、圧倒的な戦力差と毒ガス兵器の攻撃を受けて、数日後に壊滅を迎える。英陸軍第1、第6空挺師団も同様に壊滅した。

こうして、米英上陸部隊はクルップK5という1つの障害からは逃れられたものの、空挺師団のサウスエンド・オン・シー制圧は失敗、上陸は困難を極める所となった。毒ガス兵器使用の許可が降ろされ、上陸地点はSS第2ロケット発射機大隊によって攻撃準備が整えられた。

第82空挺師団のスコット・エバン一等兵は高波に吞まれ、溺死。

ギル・クルーズ軍曹は爆破作戦から2時間後、毒が回り――死亡した。

第66話 沿岸列車砲ヲ破壊セヨ（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第67話 スレッジハンマー作戦

第67話『スレッジハンマー作戦』

1944年2月25日AM06・32

英国南東岸。扇状に広がっていく航跡の前方には、無数の上陸用舟艇が勢い良く海を駆っていた。20,000隻以上が造られたベストセラー小型舟艇『LCVP』を始め、主力人員用上陸舟艇『LCP』、『LCA』、車両用中型上陸舟艇の『LCM』、歩兵用の大型上陸用舟艇『LCI』が並び、海面を割って進んでいく。その先には、英国本土の大地が広がっていた。

LCVPは飛沫を上げ、海岸に乗り上げた。ハッチが開き、米陸軍兵が飛び出した。

『大西洋の壁』を乗り越えまいと、M1ガーランドやその類の銃器を空に掲げ、海水に浸さないようにして大地に足を踏み締めた。その後ろから、LCPが続く。

刹那、空に無数の黒点が現れ、上陸した米陸軍兵に降り注いだ。それはSS第2ロケット発射機大隊の攻撃だった。更にもう一度、黒点が姿を見せる。

内陸の方に目を向けると、あの第2SS装甲師団の兵士の姿があった。対化学兵器用の防護仕様となった漆黒の迷彩服と特殊なガスマスクは健在で、機関銃の巢やトーチカを始め、12基の15cm K39沿岸重砲台やカチューシャをコピーした8cm24連装ロケット砲と、相手側の戦力は圧倒的だった。

米陸軍第7軍第2歩兵師団は上陸し、ドイツ軍の洗礼を受けた。グロスフスMG42機関銃の十字砲火が防御陣地を強化し、15cm K39沿岸重砲が大地を揺るがし、海岸を閃光に包み込んだ。空

はネーベルヴェルファアの10cmサリン弾と8cmロケット弾によって覆い尽くされた。

黒色火薬の燃焼する炎の光が朝陽越しに煌めき、重力に従って2種類のロケット弾は緩やかなアーチを描きながら地面に落下した。第2歩兵師団は毒ガスと鉛片を五月雨式に喰らった。

序盤から、連合軍上陸部隊は劣勢に立たされていた。

Operation—Sledgehammer—『スレッツジハンマー作戦』は各コード・ネームが名付けられた英国南東岸の5管区——サウスエンド・オン・シー（オマハ・ビーチ）、フォルネス（ソード・ビーチ）、シリアネス（ゴールド・ビーチ）、ハインベイ（ユタ・ビーチ）、ラムズゲート（ジュノー・ビーチ）から上陸し、一路ロンドンを目指すというものだった。各所には戦略的に有用な拠点が複数存在しており、それらの掌握若しくは破壊が主任務といえた。オマハ、ソードを米軍、ゴールド、ユタを英軍、ジュノーを加軍と、担当を大まかに区切っているが、必要に応じて別軍の投入もある。

特に重要なのはオマハ、ゴールドであった。サウスエンド・オン・シーは5管区内では最もロンドンに近く、精鋭の第2SS装甲師団が駐留している。

一方、ゴールド・ビーチというコード・ネームを付けられているシリアネスには、元英海軍所有だった海軍工廠があり、ドイツ海軍機動艦隊にとっては重要な戦略拠点だった。結果として、ゴールド・ビーチには米第1歩兵師団と英第50歩兵師団が展開している。

この米英2個師団に対しては無論、シリアネスのドイツ海軍も黙ってはいなかった。

シリアネスにはサリン・ソマン・SAK（部分的使用）化学弾を搭載したネーベルヴェルファア、8cmロケット弾発射器、シュトルムティーガー、パンター戦車、C2・R—?・V—7・HS11

7といった地对空ミサイルが大量配備され、更に15cm K39沿岸重砲も多数設置されている。今だ英仏海峡に展開する『魔法陣』によって身動きの取れ辛い空母艦載機やアイルランドからの爆撃隊はこの地域の準備爆撃を殆ど行えておらず、唯一の頼みの綱は艦砲射撃のみだった。

このような準備の整っていない状況下で上陸を強行したのは、ドイツ海軍機動艦隊やドイツ空軍爆撃隊による攻撃が原因で、既に大半の艦艇が危機的状況に陥っていた現状を危惧しての事だった。沿岸砲や機動艦隊は勿論の事、ドイツ空軍のHö-229から成る幽霊艦隊、Ar234やTa183等のジェット機の猛攻、更には鹵獲したアブロンカスターや米国本土爆撃機であるHö-18による大規模爆撃と、多重の攻撃は連合軍艦隊を苦しめ、多くの艦艇を沈める事となった。

ペンシルベニア級戦艦第2番艦『アリゾナ』艦橋。

米陸軍第7軍を指揮統括するジョージ・S・パットン中将は、双眼鏡の小口径のレンズ越しに、水平線の彼方に見える大地の姿を見張っていた。横では副司令官のオマール・N・ブラッドレー少将が同様に双眼鏡を掲げていた。

「……今回は危険な賭けだ」

パットンは双眼鏡を下し、ブラッドレーに呟く。そんな2人を尻目に、アリゾナは3基の35.6cm砲を咆哮させ、鋼鉄の雨をゴールド・ビーチに降り注がせた。

「司令、第82空挺の最後の報告を聞きましたか？」ブラッドレーは渋面を浮かべた。「第82空挺の生き残りからの無線報告では『毒ガス攻撃』と『列車砲破壊』が連呼されたとか……」

「“西部戦線異状なし”の再来——あの輝けるが最低最悪の第1次世界大戦の再来だよ」パットンは眉を顰め、呟いた。「ガスマス

クを被せたから問題は無いと思うがな」

パットンの予想とは裏腹に、ゴールド・ビーチでは曝露者が続出していた。上陸地点の海岸はサリン・ソマン・S A Kが充満しており、ガスは露出した肌や目から侵入、神経中枢に甚大なダメージを与え、死に至らしめる。サリン・ソマンの平均的な死亡時間は約1～3時間、S A K——いわゆるV Xガスに関してはそれ以上に早い時間で死に至らしめる事が出来た。但し、S A Kはその危険性故、大々的に使う事が出来ず、制約があるのが現実だった。

L C V Pが多数揚陸する中、空をアブロンカスターが駆け抜ける。

このアブロンカスターは英国傀儡政府空軍の機で、T a 1 8 3に守られていた。ランカスターはこれまでドイツ軍を苦しませてきたが、英国陥落後、ドイツ空軍や傀儡政府空軍の主力爆撃機の1つとして、大規模な航空支援を行ってきた。

ランカスターは旋回し、無数の焼夷弾を海岸に投入する。一度、海岸は火の海と化し、米第1歩兵師団や英50歩兵師団の兵士達を焼き尽くした。同時に上陸用舟艇に爆弾が降り注いだ。

成す術も無く、米英両師団は海岸を奔走し、逃げるしか道が無かった。

唯一の希望とも言えるM 4戦車を水陸両用式に改造した戦車、シャーマンD Dも生物・化学兵器に対応出来るフィルター付きの与圧装置が無い以上、S A Kガスの侵入を防ぐ事も出来ず、非力としかいいようが無かった。結果、戦車内部で死亡する人間が相次いだ。

もっとも、史実同様に沖合いから発進したシャーマンD Dの多くは波を被って沈没している。

5管区における戦闘は最初から破綻していた。連合軍の暗号は既に筒抜けで、大まかな上陸地点に対する対抗策は滞り無く施されて

いた。

5つのビーチの内、加軍の担うジュノー・ビーチ―ケント州サネット島の海岸沿に位置するラムズゲートでは、加陸軍第3師団が上陸中止を余儀無くされる程までに劣勢に立たされていた。そもそもジュノー・ビーチは5管区の中でも目標のロンドンから1番遠く、且つ戦略的利用価値も低い地区だった。加軍がこの地域を掌握しようとした理由は、万が一作戦が失敗した場合、撤退してきた別の管区の連合軍部隊を匿い、安全を確保する砦として機能させるという――撤退完遂までの臨時拠点だった。

また5管区の1つ、英軍目標のユタ・ビーチ―ハーン・ベイは最寄の都市、カンタベリーを落とす為の拠点地であったが、ここもまた危機的状況に至っていた。英軍としてはカーン・ベイを落とし、カンタベリーを落とし、内陸――背後からシアネスに侵攻するという計画だった。

――しかし、それもまた計画倒れに終わりつつあった。

第67話 スレッジハンマー作戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第68話 ミステル（前書き）

・『Ju287』性能諸元

全長…19.70m

全幅…19.40m

全高…5.70m

翼面積…58.4?

エンジン…ターボジェットエンジン×2基

最高速度…1,020km

巡航高度…12,300m

航続距離…2,500km

武装

固定兵装…MG131機関銃×2

爆弾…4,500kg

Ju287はドイツ空軍の主力ジェット爆撃機。アルゼンチン新生第3帝国時代の後世、史実同様にソ連軍によって捕虜となったユンカース社のドイツ人技術者達の潜在記憶によって生み出された。ソ連空軍の試作機、EF-140を基に開発された機で、強力なジェットエンジンにより高機動性を実現している。

第68話 ミステル

第68話 『ミステル』

1944年2月25日AM10・46

英仏海峡の遙か上空、灰色の白い綿が積み重なった様な積乱雲が不気味に蠢き、蒼い閃光が駆け抜けた。嵐が近付いている。そんな中、闇に染まりかけた太陽の光が、達磨に似た不思議な機影を空に映し出していた――いわゆる『ミステル』と呼ばれる爆撃システムである。

M i s t e l――ドイツ語で『ヤドリギ』の意を持つ特殊な爆撃システムであるミステル、元は爆撃機が戦闘機を曳航して飛行すれば遠距離でも護衛戦闘機を付けられる事が出来るのではないか？――という発想を端に発している。DFS（ドイツ滑空機研究所）ではこの形式を1940年から研究を開始、このミステルはその研究の中で確立され、発展したものである。

1943年、航空省が興味を示し、Ju-88A-1の上にBf 109Fを搭載した形式の実験を命令、同年秋にはDFSが実験を見事成功させた。その後1944年4月、1,725kgの弾頭を積んだ機が厚さ18.5mのコンクリート壁を破壊する実験に成功、同年6月24日、ノルマンディー上陸作戦時に投入、漆黒に包まれた英仏海峡において、数隻の封鎖艦を撃沈した。

基本的な形態としては、目標に突入する無人機と、その付近まで誘導する有人機とが結合した形態をとっている。下部――まるで魚雷か爆弾のように有人機に取り付けられた無人機は、機首に大量の爆弾を搭載し、その上部に結合された有人機――単発単座戦闘機に乗ったパイロットが目標近くまで誘導して切離して目標に突入させ

る。それぞれの機は現存のものが流用され、無人機は専らJ u 8 8、誘導を担うのは軽快な機動性を持つ戦闘機、B f 1 0 9やF w 1 9 0が用いられていた。

中にはM e 2 6 2とJ u 2 8 7の組み合わせも考えられていた。

今世界ではその形態を発展させた――T a 1 8 3とJ u 8 8、T a 1 8 3とJ u 2 8 7という組み合わせが生まれていた。この組み合わせは究極といってもよかった。ミステルの欠点を解消したからだ。ミステルは基本的に目標近くまで接近する為、攻撃に精密性を備え、尚且つ1・8 tに及ぶ爆弾を搭載した機を猛スピードで直撃させる為、破壊力も絶大だった。しかし、戦闘機に爆撃機を繋ぐという戦闘機の機動性を著しく低下させる形態のミステルは敵戦闘機に捕捉されたら助かりようが無い為、敵の制空権下では殆ど使用出来なかった。また、ミステル自体がドイツ劣勢下の1944年6月に実戦投入されたという事もあり、運用目標は艦船ではなく、地上の建造物を破壊するのみに留まっていた。

そんなミステルの組み合わせとして確立されたT a 1 8 3とJ u 8 8の形態は、第1世代ジェット戦闘機の傑作機であるT a 1 8 3の高速性と機動性を用いる事で、制空権下でも広く運用する事が可能となった。更に、ジェット航空機に代替する中で荷物となったJ u 8 8を有効廃棄する事が出来た。本来のミステルも、そもそもは老朽機であるJ u 8 8の有効な廃棄手段として考案されたものだった。

ジェット機同士となるT a 1 8 3とJ u 2 8 7の組み合わせは攻撃力を重視した形態である。J u 2 8 7は2・5 t規模の爆弾を機首に搭載出来た。J u 2 8 7は貴重なジェット爆撃機だったが、重防衛拠点の撃破で非常に重宝された形態だ。その為強固な要塞や戦艦に対して、この形態が用いられた。

T a 1 8 3とJ u 8 8のミステル――は『魔法陣』の対艦ミサイ

ルとしての役割も担っていた。機首に1.8tもの爆弾を備え付けたJu88は突入時の運動エネルギーも加わり、神風の何倍にも相当する破壊力を加えられる。その攻撃力は重厚な戦艦の艦体すら簡単に貫き、空母であれば撃沈は必至だった。対ジェット機戦略を取った米英機動艦隊にしても、それは予想外とも言える攻撃だった。無論、Ta183を用いても必ず高成果を出せる訳では無かった。ただ、生存性は高かった。

ミステル機は基本、新設された第200爆撃航空団に所属していた。第200爆撃航空団——通称『KG200』は史実、1944年2月20日に編成された爆撃部隊である。工作員の輸送、日本への特別貨物輸送、長距離偵察を軸とし、ミステルも加わっていた。この部隊の任務はそれだけでは無く、回天や神風のような人間兵器を用いた任務も行っていた。

今世界において発足したKG200はミステルを始め、Ho-18から成る米国本土爆撃隊、諜報活動の支援を専らの任務としている。

KG200第？飛行隊に所属するフォルクマール・シエルナー少尉はTa183の操縦席から、英仏海峡で展開している米機動艦隊に目を光らせていた。艦載機——F6FやF4Uの大編隊は空を占拠している。シエルナーは飛行中、ペンシルベニア級戦艦第2番艦『アリゾナ』や、エセックス級航空母艦第3番艦の姿を捉えていたが、彼の狙う獲物はもっと大きかった。

シエルナーが息を漏らしたのは数分後の事だった。

連合軍艦隊旗艦、氷山戦艦『エル・ドラード』は其処に存在した。110万tにも及ぶ排水量を誇る超大型戦艦、艦砲を備えていない為、防空戦艦だった。艦に備えられた40mm対空機関砲と20mm機銃の銃身は四方八方に向けられており、その姿は『針鼠』を髣髴とさせる。

ターボジェットエンジンを咆哮させながら、Ta183は急降下を開始した。エル・ドラードに向かうのは計5機のミステル、全て

がJ u 8 8を備えたものである。全5機なので、エル・ドラードは最悪9 tもの爆弾の洗礼を受ける羽目となる。流石の氷山戦艦でも危機的な破壊力となるのは必至だ。

氷山戦艦『エル・ドラード』艦橋

第20任務部隊司令官のレイモンド・A・スプルーアンス少将は信じられない思いで5機のミステルを捉えていた。目が釘付けになった。

異様な光景——スプルーアンスやエル・ドラード乗員達は不意を突かれて怯んだ。

T a 1 8 3とJ u 8 8が融合した……正にキメラ。

暗くてぼんやりと気を失う中、スプルーアンスは我に帰り、叫んだ。「対空戦闘！！目標を撃ち落とせ！」20 m機銃と40 m航空機関砲が天空を向き、5機にミステルに鋼の洗礼を浴びせ掛ける。「戦闘機の発艦急げ！！」127 m砲が咆哮し、ミステルへと一直線に降り注いだ。

第1世代ジェット戦闘機に相当するT a 1 8 3とはいえ、ミステルの弱点を完全に解消した訳では無い。J u 8 8が重荷となり、本来の機動性や高速性は殺されていた。鋼鉄の嵐の中ではどうしようもなく、1機のミステルが犠牲になった。

続いて、急速発艦したF 6 F『ヘルキャット』編隊が猛スピードで迫る。

高速性ではT a 1 8 3の方がまだ勝っていたが、機動性では劣勢に立たされていた。F 6 F同士が連携を図り、群れを成してミステルに襲い掛かった。1機が落とされたものの、F 6 Fは周囲に居た護衛のT a 1 8 3の働きにより、撃墜された。

「フォイヤー！（発射）」

シエルナーは甲高く叫び、レバーを引いた。機床が軋み、悲鳴を

上げる。下部のJ u 8 8は母機であるT a 1 8 3から切り離され、滑空を始めた。風を切り、エル・ドラードへと一直線に突進する。

爆風と閃光の渦――は起きなかった。代わりに待っていたのは――対空砲火の洗礼。若干の焦りと投入角度等が事を生み出した原因だった。

T a 1 8 3の機首を上げ、シエルナーは苦面を浮かべながらエル・ドラードを見据えた。残りのミステル2機の内、1機は結局対空砲火でやられ、もう1機は投下に成功したがエル・ドラードに痛恨の一撃を与えるには至らなかった。J u 8 8は艦橋の一部に左翼を掠った。翼はバラバラに碎け飛び、破片は雨の如く降り注ぐ。しかし、左翼を失ったJ u 8 8はバランスを崩し、海面に墜ちて碎け散った。

――氷山戦艦は健在だ。

シエルナーは無線機越しにそう報告した。

第68話 ミステル（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第69話 血のビーチ

第69話『血のビーチ』

1944年2月25日PM01..10

5管区のビーチーはまさに地獄だった。ドイツ軍は連合軍上陸を見越し、重火器による攻撃が可能なように海岸に緩やかな下り坂と、様々な施設を構築し、周辺地域の砲撃地図を作成する等、予め整備していた。そして、第2SS装甲師団を始めとした精鋭部隊を配備していた。海軍はC2を中心とした防空システムや、ドイツ空軍の存在を受け、航空支援は無縁、艦砲射撃は30分で終了された。また、海岸はNbW等や爆撃機によって煙幕を造られ、朝方に形成された濃霧と合間って視界は隔絶されていた。そんな状況下の中、米英兵達が内陸へと進むのは自殺行為に等しい。完璧な砲撃準備で化学兵器弾や8cmロケット弾が放たれ、沿岸砲・重機関銃によって米英兵達は次々と死んでいった。

そんな最中、奇妙な噂が連合軍上陸部隊の中で囁かれた。『濃霧の中の精密狙撃』である。

正体はドイツ陸軍の新型赤外線暗視装置、ZG1229『ヴァンピール』だった。第2次大戦末期の1945年、夜間戦闘用に投入されたZG1229は少数配備に留まり、戦況を変える程の成果を上げなかった。実際、有効射程も100m程度だった上、重量がかさみ、兵士達には不評であった。

今戦争において投入されたZG1229は新生第3帝国時代に改良された種で、後に接收されたZG1229を基に米軍が作り上げた『ヴァンピール?』暗視装置をM2カービンに備え付け、夜間戦闘用に改造されたM3カービンと同程度がそれ以上の能力を秘めて

いた。StG44突撃銃と併用する事で、濃霧時でも夜間でも、日中と大差無い程にまで銃の照準を付ける事が出来た。また、この類の赤外線照射装置は装甲兵員装甲車のSd.Kfz.251やパンター戦車にも搭載され、夜間戦闘で無類の力を誇る事となる。

このZG1229を始め、初期の赤外線暗視装置は相手側も同等の装置を持っていた場合、自分の位置が丸見えだという欠点を持っていた。結果、M3カービンの類は朝鮮戦争やベトナム戦争では多くの死者を出した。大元となる重量の問題もまた、該当する。

しかし、この1944年では米英を始め連合軍は暗視装置すら持つておらず、防衛戦という条件において、ZG1229は無敵だった。濃霧や白煙すら見透かす『目』を手に入れたのだ。

米第1歩兵師団、英第50歩兵師団の目標、ゴールド・ビーチは血に塗れていた。

サリン・ソマン・SAKの化学兵器攻撃、沿岸重砲台陣、地雷原、Ar234・Ju287による多重爆撃、8cmロケット発射器を用いた鋼の雨等々、無数の脅威の元、2個師団の上陸部隊は劣勢に立たされていた。空爆と15cmK39沿岸重砲を恐れ、海軍は幾度となく艦砲支援を打ち切り、後退を繰り返していた。吸血鬼の目――ZG1229もまた、この地で多くの人間の命を奪っていた。

加軍上陸部隊が奮戦するジュノー・ビーチに関しては、既に戦闘は終わっていた。H0-18、Ju287、アブロランカスターによる爆撃が原因だった。

第1波、H0-18及びJu287から編成された爆撃隊は、計2tに及ぶナパーム弾の雨を海岸に降り注がせた。ナパーム弾は主燃料のナフサ、粘稠剤としてパーム油から抽出したパルミチン酸のアルミニウム塩、乳化剤としてナフテン剤等を混合したものを落下燃料タンクに充填した弾である。ナパーム弾は燃焼の際、大量の酸素を用いる上、そこから2次効果として一酸化炭素を放出、着弾地

点から離れていても酸欠若しくは一酸化炭素中毒によって死を迎える。1944年7月には、サン・ロー近郊で米陸軍のP-38によって実戦投入されている。

第1波のナパーム投下後、第2波を担うアブロンカスターはSD2、SD10クラスター爆弾を大量に投下し、加軍上陸部隊の命運を断ち切った。SD2は2KgのTNT爆薬を内蔵した対人馬用収束爆弾で、収納コンテナに格納された形で投下される。コンテナは炸裂、その後SD2は降り注ぐ。

一方のSD10は、10KgのTNT内臓式対人馬用収束爆弾である。

SD2、SD10はアブロンカスターから投下されると、海岸中を爆発に包み込んだ。榴散弾が四方八方に散らばり、上陸した連合軍兵士達に降り注ぐ。このSD2、SD10は比較的事故が多い代物で、アブロンカスターで運ばれた理由もそれだった。

ナパーム弾の酸欠で喘ぐ加軍兵をSD2、SD10の爆発がおいもちを掛ける。身体が宙を舞うと共に、体内の血液が膨張、まるで風船のように身体が膨れ上がると――破裂した。

8cmロケット弾の鋼鉄の雨が降り注ぐ頃には、戦闘は終了していた。

ケント州カーンベイ。英第56歩兵師団、英第213歩兵師団が上陸を試みるユタ・ビーチは、5管区の中でも最も残虐な戦場と化していた。原因は、このユタ・ビーチを担う第36SS武装擲弾兵師団の存在だった。この師団は軍法会議で命令服従違反等に問われた将兵が階級を剥奪され、それらの兵士達によって編成された懲罰部隊が元となっていた。そこで服役していた兵士や強制収容所の捕虜達から構成されていた。結果、化学兵器の無制限使用が師団に命じられ、戦闘開始から終了までサリンやソマン、さらにはドイツ陸軍内でも使用が委縮されていたSAKまでもが惜しげも無く使われ

た。

また、この第36SS武装擲弾兵師団には、実験的な兵器が幾つか投入されていた。

その1つに――音波砲『ルフトカノーネ』があった。

音波砲――はオーストリア、アルプス山中のローファ研究所で、リヒャルト・ヴァラウシエク博士が開発した兵器である。メタンと酸素の混合物を入れ、ここで2種類のガスが周期的に連続して爆発を起こし、この爆発から発生する音波を武器とする構造を持っていた。1つ1つの爆発は共鳴により強度の衝撃波となり、次々と爆発を誘発し、非常に長く増幅された音波ビームとなって放出される。この音波砲は史実、実戦では一度も使われた事が無かった。

今戦争において音波砲は大西洋の壁に配備したり、トラック車両に搭載して運用された。音波砲自体は一撃で攻撃を与える訳では無かった。敵に対して30秒から60秒照射し、ようやく結果が出た。鼓膜を破壊し、時には死に至らしめる事もあったが、兵器としてはやはり失敗だった。

米陸軍第3歩兵師団の管区、ソード・ビーチ上空では米陸軍の戦闘機P-51C『ムスタング』が編隊飛行で突き進んでいた。P-51Cは今回が初投入だった。

そんなP-51に、不気味な機影が迫っていた。

米陸軍航空軍第8軍のジョー・マーティン中尉はその名の通り、『軍神』といえる存在だった。大胆不敵で力強い操縦性を持っていた。P-51は不良機として知られていた分、不満も大きかったが、機に乗れば考えも大きく変わった。第2次大戦の傑作機と言えるP-51D程ではないとはいえ、ある程度の能力は備えていた。

前方に迫る機影に、マーティンは気付いた。3機の機影。その姿は紛れも無い――ジェット戦闘機だった。プロペラを持たないその

姿は、大きな噂となっていた。

敵はMe266、第1世代ジェット戦闘機の中でも屈指の強さを備えていた。

Me266はメッサーシュミット社で開発されたジェット戦闘機だった。『P. 1101』の社内名称で開発が始まったこの機は、史実では1944年より開発が始まり、Ta183としのぎを削った。しかし、結局Ta183に敗北、Me262の製造に重視する事となる。

先進的な後退翼、後退翼角度を3段階変更出来る可変翼仕様、球体風防等、P. 1101はMe262よりも優れた機体だった。しかし1945年4月、米軍に試作の1号機を押収され、飛行せずに敗戦した。その後、機体はベルX-5開発に大きく貢献した。

今世界では1943年、Ta183の影響を受けて完成。能力はTa183よりはやや低いが、Me262に比べれば驚異的進歩といえた。

第69話 血のビーチ（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第70話 嵐

第70話『嵐』

1944年2月25日PM01…30

米陸軍第3歩兵師団が激戦を繰り広げるソード・ビーチ上空、米陸軍航空軍第8軍のジョー・マーティン中尉操るP-51C『ムスタング』は、前方に迫り来るMe266ジェット戦闘機に目を見張っていた。両翼に備え付けられたRk334——通称『X-4ルーシユタール』空対空ミサイル4発が、灰色の厚い雲より漏れてきた陽光に輝いていた。このRk334は前述したが、小型の液体ロケットエンジンを動力とし、4本の安定翼と操縦翼を備え、2本のワイヤーで誘導するという先進的な構造を持っていた。射程距離は3200m。主にTa183やMe266等に配備されており、両機とも4発搭載が可能である。

Me266は猛スピードで到達すると、Rk334空対空ミサイルを発射した。

不意に轟音が聞こえてきた。同時に、空の彼方からRk334のすらりとした白い機体が、矢の如く飛び出してきた。何だあれは！？ Rk334は右隣に付いていた僚機を貫き、爆炎を飛び散らした。更に——もう一筋の光点。それはRk334をMCLOC（手動指令照準線一致誘導方式）方式で誘導すべく、視認し易い様にと尾部に備え付けられた曳光弾とマグネシウム式のフレアの光だった。Rk334の轟音はやがて、全てを掻き消すような凄まじい音となっていた。——近付いてきている……。

刹那、鋼鉄の輝きが見えた。

Rk334はP-51Cの機体を掠め、通り過ぎた。

「大丈夫か」マーティンは僚機に無線で聞いた。

僚機のパイロットが頷き、返答を通告しようとした時、全てを掻き消す音が轟いて——パイロットの意識は世界から——遮断された。

「クソッ、何なんだ!？」マーティンは首を振った。

マーティンが憤慨する中、別のMe266は背後から迫っていた。僚機を撃墜したRk334はそこから撃たれたものだった。P-51Cの機首を持ち上げ、マーティンは大きく旋回させた。その背後で、轟音が響き続けていた。

計5機に及ぶMe266は——完全にP-51Cに狙いを定めていた。Rk334を始め、Ta183にも搭載されているMK213C/30リボルバーカノン砲が火を噴き、P-51Cの機体を引き裂いた。

——意識が遠のく。

雷鳴と閃光が轟く中、マーティンは——大地に押し付けられ——生涯に幕を閉じた。

1944年2月25日PM03:45

英仏海峡

ドイツ海軍第1機動艦隊旗艦、バイエルン級航空母艦第1番艦『バイエルン』艦橋で、アルブレヒト・ベルンフリート元帥は戦闘終結の兆しとも言える光景を目の当たりにしていた。

空に掛かる灰色の白い綿が積み重なったかのような積乱雲。

かつて日本を襲ったモンゴル帝国の軍勢を2度打ち破ったといわれる大嵐——『神風』だ。

「無謀な戦い……」Ta183やAr234が飛行甲板を駆ける中、ベルンフリートは呟いた。「それは己の首を絞め続ける。我々はただ、それを刮目すればいいのみだ」

嵐は迫っていた。

英国本土で行われた上陸作戦は15日間で終結した。5管区から成る上陸地点は厚い大西洋の壁に隔たれ、ただ毒ガスが蔓延するのを促進するだけだった。常に広がる白煙に視界は隔てられ、ZG1229『ヴァンピール』の餌食となる者が増えた。空にはC2、R1-?、V-7、HS117といった地対空ミサイル群によって守られ、天空の壁が築かれた。

そんな幾重もの壁に隔たれた連合軍に対し――嵐の到来が追い打ちを掛ける。

艦船は波に襲われ、湿度の上昇はSAKガスの停滞を持続させた。

連合軍は敗走し、枢軸軍は勝利を味わった。

第70話 嵐（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第13章 『HI作戦』 第71話 ハワイ封鎖

第71話 『ハワイ封鎖』

1944年4月16日PM01…20

オアフ島は今も昔も太平洋における重要な戦略拠点である。第1次世界大戦以後の1919年から、本格的な軍事拠点としての整備が始まった。1941年当時、米軍はオアフ島に米海軍の真珠湾軍港を始め、陸海軍、海兵隊を合わせて8つの航空基地を擁していた。そして、それらの飛行場は6箇所の陸軍レーダー施設と6箇所の海軍レーダー施設、計12箇所の施設と、内10箇所を統括するフォート・シャフター空襲警報センターと連携し、対応していた。

太平洋艦隊司令部――けたたましい警報音が鳴り響く。

スイッチを付けると、司令部地下壕に続く階段が蛍光灯に照らし出された。更に扉も。

軍服を身に纏い、肩に4つ星の階級章を座する男――太平洋艦隊司令官、チェスター・W・ニミッツ大將はいぶかしげな表情を浮かべながら階段を降りていた。またか、ああ、また戻って来たか。今月で3回目だな。敵機の侵入を許したフォート・シャフターの将校連中を無能な給料泥棒だ、と胸に呟き、罵りながら扉の前に進んだ。鋼鉄の扉の輝きが瞳に映る。

鋼鉄の扉が鈍い音を立てた。振り向いて後ろを確認し、奥に進んだ。

2、3歩進んだ所で、何かが落ちるような音がして、か細い赤の光が床上を掃いた。ニミッツは身を硬くした。爆撃だ。彼は扉が閉まるのを一瞥し、奥に進んだ。

「星を2つ、大統領閣下に返さないとな」

ニミッツは渋面を浮かべ、右隣に居た太平洋艦隊参謀長チャールズ・H・マクモリス少将に呟いた。「キンメルもパールハーバーの悲劇には、星を肩から引き千切って潔く退いたんだ」

マクモリスは彼の肩を叩き、首を振った。「先の問題解決に貴方は存分な成果を出しています。逆に、今返上するのは部下の死と混乱に招きかねません」

足音が沈黙の廊下に響く。

「司令長官、爆撃は今月で3回目ですね」右に曲がって進む中、頭に包帯を巻いたウィリアム・F・ハルゼー中將は眉間に皺を寄せた。「既にバーバースポイント、エヴァ、ヒッカム飛行場が壊滅的被害を受け、パールハーバーが封鎖された以上、奴等が来るのは時間の問題でしょう……」ハルゼーは歯を噛み締め、渋面を浮かべた。「何としてでも、湾内の掃除は早急に済まさなければ」

「分かってる——」ニミッツは肩を窄めた。「口先だけじゃ済まないからな」

「1番の問題は敵爆撃機です」

マクモリスは息を吐き出した。「ジェットで高速、通常の対空火器では太刀打ち出来ず、迎撃機でも追跡は不可能。レーダーが捕捉しても、対応までは……という現状です」

扉の前まで来ると、兵士の1人がドアノブに手を付けた。厚い金属扉で、錠が付けられていた。鍵穴が塞がると音が立ち、ロックが解除されると、扉がほんの少しだけ開いた。兵士が扉を引いて開けた。途端に、湿気を含んだカビ臭い漆黒の闇が、吐き出されてきた。

ニミッツが奥に進むと、扉が閉まった。

1944年2月。

ミッドウェー島陥落後、ハワイ攻略作戦『HI作戦』が開始され

た。大日本帝国海軍の提唱するこの作戦は太平洋戦争を想定した仮想シナリオを基に作られたものだ。3月、帝国海軍の潜水艦18隻がハワイ東方海域に展開、通商破壊任務を開始した。この作戦により、護衛空母といった真珠湾に向かう補填艦艇、輸送船団の多くは沈められた。

通商破壊を担う潜水艦隊は、伊600型潜水艦を中核と成した部隊だった。ドイツ海軍の???型や米海軍のアルバコア型潜水艦を基に開発されたこの潜水艦は、1944年時の米海軍の対潜兵器の前では無敵の存在だった。同時に機雷を撒き、海上封鎖も進めた。

また、ミッドウェー島の整備が進むと、ハワイ島に向けた爆撃が始まった。

1944年3月下旬、三式噴進重爆撃機『天河』と三式戦闘機『飛鷲』から成る統合戦略航空隊の第1爆撃隊が空に上がった。

三式噴進重爆撃機『天河』はB-47『ストラトジェット』を基に開発された機だ。戦闘機式の縦列配置タンデムコックピットに操縦士2名、機首部に爆撃手の3名、計5名という少ない乗員数に加え、35度の後退翼の主翼、そして6基のジェットエンジンというこれまでの爆撃機概念を大きく変えるこの機は、その構造により戦闘機のような軽快な機動を行う事が出来た。

ミッドウェー・ハワイ間の距離は2310kmだが、航続距離6437kmを誇る天河であれば、往復の心配も無く、H1作戦で投入されたのも、その戦略性が評価されての事だった。天河は飛鷲と共に、東南アジアからミッドウェーへと運ばれた。

唯一護衛として随伴する事が出来る三式戦闘機『飛鷲』を連れ、天河はオアフ島を襲った。天河はまず、真珠湾出入口に機雷をばら撒き、湾内の艦船の動きを封じた。この頃、真珠湾にはミッドウェー海戦時に敗走した空母『サラトガ』を始め正規空母1隻、護衛空母3隻、戦艦10隻が滞在しており、海軍工廠等で整備を進めていた。第1爆撃隊は湾内封鎖を行った後、海軍工廠、弾薬廠といった施設を破壊し、母港としての能力を低下させた。

第2次爆撃では、貯油施設に向けて攻撃を加えた。

その後、爆撃は8箇所の飛行場に向けて行われ、米軍の航空戦力を削いだ。

1944年4月16日PM01:30

オアフ島フォート・シャフター空襲警報センターも太平洋艦隊司令部同様、天河の爆撃を受けていた。6機の天河が司令部とこの施設を攻撃したのは、指揮系統を崩壊させる為だ。

センター内に勤務していたポール・A・ハーヴェイ一等兵は頭上でまた新たに警報が鳴り響き出して騒ぎを知り、室内から飛び出した。数m程進む中、足音を掻き消すような爆音が轟き、猛烈な熱風が通路に流れ込んできた。施設を飛び出し広場を出ると、炎に包まれた施設の一部を見据えた。

数時間後、施設は半壊した状態と化していた。

フォート・シャフター空襲警報センターは計12箇所のレーダー施設の内、移動局である10箇所の施設と連携を取っていた。が、この攻撃により、施設との連携は拒絶されていた。

「――『AL』という傍受した通信に度々使われる暗号を想像すると、奴らの次の攻撃目標はアリユーション若しくはアラスカとも考えられますが、恐らく見せかけだと私は思います。これまでの日本軍側の暗号は妙な点が多くありますし、敵方が戦略拠点を重点的に爆撃し、海上封鎖をしている点も含めますと、誰が何とを考えても――次は此処、ハワイ以外には考えられません」

情報主任参謀、エドウィン・T・レイトン中佐は鋭い口調で言った。

「確かにな」ハルゼーは言った。「ジャップはここを奪う気に違いない」

「問題はそれにどう対処するか——だ。どうせなら防空陣地を頑強にし、戦艦を集め、沿岸砲台陣地にも注意を厳重にしろと言うようにな。とりあえずはまず、爆撃を耐え忍ぶ事だ」ニミッツは低い声で言った。それはよしとして、地上がどうなっているのか。今こうして地下に隠れているのは、真珠湾攻撃から僅か5ヶ月も経っていないかった。御世辞にも日本軍の技術力を過小評価する事も、最近では負け犬の遠吠えか何かにしか聞こえない。ハワイ・ミッドウェーの間には——最早、目に見えない程細い境界線しかないとなミッツは見ていた。2310kmという距離も今では23・10m程度にしか感じられない。いや、2・310mか。もしも、それが米国本土——ハワイ・米西海岸間となった時、国民は命運が尽きたと感じるしか無いだろう。

「そして耐え忍んだ後は——盛大に復讐しよう」

第13章 『HI作戦』 第71話 ハワイ封鎖（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第72話 HI作戦始動

第72話『HI作戦始動』

1944年6月3日PM01:00
トラック諸島

第1機動艦隊旗艦『大和』艦内。

吉岡一等海佐の佇む艦内の一角は、大和の中では、心浮き立つ夏の午後も比較的静かな区域だ。人影も無く、ただ風が通路で呻き、パイプ管を揺らして、廊下に銀の光を撒き散らしているだけだった。通路の突き当りまで来ると、厳格な表情で佇む2人組の海軍将兵が居て、吉岡を睨んだ。

「吉岡一等海佐だ、会議に参加する――」

「――こちらです」

1人が扉に手を伸ばし、静かに開けた。内部の景色が吉岡の眼に流れ込む。

中には大きな長机と簡素な家具が並んでいた。そして、帝国海軍の有力者――『HI作戦』に参加する将校達が軒を連ね、押し黙るようにして椅子に鎮座していた。

そして、その中心には連合艦隊司令長官、山本五十六大将の姿。

「失礼します」吉岡は一礼し、空いた椅子の1つに腰を落ち着かせた。

「HI作戦の第1段階として現在進行しています通商破壊作戦ですが、既に多大な成果を上げています。護衛空母は2隻、駆逐艦は6隻撃沈し、輸送船団は止むを得ず引き返しています。また、8箇

所の主要航空基地に対しても、統合戦略航空隊の戦略爆撃は成果を上げました」

連合艦隊主席参謀、黒島亀人少将は甲高い声で言った。「第2段階として考案されているハワイ上陸ですが、実行は7～8月中——つまり夏の2ヶ月間で済まさないければいけません……」

「何故2ヶ月なのだ？ 教えてくれまいか」

第1機動艦隊司令官、南雲忠一中将は首を傾げ、言った。

「第1に、ハワイ封鎖作戦の面の問題があります」黒島は言った。「敵のガトー級潜水艦は大量生産され、1日に1回のペースでハワイに迫り、通商破壊任務を行う潜水艦隊を脅かしています」

「さしもの伊600も……という訳か」南雲は呟いた。

「それだけアメリカの工業力が強大という事だよ、南雲君」山本は言った。「第2の問題は……海の具合といった所かね？」

黒島は頷いた。「そうです。第2に海の問題があります」黒島は言った。「現時点で有力の上陸地点であるハワイ北岸の海は夏の間は静かですが、冬になると大きくしけます。12月から1月であれば7～8m、最悪の場合は10m以上の波が立つ事さえ考えられるのです」

山本が眉を吊り上げた。「10m……大発はおろか、駆逐艦でさえ転覆するな」

ハワイ北岸——ノースショアの冬の海の具合は日本の気候と深く関係している。日本で西東高低の冬型の気圧配置が強くなると、中国大陸からの発達して張り出した高気圧と、日本の沖合いで発達した低気圧との急激な気圧の差により、強烈な風が吹き始める。この風は障害物の無い海の表面に直接エネルギーを与え、うねりを発生させる。このうねりは3日から1週間程掛けて太平洋を旅し、ハワイへと到達する。この間には陸地が存在していない為、うねりは衰える事無く、肥大化を続けるのだ。

「南岸、ホノルルやパールハーバーをそのまま襲うのは？」南雲は訊いた。

「それは難しいですな」吉岡は言った。「少なくとも、理屈の上では。南岸は要塞化し、多数の沿岸砲が配備されていると聞きます。つまり私が言いたいのは、沿岸砲をいかに対処するかという事の1つに尽きます——」

黒島は大きく息を吐いた。「正にそこです。沿岸砲です。三式重噴——『天河』からの航空偵察と、吉岡一佐、貴方からの報告では北岸にも8インチ砲が計9基配備されている事が分かります」

『H I 作戦』最大の障害は——沿岸砲だった。
現在のハワイには……。

オアフ島ホノルル地区

- ・ 14インチ砲×2
- ・ 12インチ臼砲×12
- ・ 8インチ砲×4
- ・ 6インチ砲×4
- ・ 5インチ砲（以下含む）×4

オアフ島パールハーバー地区

- ・ 16インチ砲×4
- ・ 12インチ砲×4
- ・ 12インチ臼砲×8
- ・ 8インチ砲×6
- ・ 6インチ砲×2
- ・ 5インチ砲（以下含む）×9

オアフ島カネオヘビーチ及び北岸

- ・ 8インチ砲×9

機動沿岸砲

- ・ 240mm榴弾砲×16
- ・ 155mm榴弾砲×24

と、大量の数の沿岸砲が配備されていた。パールハーバー地区に鎮座する50口径16インチ沿岸砲は大和型戦艦や『きい』でさえ、脅威となりうる存在だった。その戦闘能力は1門で戦艦4隻若しくは5隻と同等に戦える程——とまで試算されていた。この16インチ砲が全部で4基存在する事や守りの固さを考えると、事実上パールハーバーの強襲揚陸は不可能、若しくは自殺行為と評価された。海が穏やかで、上陸に適した南岸が何故外されたのかは、そういう事である。

16インチと言わず、米軍の沿岸砲は強力で強固だった。防御能力の向上を図り、新型沿岸砲の大半はケースメイト（砲郭）化がなされ、露天砲台は土囊・煉瓦・盛り土等で偽装・防御能力向上が行われていた。露天砲台はこれらの工夫である程度の弾片防御が図れた。ケースメイト化砲台に至っては、大和の砲撃さえある程度は対抗出来た。

この問題を解決する方法の1つに航空攻撃があるが、無理があった。砲台破壊には、特注の800kg爆弾、若しくは5t爆弾『雷』を用いる必要がある。しかし、天河からの水平爆撃の命中精度には難があり、外せば重要な戦力の1つを失う事になった。未来兵器の開発で資源・資金等を大幅に浪費した日本としては、ノルマンディー上陸作戦時のような連合軍の大規模爆撃は出来ない。

そして、そのノルマンディーでの成果が不十分だったという事実は隠しきれない。

「——8インチ砲、侮るべきではない」

山本は唸り、呟いた。「他にも障害はある、米兵の錬度が増しつ

つ……あるという事だ」

「長官の仰る通りです。それを物語るのは2月のミッドウェー、沖合の海戦では噴戦『旭光』十数機が敵機に撃墜されました」南雲は言った。「私の勉強不足……としか言いようがありません」

「いや、問題は20年も先の技術をたった1年の短期間に習得させようとしたせいだよ」山本は肩をすくめた。「3月からの訓練、旭光のパイロット達がそこからの4ヶ月でどこまで成長してくれるか——作戦が迫っている以上、それも少ないからね。慣れてくれないと悲劇が繰り返される」

「南岸は難攻不落です。しかし、北岸も決して安易ではありません。夏とはいえ、激しければ3m規模の波が立つと予想されますので……」黒島は言った。

「3mなら、軽く大発は沈むな」

南雲は呟いた。「秘伝の空飛ぶ鳥、『雲雀』——を用いれば関係は無いだろうがね」

「そこなのですが、第2段階の第1目標として、上陸拠点『カネオヘビーチ』近郊のカネオヘ飛行場を無力化し、制空権を確保する必要があります。雲雀を使うには対空陣地・飛行場を早期に無力化せねば、死者を大勢生み出す事になりますので」黒島は言った。

「願わくば、カネオヘ飛行場は無傷で確保したい所だな」山本は言った。「陸・海・統合戦略航空隊の空挺部隊を降下させてはどうだろうか？」

「ハワイには、防衛隊が2個師団程度の戦力が展開していますので、砲台が少ない北岸の防備が頑強なものであるのは言うまでもないでしょう」黒島は言った。「慎重に進めるべきです」

「最後に、敵の航空戦力ですが……」

黒島は言った。ハワイには陸上航空戦力450機、レキシントン級空母『サラトガ』35機、エセックス級空母『ワस्प?』計85

機、カサブランカ級空母3隻計90機——合計660機の航空戦力が存在していた。この内、天河の戦略爆撃により、20～30機程度が失われている。

一方、日本側は第1機動艦隊を基幹に艦上航空機が324機、補助戦力として空母『大鷲』『飛鷲』『隼鷹』計80機、補助空母の多くは三式回転輸送機『雲雀』を運用する目的だった。また、ミッドウェー島の統合戦略航空隊の天河16機、三式陸攻34機、飛鷲72機の計122機。全てを合わせると、計526機の航空戦力を投入する事となる。

「数では米軍にいささか負けていますが、技術やパイロットの能力を考えれば5分5分とでも言えましようか」黒島は言った。「それに加え、我々には『きい』が付いております」

「更に、大和・武蔵も」

山本は言った。「46cm砲が計24門、海岸の全生命を消滅させるには十分な火力だろう」

「民間人の考慮も忘れずに」吉岡は言った。「そうでなければ、我々は協力出来かねません」

「うむ、陛下もそう仰っている。陸軍にも伝わっておればいいが……」山本は言った。「少なくとも、最善の配慮をせねばならんが、既に我々もそれを進めている」

1944年3月の戦略爆撃・海上封鎖以降、輸送の停止したハワイ内に対し、帝国海軍は統合戦略航空隊を介し、天河から大量のビラと食糧物資を民間人居住区の市街地に定期的に送っていた。食糧物資は軍に接収される恐れもあったが、逆にその行為を行えば民間人に米軍・政府への不信感を植え付ける事ができ、攻略・占領後はスムーズに事を進められると考えていた。元々、この戦争は日本側ではなく、米国側から行ってきた事や、日系米国人等を考慮すれば、ハワイ——米国内において反日思想に熱狂的になる事は少なく、全力での対独戦を渴望していた。願わくば、テロ紛いの反戦運動やストライキ運動を誘発し、日本軍侵攻を阻もうとするハワイ防衛隊へ

の足枷になれば……と、山本は考えていた。

第72話 HI作戦始動（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第73話 HI作戦開始(前書き)

・四式噴進艦上攻撃機『暁星』性能諸元

全長…23.27m

全幅…22.10m

全高…6.95m

主翼面積…75.34?

エンジン…ターボジェットエンジン×2基

最大速度…982km

実用上昇限界…12,500m

戦闘行動半径(最大兵装時)…1,690Km

乗員…3名

兵装

固定兵装…九九式20mm機銃×2

ペイロード…5.4t

大日本帝国海軍のジェット艦上戦闘機。A-3『スカイウォーリア』を基に開発された。三式噴進戦闘機『旭光』同様、量産能力は低い。胴体下部兵装倉には最大5.4tに及ぶ爆弾を搭載出来るが、その爆装に似合った巨体なので、運用空母も限定されている。

第73話 HI作戦開始

第73話『HI作戦開始』

空母『三河』は大和級戦艦第4番艦『紀伊』に使われる資源を基に造られた大型空母である。1941年12月、建造が決定された三河は航空機艦載量や兵装量が拡充され、新型の機関によって機動性も備えた空母だった。噴進航空機対応甲板を備えた貴重な一艦でもある。

また信濃同様、日本海軍の待望だった『装甲飛行甲板』を持つ空母でもあった。

飛行甲板には75mmNVC甲板が着板され、航空機エレベーターにも75mmNVC甲板を着板。500kg爆弾の直撃にも耐えうる装甲だった。

搭載機も噴進航空機対応というだけあり、三式噴進艦上戦闘機『旭光』が多数配備されていたが、1944年4月より、三河には新たな噴進航空機が配備された。

それは四式噴進艦上攻撃機——『暁星』である。

四式噴進艦上攻撃機『暁星』は大日本帝国海軍初の噴進艦上攻撃機だった。米海軍のA-3『スカイウォーリア』を基に開発されたこの機は、元々米海軍が核搭載能力を前提として持ち、尚且つ戦闘行動半径3,700kmを持つ艦上攻撃機という仕様要求を元に造られた艦上攻撃機だった。結果、5.4tもの爆弾搭載能力を備え、長大な航続距離を持つ。

しかし、艦上機ながら全長23mという、大型艦上攻撃機だった。よって、運用艦も限られており、三河は貴重な運用艦の1つでもあった。

1944年7月13日AM00:00

総員起こし。

高らかに鳴り響くラッパ音に乗員達は頭を揺さぶられた。乗員達はぎょつとして起き上がった。壁掛けベッドから飛び出した。誰もかも、誰もかもが総員起こしを待ち望んでいたのか、1人1人が微笑を湛えている。遅れまいと急いで持ち場に着いた。

「搭乗員整列！」

拡声器の甲高い声が轟く。「搭乗員整列！」

艦橋指揮所前に集う者、四式噴進艦上攻撃機『暁星』搭乗員達はきびきびと、しかし冷静に整列した。漆黒が重く垂れ下がる三河の飛行甲板の下、一同は集った。

艦長、菊池朝三大佐が闇より姿を見せた。直立不動の姿勢を保つ搭乗員達は、次に現れた人物を見た瞬間、思わず呆気に取りられてしまった。

——第2機動艦隊司令長官、小沢治三郎中将の登場である。

南遣艦隊を率い、南方作戦を有利に進めた彼は現在第2機動艦隊の司令長官に就任し、H I作戦に臨む事となった。第2機動艦隊旗艦である三河艦橋指揮所前に——静寂が訪れる。聞こえるのは波と磯風の音。高さ10m以上の波がうねりを持たせ、三河の艦腹にぶち当たった。そして艦橋指揮所前、三河の重厚な甲板には猛烈な突風が吹き荒れていた。

「諸君——」そこで一旦、口を噤む。

間隔が開いた所で、沈黙を破る。「戦友を信じ、戦友に信じられて、戦友と共に任を完遂せよ」小沢は言った。「それこそが飛行機

乗りとして信ずべきものだ。諸君の主観と思想の下に——価値を見出すのだ。私に言えるのはそれだけである」

訓示を終え、乗員達は鋼鉄の大地を駆ける。

三河は転舵し、風を掴みながら加速を始めた。暁星は23mの巨体を震わせ、護衛の旭光は一早く空に駆け昇っていた。

1機、また1機と暁星は飛行甲板を蹴って飛び上がる。

そんな機影に目を向け、小沢は甲板に佇む。

「帽振れええッ！」艦長の声が轟き、整備員達は帽子を一举に振り上げた。

——暁星は天に鎮座し、ハワイに針路を向けた。

1944年7月13日AM04:00

『HI作戦』開始。

断雲の切れ間より漏れ出す月の残光に、闇を翔ける機群が姿を見せる。

それは第2機動艦隊より発進した第1次空中攻撃隊の姿だった。

第2次機動艦隊は空母『蒼龍』『飛龍』『信濃』『三河』を主力とした機動部隊だった。そこから発進した暁星26機、零戦32機、旭光25機、天山34機、彗星52機——計159機から成るのが第1次空中攻撃隊だった。第1機動艦隊も多数の機を攻撃隊として発艦させており、合流後は更に強大な部隊となる。

今作戦でも、第1次空中攻撃隊を指揮するのは真珠湾攻撃同様、淵田大佐である。

淵田大佐は2月のミッドウェー海戦には参加せず、内地で四式艦

上噴進攻撃機『暁星』の操縦訓練を続けてきていた。第1次空中攻撃隊内では、最も暁星の特性を知った人間である。赤城から三河に転属し、愛機であった天山を手放した代わりとして、彼の手元には――暁星が存在する。

ハワイの端部が視界に映ると同時に、淵田は微笑を浮かべた。

第73話 HI作戦開始（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第74話 連星（前書き）

・三式艦上汎用攻撃機『極星』性能諸元

全長…11.84 m

全幅…15.25 m

全高…4.78 m

翼面積…37.19?

エンジン…レシプロエンジン×1基

最高速度…520 km

巡航速度…319 km

実用上昇限界…8,660 m

航続距離…2,115 km

乗員…1名

兵装

固定兵装…九九式20 mm機銃×4

ペイロード…3,600 kg

大日本帝国海軍の艦上レシプロ攻撃機。A-1『スカイレーダー』を基に改良を加え、完成した。爆撃・雷撃を兼用し、優れた操縦性と兵装能力から『汎用攻撃機』として絶大な信頼を得ている。爆撃機・雷撃機・攻撃機の生産ラインの一本化、簡易化を図るべく開発されている。

第74話 連星

第74話『連星』

1944年7月13日AM05・30

アメリカ合衆国／ハワイ準州

「見つかってもうたな――」

第1機動艦隊、第2機動艦隊から成る第1次攻撃隊総指揮官の淵田大佐は、暁星の操縦席に備えられたレーダー表示機を見て、洩面を浮かべた。これは米軍のレーダー波を逆探知すべく開発されたものである。表示画面にはSCR-270のレーダー波が映っていた。このSCR-270は史実、真珠湾奇襲時に日本軍の偵察機を発見したものである。周波数102-110メガヘルツで、波長に換算すると2.8m。最大検出距離は241kmで、200km弱圏内に飛行する航空機であれば探知する事が出来る。

30分前、カネオへ飛行場近辺に設置されていたSCR-270は既に200機超えの大編隊の存在を掴んでいた。情報はフォート・シャフター空襲警報センターに伝えられ、PBY『カタリナ』が海上哨戒任務を開始、カネオへは早く警戒態勢が敷かれた。

上陸作戦の第1段階として、第1次攻撃隊に与えられた任務は各飛行場・軍事拠点の航空爆撃だった。その中でも、横須賀鎮守府第1特別陸戦隊の空挺降下目標地、カネオへ飛行場の航空戦力の無力化は最優先目標だった。

水平線の彼方、朝陽の光雨が降り注ぐ払暁の空の頂に黄金色の煌めく光点が浮かび上がっている。輝く頂点には無数の航空機が鎮座

し、機首の先端が光を集めて輝いていた。光が篝火となって、薄闇に包まれたカネオへの街は浮かび上がった。

噴進戦闘機の不気味な轟音が上空の大気を震わせた。

背後の水平線から太陽が顔を徐々に覗かせるにつれ、ハワイを照らす光が下り、無数の機影を映し出した。

その光景を見据えながら、第1次攻撃隊第4集団制空隊隊長の佐藤正夫少佐は眼前に迫り来る敵機存在に身を硬くしていた。佐藤少佐は真珠湾奇襲にも参加した歴戦の勇士で、噴進戦闘機『旭光』を操る数少ない人間の1人でもある。

敵機はP-40『ウォーホーク』を始め、P-39『エアコブラ』、P-38『ライトニング』、更に新鋭機のP-47『サンダーボルト』、P-51『ムスタング』と戦闘機が勢揃いだった。近隣の米陸軍航空軍・米海兵隊の戦闘機の半数の戦力が集結していた。ここを越えなければ、飛行場制圧は夢のまた夢だ。

第1次攻撃隊は噴進戦闘機の旭光を中心に零戦を加えた制空隊を基盤に、艦上爆撃機の『彗星』、四式艦上噴進攻撃機の『暁星』、レシプロ機の『天山』

そして三式汎用攻撃機——『極星』

三式汎用攻撃機『極星』は朝鮮・ベトナム戦争で活躍した汎用機、A-1『スカイレーダー』を基に開発された。攻撃機ながら爆撃・雷撃能力を兼用するというコンセプトの下、実現したのは3,600kgに及ぶ兵器搭載量であった。優れた機動力や戦闘機としての攻撃能力にも富んだ。また、暁星とは違い、量産し易く、海軍内における爆撃・雷撃・攻撃機の生産ラインの一本化も出来た。

ただ、優秀な性能を備えているとはいえ、この機は単座なのでパイロットの負担が大きい事も事実だった。史実でも、新人パイロットは過酷な状況に立たされ易く、ベテランを要した。

とはいえ、その優れた機体性能は評価され、パイロット達にしてみれば突貫開発で事故や不具合の多い噴進機よりも、長い時間を掛けて造られた極星の方が評価が高かった。

圧倒的性能を誇る2つの攻撃機、『暁星』と『極星』は生産ラインの一本化を図るべく造られた機体であった。爆撃・攻撃能力を有する『暁星』、3つの能力を誇る汎用機『極星』、暁星はどうしても生産が限定される噴進航空機である為、2つの能力を有して――をコンセプトに造られ、中には雷装機も存在し、極星もまた3つの能力を有して造られた。

この2つの――星をオアフ島全域に進める為にも、制空隊は全力を出さなければならなかった。

1944年7月13日AM04:00

飛行長の西川一等海尉は後部甲板に居た。

後部甲板には2機のハリアー？が出ており、発艦準備を進めていた。赤色のジャケットを着た兵装・燃料担当の兵員は両翼に備え付けられたAIM-9『サイドワインダー』を最終確認し、セフティピンを外している。

西川はコックピットに掛けられたラダーを登って、コックピットに滑り込んだ。

ヘルメットを被り、ハーネスを装着する。

発艦準備の合図が出され、西川はスロットルを倒した。ハリアー？内部のエンジンが始動、甲高い声を放ち始めた。西川は発艦準備を行っていた整備員達に敬礼し、エンジンを可動させた。機体は垂直に宙へと浮かんだ。

そして――空を駆る。

『CICよりクロスジャック・リーダー、離陸完了』

「クロスジャック・リーダー、了解」
ラジャー

CICの高橋三等海佐の声を聞き、西川は無線越しに応答した。

「C I C、こちらクロスジャック・リーダー、目標地点αに到達。第1次攻撃隊と合流した」

西川の視線の先には、複数の旭光と極星の姿があった。西川率いるハリアー？攻撃隊は、予備機を除いた通常可動機の4分の3以上、計8機から成る部隊だった。攻撃隊の任務は大日本帝国海軍第1次攻撃の護衛であった。

「クロスジャック・リーダーよりC I C、リーダーコンタクト。交戦許可を要請する」

機首に備え付けられたA N／A P G－65（V）2リーダーは敵機を捉え、示していた。

『こちらC I C、交戦許可』

「了解、クロスジャック・リーダーより全機へ、交戦許可、マスターアームオン」

西川は無線越しに伝え、武器安全発射装置を『S A F E』から『A R M』に切り換え、搭載兵器を発射可能な状態にした。

「T a i l y－H o！（目標視認）」

敵機――P－47の編隊を視認した西川は無線に言った。

刹那、A I M－9『サイドワインダー』が火を噴き、米軍に襲い掛かる。

それが――ハワイ航空戦の始まりだった。

第74話 連星（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第75話 ハワイ航空戦

第75話 『ハワイ航空戦』

1944年7月13日AM05:50

アメリカ合衆国／ハワイ準州

「FOX2!!」

西川一等海尉はスティックを握り、ミサイルリリースを押し込んだ。同時にAIM-9『サイドワインダー』が放たれ、P-47『サンダーボルト』に向けて一直線に空を駆け抜ける。計8機から成る第1攻撃隊は各機2基ずつ――計16基が白い尾を曳き、ハワイ防空部隊に襲い掛かった。AIM-9は16機のP-47を完全にトラッキングしており、抜かりは無かった。

AIM-9は急上昇し――P-47の頭上から鋼鉄の洗礼を放った。

刹那、眼前に無数の火球が飛び散った。

「16機撃墜！」西川は無線越しに叫んだ。「Good Kill!」

8機のハリアー？は編隊を崩さず、一糸乱れずに天空を駆け抜ける。パイロット達は兵装選択スイッチをGAU-12Uイコライザーに変更して、敵機の第2波に備える。

「手柄を取られてばかりじゃいかんよな――」ハリアー？隊がGAU-12Uの射撃準備を進める中、第4集団制空隊隊長の佐藤正夫少佐は呟いた。三式噴戦『旭光』数十機が火を噴いた。55m噴進弾が旭光の翼下から飛び出し、太い白煙を曳きながら敵機の翼に直撃した。口径55mmの噴進弾の炸薬は一撃で主翼を吹き飛ばす。扇状に広がった55mm噴進弾の通過後は敵機の黒煙に包まれ

ていた。

「FOX3!!」

GAU-12U機関砲が轟音を響かせ、無数の25mm弾が前方のP-38『ライトニング』の鋼鉄の身体を切り裂いた。双胴の身体は真つ二つに断絶、2基のアリソンV-1710エンジンは稼働しながら群青色の海原へと墜ちていった。

戦闘開始からものの1時間少で、迎撃に向かったハワイ防空隊は壊滅した。その先に存在するハワイ北岸の地域、カネオヘを守るものは出遅れた米海兵隊のF4U『コルセア』だが、それは航空母艦の着艦が困難として引き渡された初期生産型のF4U-1が大半を占めており、旭光や零戦にしてみれば他愛無い敵といえた。防空隊を撃滅した後、第1戦略拠点であるカネオヘ飛行場に小規模な攻撃を与え、対空陣地等の撤去を遂行した。

第1次攻撃遂行後、防弾能力を増加し、兵員輸送用に改造された三式陸攻から横須賀鎮守府第1特別戦隊500名、陸軍挺進第1連隊500名、計1000名の兵士が空挺降下して、カネオヘ飛行場や周辺に配備された8インチ沿岸砲台を掌握した。これにより、『大鷲』『飛鷲』『隼鷹』計3隻の空母に搭載された三式回転翼機『雲雀』運用が可能となり、3隻は戦艦『大和』『武蔵』、護衛艦『きい』の支援を受けながら上陸作戦を展開した。

一方、第1次攻撃隊の一派は一路、真珠湾を目指していた。

ハワイ上空10000mを飛行する三式重噴爆撃機『天河』と伊600がに真珠湾出入口に対し、H1作戦開始前に機雷封鎖を図っていたので、大半の艦艇は湾内で立ち往生していた。第1次攻撃隊の主任務は艦艇の撃破にあり、海軍戦力を殲滅させる事にあった。

他、オアフ島内7箇所の飛行場に対しても攻撃の手が加えられた。攻撃序盤、四式噴攻『暁星』がヒツカム飛行場に到達、淵田大佐

の機が1番乗りとなった。

「投下!!!」

淵田の声が轟き、胴体下部兵装倉から250kg爆弾が姿を見せ、払曉のヒツカム飛行場に降り注ぐ。爆撃開始からものの3分で100発以上の250kg爆弾がヒツカム飛行場や周辺地域に着弾、猛烈な光が大地を包み、爆撃の成功を物語っていた。

この攻撃後、更に淵田は真珠湾に針路を向けた。真珠湾には立ち往生する空母『ワस्प?』や、カサブランカ級護衛空母2隻が停泊、他にも多数の艦艇が居た。

「勢揃いって訳や」

第1次攻撃隊の前には、空母や飛行場からの戦闘機が迫っていた。

真珠湾は騒然とした。暁星や極星が空を駆け、空母に迫る。

空母攻撃を阻止すべく発艦したF6Fが天空に昇り、迎撃を試みた。が、その前には旭光が立ちほだかり、F6Fを牽制する。第2集団水平爆撃隊の極星はその間の隙を突き、防空網を突破した。天空に聳え立つ壁――対空機銃の弾幕や艦載機の攻撃を避け、爆音と黒煙に染まった上空を駆け抜ける。

「用意」

「射ッ!」

500kg爆弾が6発、3機の極星の胴体下から放たれると空母『ワस्प?』に直撃、飛行甲板が陥没し、紅蓮の華が咲き誇った。

3機の極星は一糸乱れぬ飛行を続け、戦線離脱を図った。

ところが、空を駆る極星は復讐に燃える米海兵のボフォース40mm機関砲の鋼鉄の洗礼を受けた。高射砲によるものと分かる漆黒の華が蒼穹に咲き乱れ、幾筋もの対空機関砲の射弾が、一直線に空へと上がっていく。極星は翼に炎を曳いて急速に高度を落とした。不気味な断絶音が響き始め、翼が碎け散る。極星はそのまま海面に打ち付けられ、粉々になって消し飛んだ。

1機を失った極星の編隊は旋回、復讐を試みる。

そこに第2集団急降下爆撃隊の隊長、江草少佐の極星が合流した。後ろに3機率いていた。

「一気に叩くぞ！」

無線越しに僚機へと伝え、ワस्प？に照準を向ける。漆黒の煙柱を形成するワस्प？は最早沈むべき運命にあったが、米海兵のしぶときは健在だった。ダメコンチームは消火活動を進め、窮地から脱しようと模索していた。

爆撃を試みる中、江草の脳裏に過去の思い出が浮かび上がった。

それは昨年の1943年11月19日、真珠湾奇襲時の記憶だった。空母『エセックス』に対し、江草は彗星に搭載された250kg爆弾で撃沈寸前のエセックスに止めを刺した時の記憶。眼前に今映るその光景は、まさにその時と同じ光景だった。炎に彩られた煙柱、対空砲火の重圧……。

500kg爆弾が唸りを上げ、空を駆け抜けた。

刹那——ワस्प？の末期の悲鳴が真珠湾に轟く。

極星は体勢を整え、機首を持ち上げて急上昇した。江草の眼下には、無残に朽ちる空母ワस्प？の姿があった。火のついた花卉の如く、火の粉が輝きを散らしながらゆっくり降り注ぐその光景は、去年11月のエセックスの最期と同じだった。

第75話 ハワイ航空戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第76話 ハワイ上陸戦(前書き)

・『神田級戦車揚陸艦』性能諸元

排水量 基準…2,340 t
満載…6,000 t

全長…116 m

全幅…16.5 m

吃水…4.39 m

機関

艦本式ボイラー×2缶

艦本式蒸気タービン×2基

2軸推進

(6,000 ps)

最高速力…14ノット

乗員…358名

兵装

65口径12.7 cm単装高角砲×2基

25 mm連装機銃×2基

13 mm単装機銃×2挺

貨物積載量…500 t

大日本帝国海軍の大型戦車揚陸艦。ビーチングを行うべく、艦首には扉が備えられている。艦隊行動を行う為、6000馬力の蒸気タービンを搭載して速力向上を図られている。現在、三式中戦車『チヲ』を唯一運用出来る艦艇である。名前の由来は東京市35区の

1区、『神田区』より。

第76話 ハワイ上陸戦

第76話 『ハワイ上陸戦』

1944年7月13日PM10…30

ハワイ北岸、カネオヘビーチは真つ暗だ。細い雲が月に懸かつて空を流れていき、雲間からの漏光が闇の中でのたうち回っている。

漆黒の海原が闇を溜める。3隻の弩級戦艦は身じろきもせず立ち尽くし、戦闘に備えて27門の砲が冷酷な視線を海岸に向けていた。

カネオヘビーチを守る米陸軍第25歩兵師団の兵達は、漆黒の海の先から冷酷な目がこちらを見ている気配がした。カネオヘ飛行場を奪取されて以来、第25歩兵師団は帝国陸軍の上陸を防ぐための海岸防衛部隊と、飛行場奪還の為の部隊の2派に分けられて行動していた。防衛部隊の兵達は海を向き、塹壕やトーチカに隠れ、息を殺していた。大戦力となり得た筈の8インチ砲台の大半は横須賀鎮守府第1特別戦隊及び陸軍挺進第1連隊の空挺部隊に掌握されており、有事の際に用意されていた沿岸砲用砲台に240mm榴弾砲や155mm榴弾砲を配置したという即席沿岸砲が対洋上戦力だった。3隻の戦艦——『大和』『武蔵』『きい』は咆哮す。

数多の戦場で敵兵達を恐怖に陥れたあの音が響いた。3連装46cm砲が響かせる爆音が。

計27発、全砲門が零式徹甲弾を放った。

零式徹甲弾は——駆け出した。闇を抜け、240mm榴弾機動砲台の陣地の中に走り込んだ。紅蓮の刃が闇夜を貫き、無数の火球を天に飛ばした。第2の太陽が如く、火球はカネオヘビーチを燦々と

照らし、海に不気味なシルエットを投影した。

『こちら指揮管制所、射撃準備よし!』

山本五十六連合艦隊司令長官の耳に轟く声は、勇猛さを備えていた。恐れ知らず——といった具合である。先の航空戦の勝利が要因だった。

「撃ち方始め!」

砲術長は叫んだ。3基の砲台は唸りを上げ始めた。間を空けず、46cm砲9門が咆哮した。

大気を揺るがす轟音と共に、大和の46cm主砲が炎を舌なめずりし、零式徹甲弾が再度解き放たれた。砲口から黒煙が漏れ、凄まじい爆圧が周囲を包み込んだ。第25歩兵師団のカネオヘビーチ防衛部隊の直上を駆るのは第1波から6発少ない21発だった。

しかし、それでも十分だった。内6発は護衛艦『きい』の精密誘導砲撃を元にしており、正確な攻撃を可能としていた。低空を飛行するハリアー?2機の哨戒により、空から機動砲台の正確な位置を特定する事ができ、第1波の攻撃で240mm榴弾機動砲台を撃破したのも『きい』の46cm砲だった。

1944年7月13日PM11:30

日が終わりを迎える頃、上陸は始まった。

先陣を切るのは三式回転輸送機『雲雀』だった。ハワイ北岸の沿岸に展開する空母『飛鷹』『隼鷹』『大鷹』計3隻は雲雀を多数艦載しており、上陸作戦の第1波として、カネオヘ飛行場に空挺降下した横須賀鎮守府第1特別陸戦隊と陸軍第1挺進連隊の支援に回された。雲雀は群を成し、不気味なプロペラ音で夜空を染め上げた。

しかし、第1波の飛行場到達までは熾烈を極めた。冷酷な意図の元、憎しみを滲ませた第25歩兵師団の兵達は高射砲に付いた。

ドドドドド……という轟音が、雲雀の進攻を妨げた。機銃座に着いた米陸軍兵は高射砲から銃弾の雨を帝国統合戦略航空隊の輸送機に浴びせ掛けた。眩しい閃光が闇を切り裂き、甲高い悲鳴を上げて雲雀は墜ちていった。1機、また1機と墜ちていく。

ベル47を基に開発された雲雀だが、史実のベル47同様、撃墜され易かった。

高射砲の爆音は内陸へと進むにつれ、徐々に止んでいった。カネオへ飛行場は暗闇の中で赤く染め上げられていた。原因は猛烈な空爆と砲撃だった。むせび泣くような空襲警報のサイレン音が轟く中、雲雀の数十機が降下、兵員2名を降ろした後、負傷者2名が乗せられる。カネオへ飛行場には対処し切れない量の負傷者がおり、その中の一部は3隻の空母に輸送されて処置を施す事となっていた。これにより、捕虜となった米兵の死者数が若干減少した。

雲雀がカネオへ飛行場を出る頃、多数の大発・小発等上陸用舟艇が海を駆け、鮮やかな航跡を刻みながら突き進む中に、1隻の巨大艦船が紛れていた。明らかに大きさの違うその艦船は、戦車揚陸艦『神田』である。

神田は大日本帝国海軍の戦車揚陸艦である。米海軍の戦車揚陸艦『タルボット・カウンティ級』を基に開発された。米海軍のコンセプトを受け継ぎ、6000馬力の蒸気タービンを中心とするこの戦車揚陸艦は艦隊行動を行う想定の中で開発された。とはいえビーチングを行うべく、艦首扉を設ける等、航海に適したものとなっておらず、造波抵抗が高いのが特徴である。

武装としては25mm連装機銃が2基、13mm単装機銃が2挺。更に65口径12.7cm単装高角砲が2基、主兵装として艦首と艦尾に搭載されている。

神田級は1944年現在、唯一三式中戦車『チヲ』を艦載し、運用する事が出来る。

そんな戦車揚陸艦『神田』が海原を突き進む中、漆黒の空の中から、唐突にP-51D『ムスタング』が姿を現した。P-51Dは第2次大戦最優秀機たるムスタングの中でも決定版であり、米陸軍の新鋭戦闘機だ。火力強化の為、計6挺の12.7mm重機関銃を搭載、翼下にレールを追加し、最大8発の55mmロケット弾を携行出来るようになった。

P-51Dが2機、旭光の防空網を縫って現れた事により、上陸地点は騒然となった。対抗出来る手段は数少なく、上陸した帝国陸軍兵達は海岸を四方八方に逃げた。その混乱状態を見過ごさなかったP-51Dは、6挺の12.7mm重機関銃を咆哮させた。血飛沫が飛び、砂浜が紅色に染まる。

一方、海岸揚陸を図った神田はP-51Dの猛攻を前に少しずつ後退を始めた。

たじろきながら、時間稼ぎを図るべく、神田は艦首・艦尾の65口径12.7cm単装高角砲でP-51Dに鋼の洗礼を浴びせ掛けた。

続いて、25mm連装機銃が咆哮す。

これには参ったと、2機のP-51Dは一旦旋回し、距離を取り始めた。

神田が奮戦を行う中、1機の旭光が到着した事で状況は変わった。55mm噴進弾を10発搭載し、12.7mm重機関銃のそれを凌ぐ20mm機銃を6挺備える旭光は2機のP-51Dを威嚇するようにジェットエンジンの爆音を轟かせ、時速900km程度で空を駆る。

更に沿岸域の艦艇が対空攻撃を図り、鋼鉄の雨が降り頻り始めると、P-51Dのパイロット2人は同様に身の危険を覚え、一時後退を決意した。

しかし、旭光と神田は逃さない。

神田の主兵装12.7cm高角砲が咆哮し、10発の55mm噴進弾がけしかけられると、空に紅蓮の華が咲き乱れた。華は無数の

漆黒の花弁を散らしながら墜ちていく。もう1機は背後に付いた旭光の20mm機銃の攻撃を受けながらも、パイロットが持ち前の技量を活かして逃げおおせた。

——戦闘終了後、神田は三式中戦車を降ろして任務を完遂させた。

第76話 ハワイ上陸戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第77話 ホノルル侵攻

第77話 『ホノルル侵攻』

1944年7月15日PM03…10

アメリカ合衆国／ハワイ

カネオヘビーチ上陸から2日目の朝、総勢6000人以上に及ぶ帝国陸軍部隊が、首都ホノルルを攻め落とすべく態勢を整えて出発した。横須賀鎮守府第1特別陸戦隊と陸軍第1挺進連隊によって掌握されたカネオヘ飛行場を拠点に、2日間で上陸部隊は周辺地区の防備を固め、強固な防御網を形成した。2つの空挺部隊を始め、侵攻軍は猛者揃いだった。そこに帝国海軍・統合戦略航空隊の航空支援が加わり、万全の態勢で挑む。

主力は戦車第1師団、戦車第1連隊。8両程度の三式中戦車『チヲ』を配備し、陸軍最高峰の戦車部隊に成長していた。また、貸与や鹵獲によって入手したM3・M4中戦車を根幹にしており、戦闘に熟知した兵士達は上手く使いこなしていた。

「――ホノルルに1番乗りした者には惜しみない賛辞と1杯の酒を呈しよう」

朝陽を背に向け、戦車第1連隊長藤田実彦大佐は微笑を滲ませて言った。血色の良い幸福顔に胸元近くまで伸ばした髭、その特徴的な風貌は兵士達にも親しみを持たせた。勿体振った、格好だけの帝国陸軍の高級将校とは訳が違う。

午後3時、戦車第1連隊はホノルルに突入した。士気は上々、兵装もまずまずの状態だ。歩兵第28連隊の進路を切り開くべく、三式中戦車『チヲ』を所有する第3中隊が先陣に立っていた。第1世代MBTに相当する性能を誇るチヲをも持つ戦車第1連隊だが、実

際には不安要素が多かった。それは『市街戦』という未知の経験への恐怖だった。

1943年11月19日、ナパームと零式徹甲弾の洗礼から始まったマレー戦において、戦車第1連隊は投入された。コタバル制圧に2両投入されたチヲだが、その時は小規模な町を襲っただけで役目を終えた。それは52tもの超重戦車である事や、貴重な車両であるが故だった。貧弱な英印戦車であればM4やチヌ程度で十分対応出来た。シンガポール攻防戦に至っても、三式重噴進爆撃機『天河』の絨毯爆撃により、既に市街は甚大な被害を受けていて、史実通り市街戦前に英側が降伏した。結果、戦車第1連隊は戦闘経験を得られなかった。コタバルのような小さな村や海岸なら経験はあれど、首都であるホノルルのような敵性主要都市に侵攻するような経験は持ち合わせてはいない。何しろ相手は守備隊の陸軍3個師団に海兵隊、海軍のお膝元にも当るので、その防衛戦力は途方も無い数だ。反日思想を持ち、武装した市民が軍に扇動され、建物の蔭からM1バズーカで奇襲など仕掛けてくるかも知れない等と、考えるだけで恐ろしい危険性の例があり、戦車第1連隊は戦々恐々としながら前進し続けた。

「よし、俺達が1番乗りだ！」

チヲの車長は部下の兵達に笑みを漏らし、その栄光に湧き上がった。第3中隊に所属するそのチヲは2両のチヲと列を組み、舗装された道を突き進む。

戦闘開始はその時、午後3時を10分程度切った頃だった。3両のチヲの前にM4『シャーマン』が姿を見せた。数は計6両。背後から進軍する歩兵連隊が到達する前に破壊してしまうおうと、先頭車両の車長は心に決めた。M4戦車は扇状に展開しており、周囲に土嚢を盛ってあった。

最初に砲を吠え立てたのは――チヲだった。先頭車、2号車の6

4口径84mm戦車砲が唸りを上げて市街地を飛んでいって、M4戦車の装甲を貫いた。前面の軟弱な装甲は84mm戦車砲の前では意味を成さず、車内で砲弾が炸裂して、M4戦車は沈黙した。残った5両が仇取りと言わんばかりに、怒りの矛先をチヲに向けるのは容易く想像出来た。先頭車に鎮座する車長は、後退を命令し、M4の鋼の洗札を切り抜けさせた。M4の砲弾は車体すれすれを抜け、虚しく空を駆けていった。

「よし、撃ち方用意……撃てッ！」

3門の84mm戦車砲が咆哮し、M4戦車に鋼の刃を突き立てた。戦車は鉄屑に還る。残り4両。前進、後退を繰り返しながらチヲは奮闘した。第3中隊のM4戦車が合流すると、戦闘は終わりを告げた。初期戦において、M4中戦車が6両も破壊されたという事は、米陸軍司令部に衝撃を与えた。しかも、相手には1両の損失も与えられなかったのだから面目丸潰れだ。

ホノルル市街戦はその戦車戦闘を区切りに、本格化した。数分後、迫撃砲と榴弾砲の砲弾100発程度が、侵攻部隊の頭上を唸りを上げて飛んでいき、敵陣を粉碎した。第1波の砲撃後、極星の大編隊が守備隊拠点の空を覆い隠し、爆弾の雨を降り注がせた。砲撃と爆撃によって露払いされた道を、精鋭たる第28歩兵連隊が歩を進めた。

そんな中、市街では市民間の抗争が始まっていた。それは日系人対白人――の戦いだった。

戦闘勃発の発端は4ヶ月前、統合戦略航空隊のハワイ封鎖作戦だった。封鎖後、『人種差別からの解放』をテーマとしたビラがホノルルの街角を覆い、食糧を積んだコンテナが降り立った。そのビラに日系人達が興味を示さずにはいられなかった。

1943年11月の米英加豪4国による対日宣戦布告から2ヶ月後、フランクリン・ルーズベルト大統領は日系人の逮捕を命じた。12万人以上の在米日系人は、僻地に設置された強制収容所に収容された。そんな中、ハワイでは例外的に日系人は収容されなかった。

理由は――日系人が多過ぎるという事だった。ハワイ人口の内、約4分の1を日系人が占めていた。その状態で日系人を全員収容すれば、経済活動が大混乱を起こす事は目に見えており、輸送面の問題も合間って行われなかった。そして日本の快進撃がハワイ在住の白人達の不満を募らせ、人種差別を加速させていた。

そして人種差別の限界点は――ハワイ封鎖だった。食糧不足からの経済停滞、軍の怠慢への不満に繋がり、同時に恐怖を駆り立てた。全ての不満と恐怖の矛先が日系人に向かうのは言うまでもなく、真の解放を望む過激派が日本軍を支援するようになった。ホノルル侵攻はその解放を望む勢力の戦闘開始の火蓋を切る事となった。

戦車第1連隊第3中隊が進撃する中、市民間の抗争は目の当たりにした。軍から支給されたか、拾ったのか――M1バズーカロケット弾を肩に背負った若い白人の男が建物の上から、第3中隊のM4中戦車を襲おうとして、1人の日系人の老人に阻止された。老人の手には古びた猟銃が握られていて、躊躇せず男の胸に銃弾を刻み込んだ。どの街区でも、燃えながら崩れ落ちる建物の目にしみる煙を背景に、侵攻部隊は両勢力の交戦に巻き込まれた。そして、日本軍が露払いする。

進軍する戦車を蔭にして、精鋭たる第28歩兵連隊は歩を進めた。この頃、帝国陸軍は守備隊の戦闘計画に気付き、厄介な事になる事を知っていた。米陸軍守備隊は徹底抗戦を決意し、ダウンタウン地区のイオラニ宮殿近辺に籠城しようとしていたのである。

イオラニ宮殿は1880年代、ハワイ王国第7代国王カラカウア王の命によって建てられた。当時はイギリスのバッキンガム宮殿にも無かった電気設備を備えていた。地下設備もあり、重要な文化財としてハワイ封鎖時に爆撃隊が攻撃を禁止されていたイオラニ宮殿は守備隊の目に留まり、拠点とされた。

イオラニ——『天空の鷹』なる意味を持つこの宮殿に対し、砲撃が加えられた。

第28歩兵連隊が宮殿近くまで到達した頃、陸軍の砲撃が始まった。周辺地域の防衛陣はそれで一旦寸断され、最終的に勇猛な兵達によって沈黙した。

孤立したダウンタウン地区の守備隊の抵抗は、日本軍部隊が近付くにつれて弱まった。もはや砲の轟きは止み、燃える建物の火が燃え滾る音や、時々壁が崩れる音が聞こえるだけだった。M4中戦車が要所に配備され、薄い装甲に気持ち程度の土嚢やコンクリートの防壁を備えたという防御陣も、見られなくなってきた。同時に、市民間抗争も終結していたようだ。

全てを終わらせる為——クラスター爆弾と250kgを搭載した天河——が陸軍の命を受けてホノルルの空に現れた。銀翼を輝かせ、純白の雲から機首を飛び出して、機体をイオラニ宮殿直上に向けた。対空火器が唸りを上げ、天空に向けて無数の銃弾を撃ち付けた。銃弾の嵐を縫うようにして進み、天河は爆撃ポイントに到達すると爆弾倉から——2tもの爆弾を差し向けた。

午後7時、ダウンタウン地区から銃声が止んだ。

鉄兜から土埃を払い落とし、震える身体を大地に踏み立たせ、息を整えた守備隊指揮官は、白旗を振って侵攻部隊の前に歩み出た。遂に降伏したのだ。少なくとも、ダウンタウンから戦闘は消えた。

彼らは周辺地域の海軍や陸軍の航空戦力に最後の望みを賭け、後2~3日は籠城し続ける気でいた。周囲に地雷源を設置し、戦車を用意し、食糧をかき集めた。だが、そんな備えも1機の天河によって、儚くも崩れ去ったのだ。そして絶望の末、指揮官は降伏した。

第77話 ホノルル侵攻（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第78話 真珠湾攻防戦

第78話『真珠湾攻防戦』

1944年7月16日AM04:00

高度12,000mの高みから、西川一等海尉はパールハーバーを眺望した。サフラン色に染まりつつある空を、100機以上の三式回転輸送機『雲雀』が群れを成している為、黒点が目立った。その隣を無数の戦闘機と爆撃機が鎮座し、一筋の大河――米軍にとっては恐怖を象徴する大河と言えた。それぞれが銃弾から爆弾と、数千~数万の命を消し去る兵器を搭載し、轟々と天空を進んでいる。後ろに曳く白い尾は重なり、巨大な飛行機雲を形成している。地上もまた、人や戦車や装甲車から成る集団が覆い尽くしていた。

ホノルル侵攻から15時間程度、真珠湾制圧作戦は滞り無く始まった。零戦、旭光、ハリアー?から成る防空網が張られ、航空支援を担う三式陸攻や極星の爆撃隊、雲雀中心の輸送隊を護衛する。しかし、既に作戦開始時点で600機以上のハワイ航空戦力の大半は、第1次航空戦の時点で打ちのめされていた。周辺飛行場はなおも黒煙が立ち昇っているのがそれを物語っている。

「CIC、こちらクロスジャック・リーダー、リーダー・コンタクト。大規模な敵編隊の存在を確認した。交戦許可を要請する」
AN/APG-65(V)2機首リーダーは敵の存在を捉え、ディスプレイ画面に投影していた。

『こちらCIC、交戦許可』

護衛艦『きい』CICに居た高橋三等海佐は言った。

数分後、ハリアー?支援戦闘機隊は西川の指揮の下、行動を開始した。4機のハリアー?は編隊を崩さず、迫り来る24機のP-4

7『サンダーボルト』の前に躍り出た。P-47は図体も重量もでかい割に高高度では機動性に優れ、何より防弾性に富んでいた。ハリアー？に搭載されたGAU-12イコライザーの25mm弾と言えど、P-47の機体を引き裂くのは容易ではない。前方に広がるP-47はホノルル侵攻と、この真珠湾侵攻から、急遽補修作業を受けた陸軍飛行場から発進した機であった。

「FOX2!!」

ハリアー？4機が各2発——計8発のAIM-9『サイドワインダー』はP-47を捉え、白い尾を曳きながら一直線に突き進む。刹那、8機のP-47は紅蓮に染まり、粉々に砕け散った。無論、P-47のパイロット達は恐怖に戦いた。万能の槍、神の槍——言いは複数存在したが、大日本帝国軍の驚異的な兵器はハワイ防衛隊の中で伝染病の如く広がり、途方も無い噂を幾つも生み出して士気を削いだ。

勇猛果敢な旭光戦闘機隊も後方から加わると、米陸軍航空軍の戦闘機部隊は遂に撤退の事を頭に浮かべだした。

しかし、このP-47戦闘機隊を指揮するスミス中佐は、一步も引かなかった。

「——しっかりしろ！我々は合衆国陸軍——此処は祖国だ。逃げる場所も無ければ理由も無い」スミスは無線越しに、AIM-9の鋼鉄の洗礼を逃れたP-47のパイロット達に言った。「噂は所詮、噂だ。数では今だ、我々が勝利している。それにこの空なら勝算はある！」

そう言うと、スミスはP-47の操縦席から、1機の旭光に狙いを定めた。旭光は僚機を追い、10発の55mm噴進弾を放とうとしていた。

巧みに機体を操り、彼は旭光の背後にへばり付いた。僚機は囷となり、急降下して55mm噴進弾を避け、難を逃れた。スミスは直

属の部下、ルーミス少尉と合流して、同時に8挺の12.7mm機銃を咆哮させた。無数の銃弾は全面に展開、旭光は避ける間も無く撃墜された。

続いて囹の役を買って出たのはルーミスだった。わざと旭光に迫り、挑発する。旭光はまたもや55mm噴進弾を用い、邪魔者を排除しようとした。

55mm噴進弾は稲妻の如く空を駆けるが、P-47は高高度での急降下ではそれを凌駕する。重厚な機体ながらも800km以上の速度を出し、また大型のP&W-2800エンジンと巨大プロペラにより、上昇率にも優れた機体だった。結果、史実では数多のドイツ軍、日本軍機を葬り去った。

轟々とジェットエンジンの爆音を響かせ、時速900km程度で飛行する旭光は、P-47に若干圧倒されていた。そもそも助っ人に参戦したのは8機で、その内1機は落とされた。そしてまた、1機が熟年パイロットの手により、翼を？がれた。8挺の12.7mm機銃と、計4発のFFARロケット弾が、猛然と旭光を襲い、周辺空域を一掃した。決定打となったのは12.7mm弾だった。

そんな空戦の最中、火力支援を行うべく戦火に突入した4機のハリアー？は、P-47を恐怖に陥れた。残るAIM-9を温存しつつ、GAU-12で敵を討つ。100発ばかりの25mm徹甲焼夷弾を放ち、P-47に炸裂させて鋼鉄の翼を引き千切った。明らかに速度や機動性が違い過ぎるこの機に対し、P-47のパイロット達は姿を見かけると一目散に散らばった。

「――弾切れが近い」

西川はディスプレイ画面を見据え、無線越しにCICへと伝えた。『了解した、弾が切れ次第、撤退しろ。待機している第2次攻撃隊を向かわせる』

いや、まだだ。歴戦の強者が生き残っている。

天空で貪欲なまでに旭光を仕留める1機のP-47を見て、西川は呟いた。機動性・速度等を考え、複数の機と連携するその機は、

優れたパイロットが乗っているに違いなかった。

残弾数を気にしつつ、西川はそのP-47に狙いを定めた。

天空の激戦が始まった頃、地上でも大規模な戦闘が始まっていた。鹵獲や貸与品のM3、M4。最新鋭の三式中戦車『チヲ』『チヌ』等から構成される戦車第1連隊の第2、第4中隊は、防空網を潜り抜けてきたP-51D『ムスタング』やF6F『ヘルキャット』の機銃掃射・航空爆撃、真珠湾を守る防衛隊の対戦車兵器による集中攻撃を受け、真珠湾港湾の一角で釘付けにされていた。また、真珠湾内の石油タンク近域でも、敵の防衛陣の前に多数の雲雀が危機に立たされていた。両者共、狙いは石油タンクだった。

史実、開戦時の真珠湾には450万バレルもの重油があった。今世界でもそれは同じで、満州の大慶で石油精製が進まない以上、帝国陸海軍にとってこの重油は手に入れるべき物だった。それに気付いたニミッツ大将は防衛網を敷き、島内で再編を図る防衛部隊の到着まで耐えようと試みた。

もし到着前に占領されようものなら、ニミッツはタンクを全て焼き尽くそうと考えていた。それは即ちパール・ハーバー地区の港湾施設としての能力を失う事になり、数ヶ月は米海軍は行動を起こせない。重油を失うだけに足らず、火災によって港湾施設は一扫されるかもしれない。

それを阻止するべく、予定以上に早く日本軍は行動を開始した。

雲雀によるヘリボーン、そして三式陸攻からのエアボーン作戦を敢行し、可及的速やかに石油タンク施設を掌握するのが作戦概要だった。対空火器による強固な防空網には、爆撃機や攻撃機を用いて攻勢を仕掛ける。5000人以上の兵から成る日本軍としても、無謀と言える作戦だった。

弱々しい曙光が差し込む中、雲雀の第1波が港湾内に侵入し、強

襲攻撃を仕掛けた。各機、2名ずつの兵員が降ろされ、M1カービンやM1ガーランド、三八式歩兵銃を構えて突き進む。薄闇に包まれた湾内には、大きく傾斜して海面に艦体をつっ込んだ艦船が数多見れた。

太平洋艦隊司令部の地下壕に陣取るニミッツ指揮の下、防衛部隊を力の限りを尽くした。激しい鉛玉の洗礼に始まり、後方を陣取った陸軍砲兵隊の榴弾砲が放つ強烈な砲撃が襲う。ようやくチヲが砲火を乗り越え、支援を行える頃には、雲雀部隊は甚大な被害を受けていた。だが、重厚な装甲と64口径84mm戦車砲を武器に、敵陣に深く切り込んだ。

三式陸攻から空挺降下した横須賀鎮守府第1特別陸戦隊の兵達は、混乱する敵の隙を突き、友軍を引き入れる突破口を開く事に成功した。全部隊が銃弾を掻い潜り、敵陣に雪崩れ込む。

「ジャップが来たぞおおおッ!!」

指揮官の将校が叫び、劈くような音が周囲を包み込んだ。しかし防衛部隊の兵士達は1人、また1人と倒れていく。数分後、榴弾砲の砲撃を米軍は受け始めるようになる。

この頃には、真珠湾の命運は決まったようなものだった。

P-47、スミス中佐は——愕然として“噂”に巡り合った。

音にも迫る速さ、華麗な機動性、全てを貫く神の槍……。

「冗談じゃない！」スミスは叫んだ。「お前に怯え、震えるものか」

スミスはP-47を旋回させ、敵機ににじり寄る。「来い、お伽の世界に還してやる!」

心の叫びに共鳴したのか、敵機——ハリアー?——西川はスティックを握り、ミサイルレリーズを押し込んだ。AIM-9が飛び出し——オアフの空を飛翔した。

A I M－9に気付いたスミスは、噂の槍の神髓を思い知った。操縦桿を握り締め、彼は目一杯まで降下、速度は軽く800kmを越えていた。機体が悲鳴を上げながら、風を切って高高度から下へ下へと落ちていった。しかし、背後からは今だ、A I M－9は続いていた。

刹那――閃光と衝撃の末に――P－47は灰に還った。

第78話 真珠湾攻防戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第79話 ルーズベルトの意地

第79話『ルーズベルトの意地』

1944年8月15日AM09..20

アメリカ合衆国／ワシントンD.C.

首都ワシントンDCの様子は明らかに変貌していた。壮麗で貴重な歴史的建築物が立ち並ぶ街角には、必ずと言っていい程、露骨な高射砲が並べられ、天空にその切先を向けていた。新たな民主国家の法と文化の拠点として築かれたワシントンDCには現在、4000門以上の高射砲が配備され、首都の天空に壮大な防壁を築いている。これは、バトル・オブ・ブリテン時のロンドンに配備された高射砲の4倍近くに相当する数であった。また、支援の見返りとして英国から寄与された技術を基に、最新鋭の早期警戒レーダー網をワシントン中に張り巡らせていた。

これだけの防空網が築かれたのは1943年11月16日、ポーツマス―ノーフォーク海軍造船所―の忌わしき惨劇、世界初の原子爆弾UG-1―『ミョルニル』による核攻撃だった。その2時間後、H0-18によるワシントンDC・ニューヨークのビラ散布が合衆国政府の防空意識を決定付けた。

史実、40億ドル以上の国費が防空強化に充てられていた。が、それ以上の予算増加が議会に承認された。議会がそれを承認したのは、H0-18の不気味な機影とワシントンを埋め尽くすビラをその目で見たからなのは、言うまでもない。その潤沢な予算により、ワシントンには逐次、高射砲や護衛戦闘機が配備され続けていた。

ワシントンDCペンシルベニア1600番地、ホワイトハウス。
オーバルオフィスに鎮座する第32代大統領フランクリン・D・
ルーズベルトは眼鏡を外し、目頭を摘んで、眼前に遠慮気味に立っ
ているコーデル・ハル國務長官の顔を覗き見た。彼は怒気を含んだ
ルーズベルトの視線に耐え切れず、目を背けている。

「……もう1度、言ってくれないか？」

彼は穏やかながらも、憤りを滲ませた声色を発した。

ハルは真実を告げなければならなかった。「ですから、ハワイは

――」

「ハワイは？」ルーズベルトの、剣の様に鋭利な視線がハルを貫
いた。

「――落ちたのです。日本に」

視線を落とし、苦しげな表情を浮かべながら言った。

H I作戦開始から3週間程度、カネオヘビーチの上陸から始まっ
た侵攻作戦は3週間で真珠湾・ホノルル等重要な戦略拠点を奪い、
オアフ島の防衛隊の戦力・士気を削り取った。そして僅か1週間足
らず、日系の地元民から構成される民兵のスパイによって内陸に潜
む軍指揮官達が見つかり、2日に渡る攻防戦の末、海陸軍は白旗を
振り、ここにH I作戦は終結した。

第32代大統領にして、大統領4選を目指すルーズベルトとして
は、最悪のニュースだった。合衆国の準州――とはいえ、自国の領
土を喪失させた今、1944年度大統領選の勝利の可能性は無に等
しい。そもそも、身体的衰えと敗北続きの中、党内で再指名された
だけでも奇跡と言えた。投票日の11月7日までは、後3ヶ月程し
か残されていないのだ。その間に巻き返しを図るのは、自身の人気
と選挙戦術を限界以上まで引き出させても不可能だろう。今大統領
選挙における宿敵、共和党大統領候補のトマス・E・デューイに敗
北するのは必至だ。

ルーズベルトは呆然としている様だった。「私は――これで」

ハルは書類を纏めたファイルをデスクに差し出した。

「大統領、これは9時に日本から届いた物です」

ファイルから1枚抜き出し、手で示した。「彼らは講和を望んでいます」ハルは言った。「最早、合衆国はアジア侵攻を中断し、日本人と握手を果たすべきだと思います。対日対独の合衆国本土東西二正面作戦というのは荷が重過ぎると私は――」

「分かった、それを」

ルーズベルトは口を挟むと、ハルの手から書類を引っ手繰る様にして取り、その1枚の書類の隅々に目を行き渡らせた。警戒心溢れる視線だった。

「――恒久的な核兵器の放棄……」ルーズベルトは鼻で笑った。「馬鹿な。ドイツが1年も前に造り出し、配備しているそれを捨てろとは……我々に死ねと言っているのと同じでは無いか。奴らにそれで脅されれば、合衆国は戦わずして敗北を宣言せざるを得まい……」

確かに、とハルも思った。1発で数万の命を奪う兵器、それが核兵器だ。もし講和条件を呑めば、それを既に多数保有持するドイツ、そしていずれ開発に成功するであろう国家に対し、永久に外交面で不利に立たされる。国務長官としては、呑めない条件と言えよう。

しかし、1人の人間――国連設立による恒久的平和を望む者としては――悩むべき所だった。

「大統領、それも1つの手ではないでしょうか」

ハルの言葉に、ルーズベルトは目を丸くした。「何？」

「核の威力を大統領も知ってらっしゃるでしょう。私もポーツマスに行つて、あの惨事を見してきました。我々が持つてしかるべきものは、あれを使えなくする手段です」

「では聞くが、その具体的な例は？」

その質問に対し、ハルは押し黙ったままだった。

ルーズベルトは唸った。「言えないだろうか？当然だ。それは原子爆弾なのだから」ルーズベルトは拳をデスクに打ち付け、音を出した。「ボーン――！奴らはレーダーに映らない爆撃機を使ってポー

ツマスを爆撃した。怖いだろう……次はどこだか分かるか？」彼は
洗面を浮かべ、ハルの顔を見据えた。「分からないんだ。止めたく
てもな。それに奴らはレーダーに映らない航空機だけでなく、高性
能のロケット兵器も開発している。専門家の多くは、ナチスが以後
数年の内にそれに原子爆弾を搭載し、我が国に撃つ事の出来る大陸
横断攻撃兵器を開発するだろうと推測した」

ルーズベルトは更に話を続ける。「専門家の話だと、V2ロケッ
トを迎撃するには、1万門以上の高射砲で造った重密な弾幕が必要
だそうだ。此処、DCに4000門も5000門も高射砲が置いて
あるのは、それに備える布石の1つなのだよ。我々は既に数年先の
未来を見据えているのだ」

……それで納得がいく。

ハルは前から、ワシントン中に備えられた対空火器の多さに疑念
を抱いていた。爆撃機に対抗するとはいえ、敵1に対し4000以
上というとてもない割合の対空火器は、本来東海岸をカバーする
のに使ってしかるべき物なのだ。ワシントンに集中配備されている
実態は、ステルス爆撃機といずれ第3帝国が実用化に成功するであ
ろう、長距離ロケット兵器への対抗措置——一種の実験なのだ。

「とはいえ、例えば高射砲が1万門あるうとも、それを完全に撃墜
出来る確証は無い。だからこそ、抑止力として合衆国には核兵器が
必要なのだよ」

対軍事、対外交等、様々な面で核兵器は防壁になると、ハルも
考えていた。1発で都市1つを破壊出来るという事は、都市1つを
人質に取るようなものだ。あらゆる面で、抑止力として活躍する事
は目に見えている。更にそれを使わない、或いは無力化させる対抗
兵器は——それに相当する抑止力だと言えよう。ルーズベルトはア
メリカの工業・経済力を信じ、他国では出来ない壮大で途方も無い
スケールの防衛措置を取らせ、それを発展させ続ける事で核に相当
する“力”を手に入れようとしている。

つまり彼は、2つの力を手に入れ、他国よりも優位に立とうとし

ているのだ。

しかし、その力は既に第3帝国や大日本帝国も有していた。

「ナチスの新兵器を知っているか？海や陸に配備されたそれは、無数の空母艦載機と爆撃機、輸送機を葬り去った」ルーズベルトは顔を顰めた。「奴ら、第3帝国は数年先どころか、数十年先を進んでいる訳だ。2つの抑止力を持った敵に対し、1つで対抗出来るのか？」

出来ない――とハルは胸の中で即答したが、口には出さなかった。ハルは一步後ずさった。「分かりました大統領、しかしよくお考え下さい」ハルは言った。「やがてそれは自分の首を自分で絞める事にもなりますよ。一步間違えば……」

そう言い、「ボン！」と口を窄めて爆発音を真似た声を発した。

「――自分の身に降りかかる事になりますよ」

「思い切ったな」ルーズベルトは言った。「確かに、それは一理ある」次にくる言葉を、ハルは大体予想していた。「だが、身に降りかかるより敵に浴びせられる被害の方が大きいのは明らかだろう。しかるべき者によってしかるべき管理を行えば、害ではなく利となり続ける」

ルーズベルトは出入口扉を一瞥した後、ハルに視線を向き直した。

「書類は読んでおく。結論は早い内に出そう……」ルーズベルトは言った。「とりあえず、今は退室してくれ。少し考えたいのでな」

20分後、ジェームズ・V・フォレストル海軍長官と、ヘンリー・L・スティムソン陸軍長官兩名が、互いに顔を見合わせながらオバルオフィスに足を踏み入れた。第32代大統領ルーズベルトの顔色の悪さが2人には即座に分かった。意識朦朧といった様子で窓から万緑の園、ザ・エリプスを一望した後、背後に並んで立つ男達に顔を向き直した。

「――よし、早速だが……ハワイへの戦略爆撃について、諸君等の意見が聞きたい」

第13章 『HI作戦』 完

第79話 ルーズベルトの意地（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第14章 『オーバーキャスト作戦』 第80話 新京会談

第80話 『新京会談』

1944年8月22日PM03:00

満州国／新京

首都新京の玄関口、新京駅。中枢に位置するこの駅は、連京線、京浜線、京図線、京白線と満州国内を結ぶ4路線が集まる一大ターミナルだった。『国都』――新国家『満州国』建国の際、国の顔とも言うべき首都建設構想の中で、この新京駅は産声を上げた。そして、駅の役割はこの4路線の中心点だけでなく、国都の中心も担っていた。

そんな新京駅に、思わぬ来客が訪れた。軽快な駆動音と耳を劈く汽笛が鳴り響き、大編成の列車がその姿を現した。普段、鈴なりにプラットフォームを埋め尽くす一般市民の姿は無い。代わりに憲兵や将校達が、排煙と砂埃の充満するその場所に列を成している。

満州国軍はおろか、関東軍の兵でさえ、新京駅に何の理由で、そして何が起るのかを知らなかった。特別な出来事が起るのは確かだった。新京駅から周囲数km圏内は一般人の立ち入りが禁止され、その周辺地域にも多数の検問、封鎖線が敷かれていて、新京駅付近はいわば――陸の孤島――と化していた。その陸の孤島への唯一の移動手段、船に相当するそれが列車なのだ。そして新京駅に到着した列車を見た兵達は、その異様さにまた1つ、疑念を抱いていた。

大編成の車両の全ては、普通の列車とは訳が違った。鮮やかな深緑色の車体がそれを物語る。そしてその列車の心髄には、1人の男の姿があった。その男用の専用室、広々とした会議室、豪華な食堂

車、そしてバスルームもあった。更に車内には、数百人の一般従業者達の他、重武装を施された屈強な軍人が数十人程乗り込んでいた。列車が停車し、鋼の身体とも言うべき体格の軍人が出てきたのを見て、満州国軍や関東軍の兵達は察しがついたようだった。兵達の口から、“露助”とか“ロシア野郎”といった、それに類する蔑称が自然と飛び出した。

同様に、赤軍の精鋭兵士達も、小柄で黄土色の肌について蔑んだ言葉を吐いた。

蔑称合戦がプラットホーム上で繰り広げられる中、1人の男の登場が終止符を打つ事となった。

新京駅前に隣接する新京ヤマトホテルは、1909年に完成した高級ホテルである。ロシア帝国や清国高官との交渉の場に充てられるべく建設されているが、この1944年8月20日こそ、その目的の達成点とも言うべき記念すべき日だった。

ソビエト社会主義共和国連邦第2代最高指導者、ヨシフ・スターリンは館入口を前に、その歩みを止める気は無かった。今日という日が、歴史の変換点になる事を――彼は確信していた。その名と自らの名声は不変のものとなり、後世に刻まれる。そして今、目の前に聳え立つ白塗りの建物も、後世の歴史に刻まれ続ける事だろう。

スターリンを迎える新京ヤマトホテルは、この出来事が無くとも後世に刻まれておかしくなかった。とても壮麗な建物だった。ウィーン分離派――ゼツェション、セツションとも呼ばれる芸術家集団の芸術改革の中、確立されたセツション様式がこのヤマトホテルの内外装には使われていた。セツションは直線、直角、方形、円形といった幾何学形態に特徴を持つ、モダンデザインの先駆けだった。様式には世紀末の官能的、廃退的な雰囲気も漂わせていた。

新京ヤマトホテルはそんな様式を備えた建物である。因みに、広島

市にて世界文化遺産になった原爆ドームがあるが、それもセセツシヨン様式が用いられている。あの特徴的な楕円形ドームこそ、セセツシヨンの神髄ともいべき点だ。

館内の一室へと招き入れられたスターリンは、そこでようやく話すべき人間達と対面した。その部屋には東条英機総理大臣、蒋介石、中華民国元首、満州国皇帝溥儀と、アジアの盟主3名が鎮座していた。3名が向かい合い、取り囲む円卓に置かれた席の一つを進められ、スターリンは腰を下した。

これは後に――『新京会談』――と呼ばれる首脳会談の始まりだった。

この4ヶ国の首脳達が集まった理由は、米国への宣戦布告だった。昨日15日、ハワイ防衛軍が降伏を表明、ハワイが日本の占領下に入ったと同時に、ソ連は3国にアプローチを掛けた。それは日本に米英加豪4国同盟――連合国が宣戦布告して以来、虎視眈々と漁夫の利を狙うソ連が重い腰を上げた証拠で、対米参戦と軍事的同盟を望む日本には嬉しいニュースと言えた。交渉の場として以前から取り決めていた新京が選ばれ、22日に4国首脳が集まる事となる。新京が選ばれた理由は、日ソ中3国の中間点に位置する事と日ソ間で大まかに力関係を示さない為、そして満州国が日本にとって都合が良かったからだ。

4国間の中で、最初に決められた取り組みは――『対米参戦』密約だった。

「――私は祖国の悲願を達成したいのです」

スターリンの第一声がそれだった。

重要且つ機密の事項の中に、『対米参戦』があった。これは4カ国間の会談が実現した最大の要因といえる。かつてヒトラーがスターリンに提案した『西と東』構想もまた、スターリンの対米参戦を掻き立てていた。

秘密協定として打ち立てられた『新京協定』は、史実のヤルタ協定に近かった。米国に対する講和勧告開始から30日後、返答無し、若しくは否定された場合、中立関係に立つ満中ソ3国は米国に参戦、アラスカへと侵攻し、各軍によって各地を分割占領するということだった。当初、提案した日本は60日の期間を考えていたが、スターリンは米国が講和に行き着く猶予を与えない為、30日と期間を縮減させた。

この協定に、ソ連・中国は好意的だった。スターリンはこの対米参戦でアラスカ領を奪還し、祖国の英雄として永遠にその名を刻んで、自身の地位を盤石にしようと考えていた。また、蒋介石も中華民國建国初の快挙として、アラスカに攻め入り領土を確保、欧米に一条報いた英雄として、一党独裁体制を盤石にしようと画策していた。

だが、日中満3国は同盟関係にあるはずのソ連を始めから敵視していた。ハワイへの侵攻後、ソ連は着々と極東方面に兵を送り、その戦力を増強していた。こうなると、アラスカにおける領土確保はソ連の一人勝ちとなるのは目に見えていた。ソ連は海軍力乏しく、空母さえ運用していなかったが、ランドパワーは強力だった。独ソ戦を経験していないとはいえ、急激に領土を広めた日独への対抗戦略として軍備増強を推し進めており、その気になれば数百万の兵をアラスカに攻め入らせる事も出来た。経験や技術こそ乏しいものの、力押しなら急発展した日本も太刀打ち出来ない。

しかし、アラスカには膨大な量の資源があり、大日本帝国や中国としては、1つでも多くの土地を占領下に入れたかった。それに末端とはいえ、米国を赤化させる訳にもいかない。そんな事をすれば共産主義の防波堤の1つを失い、アジア全域がソ連に呑み込まれる

事を、3国の指導者達は気付いていた。

民主主義国家である中華民国元首、蒋介石はその事に危機感を覚え、日満に3国協力体制を取る事を提案した。これは3国協同でアラスカの領土を効率的に奪い取る為の方法だった。

日本は絶大な技術・経験に加え、大型戦艦や航空母艦等、ソ連が持たない海洋戦力を多数持ち、満州国も史実以上に兵力が潤沢だった。これは満州国の独立を図るべく、関東軍に代わる戦力として満州国軍を育て上げる為に米国が行った武器貸与によるもので、満州国軍には米軍の貸与兵器が多く配備されていた。これに貸与空母も持つ中華民国の戦力を加えれば、アラスカ攻略には十分な戦力を有する事となり、ソ連を出し抜けるだろうと考えていた。

それぞれの思惑が交錯する中、新京協定は練り上げられていった。

第14章 『オーバーキャスト作戦』 第80話 新京会談（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第81話 ハワイの実情

第81話 『ハワイの実情』

1944年8月15日、『H I作戦』は遂に実を結ぶ。米軍司令部が陥落し、軍首脳部は降伏を宣言した。こうして、ハワイは日本軍の前に落ちた。しかし、それは苦難の道程の始点に過ぎなかった。ハワイ諸島を統治し、平和を維持すべく、4000人規模の駐留軍が置かれる事となったが、諸島全域を掌握出来るだけの余力はなかった。治安は悪化、駐留軍の兵士達は銃を携え、過去の栄光を引きずる白色人種優越主義者や米軍の反乱分子の掃討に手一杯だった。掃討作戦には生き残った警察も投入された。無秩序状態になった街の治安維持には、バスの運転者や電車の車掌、事務方作業を務めていたお役所の公務員達が駆り出された。だが、反乱を危惧した軍は地元民の銃所有を禁止し、銃の支給も行われなかったので、交通整理ぐらいしか出来なかった。

未だ抗戦を続ける米軍防衛部隊や、白色人種優遇思想を持った怒れる群衆の他、島内には各所に防衛部隊の廃棄した銃器や火砲が大量にある為、警察——とはお世辞にもいえない組織——は、武器回収に手一杯で、事実上ハワイは無警察状態にあると言ってよかった。ハワイ解放を望み、立ち上がった人々や占領軍に夢や希望は無かった。大本営は数ヶ月程前から行った『ハワイ封鎖作戦』からの物資投下を含め、H I作戦における大日本帝国の戦争遂行用物資備蓄量の減少に頭を悩ませ、ハワイを手放したいとまで考えていた。ハワイに住む数十万人規模の人間の食糧・生活用品を大日本帝国が工面しなければならぬからだ。戦線を拡大し、新兵器の製造の為に資源を使い続けてきた日本としては、ハワイという新たな領土は、負担が大き過ぎた。結果、数十万人の人間の腹を満たせる量の食糧

も無ければ、住む場所を与える用意さえ出来ていなかった。

全ては——始点に過ぎない。

食糧配給所に診療所、仮設キャンプといった類——の島民への支援体制は全く整っていない。占領軍は内部の兵を賄うだけで精一杯だった。そもそも、流通経路が破綻していた。離島にあるが故、本国との補給線は延びきっている。

また、島内にしても輸送用のトラックも数が揃わず、そもそも街は連日の爆撃・砲撃の嵐で瓦礫が溢れていた為、トラックは瓦礫に行く手を塞がれ、交通網は寸断されていた。この為、闇市が盛んに生まれた。

闇市の開設には、ハワイの地主達が大きく関わっていた。元々、ハワイの私有地というのは、少数の地主達によって大規模の土地が支配されていた。ハワイの全私有地の内、8分の7の土地が40人程度の地主によって支配されており、それぞれが2000ヘクタール以上の土地を所有している。また、諸島経済の中心として、産業の80%以上が集中するオアフ島では、3分の2をその大地主達が所有していた。これらの大地主達は西海岸にコネクションを備えており、占領後日本軍によって民間人が本土に戻る事を許されると西海岸に渡り、違法な密輸団を組織して、西海岸のありったけの物資をボートに積ませると、ハワイに送って売り捌かせた。

この頃、ハワイの通貨状況は最悪だった。円は普及せず、流通通貨にあるUSドルは、破滅的なインフレによって価値を失い、紙切れ同然。結果、経済の基本は『物々交換』に取って代わられた。但し、全体の物資が不足している為、マーガリン1本で1週間の賃金に相当し、小麦粉1週間分なら、高価な装飾品に匹敵するという程、物の値段が上がっている。

更にこの状態を悪化させたのが、闇市だった。闇市では商品に法外な値が掛けられ、取引が行われていた。軍上層部は無論、これを

取り締まるべく命令を下すが、下級層——地元の軍関係者達はその闇市を立てる密輸団に賄賂として物資を渡させ、代わりとして闇市を黙認していた。

この黙認している占領軍——陸軍の下級層だが、私利私欲の為にやっていた訳ではない。この頃、占領軍内は餓死者を日常に出すという、深刻な食糧不足に悩まされていた。現場の下級将校達はその状況と共に、天皇より出された言葉を胸に抱いていた。それは、占領地に住む地元民に対しては、一国民として扱い、その生命と財産を守るように、という言葉だった。それが影響したかどうかは定かでは無いが、下級将校達は部下と、目の前で死んでいく地元民を放っておけなかった。

だが、肝心の二者を救う支援物資は一向に届かず、必要な物を手に入れる為には、闇市の存在を承認するしか、他に手が無かった。

1944年8月30日、夏の終わり。

護衛艦『きい』ブリーフィングルームにて、これまで夢のない絵を描き続けていた桐野海軍少佐は、周囲を見渡した。誰1人として声を漏らさず、愁いを帯びた瞳を向け、項垂れていた。そんな状態に陥ったのは無理もない、彼らは誰1人として、ハワイの実情を知らなかった。

機密保持の為、きい乗員達はパールハーバー、及びホノルルの制限された一部地域のみ、入る事を許されていた。そこは占領軍によって復興された地域で、ハワイの現実——多数の家を失った人々や、食糧を求める地元民達から金を巻き上げる闇市——など、見る事も出来なかった。この桐野の報告によって、一同はようやく、ハワイの現実を理解するに至ったのだ。海上自衛隊員達が思い描いた、日本軍によって統制され、復興作業が進み、各所に救いの手の食糧配給

所や診療所は——とんだ思い違いだった訳である。

傍目から見れば、この占領を『日本軍によって全てが支配されたハワイ』と見るのは当然だろう。しかし、現状は——『日本軍によって土地は支配されたが、経済はアメリカ人によって支配されたハワイ』なのだ。白色人種が未だ支配階級に席を持つハワイである。占領軍は腐敗し、甘い汁をハワイ経済のかつての支配層がしぶとく君臨していた訳である。

「大地主達を拘束して、財産を全て没収すれば良いんじゃないのか？」

高橋三等海佐は発言した。

「ええ」桐野は言った。「しかし、占領と共に、大本営は多くの地元民を米国本土に送りたかった。それで軍の負担を少なくしたかったのです。だから事務方が不足する中、とにかく多くの人間を輸送船に押し込み、富裕層か貧困層かどうかも確かめなかった」

「それで——帰してしまった……」

高橋は洪面を浮かべ、声に出した。

桐野は更に話しを続けた。地主達の土地は没収されたが、彼らは大半の資産を西海岸に運び込んだ後だったという。そこで彼らは資産を密輸組織設立に投じ、闇市を設立した。この間、ハワイへと向かう場合には、米海軍・帝国海軍の人間とも内通しており、賄賂を贈る事で密輸ルートを形成したという。また、物資は米国本土に備蓄されていたものを横流ししているようで、その中では米陸軍から西海岸の議員まで、多くの人間が関わっているのが予想される。

それはさながら、麻薬密売のようだった。しかし、ここで売買しているのは別の白い粉——“小麦粉”だった。

ハワイ島内の闇市場の中でも、小麦粉は人気であり——高価だった。元々、主食の違いを持つ日本は、自国や南方で育てた米を送るのだが、その普及率は低い。ハワイは小麦を育てられない以上、小麦粉は希少品であり、ハワイ封鎖作戦時から多くの島民が悩んでいた事柄だった。

闇市場の面々は本土に貯蓄された膨大な量の小麦粉を手し、市場の数十倍の値でふっかけた。これが1番の売れ押し商品であり、高価ながらもよく売れた。

現在、大日本帝国ハワイ駐留軍にとって最も差し迫った問題は、防空壕や地下壕に今も住んでいる、我が家を失った島民達に住む場所を提供する事だった。プレハブにせよテントにせよ、仮設住居にも限りがある。しかし、防空壕や地下壕のような狭く、息苦しい場所で箱詰めに人を住まわせる事が、健康的に問題だというのは言うまでもなかった。特にホノルルは瓦礫の海が一面に広がった状態で、まずは瓦礫類を撤去する所から始めなければならなかった。

環境を改善すべく、大規模な土木作業を占領軍は行いたいが、円通貨が普及しない結果、彼らは職の手当に食糧や医薬品を望んだ。しかし、占領軍は自らの食事さえも用意出来ていない。よって、占領軍の下級層——地元駐在の将校達は、積極的に復興作業を推奨しなかった。それが、未だにホノルルに広がる瓦礫の海の原因だという。

「何万……いや、何十万の人が家が無い状況です。このままこの状況が続けば、折角プロパガンダで味方についた日系人達も反抗を始めるでしょう」

「まさに負の連鎖だな」

横峰三等海佐は言った。「事の顛末は想像に難くない。ハワイ内部では日本占領軍の排斥運動が高まり、数十万の島民との戦争が始まる。まさに——史実の大東亜共栄圏のように」

「だからこそ、ハワイからの即時撤退が必要という訳だ」高橋は言った。

「その通りです」桐野は頷いた。「このままなら、ハワイ占領は3ヶ月と持たないでしょう。その前に米国との講和を果たさないと、

困った事になる」

更に、大日本帝国には差し迫った問題があった。15日の講和勧告から30日後、米国の返答無き場合はアラスカへと攻め込まねばならない。冬国たるアラスカを攻めるならば、膨大な量の食糧・燃料、そしてそれを運ぶトラックが必要となる。現時点で、それに備えるべくハワイから多数のトラックが持ち出され、本国へと移送され続けていた。このままトラックが運び出され続ければ、確実に輸送網の崩壊は目に見えた話だった。

また、米や医薬品の類がハワイに流れなくなり始めており、食糧不足が懸念された。

「治安の悪化、最初に言いましたが、それが更に深刻な状態になると私は推測します」

桐野は言った。住民は飢え、米軍の防衛部隊の残党は抵抗を続けている。夜になると通りを獐猛な野良犬と放棄された武器を持つ貧困者によって占拠される。それに、敗北を喫して復讐に燃える白人優越武装組織や、防衛部隊の残党兵、闇商人、サイコが徘徊し、更なる軍が動員されなければ、街は彼らによって支配されるかも知れない。

また、巷では食人行為が噂されていた。

「問題三蹟、どうしようもないな」

横峰は言った。「それをどうしようも出来ないとは……」

「ああ……」高橋は苦面を浮かべ、呻きに近い声を漏らした。「結局、いつも戦闘の後に思う事だが、我々は多くの人間の命は奪えるが、それを救う力は持っていない」

護衛艦『きい』の食糧備蓄量では島民どころか、陸軍の駐屯地を救えない事も分かるし、未来の医療知識を持った人間が居るにせよ、大本営は危険地域への立ち入りを許さない。情報漏洩を防ぐ為と、反乱分子から乗員を守る為だ。しかし、本当に救いを求める人間は、その地域に存在する。

特務組織『紀伊機関』の桐野がこの一連の情報を伝えたのは、そ

れが真実だったからだ。最初は護衛艦『きい』の情報漏洩を防ぐべく、防衛部隊の残党の危険性を調べるだけのつもりだった。米軍のスパイにきいの存在を知られない為だ。だが、調査を進めるにつれ、ハワイ島内の現状が露になってきた。

それは極秘でもなかった。軍の腐敗、闇市は普通、島民の貧困も予想がついた。しかし、実際にそれを見るかどうかで話も変わってくる。

桐野は、この状況を打開する為にも、護衛艦『きい』に協力を仰ぎたかったのだ。

「桐野少佐、私は……早くハワイを還したいと思っている」

沈黙を貫いてきた吉岡一等海佐は、ようやく口を開いた。「山本長官ともお話しするが、もし講和が無かった場合、我々が行う次の任務を教えて頂きたい」

桐野は微笑を浮かべ、頷いた。

西海岸爆撃——米本土爆撃作戦。

「今作戦において、護衛艦『きい』の存在は重要となってきます」爆撃概要はこうだった。まず5t爆弾『雷』を搭載した天河数機をハワイから発進させ、西海岸へと向かわせる。途中、沿岸部において空中給油機仕様に改造された四式艦上噴進攻撃機『暁星』を空母から発艦、天河を空中給油させた後、本土へと送り込む。

「ハワイ・西海岸間の距離は約4000km、空中給油は必須ですからね」

桐野は言った。「給油の間、及び空母の護衛に着いて頂きたい」

「目標爆撃地は？」吉岡は言った。

「ボールダーダム、西海岸における重要な電力供給源の1つです」ボールダーダム——後にフーバーダムと改称されるこのダムは、1931年着工、1936年に竣工した。重量式アーチダムで、落

差221m、幅は379mもあり、その巨大なダムはミード湖と呼ばれる人工湖を形成し、コロラド川の氾濫を防止するのも役立つ。また、現在カリフォルニア州、アリゾナ州、ネバダ州、計3州に電力を供給し、更に灌漑・西海岸地区の水道水を確保する重要な水供給源でもあるという、多目的ダムなのだ。

「ダムを破壊すれば、ロサンゼルスや各都市は深刻な水不足と電力不足に悩まされ、決壊して溢れた水は各地に甚大な被害を与えるでしょう」桐野は言った。「更に、西海岸に配備されていると思われる氷山空母も――願わくばですが――溶けるかもしれません」

現在、氷山空母『ハバクック』はサンディエゴの専用ドックに配備されている。これは数百基の冷却装置と冷却水によってその形を保ち、8月の暑さをしのいでいるのだが、一度電力が停止すれば冷却が不可能となり、ハバクックは溶ける――若しくは東海岸への撤退を与儀無くされる。

「もし、作戦が成功しても米国政府が講和を応じなかったら？」高橋は訊いた。

桐野は浮かない顔で、告げた。

「その場合は――西海岸各都市への戦略爆撃が始まるでしょう」

第81話 ハワイの実情（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第82話 超空の爆撃隊

第82話『超空の爆撃隊』

1944年9月8日AM08:00

その日、米合衆国西海岸の空は——漆黒に染まっていた。西海岸の街々にて、朝を迎えた一般市民達は、ただただ口をあんどりと開き、呆然と天を仰いでいた。9月上旬、水に満たされ、未だ大地は万緑に包まれた日の事である。

数千機——最新鋭の爆撃機が軒を連ね、1つの嵐——爆弾と鋼と愛国心——を成分とした嵐を築き、青々と晴れ渡った蒼穹を、見事な編成で駆け続けた。その西海岸の空を覆う爆撃機編隊は、B-25『ミッチェル』、B-26『マローダー』が中心となった、恐ろしい量の中型爆撃機を核と成していた。その中には、B-10のような旧式機や訓練機も含まれていた。そしてそれらの後尾には、B-17『フライングフォートレス』、B-24『リベレーター』、アブロランカスター、B-29『スーパーフォートレス』といった、米英の空の超要塞群に始まり、P-51『ムスタング』の護衛戦闘機の軍勢が、この未曾有の爆撃機の脇や前後を固めて守りに徹する。辛くもヨーロッパ戦線を生き残り、この爆撃機編隊の前線指揮を担うカーチス・E・ルメイ少将は、この未曾有の超爆撃機隊の片鱗に触れ、感銘していた。彼が座乗するのは、B-25に通信機器を搭載し、戦闘指揮能力を向上させた特別仕様の機だった。

かつて、英国本土上陸作戦時、ロンドンに爆弾の雨を降らせるべくB-29に座乗していた彼は、そこでドイツ軍——第3帝国の英知——が生み出した恐怖の防空網、『天空の壁』を前に苦い思いを味わった人間で、危うく更迭に追い込まれる所だった。だが、彼は

他の爆撃を指揮した將軍達とは違い、最後の最後までB-29を内陸に送り込んだという功績を出していた。1944年2月下旬、『サウスエンド・オン・シーの戦い』にて、サウスエンド・オン・シーの天空の壁に小さいながらも穴を開け、第82空挺師団を始めとする米英の空挺部隊に道を切り開いた。その時に米英空挺部隊に火力支援を十分与えた功績は、ルメイの最大の戦績だった。

この未曾有の爆撃機編隊、その目的地はかつての国土、ハワイだった。

陸軍司令長官、ヘンリー・L・ステイムソンにその話を聞かされた爆撃隊総司令官、ヘンリー・H・アーノルド大将や、その部下に当たるルメイは、根本的な問題——「航続距離の足りないB-25等中型爆撃機をどうやってハワイに送るのか？」——を最初に口に出し、抗議した。西海岸—ハワイ間の距離は約4000km、B-25の航続距離ではどうやっても到達するはずもなく、また航続距離では行きは十分条件を満たしている大型爆撃機B-29も、往復等の問題があった。

彼らの疑念は、ステイムソン陸軍長官も抱いていた。

1944年8月15日、日本から講和通告の文書が届いた頃のホワイトハウスで、彼は風前の灯の第32代大統領、フランクリン・D・ルーズベルト大統領にその初歩的な質問を問い掛けた。

「——案ずるな、策は既に専門家達に考えさせておいた」ルーズベルトは言った。「我々にはジャップやナチスが持たない究極の超大型空母『ハバクック』があるではないか」ルーズベルトは不敵な笑みを漏らした。「ようやく、有効利用する時が来たわけだ」

陸海の主両名は、その作戦の概要を聞かされた。

まず、ハバクックを西海岸―ハワイ間の洋上に展開、多数の駆逐艦、巡洋艦、戦艦を防御陣と成し、空も空母群を用い、鉄壁の守りでハバクックを固める。そこに本土から到着したB―24、アブロランカスター等、降着装置付きの大型爆撃機、B―25、B―26等の中型爆撃機を着艦させ、給油・武装を行い、また空に飛ばしてハワイに送る――というものだった。

しかし、この作戦は莫大な量の金と労力、そして経験が必要とするものだった。数千機単位の爆撃機は絶えずハバクックに降り、給油と弾薬補給を要求するので、もの凄い量の輸送艦・油槽艦を周囲に陣取らせなければならない。この補給作業は少しでも間を空ければ、ガス欠になった爆撃機はそのまま海に落ちるのが関の山だ。また、B―17、B―29はハワイ到達後に爆撃した後、何とか帰るか、海に着水させ、放棄せざるを得ない。パイロット達は待機する潜水艦に拾われ、本土に帰還するという計画なのだが、それで生き残れるかどうかは定かでは無い。

穴だらけの具体的な作戦だが、ルーズベルトに選択の余地は無かった。3ヶ月先に迫る1944年度大統領選挙投票日まで、ルーズベルトは華々しい戦果を挙げたかった。それで4選を凶ろうと、彼は心の中に決め込んでいた。

第82話 超空の爆撃隊（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第83話 新太平洋艦隊司令官

第83話『新太平洋艦隊司令官』

1944年9月8日AM09・00

ハワイと西海岸の狭間。

澄み渡る蒼空と紺碧の海、残暑残る9月の海のその景色の中には、およそ似つかわしくない氷塊の姿があった。そしてその塊上には、9月ながらも体感気温は30度以上であるにも関わらず、およそ似つかわしくない厚着を身に纏った男達の姿があった。

その氷塊——冰山空母『ハバクック』——の周りは、見渡す限り船舶に覆われている。駆逐艦、巡洋艦が外縁を警戒する中、全長数百キロに及ぶ1つの大きな輪が形成され、外部と遮断される具合になっていた。ハバクックの周囲には輸送船が数分単位で横付けし、冬服を着た米陸海の兵達は奔走する。艦内は無数の冷却装置によって平均5度~0度以内に調整されており、この未曾有の機動艦隊中核艦が、全ての面で外界と隔絶した能力を秘めている事が、見て取れる。そして、5~6秒の間隔でB-25『ミッチェル』、B-26『マローダー』といった、米陸軍が誇る中型双発爆撃機が着陸し、ハワイまでのチケット——ガソリンと弾薬を要求した。

太平洋艦隊司令官のウィリアム・F・ハルゼー大將は顎を擦り、B-25が離陸する様をまじまじと見据えていた。ハルゼーは先日、日本軍の捕虜と化したチェスター・W・ニミッツ大將に代わり、臨時の太平洋艦隊司令官に任命されていた。

8月15日、ニミッツがハワイにて、日本軍兵士の手で拘束がなされる頃、ハルゼーは西海岸で療養を取っていた。ハルゼーは長期間の軍務、2月のミッドウェー海戦を始めとする、米海軍の度重な

る敗北を受けて、心身共に疲れ果てていた。

封鎖作戦中の6月、遂にピークに至る。重度の皮膚病、それに併発する病を前に倒れた。ニミッツはハワイの惨状を危惧し、ハルゼーを本土へと移して、本格的な療養を命じた。8月16日、サンデイエゴの病室で彼は部下からハワイ陥落を聞き、激怒と共に哀しみを抱き、ベッドを飛び出して窓から外界を見据え、ニミッツや同僚達の解放を――胸に誓った。

そして9月、ハルゼーは太平洋艦隊司令官に任命された。

9月1日、太平洋艦隊司令官に任命されたハルゼーは、コロラド州コロラドスプリングス近郊に置かれた米国陸軍の基地、暗号名『エリア55』に出頭するようにとの命令書を受け取った。正式な政府文書で、合衆国の象徴、白頭鷲の国章が刻まれたレターヘッドと、第32代大統領フランクリン・D・ルーズベルトの直筆サインを見て、何かの冗談じゃないのかとハルゼーは疑った。だが、同時にただ知れぬ興奮と野望を抱き、この手紙を捨てる気にはなれなかった。たとえ――落日の国の追い詰められた主――だとしても、だ。

飛行機に揺られ、陸に降り立って専属運転手付きのジープに乗り込むと、エリア55の全貌が明らかになってきた。巨大な岩壁が聳え、その一部がくり抜かれたトンネルがエリア55の正面入り口だった。ジープから降り、徒歩でトンネルを歩くのだが、その距離は意外に長かった。大きな車庫がトンネル中央にあり、少数のジープや、M4中戦車が駐車されていた。

その施設、エリア55――は、新生ワシントンD・C.――と言ふべき場所だった。ロッキー山脈をくり抜き、そこにコンクリートを流し込んで造られたエリア55は、第3帝国の最終兵器、原子爆弾に十分耐えうるだけの強度を備えていた。元々、その為に造られたので、当然と言えば当然だった。

1943年11月16日、バージニア州ポーツマスが核攻撃を受けた後、ルーズベルトはこの施設の構想を打ち立てた。ワシントン

の全機能を移転するというその計画は、このエリア55を生み出し、同時に影の大統領官邸——『シャドーハウス』という通称ももたらし、ホワイトハウスの壮麗で歴史的な建築様式——を除く、歴史的な家財道具一式や政府機能をそっくりそのまま移転したその様は、あたかもこの洞穴にホワイトハウスを投影したかのようだ——という所から、その名が来ている。

一歩間違えば、こんな光景は見れなかっただろう……。

虜囚となった上司、ニミッツの顔を浮かべながらハルゼーは心に呟いた。ここに来れば全ての情報を伝え、命令書には書かれていて、ハルゼーはここに呼ばれた理由を早く知りたく、急ぎ足でエリア55の中を進んでいった。

4階ほど降りた所、嚴重な警備下のその階層でハルゼーは、1つの扉の前に立っていた。周囲を取り囲む人間をハルゼーは大方見て、高級将校ばかりだという事に気付いた。機密施設であるが故か、ここに降り立つまでも、一般の下級兵士達はあまり目にしなかった。部屋の前で、ハルゼーは1人の男に会った。米海軍將軍、ウィリアム・D・リーヒ大將だ。

ルーズベルト大統領の軍事顧問であり、アナポリスの大先輩に当たり、自らに航空の道を勧め、今のキャリアを切り開いてくれたリーヒに、ハルゼーは既に正された自身の服装に目を向けつつ、軍人として最高の挨拶を行おうとした。リーヒは微笑を浮かべ、優しげに、堅苦しい挨拶は抜きにしよう、とただ手を差し伸べ、握手に済ませた。2人は一時扉を離れ、階層の蔭に当たる部分へと歩いていた。

リーヒは厳格な趣を見せ、ハルゼーに告げた。無数の幹部將軍達の中から、君を選んだのはその才能を見込んだからだ。もっと経験豊かな人間も居たが、太平洋上で最も暴れているのは、君を差し置いて他には居ないだろう。だから私は君に、一途の希望を持って、

太平洋艦隊司令官に任命するのを大統領に進言したのだ、とリーヒは説明した。

「希望……ですか？」

リーヒは頷いた。彼は渋面を見せ、声を潜めた。

「実はな、君に日本との講和を図ってほしい」ハルゼーが顔を顰め終える前に言った。「というのは、考えもしないよ。ぜひ、勝って貰いたい」

しかし、ハルゼーはリーヒの奥底に秘められた想いについて、何となく知る所となった。リーヒ提督は大日本帝国との講和を図りたいのだ。最初の言葉に熱がこもっていた。ハルゼーを必要とするのは、その発言力、知名度にあった。彼の敗北は結果的に絶望を生み、勝利すれば喝采・賛美を受ける。どちらにせよ、アメリカは早く決着を着けねば、第3帝国に蹂躪されるのは目に見えた話だった。第3帝国を牽制する為にも、この無意味な日米間の戦争を早期決着させる――というのが、リーヒの考えだった。何も自国の敗北を望んでいる訳ではなく、何らかの分岐点をリーヒは欲しかった。そして、その分岐点を与えてくれる最大の人物が、ハルゼーだった。

「正直に言えばどうです」ハルゼーは言った。「講和を望んでいいのでしょうか？」

「大統領閣下は次なる戦闘を望んでおられる」

リーヒは言った。「しかし、その全貌を聞けば、君も耳を疑うだろう」

ハルゼーはリーヒと共に、エリア55第4階層の大統領執務室前に立っていた。厚さ20cmのその扉を開けると、数十メートルは続く通路が広がっていた。その先に配置された、もう1つの扉の先が大統領執務室だった。

命令出頭書を送った張本人である、第32代大統領ルーズベルトは、ホワイトハウスからそのまま持ってきたというデスクの前に、

愛用の椅子に座っていた。部屋の暗さか、投票日が2ヶ月後に迫っている為か、その顔色は蒼ざめていた。眼鏡の先に映るハルゼーの姿を見たルーズベルトは、到来を待ち望んでいたのか思わず声を出した。

ハルゼーはその前に躍り出て、敬礼を果たした。その後、ルーズベルトは握手を求めてきたので、何とか笑顔を繕いながら手を差し出した。

彼はこの男が行おうとしている一大計画を、先刻リーヒから聞いたばかりだった。その事に頭が一杯で、ハルゼーは心ここにあらずといった具合に握手を済ませた。2人はルーズベルトの前に立ち、厳格な表情を浮かべると、聞き耳を立て始めた。

「リーヒから聞いている筈だな。私が君を呼んだ理由を」

ハルゼーは頷いた。「ハワイへの戦略……爆撃だそうで……」

ルーズベルトがペラペラと、ハワイへの戦略爆撃を説明する中、ハルゼーはその全貌の末路ばかりを考えていた。ハワイ戦略爆撃・奪還を済ませた後、ハバクックを日本海へと進ませる。そこで艦上に搭載したB-29を何とか飛ばし、帝都東京を爆撃する――というのだ。

この話には続きがある。東京を攻撃する際、B-29は開発中の原子爆弾を落とし、世界で2番目の核攻撃を行う――という計画だった。ハルゼーはその兵器の脅威について、東海岸付きのスプルーアンスから幾度か聞かされていた。物凄い破壊力で港湾施設を一掃し、大勢の人間の命を奪ったという。この蛮行に、ハルゼーはナチスにただならぬ憤りを覚えていたが、これをアメリカが果たして、実行しているのか？というのがリーヒの考えだった。

自国の状況を考えれば、そんな事に良心を関与させる程の意識をハルゼーは併せ持っていなかった。しかし、それならばベルリンに落とすべきだとハルゼーは思った。リーヒもまた、それに似た事を考えを持ち合わせていた。

史実でもそうだが、リーヒは決して卓越した戦略家でも軍政家で

もなかったが、穏健な良識家であった。軍人としての立場を重んじ、寛大な心構えで事に当たっていた。大統領の軍事顧問でありながら、進言を行う事はあまりせず、サポートに徹していた。

そして非戦闘員の無差別虐殺を嫌った人物でもあった。この9月、決行された『オーバーキャスト作戦』は、その壮大なる惨劇の序章に過ぎない。ハワイへの爆撃には無論、アメリカ国民の犠牲も生じる。更に原子爆弾を用いた、大規模な虐殺劇が行われる。それにリーヒは嫌悪感を抱かずにはいられなかった。

双方に犠牲が出ない方法、講和の道という一つの手を考えたりーヒは、これに見合った人間を探した。あからさまな親日派は無論大統領に嫌われ、左遷されてしまう。更に、大統領に発言力があり、知名度も高い人物が必要であった。

そして海軍の伝手を頼りに辿り着いたのは――ハルゼーだった。史実程ではないが、ハルゼーは華々しい戦果を上げ、知名度もニミツツ以上に高かった。ミッドウェーの敗北も、真実が捻じ曲げられた形で国民に伝えられていて、その敗北は若干和らいでいた。また、リーヒは航空局長時代に面識があり、空を知る借り――のようなものを作った所からも、ハルゼーはやってくれるのではないかと考えた。

少なくとも、その怒りの矛先を何とか第3帝国に向けさせ、日本との戦いを騎士道精神に則った、しかし間違った戦いであると、ハルゼーにリーヒは暗にほめしていた。

更に重要なのは、日米間戦争の不要性についてだった。

早期講和を行い、1人でも多くの人間をリーヒは救いたかった。ルーズベルトは2ヶ月もすればその座を譲る事になるだろうが、次の大統領が講和に臨むとも言いきれない。また、ルーズベルトが英雄行為で人気を上げる為、東京爆撃を強行する可能性が十分にあった。

ハルゼーは艦上でそれを想い、海の彼方に視線を向ける。数千機の爆撃機から成るこの爆撃作戦は、数百機単位の陸上爆撃機、艦上爆撃機が計10波の爆撃を行う。それで死ぬ民間人の数は計り知れないだろう……。

自然と、リーヒが最後に告げた言葉が脳裏に投影される。

「講和も1つの道だと私は思うが――君はどう思う？」

今のハルゼーに、それを考える暇など無かった。

第83話 新太平洋艦隊司令官（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第84話 防空網、始動(前書き)

・四式噴進戦闘機『神電』

全長…13.21m

全幅…10.24m

全高…4.57m

翼面積…30.19?

エンジン…ターボジェットエンジン×1基

最高速度…1,090km

実用上昇限界…11,400m

戦闘行動半径…1,300km

兵装

固定兵装…12.7mm機銃×6挺

副兵装…55mm噴進弾×24

ペイロード…2.7t

大日本帝国陸軍の噴進戦闘機。F-84F『サンダーストリーク』を基に開発された。大型のジェットエンジンを搭載しているが、出力不足で満足のいく速度は出していない。最大24基のロケット弾や500Kg爆弾等、強力な火力を備える事が可能。

第84話 防空網、始動

第84話『防空網、始動』

1944年9月8日AM10:00

その朝、フォート・シャフター空襲警報センターでは、けたたましいアラーム音が鳴り響いていた。米軍の防空レーダー網、そして大日本帝国軍の最新鋭レーダー機器を持ち込み、増強がなされたハワイの早期警戒レーダー網は、100機を超える航空機が存在を鮮明に映し出し、警報センターに座していた電探兵達を恐怖に陥れた。今のハワイ、その土地に駐留する占領軍は、『HI作戦』のカネオヘビーチ上陸時にも活躍した強者も多かったのだが、その時に比べると部隊の士気は下がっていた。

戦い疲れ、食糧不足、兵士の入替え……要因は複数あったが、最も大きな問題があった。未知への恐怖——100機を超えるという航空機——に対する未知への恐怖である。これまで、優勢側として強襲は仕掛けけれど、攻撃を受ける事は無かった。何しろ相手は電探画面を埋め尽くす勢力だ。高射砲が各地に配備されてはいるが、考えるだけでも恐ろしかった。

敵の情報は各地に伝えられ、防空部隊は臨戦態勢を取り始めた。空は晴れ渡っており、観測し易く、近接信管付き弾薬と、最新鋭の対空射撃用測距装置を用いた高射砲を配備された高射砲部隊にとっては、やりがいのある環境だった。

B-24、B-25、B-26、100機以上で構築されたハワイ戦略爆撃部隊は、F6FにF4Uといった海軍戦闘機に護衛されながら、ハワイ北東部から迫りつつあった。高度は6000を維持

し、猛進するこの大爆撃編隊は、第1次爆撃隊——『オーバーキヤスト作戦』の急先鋒といえる精鋭部隊だった。そこにB-29の大編隊が加わり、第1次爆撃隊は未曾有の規模に膨れ上がる。

そんな爆撃隊を迎え撃つべく、ハワイには『天空の壁』が存在した。

C-2ヴァッサフルや、ライントホターR-?といった地对空ミサイルに構成される第3帝国の『天空の壁』程ではないが、大日本帝国のそれも優秀なものだった。根幹を優秀な早期警戒レーダー網から構築され、これを四式十五糎高射砲に活用した。

大日本帝国陸軍の最新鋭対空砲——四式十五糎高射砲は、終戦間近の1945年に配備され始めた五式十五糎高射砲に劣らない性能を誇る。B-29が飛行する高高度空域にもその砲火を浴びせる事ができ、尚且つ圧倒的な火力を備えた。また、五式には無かった高度なレーダー管制射撃装置と近接信管付きの砲弾により、その射撃精度は飛躍している。昨年に当たる1943年、完成した三式十二糎高射砲にもその進化が見られるが、四式は最新鋭のレーダー機器により、更に性能が上がっていた。オアフ島の北東に位置するコアラウ山脈に配備された1個高射砲連隊には、この四式十五糎高射砲が配備されていた。

戦闘開始は10時30分程、カネオヘ飛行場から飛び立った零式艦上戦闘機『零戦』、三式艦上噴進戦闘機『旭光』、三式艦上戦闘機『海鷲』、三式戦闘機『飛鷲』、そして迎撃機たる四式噴進戦闘機『神電』がコアラウ山脈を抜け、紺碧のハワイの海へと飛び立った。

四式噴進戦闘機『神電』は、帝国陸軍の最新鋭ジェット戦闘機である。F-84F『サンダーストリーク』をベースに開発されたこの機は、最高時速1,090km、その巨体に似合い2,700kgという兵装搭載量を誇り、24基のロケット弾を搭載する事が出来る。神電はハワイに少数配備されただけで、そもそもの生産数も低い為、普及していないのが現状だった。

その日、飛行第64戦隊——通称『加藤隼戦闘隊』——は、普段通りの平穏な1日が始まるものだと思っていた。『HI作戦』時、陸軍の輸送船団と、統合戦略航空隊の護衛を担っていた第64戦隊だが、その後は活躍の場も無く、南国の地に休暇の様な日々を過ごしていた。

部隊長でエース・パイロットの加藤建夫中佐は、この日もカメラを手に、飛行場やその近辺の風景を撮影していた。陸軍の英雄の1人として、一般将校達よりも高待遇だった彼は、この瓦礫と食糧不足という破滅的なハワイで、一時の至福を享受していた。ハワイの各地を巡っては写真を撮り、テニスや野球、そしてゴルフといったスポーツを嗜み、オアフ島で栽培されたパイナップル等の果物を食せた。そんな3つの至福を楽しんでいた彼は、ハワイを第2の故郷のように思っていた。

しかし、そんな日々にも区切りがやってきた。

「本日の朝、ハワイ各地の電探が無数の敵機の姿を捉えた。第64戦隊は全力を持ってこれを排除し、ハワイの空を曇らせる事無きよう、してもらいたい。各員は日々の訓練の成果を存分に発揮して、迎撃に当たること。また、常に言っているが、無線は外さず、『神電』に乗る者も1人で行動するような、身勝手な行動は慎むように！。話は以上だ。分かったか」

搭乗員達は声を張り上げ、同調した。

加藤が訓示を終えた後、搭乗員達は各小隊ごとに打ち合わせを行って自機に走り出した。加藤は四式噴進戦闘機——『神電』に駆け寄った。

神電はF-84F同様、後退翼を備えた戦闘機だった。太い胴体部には大型のジェットエンジンが搭載されており、それによって高速性を確保、2・7tの兵装搭載量は相当量の爆弾やロケット弾を

備え付ける余地を持ち、6挺の12.7mm機銃は恐ろしい程の破壊力を発揮するのだ。なお、加藤が与えられた神電には、空対空兵器の定番、三式55mm噴進弾が計24基取り付けられている。

加藤が発動機を始動させると、神電は産声を上げ始めた。後部噴射口から黒煙が漏れ出し、紅蓮の炎が唐突に噴き出した。徐々に速度を増していき、速度が200kmを超える。神電はがキューーン！と甲高い声を立てて機体を揺らすと、加藤はスロットルを引き上げた。

神電は飛翔し、機体は空で安定した。

「加藤1番より全機へ。高度を10000に引き上げ、針路を北東45度に向ける」

第84話 防空網、始動（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第85話 パラサイト・ファイターズ

第85話 『パラサイト・ファイターズ』

1944年9月8日AM10:30

ハワイの空を埋め尽くす米軍戦略爆撃隊の第1波は、ハワイ北東のコオラウ山脈を抜け、ホノルル地区やパール・ハーバーといった、各所の戦略目標に向け、攻撃を仕掛けようとしていた。B-25を中核と成した第1波の爆撃機は100機を軽く越え、その爆弾量は戦略目標を十分に粉砕出来るだけあった。また、大日本帝国軍のジェット戦闘機から爆撃機を守る為、F6F『ヘルキャット』海軍戦闘機を護衛に付けるだけではなく、陸軍は対日戦闘機対策として、奥の手を隠し持っていた。

「油断するな、ジャップは手強い」

第1次爆撃隊隊長のアーヴィン・ニコルズ米陸軍航空軍中佐は、電子機器を詰め込んだB-25の機内にて、第1波の爆撃機に無線で伝えた。

そんな最中、B-25の機窓からコオラウ山脈の水々しい新緑の山肌が見えた頃の事だった。第1波は高度12000m以上の高みを飛んでいたにも関わらず、地上からの激しい対空砲火が、一糸乱れぬ編隊隊形を引き裂いた。コオラウ山脈の帝国陸軍1個高射砲連隊が持つ、五式十五糎高射砲の砲撃だ。彼らは15cmの大口徑砲弾を爆撃編隊に送り込み、B-25やB-26といった中型爆撃機を圧碎した。途端に、第1波の爆撃機搭乗員達やF6Fのパイロット達は、恐怖の念に憑りつかれた。

悪夢は続く。帝国陸軍の飛行第64戦隊を始めとした戦闘機群が到着し、第1陣が攻撃を開始した。四式噴進戦闘機『神電』を始め

とする戦闘機数十機が、無数の55mm噴進弾を爆撃編隊と護衛編隊に送り込んだ。12000m以下を飛行していたSBD『ドーントレス』艦上爆撃機編隊や、護衛のF6Fを血祭りに上げてしまった。

「プランA」——だ」

B-25機窓から、天空を駆る帝国陸軍機を見据えつつ、ニコルズは無線を口に当てて言った。

第1次爆撃隊主力後方に展開していたB-29『スーパーフォーレス』——超空の要塞群——編隊は、その無線交信を聞くや否や、支援火力を主翼に送り届ける準備を始めた。

その数分後、一部のB-29は高度と速度を一定に維持し、機体翼下に取り付けられたP-80『シューティングスター』や、P-84『サンダージェット』を戦場に送り出した。

P-80、P-84は共に、米軍のジェット戦闘機であった。これらが史実より早く製造されたのは、1943年の第3帝国による英国本土侵攻が要因の1つだった。軍司令部はドイツ軍のジェット航空機の高さに圧巻させられた。英国脱出作戦——通称『ノアの方舟作戦』時、英軍は鹵獲したTa183『フッケバイン』を輸送艦に積み込み、英国を後にした。その後、ルーズベルトや米軍上層部に支援の見返りとしたa183の技術開示を求められ、英軍はリーダー技術と共に自国のジェット開発技術や、鹵獲したTa183を提供し、それを基に米国のジェット開発はより早く進んだ。

B-29から切り離されたP-80、P-84は、猛スピードで爆撃隊主翼の後を追った。P-84は実験段階ながら、作戦に間に合わせる様、突貫で実戦化された為、パイロット達も覚束ない。一方、P-80はある程度、実用化が進んでいたが、性能の低さ是否めなかった。

また、これらのジェット戦闘機に混じり、英空軍のジェット戦闘機『デ・ハビランド・バンパイア』の姿もあった。こちらはP-8

0より前に製造、飛行訓練が始まり、空母着艦実験も密かに進められていた。前述した2機に比べれば性能面ではやや劣る面も多い。しかし、数は1番多く、米軍にも採用されており、独自の改良を図った米海軍機も存在した。

3種類の黎明期ジェット戦闘機が爆撃隊主力に到達した頃、加藤建夫中佐率いる四式噴戦、神電編隊も主力に迫っていた。板挟みになった爆撃隊は、戦闘の巻き添えを喰らいたくないが、コオラウ山脈の五式十五糎高射砲の大口徑砲弾はそれを許そうとはせず、砲撃で張り付けにされた。

B-24、B-25、B-26が両者の板挟みになる中、空中戦闘は始まった。先手を切ったのは、第64戦隊の方だった。計12機の神電は、それぞれ12発の55mm噴進弾を発射した。無数の噴進弾が扇状に広がった後、中央に居た爆撃機に阻まれた。その結果、爆撃機の手厚い壁で米英ジェット戦闘機群の損害は軽微で、難を逃れる事が出来た。しかし、同時に大勢の命が失われ、戦略爆撃の火力や爆撃隊の士気にも、甚大なダメージを与える事となった。

友軍機が存在に攻撃を躊躇した米英ジェット戦闘機群は、爆撃隊主力が編隊を解き、周囲に分散したのを見計らってロケット弾を発射した。デ・ハビランド・バンパイアは8発、P-80、P-84は10発以上のロケット弾を搭載する事ができる。数で圧倒する戦闘機群は半分程度発射した。

「敵の攻撃！全機、回避行動を取れ！」

加藤は無線越しに叫び、前方に迫る無数のロケット弾を見据えた。

第85話 パラサイト・ファイターズ（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第86話 真珠湾炎上

第86話『真珠湾炎上』

1944年9月8日AM11…13

一閃——そして衝撃。

無数の5インチロケット弾は一直線に空を駆ると、帝国陸軍飛行第64戦隊の加藤達に襲い掛かった。加藤は大日本帝国の英知、噴進戦闘機『神電』の性能を発揮し、10発以上のロケット弾を紙一重で避ける事に成功したが、他の神電には損害が出ていた。また、三式戦闘機『飛鷲』といった通常のレシプロ機には、ロケット弾が軒並み直撃し、多くの死者が出た。

帝国陸軍の防空航空隊や、米陸軍のパラサイト・ファイターズ達も思ったが、この戦いは中世の騎馬戦に似ていた。B29——超空の要塞——から飛び出した中世の騎士団——寄生戦闘機部隊——は槍を掲げ、東方に住む蛮国の騎士——帝国陸軍戦闘機部隊——と現代の槍、5インチロケット弾を交わせる。一撃離脱のその戦法は、正にそれだった。

20世紀の槍の洗礼を終え、これ以上浴びずに済むと安堵したのも束の間だった。両者は機銃という火力を互いに交じ合わせ、戦闘に臨まなければならない。神電は12・7mm機銃を計6門備え、高度な近接信管を備えている。一方、敵部隊の主要戦力であるP-80『シューティングスター』も、12・7mm機銃を6門装備しているが、機体軽量を図るべく弾薬があまり積まれていない。

両者を比較すると、火力・性能面では神電が勝っていたが、数が数なので些細な差だった。飛鷲にしても、絶大な火力を備えた4門の20mm機銃を兵装として持っているが、英空軍のジェット戦闘

機、デ・ハビランド・バンパイアも同様に20mm機銃を4門も備えているので、やはり両者の差は無かった。

帝国陸軍の航空部隊は12・7mm機銃、20mm機銃で米陸軍寄生戦闘機部隊を掃射した。敵も応戦する。P-80、P-84『サンダージェット』の12・7mm機銃、デ・ハビランド・バンパイアの20mm機銃が唸りを上げて帝国陸軍機に襲い掛かり、前方に展開していた飛鷲、神電の体躯を穿った。

銃弾の嵐が吹き荒れた後、両陣営は四方八方に引き裂かれていた。最初に体勢を立て直したのは帝国陸軍の精鋭、飛行第64戦隊だった。

第64戦隊の精鋭達は、コオラウ山脈に架かる『天空の壁』を抜けようとするB-24『リベレーター』大型爆撃機に12・7mm銃弾を叩き込み、鋼鉄の巨躯を引き裂いた。B-24は翼がへし折れてたちまち炎に吞まれ、鮮やかな螺旋を描きながら雲海の下へと消えてしまった。

「くそッ、奴らを阻んで時間を稼げ！」

第1次爆撃隊隊長のアーヴィン・ニコルズ米陸軍航空軍中佐は、指揮用に改造されたB-25機内から、ハワイの空を墜ちていく無数の炎塊を見張り、叫んだ。B-25、B-26の群れは旋回機銃や各所の機銃、計12門の12・7mm機銃を斉射して、見えない壁を作り出した。が、神電の桁違いの速度を前には手も足も出ず、どうしようも出来ずに翼を？がれるばかりだった。

体勢を立て直した帝国陸軍航空部隊は、寄生戦闘機部隊と爆撃部隊をじりじりと追い詰めた。絶えなかった敵の銃弾にも曇りが見え、巨体のB-24に至っては完全に釘付けになった。

「中佐、これ以上は……」

ニコルズの横に座していた通信員は、焦りを滲ませながら言った。既に第1次爆撃隊は、主力たるB-24を4分の3、B-25・B-26を半分は失っていた。後方に展開するB-29であれ、四式十五糎高射砲に身動きが取れず、米海軍の艦載機を片した旭光・零

戦・海鷲部隊が迫っていた。

「まあ、待て。俺も今の状況は悪いと思う」ニコルズは渋面を浮かべて言った。「だがな、後の始末はドーリットル中佐の隊の仕事だ。彼らが仕事を終えるまでは、踏ん張らんな」

1944年9月8日AM11・46

ハワイ南岸沿岸部、この海域を24機のB-25が海面すれすれの高度で飛行していた。その内の1機にて、晴れ渡る蒼穹と紺碧の海面に目も向けず、ただ前方を見据える1人の男が居た。

「ジャップに一糸報いらずには帰らせねえからな」その朝、西海岸の飛行場にて、B-25の前に立ったジェームズ・H・ドーリットル陸軍中佐は、部下達に言い放った。史実では、空母『ホーネット』から日本本土爆撃を指揮したドーリットルは、戦況の全く変わったこの太平洋戦争において、特にこれといった成果は出していなかった。しかし、未曾有の氷山空母『ハバクック』が完成し、実用される前から米英軍爆撃機パイロット達に技術を叩き込み続けてきた。

B-25、B-26――従来の中型爆撃機を空母上で運用するという、この一連の前代未聞の運用法は、とにかく心理的恐怖を駆り立てた。未知への恐怖である。全長600mの飛行甲板を備えているとはいえ、艦体が氷から出来ていたり、周囲が海となるとどうしても恐怖を覚えてしまった。また、随時運用するには大規模な要員を必要とする為、一からパイロットも育てなければならなかった。これらの恐怖をはねのけ、高度な技術を教えたドーリットルは、今作戦の指揮官に任命された。

ドーリットル率いるB-25編隊が担う作戦は、最も危険なものだった。海軍から少数の護衛機を付け、オアフ島を大きく迂回して

南から侵入、パールハーバー地区に設置された重油タンク群を爆撃する——というものだった。北西から侵入した大編隊とは違い、少しでも気付かれない様、護衛機も少なく、パールハーバー近域には、航空戦力や高射砲陣地も少ない。ドーリットルはB-25や護衛のF6Fはハワイに配備された早期警戒レーダー網を少しでも欺くべく、低空を飛行させた。

B-25編隊は電探をある程度は欺いたが、見つからなかった訳では無かった。とはいえ、無事にパールハーバー地区に侵入し、予定通り重油タンク群へと向かった。湾内には、大和級戦艦第2番艦『武蔵』といった、帝国海軍の打撃力の要が揃っていた。しかし、謎の戦艦『K i i』の姿は確認出来なかった。

ドーリットルの爆撃隊の第1目標は重油タンク群だったが、副次目標として『K i i』の攻撃も命じられていた。しかしこの頃、護衛艦『きい』は母港呉に戻り、整備とCIWS——高性能20mm機関砲『フランクス』用にこの時代の資材を用いて造られた新型補給用弾薬の試射実験を行っていた。

弾薬はこれまで使っていたAPDSタンクステン弾丸に比べれば、威力や射程はかなり落ちている。だが、補給は補給として出来るので、これまでに開発が続けられていた。当初開発されたものに比べれば、今回の弾薬はかなりの性能向上が図られていた。

ドーリットルや爆撃隊、海軍の護衛機の兵員達は、武蔵をK i iだとは誤認しなかった。その日は視界良好で、謎の戦艦『K i i』に見られる特徴——後方の飛行甲板や、特異な円形状の物体——が確認出来なかったからだ。武蔵には第3砲塔があり、副砲が搭載されていた。

彼らは武蔵を素通りし、重油タンク群に向かった。

今作戦、『オーバーキャスト作戦』の中において、最重要任務だったのが、この重油タンク群攻撃だった。史実、開戦時に450万

バレル相当の重油が真珠湾にあり、今世界でも同様の量が貯蔵されていた。『H I 作戦』完遂後、その重油は大日本帝国軍に渡った。

しかし運の良い事に、重油の半数はアラスカ攻略に向けて、日本本土に送られていた。結果、この時点で米軍は作戦目標の半分以上を失った事になる。そんな事を知る由も無いドーリットル爆撃隊は真珠湾内に侵入し、爆弾を落とそうとしていた。

爆撃開始は12時と6分、計24機のB-25は銃火の中、多数の徹甲爆弾とナパーム爆弾を投下した。続いて、翼下に搭載されたFFARロケット弾が空を切り裂き、唸りを上げてタンクに直撃した。

数分後、パールハーバーに爆音が轟いた。紅蓮の刃が立てられ、天空に向けて切先が向けられていた。多数の火柱が立ち並び、周囲の建物を巻き込んでいった。

——真珠湾は炎上し、空は黒煙に染め上げられた。

第86話 真珠湾炎上（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第87話 ニミッツ救出作戦

第87話『ニミッツ救出作戦』

1944年9月8日PM12…28

真珠湾が――燃えている。

自分が虜囚であるという状況からしばらく離れて、1年程前に此処に居た人間達が見たであろう光景を、チェスター・W・ニミッツは傍観していた。数分前まで、桃色のシングルベッドに座していた彼は、虚空の空間――監禁室――に轟く爆音に飛び起き、外界に目をやった。普段であれば、ただ目的も無くハワイの美しい景色を眺めながら、1日を過ごしていただろう。今ではそれも激変し、戦争を思い起こさせる火柱と噴煙を目にして、呆然とするばかりだった。眼下を眺めると、幹線道路の両側から、軍用車の姿が消えていた。この建物の前に屯していた筈の日本軍将兵達も、威圧感を帯びた保安憲兵達も、姿を消し、兎の様に防空壕や周辺施設に逃げ込んでいた。監禁されて以来、初めての光景だった。

全く道理に合わない事だが、ニミッツは大本営直属の軍政当局本部――オアフ島ホノルル地区の一等地、世界有数の観光地に立地する『ロイヤル・ハワイアン』という高級ホテルに収容されていた。軍政当局本部、ワイキキビーチを望むこの建物は、かつてはホノルルの3大ホテルの1つ――になぞらえられていた高級老舗ホテル、ロイヤル・ハワイアンだった。

1927年2月1日創業、スペインの建築様式をアラブ風に昇華させた、スペイン・ムーア様式の建物で、ワイキキビーチやダイアモンド・ヘッドの景色を目前にした眺望の良さを誇る上、最新の設備といった利便性な面を多く備え、その建物のピンク色の色彩から

『太平洋のピンク・パレス』と称され、同時代近くに建設された『モアナ・ホテル』や『ハレクラニ・ホテル』と並んで最も古い歴史や気質を備えた、ホノルルの高級ホテルとして、君臨していた。しかし、史実では1942年、今物語では1944年から米海軍に将兵の保養所として利用される為に、接收された。

『HI作戦』完遂後、軍政当局は早くも岐路に立たされた。ハワイでは米軍防衛部隊が投降したが、その数がありにも膨大過ぎた。日系人用の強制収容所も無く、刑務所も少ないハワイの設備では既に米軍捕虜の収容限界を振り切っており、日本本土に輸送しようにもその目途さえ立っていなかった。更に、米軍の重要人物達——戦争犯罪重犯者達——いわば陸海軍の幹部達の専用収容施設も必要だった。裁判にかける為にも身体状態を万全にしなければならなかったが、一般の刑務所は捕虜がすし詰め状態で、とても劣悪な状況だったし、輸送面でも米本土への移住民を優先する様、上層部が命じた為、日本本土に移送する事も出来なかった。そこで、彼ら重犯者達を収容するべく設置されたのが、ハワイ各地に建てられたホテルだった。

自分勝手——としか言い様が無いが、大本営は軍政当局や軍司令部を入れる施設として、リゾート地の高級ホテルや米軍幹部用の保養住宅地を爆撃対象から除外し、代わりに一般市民の住む市街地を攻撃した。ホテルは電気・ガス・水道等、生活に必要なライフラインが揃っていた。立地的にも良く、様々な占領任務を的確且つ素早くこなせる。そこに重犯者達は入れられ、一般収容所よりも快適な寝床と食事、そして安全を保障された。

その徴用された建物の1つ、ロイヤル・ハワイアンは重犯者達の中でも、更に階級が高い將軍達が収容されていた。元太平洋艦隊司令官のニミッツ海軍大將もまた、そんな1人であり、監禁室として、ピンク・パレスの最上階、ワイキキビーチの白い砂浜と、エメラルド・グリーンの紺碧の海が眺望出来る小部屋を1つ、与えられていた。

何不自由無い、快適で安全な生活を淡々と過ごすニミッツの日々も、この日を区切りに1つの分岐点に立たされる事となった。黒い豆粒の様に瞳に映るB-25の24機の爆撃編隊は、爆弾倉から次々と砂粒の様な徹甲爆弾を落とし続けていた。ニミッツは讃嘆と畏怖の念を覚えつつ、空を駆るB-25の爆撃編隊を見据えていた。収容所に入っていた捕虜達も、この光景を見ていた。合衆国の鉄槌――祖国の底力に彼らは感嘆し、涙を流して残飯の様な食事を貪り食った。

ニミッツが窓際に立ち、真珠湾が燃え行く様を見張る時、背後の扉に衝撃が走った。誰かがノックしている。ニミッツは後ろを振り返り、扉に目を向けた。開いた扉から姿を見せたのは大日本帝国の軍人ではなく、アメリカ人の男だった。

高級なスーツに身を包み、白髪の前は殆ど禿げていて、黒縁眼鏡を掛けた50～60代のその男について、ニミッツは面識があった。ホノルル市議会の元副議長、ゲイリー・ベンジャミンだ。

ホノルル市議会の副議長だったベンジャミンに対し、ニミッツは軽蔑染みた視線を向けた。ベンジャミンはハワイ陥落後、軍政当局の都市再生計画の責任者として、第1期仮設住宅設置計画に携わっている。この第1期計画は、家を失ったハワイ市民数万人に対し、正式な住居が決まるまでのプレハブハウスを増設する――というものだった。ベンジャミンの様な、元米国政府の公務員達はキャリアを落とされる代わりとして、職を与えられた。例えば、警察署長は巡査官に落とされ、市長は産業廃棄物の処理員として、市政の代わりに汚泥物と戦っている。そうしてキャリアを失う見返りとして、彼らは生きていけるだけの賃金と身の安全を保障されるが、その代わりに合衆国への忠誠を破ったのだ。軍人であるニミッツとしては、日本人の次に軽蔑すべき存在と言えた。

「何の用だ？裏切り者」

ニミッツは吼えた。「話しをする事は無い、さっさと帰れ」

「提督閣下、議論の余地はありません。大統領はご帰還を所望です」

「何だと!？」ニミッツは遮った。「でたらめを言うな」

ベンジャミンは、自分は裏切り者ではないと否定した。大統領命令により、軍政当局に潜伏し、内部から軍人や重要人物を解放、身の安全を確保する任務を行っているのです、と彼は付け加え、胸ポケットに忍ばせた1本の鍵を、ニミッツの前に差し出した。

「本当か？」ニミッツは言った。

H I 作戦後、占領地となったハワイでは、財務・市政等、多くの事務仕事を行う人間が不足していた。そこで初期に優先的に雇われたのが、過去に経験がある人間達だった。それらの人間の中には、米国政府の回し者もあり、積極的に内部事情や日本軍の情勢を報告し、闇市設立を手伝った。闇市も、そもそもはハワイや西海岸の有力者達によって造られた金儲けの道具だったが、途中からそれに氣付いた米国政府は、諜報部の秘密情報網として、活用した。この様に軍政当局の内部は、腐敗していた。

腐敗の一例に、こんな話がある。オアフ島の捕虜収容所に入れられた米陸軍高級将校の1人は、指揮していた部隊の部下達に市内に眠る金品を略奪させ、それを自分の私腹とした。日本軍の追撃が始まると、その高級将校は金品を持ち、部隊を見捨てて逃げ出した。その後、別の部隊を見つけた高級将校は部隊長に賄賂を贈り、自身の身分を伍長として偽らせ、捕虜として収容所に送り込まれた。その間、高級将校は金の指輪1個と個粒のダイアモンドを幾つも飲みこんでおり、これを賄賂として収容所の看守を買収し、何とか逃げ出そうと考えていた。排泄を待つ間、高級将校は待った。

収容所はあまりにも劣悪な状態だった。食事は残飯の様な物がバケツに入れられ、何十人もの屈強で飢えに苦しむ男達に差し出されたが、その食事風景はさながら豚の様といえた。無論、臭い等は言うまでも無く、臭氣に対する意識を欠如させた。

排泄後、高級将校は金の指輪を少ない飲み水で洗い磨き、腐敗した看守を1人買収した。しかし、これでそのまま逃げられる訳では無い。高級将校は受け取った賄賂を前金だと言った。高級将校は飲みこんでいたダイヤモンドを看守を通して軍政当局の腐敗した役人――元米国の公務員――に渡し、正式な釈放許可証を手配する様、言ってくれた暁には、ハワイの大地に隠した財産の在り処を教え、追加報酬として渡す事を約束した。

看守は計画に従い、ダイヤモンドを軍政当局の役人に渡し、高級将校の釈放許可証を受け取った。それを渡された高級将校は晴れて自由の身となり、闇市の密輸船に乗り込んで西海岸に逃れる事に成功した。その後、高級将校はハワイから逃げ切った『奇跡の男』としてもてはやされ、ルーズベルト大統領にワシントンDCに招かれた後、英雄として戦争国債ツアーで国中を回った。

戦後、高級将校は隠し持った略奪品を元手に、カリフォルニアに牧場を持った。

ベンジャミンはニミッツの前に立ち、これからの計画を話した。10波に渡る爆撃により、混乱状態に陥ったオアフ島沿岸に、UDT水中破壊工作部隊、レンジャー部隊、コマンドー部隊等、米英の特殊部隊員を乗せたガトー級潜水艦、及び闇市の密輸船が到着する。ニミッツや将軍達は特殊部隊員の支援を受けながらそれに乗り、西海岸まで逃げ帰るという寸法だ。

「チャンスは少ない、早くしなければなりません」

「君は知らないだろうが、ジャップは恐ろしい。侮ってはいかん」しかしニミッツはベンジャミンに従うしかなかった。捕虜としては至高の扱いを受けているが、こんな生活も長くは続かない。いざ裁判となれば、重罪をかけられて軍歴は穢れる事となるだろう。

手に握られた鍵を見据え、彼は思い耽った。

第87話 ニミッツ救出作戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第88話 灼熱の空

第88話『灼熱の空』

1944年9月8日PM01…46

「給弾、燃料補給急げ！」

オアフ島ホノルル地区、真珠湾南東に位置するヒッカム飛行場。
ホレース・M・ヒッカム中佐に因んだこの航空基地は現在、大日本
帝国陸軍の戦略拠点として、数少ない四式噴進戦闘機『神電』や、
三式陸攻といった、航空機が配備されていた。また、此処には帝国
陸軍の精鋭部隊、飛行第64戦隊が駐留しており、優れた人材が揃
っていた。

第1波となる米軍第1次爆撃隊を壊滅した後、加藤建夫中佐率い
る第64戦隊は、弾薬・燃料補給の為に、この基地へと戻ってきて
いた。第1波を壊滅し、撤退した加藤は数千、数万の爆撃機を製造
し、維持し、出撃させ、何千キロメートルも先の敵地奥深くにそれ
を送り込めるアメリカの力を目にし、恐怖に戦いた。参戦後、加藤
はこの様な規模の超爆撃編隊と対戦した事など一度も無かったし、
これまで驚異的な技術力によって、優勢下でしか戦った事が無かつ
た。史上最強・最大の合衆国爆撃編隊は、そんな優勢を悉く叩き潰
し、夢から目覚めさせてしまった。

神電のラダーを駆け上る中、加藤はその光景を目の当たりにした。
数十、数百の爆撃機が山を越え、一筋の大河――を形成しながら轟
々と爆音を響かせ、胡麻粒程度の爆弾の雨を、パイナップル・サト
ウキビ生産地であるカポレイに降らした。かつてはハワイ有数の資
産家、ジェームズ・キャンベルの土地であったそこは大日本帝国に
接收された。ルーズベルトはそこを完膚無きまでに破壊し、兵糧攻

めにしようと模索したらしい。その背には、何キロもの長さの飛行機雲を曳いていた。

その爆撃編隊の最前線、横一列に並ぶA-20『ハヴォック』双発攻撃機の機影が見えた頃には、神電は出撃準備を済ませていた。加藤率いる神電編隊は空へと駆け上がり、A-20と対峙した。

A-20、第2次大戦中は専ら連合国への貸与機であったこの機は爆弾兵装量は900kg程度だが、12.7mm機銃を9門を搭載しており、絶大な対地攻撃能力を秘めている。

「撃ち落とせ！1機たりとも逃がすな」

加藤は無線越しに叫んだ。神電は計4門の12.7mm機銃を差し向け、A-20の鋼の体躯を引き裂いた。大口径の銃火を送り込まれたA-20は末期の悲鳴を上げる。翼が折れ、真っ赤な炎に包まれながら、機体が空中分解を始めた。そして、錐揉みしながら、オアフの大地に叩き付けられて沈黙した。

真珠湾の空は、紅く染まっていた。

ヒツカム飛行場を出た帝国陸軍飛行第64戦隊の神電編隊はA-20を撃退した後も、休む暇は無かった。帝国海軍の三式艦上噴進戦闘機『旭光』や海鷲、零戦と共に、血の様に真っ赤な真珠湾——現在は帝国海軍の軍港であるパール・ハーバー地区——に向けて、進撃していた。

『——こちらフォート・シャフター、敵編隊の存在を確認。時間は1423、真珠湾に向けて進攻中、飛行第64戦隊は敵編隊を迎撃せよ』

加藤は頷いた。「加藤1番、了解した」

神電はターボジェットエンジンを唸らせ、機首を北東の空に向けた。加藤は部下を集結させ、編隊を組むと、迫り来る爆撃編隊への突撃を命じた。

敵爆撃機は北東の空に姿を現していた。B-25を中心に、B-

24・B-17、更にB-29の巨軀も確認出来た。それぞれ、真珠湾やホノルルに甚大な損害を与えられるだけの打撃力を秘めていた。神電を始めとする帝国陸軍、及び帝国海軍の防空戦力は、この第2次爆撃部隊を相手にするには、やや少なかった。爆撃機の前方、敵編隊正面から真つ直ぐ突っ込んで、突撃した。

数分後、12・7mm機銃や20mm機銃から無数の大口径弾が紅蓮の空に飛び出し、唸りを上げて駆けて行くと、敵編隊の正面部を散り散りに引き裂いた。第1撃は正面にはみ出していたB-25、B-26の中型爆撃機を多数撃墜し、米海軍・陸軍航空軍の護衛戦闘機が突撃を開始した。

P-80『シューティングスター』——を始めとした米軍ジェット戦闘機編隊は10発以上のロケット弾を放ち、零戦や飛鷲、海鷲といったレシプロ戦闘機を血祭りに上げた。

「こちら加藤1番、各機反撃を開始せよ！」

そう言うと、加藤は24発の55mm噴進弾を斉射した。

流星群——の様に燃える真珠湾の空を駆ける55mm噴進弾は、シューティングスターの群れに到達すると、炸裂した。直撃したP-80の機体は爆ぜ、鮮やかな紅蓮の螺旋を描きながら、地上に向かって堕ちて行った。ロケット弾攻撃の第1波の後、護衛機から成る『天空の壁』には、大きな穴が開いていた。その穴を抜け、第2波である55mm噴進弾は、背後に蠢いていたB-24やB-29大型爆撃機——超空の要塞群——に直撃、編隊は崩れてしまった。

爆撃機の機銃手達は前方から浴びた攻撃に混乱し、訳も分からず発砲を始めた。意味の無い銃撃は多方面に渡って行われ、その内友軍護衛機や爆撃機を誤射するという、最悪の結果を招いた。それでも、敵編隊は動きを止めず、真珠湾に向けて爆進する。

熱気と噴煙、火花に染まった真珠湾の空を駆る第2次爆撃部隊は、湾内から抜け出そうとする艦船群に対し、狙いを定めていた。目玉

は大和型戦艦第2番艦『武蔵』だ。重油タンク群の爆発後、武蔵は大慌てで脱出準備を済ませ、猛スピードで真珠湾からの脱出を目指していた。その46cm砲は米陸海軍のパイロット達に野心を抱かせ、挙って撃沈を競った。

胸騒ぎを覚えながら、武蔵乗員達とはにかく逃げた。前方に迫るB-25やB-29の機影が不安を駆り立てる。国家予算の数%を用いて造られた武蔵を絶対撃沈させる訳にはいかない海軍上層部は、周辺航空基地から旭光、海鷲、零戦を呼び、迎撃を図らせた。

先陣を切り、攻撃を仕掛けたのは米海軍の新鋭爆撃機、SB2C『ヘルダイバー』だった。史実では、坊の岬沖海戦で大和を血祭りに上げた。

454kg半徹甲爆弾を搭載したSB2Cは武蔵の背面から、急降下爆撃を敢行した。武蔵艦橋にて、指揮を行っていた飯島昌樹海軍大佐は、そのSB2Cに対し、対空迎撃を命じた。搭載された最新鋭のレーダー機器を駆使しながら25mm機銃群はSB2Cを吼え立て、機体を切り裂いた。

「よし、いいぞ！」

飯島は吠えた。SB2Cは背後で音を立て、炎に巻かれながら墜ちて行った。対空砲陣は、尚も吼え続けた。敵も躍起になる。銃火を抜け、味方と連携したSB2C編隊は2機を送り込ませる事に成功した。

2機のSB2Cが、武蔵の応戦射撃を受けた。だが、その内1機は爆撃準備を済ませていた。機体下部の爆弾倉が低く鈍い音を立てて開き、454kg半徹甲爆弾を放つ。爆弾は第3砲塔に直撃し、周囲の兵員共々、武蔵を血祭りに上げた。だが、その攻撃に成功した1機も、最後には墜ちた。

しかし悪夢は終わらない。4機のB-25Hが武蔵に迫っていたのだ。B-25Hは機首部に75mm砲を搭載した、対地・対艦用機で、その攻撃能力は絶大だ。また装甲も頑丈、燃料タンクには防弾が施され、エンジンにも消火設備が備えられている為、撃墜は中

々難しかった。B-25Hは急降下を始め、武蔵に駆け走った。定位置に着いた所で、75mm砲が咆哮する。

機首から飛び出した75mm砲弾は空を駆り、武蔵艦橋に炸裂した。炎と噴煙が立ち昇り、衝撃が迸る。飯島は体を床に強打した。飯島が体を奮い立たせる間も、敵は迫り来ていた。

第88話 灼熱の空（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第89話 ハワイ脱出作戦

第89話 『ハワイ脱出作戦』

1944年9月8日PM05・06

黄昏時、茜色に染まりつつあるハワイの空。

チェスター・W・ニミッツは、白浜に接岸した1隻のボートに乗り、振り返って後ろを見た。――ホノルルの市街地、ワイキキビーチの背は黒煙と火の粉に包まれ、紅蓮色に染まっていた。現在までに、計7波の重爆撃部隊が侵入し、ハワイに大打撃を与えていた。しかしその間、ワイキキビーチ地区は一度も爆撃を受けていなかった。オアフ島3大老舗ホテルの1つ――『ロイヤル・ハワイアン』もまた、傷1つ無く聳え立ち続けていた。

「軍は――命を見捨て、建物を救ったか」

何とも言えない思いを感じたニミッツは、船上から吐き捨てた。重要人物達の救出もあるが、政治的・経済的面から、ワイキキビーチの高級ビーチ群を米軍上層部は救った。代償は――数万人の命と、数十万戸の我が家だ。

米軍の用はまだ済んでいない様だった。ビーチからは、次々とボートが旅立ち、紺碧の海原に向けて駆け出した。それを、背後の日本軍兵士が、重機関銃の弾の雨を浴びせた。この地区に捕らえられていた軍関係者達――いわゆる重犯罪人はニミッツに限らない。陸海の幹部連中、ハワイ防衛を司り失敗した人間達の大半は、この地区に捕らえられていた。それらの人間全員を救出し、脱出させる為、ワイキキビーチやその周囲は米英の精鋭集団――UDT、レンジャール、SASにコマンドー部隊といった英軍精鋭部隊も救出作戦の為に参加していた。

「ニミッツ提督、USS『ラッシャー』に招待致します」

ボートに同乗していたUDT部隊長、ポール・ハーキンズ少尉は言った。UDT——水中破壊工作部隊は米海軍の特殊部隊である。そこに所属するハーキンズは、100隻以上の爆撃任務艦隊を指揮する新太平洋艦隊司令官、ウィリアム・F・ハルゼー大将の命令により、ニミッツ救出を行う事となっていた。

ガトー級潜水艦『ラッシャー』の黒い艦影が視界に映ると、ニミッツやUDTの隊員達の顔に自然と笑みが綻んだ。沿岸部には、ラッシャーを始めとして数十隻のガトー級潜水艦が身を隠しつつ、VIPの到着を待っていた。

『オーバーキャスト作戦』の根幹、大規模爆撃を利用した環境下の中、米軍幹部達を救出するというVIP回収作戦は、その他上手く成功した。その間、未曾有の爆撃に苛まれた日本軍兵士達が、どうしようも無く防空壕や地下壕に逃げ惑ったのが、1つの大きな要因だったが、やはり何とんでもその爆撃の規模が物を言っていた。計10波に渡る爆撃は、オアフ島に対し甚大な被害を与えていた。

「ソナーに感あり！」

バラオ級潜水艦第2番艦『ビルフィッシュ』艦長のヘンリー・G・マンソン少佐は航海長からの報告を聞き、苦面を浮かべた。「不味いな、艦種は……何だ？」

「戦艦です」

航海長は答えた。

「——両舷停止、潜航準備」

「両舷停止、潜航準備」

「潜航急げ」

マンソンは嫌な予感と共に、血に滾る不気味な衝動を感じた。

「潜望鏡上げ」

ビルフィッシュが潜航し終えた後、マンソンは注意深く潜望鏡を

覗いた。海面上に飛び出た潜望鏡は、『k i i』——と呼ばれる戦艦にやや酷似した艦の存在を確認した。米海軍の報告の中から、日本海軍の新鋭戦艦の部類に入る艦だと分かった。

マンソンは潜望鏡を下げ、艦を静止させる。

「……魚雷発射用意」

このビルフィッシュに下された主任務はVIP——米海軍の幹部——の救出である。しかし、副次目標として、敵艦船の撃沈も任務の中に入っていた。マンソンの下命を受けた方位盤手はボタンを押し、必要な発射データを発信する。魚雷砲撃手は射撃準備を完了した。

「発射用意……発射」
ファイア

533 m 魚雷発射管から発射された6本の魚雷は鮮やかな航路を刻みつつ、目標に向けて海中を駆け走った。乗員達は沈黙し、胸に十字架をきりながら祈り、神に直撃を乞うた。

真珠湾内から辛くも脱出した大和型戦艦第2番艦『武蔵』は、トラク諸島に向け、針路を取っていた。しかしこの帰路には、バラオ級潜水艦『ビルフィッシュ』が隠れていた。マンソン少佐の下命により、送り出された6本の魚雷は海を突っ切り、武蔵に襲い掛かった。

——激しい衝撃が迸る。

「くそッ、何だ!？」

戦艦『武蔵』艦長、飯島昌樹大佐は叫んだ。

武蔵に向け、放たれた6本の魚雷の内、左舷艦首部に1本、第1主砲塔下に1本という計2本が命中した。武蔵が受けた損傷は限り無く微少で、湾内で受けたSB2C『ヘルダイバー』艦上爆撃機の鋼鉄の洗礼よりも攻撃は軽いと言えた。

「閣下、どうなさいますか？」

航海長は渋面を浮かべ、訊いた。

「うむ……今は逃げるぞ、退避を続けろ」

飯島は言い、武蔵はトラック諸島への帰途に着いた。ビルフィッシュへの対処としては、周囲に展開していた秋月型駆逐艦『照月』が相手になった。

「奴を仕留め損ねたか……」

マンソンは悔しそうに呟いた。潜望鏡には、代わりに1隻の駆逐艦の姿があった。「撤退の準備だ、当初の任務にもこれでは戻れない」

しかしそんな間にも、照月は迫っていた。

「ソナーの探信音を確認」

「回避するぞ」

ビルフィッシュは敵の攻撃を逃れるべく、潜っていく。そんな最中、水中では強烈な炸裂音が轟いていた。爆雷の攻撃だ。刹那、ビルフィッシュの船体に亀裂が生じ、断絶音が不気味に漏れ始めた。

「Shit!!」

次の瞬間――ビルフィッシュは崩壊した。

――浸水、悲鳴、断絶音……。艦内を包むその無数の音は、限り無く危機的なビルフィッシュの状況を示していた。爆雷の炸裂音は止まず、侵入する何万ガロンもの海水の感触が肌を伝った。艦長のマンソンは半開きの唇を震わせ、その瞳に動揺の色を湛えていた。

そして数分後、ビルフィッシュはハワイの海に――散った。

第89話 ハワイ脱出作戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第90話 嵐の後

第90話『嵐の後』

1944年9月8日PM08・26

漆黒に染まる空、果てしなく広がる闇を前にした加藤建夫中佐は、退路に着くB-29を狙いに定め、55m噴進弾を惜しみなく発射した。鮮やかな紅色の火花が闇夜を照らしながら、55m噴進弾は空を駆け、見事B-29——超空の要塞——を粉碎した。

左翼付け根に55m噴進弾の直撃を受けたB-29は一度、空中で断絶を始めた。火達磨と化したB-29は錐揉みしながら大地に墜ち、ジュラルミンの塊に還った。

「……………」

B-29を撃墜した加藤の口から、勝利の言葉は出なかった。その原因は、朝方から途方も無く続いていたハワイ上空の戦闘、そして眼下に広がるハワイの惨状だった。

午前9時、計10波、数千を超える爆撃機から編成された未曾有の爆撃編隊の到来に占領軍は果敢に立ち向かった。占領軍の防空戦力は圧倒的な数の差を強いられていたが、技術や経験を武器に戦い抜いた。最終的な報告では、少なく見積もっても500機以上の敵機を撃墜した。

ところが、相手側は予想通りと全く損失を恐れず、結局最後の1機まで攻撃戦力をハワイに送り込んでいた。B-29のパラサイトファイターズ——最新鋭の米英ジェット戦闘機部隊——の健闘もあり、三式戦闘機といった主要戦力を始め、三式陸攻、三式噴進重爆撃機『天河』といった数少ない爆撃戦力、更には三式艦上噴進戦闘機『旭光』や四式噴進戦闘機『神電』といった、最新鋭のジェット

戦闘機も少なからず落とされてしまっていた。

また、オアフ島は大被害を受けていた。

加藤の眼下に映る、紅蓮色に染まったホノルルは最も激しい空襲を受け、市の都市機能と経済が完全に麻痺していた。市街の中心、占領軍の駐屯地区も住宅地――崩れた瓦礫や数少ない木材を合わせ、作り上げた掘立小屋群――も難民キャンプも学校も教会も、ありとあらゆる施設は完膚無きにまで破壊された。この空襲で少なくとも5～6000人近くの人間が死亡した。

占領軍の上層部も、大本営も既に薄々分かっていた事だが、オアフ島に回復の兆しは見えなかった。真珠湾は重油タンク群を破壊された事により、150万ガロン相当の重油による未曾有の火災が発生、港湾施設群はことごとく機能を失い、空襲によって多数の艦艇が沈んだ。これらの施設を再建するのは、現在の大日本帝国の財力では到底無理な話だった。それが、アメリカの工業力・経済力に望みを託した、ルーズベルトのねらいの1つでもあった。

爆撃による最大の影響は、住民が寝床を失った事だった。今回の爆撃を受け、既に10万人以上が雨露をしのぐ場所を失った。爆弾は瓦礫や廃木材で造った仮設住居に落ち、それが再び瓦礫と還った後も、続けて落ちていた。掘立小屋の破壊は然したる問題ではないが、目下に迫る最大の問題が――防空壕・地下壕が破壊された事だった。

当時、ハワイの地元民達は米軍がこさえた防空壕や地下壕に身を寄せ、営みを築いていた。圧倒的に住居の不足するハワイでは最も有名な寝床であり、同時に悪名高き場所でもあった。身体に悪影響が出る可能性が極めて高いのだ。しかし、そんな事を言ってられる訳も無く、地元民は肩を寄せ合い、すし詰め状態で居住した。爆撃時には逃げ惑う人々によって更に過密状態となり、圧死する例が少なからず報告されていた。そして、数ヶ月前の日本軍の猛攻や今回の10波に渡る大爆撃により、各防空壕の耐久精度は限界を迎え、

遂に崩壊した。

爆撃が終わりを告げ、再建に入った後も問題は続いた。火災だ。街の水道設備は爆撃によって壊滅的被害を受けており、各地で水不足が頻発していた。ただただ炎は悪戯に建物を燃やし、街を灰に還そうとした。

他にも問題はある。爆撃によって積まれた瓦礫により、交通網は使えなくなっていた。占領軍は配給を始めたくともトラックを使えず、馬や人力で各地に物資を送るしか出来ない。結果、一般住民には1食分の食糧も手に入らなくなっていた。

燃料も電気も無く、通りは瓦礫の海。食糧も無ければ飲料水も無く、餓死者が激増した。木材が圧倒的に不足している故、死者は棺に入れられる事も無く、紙に包まれて埋葬されるか火葬されるかの2つに1つの選択を迫られた。とはいえ、双方とも労力や燃料、食糧を必要とする為、大半の死者はそのまま街に遺棄されていた。

また、爆撃の騒動に紛れ、収容施設からの捕虜脱走が相次いでいた。爆撃により、施設の防壁が破壊された事が原因で、島内に潜伏する米軍残党勢力により、脱走が手引きされ、各所で暴動が繰り広げられた。島各所の爆撃の傷跡を調べるだけで息切れ寸前の占領軍に、これらの暴動を押え付ける力は殆ど残っておらず、暴動は悪化の一途を辿った。

第14章 『オーバーキャスト作戦』 完

第90話 嵐の後（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第15章 『ニューヨーク沖海戦』第91話 破滅への序曲

第91話 『破滅への序曲』

1944年9月15日PM02:58

ドイツ／東プロイセン州

「……そうか、遂にアラスカに向かったか」

ラステンブルクの東約8kmの森林の奥に隠れ建つ総統大本営の1つ、ヴォルフスシャンツェ。その中の管理棟に秘密裡に造られた隠し部屋で、第3帝国の総統アドルフ・ヒトラーは呟いた。眼前には、中世に作られた豪華な椅子に座すアルブレヒト・ベルンフリートの姿があった。優麗な物腰のベルンフリートは純白の陶器のティーカップに口を付け、紅茶を舌に転がした。2月の英国戦線で大勝利を導き、晴れて海軍元帥となったベルンフリートが話しているのは、日ソ満中4国同盟によって開始された、アラスカへの侵攻行為の事だった。

「ソ連がアラスカに釘付けの今、行動を図るべきでしょう」ベルンフリートは言った。「米国は着実に軍備増強を図っています。この契機に再起不能にすれば楽に勝てます」

ベルンフリートの言葉は熱を帯び、ヒトラーを魅了した。この頃、ドイツ海軍は英国海軍からの戦利艦を含め、主力空母を10隻以上所有していた。また、Ta183『フッケバイン』といった、ジェット艦載機や、空対空ミサイルの稼働率も順調に上がっており、海軍には慣れが生まれていた。大西洋を横断する以上、戦術爆撃以外の空軍の支援が当面望めない状況の中では、海軍の力が付いてきたというニュースは、ヒトラーに米国本土上陸を決めさせる重要な判断材料と言えた。

更にベルンフリートは、1冊の報告書を手渡した。

「V3ロケットが完成したのか!？」ヒトラーは愕然と目を見開いた。

V3ロケット——元はA9/A10『ニューヨーカー』と呼ばれる2段型ロケットで、中距離弾道ミサイルである。A4——いわゆるV2ロケットに改良を加えたA9と、更に巨大化させた液燃ブースター・ロケットA10に載せたもので、5000kmという1944年という時代ではありえない程の射程を誇り、尚且つ無線誘導による精密な攻撃を可能としている。

6月、遂に実験が行われたV3ロケットは海軍の指揮の下、無事空高くまで飛び立つと、遥か彼方——宇宙まで到達し、見事な軌跡を描きながら、大西洋のど真ん中に落ちた。実験の成功と共に、V3ロケットは英国内の工場で組立てが開始され、今日までそれが続いていた。

「本当なのか？」ヒトラーは訊ねた。

「無論です。V3は英国内の打ち上げ施設で最終調整を済ませ、管理されています」ベルンフリートは言った。「総統閣下の命令があらば、いつでも——」

「分かった」ヒトラーはベルンフリートの話を遮った。「問題は——タイミングだな」ヒトラーの脳裏には、また別の飛翔兵器の姿が浮かびつつあった。

先のV3と同じ様に、海軍ではA4/U——またはV2/Uと称されるロケットが開発されていた。V2/Uとは、V2ロケットの艦載型バージョンだった。これはV2ロケットを防水耐圧仕様のカプセル型コンテナにV2ロケットを搭載し、Uボートで曳航させた後、浮上させて攻撃するというものだった。史実では計画のみだったが、今物語ではV3より早く完成し、多数が配備されていた。

また、V2/Uの他、海軍ではUボート向けに多数の試みがなされていた。駆逐艦に対抗すべく、誘導式の艦対艦ミサイルを搭載したり、C-2ヴァッサファルやヘンシエルHS117といった、艦

対空ミサイルを搭載した対空防衛能力を備えたりと、Uボートに強力な火力を持たせたりしている。更に、世界初のチップジェット式ヘリコプターWNF342V1や、世界で最初に実戦投入されたFI282といったヘリを搭載させるという、史実では実現しなかった計画が実験段階まで進められていた。

「1週間……1週間の猶予を奴らに与えるというのはどうだ？」
ヒトラーは不気味な笑みを浮かべ、ベルンフリートに告げた。

「一体、何の話です？」

「アメリカに無条件降伏の猶予を与えるのだ」ヒトラーは言った。
「もし、米国政府が承認しない場合、V3ロケット——それにV2ロケットを東海岸中に撃ち込んでやればいい。政府や軍が断固たる決意を示しても、国民は降伏の道を選ぶに違いない」

ベルンフリートはヒトラーの提案に驚かなかった。それどころか、これまでそれが行われなかった事に疑問を抱いていた。2月の激戦以降、V2ロケットの艦載型が完成し、東海岸を巡回出来る態勢が整っていたが、ヒトラーは何故か攻撃を命じなかった。

ヒトラーにも理由はあった。第3帝国は既に膨大な量の資産を兵器開発に注ぎ込んでおり、米国本土への侵攻は財政の破綻すら想像出来た。英ポンド紙幣が価値を失い、数百億相当の偽札、そして英国内の正規札が紙屑と化した今、英国本土からの略奪紙幣は価値が無く、中東方面の地下資源の大半も採掘、精製段階である以上、即時に米国本土を侵略出来る資金は無かった。第3帝国に安定を図り、経済の発展と資金の調達を進めるのが、ヒトラーに課せられた目下の課題だった。

その結果だが、かの『ベルンハルト作戦』も、USドルをターゲットとした作戦に変更させられていた。

史実では偽ポンド紙幣の大量製造による、英国経済の攪乱と資金の調達を目的としたベルンハルト作戦だが、1943年5月に英国

が落ちて以来、その計画はUSドルの偽札製造に変更された。史実では作戦後期にUSドルの製造が決まっていたが、技術的問題から完成しなかった。しかし、アルゼンチンの奥地に再建された『新生第3帝国』では、計画が進められ、主要な資産として製造が続けられていた。当時は帝国の存在を知られないべく、製造は小規模であった。

だが、現在では膨大な量のUSドルが製造され、ヨーロッパ中で使用された結果、ドルの信用が落ち、その価値が急落した。

1944年9月16日AM10:30
アメリカ合衆国／コロラド州

コロラドスプリングス、ロッキーマウン脈に造られた『エリア55』第4階層に位置する大統領執務室では、ドイツ本土から届けられた驚愕の報告を前に、第32代大統領フランクリン・D・ルーズベルトの顔は凍り付いた。

「血も涙も無い奴らだ、ナチは！」ルーズベルトは憤慨した。

この頃、アメリカは遂に復活の時を迎えようとしていた。史上最大の戦略爆撃『オーバーキャスト作戦』が成功し、P-80『シュートイングスター』といった、最新鋭のジェット戦闘機が着々と生産されていた。不足していたエセックス級空母やカサブランカ級軽空母が大増産され、大和型戦艦に対抗すべく、モンタナ級第1番艦『モンタナ』が就航していた。

また、第3帝国の英知である原子爆弾に対抗すべく、核開発も終盤に差し掛かっており、史実通り2発の原子爆弾が滞りなく完成するはずだった。

「万が一、ナチスドイツが言う様にV3が大西洋を乗り越え、ニューヨークやワシントンさえ攻撃する事が出来る兵器だとすれば、

合衆国としては最悪の脅威といえましょう」ルーズベルトの側近、ハリー・L・ホプキンスは言った。

実際、ホプキンスが言う事も含め、ルーズベルトは崖っぷちに立たされていた。オーバーキャスト作戦が成功したものの、ハワイ内の米国民の死者は凶り知れなかった。ルーズベルトとしては、祖国よりジャップの占領地で住む事を選んだから自己責任だ、と言うつもりだったが、そこに恐怖の兵器――『V3ロケット』の登場である。

「くそッ！くそッ！くそッ！！」

デスクを叩き、ルーズベルトは怒りをぶちまけた。1944年度大統領選投票日まで後2ヶ月も無い。精神的にも肉体的にも、そして眼前に広がる現実も限界寸前だった。

「如何なさい……ます？」後ずさりしつつ、ホプキンスは訊いた。大統領としての威厳を欠如しつつあるルーズベルトはホプキンスを見据えた。「如何も何も、2ヶ月で何をしろというんだ、今やアラスカにも攻め込まれてるんだぞ！ハワイを取り戻し、ジャップや社会主義からアラスカを守り、未知のV3ロケットやナチ艦隊から東海岸を守れと言うのか！？」

ええ、とはホプキンスも言えず、黙り込んだ。この時、ホプキンスは大統領の末路が定まったのを感じた。憐れな末路である。

ルーズベルトは一瞬、思考が止まったかのように、虚ろな顔を見せた。

「よし……こうなったら手段は1つだ……」

ルーズベルトは虚ろな顔を崩さず、その言葉を連呼し続けた。

第15章 『ニューヨーク沖海戦』 第91話 破滅への序曲 (後書き)

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第92話 墮落

第92話『墮落』

1944年9月18日AM10:00

アメリカ合衆国／コロラド州

その2日前、合衆国内に点在する米軍上層部関係者達の拠点で、通信網構築用に配備され続けられていたテレタイプが、1つの報せを打ち出した。そこにある差出人の名は、フランクリン・D・ルーズベルト。彼は大統領命令により、米軍の中枢を担う重要な人間――10人程度の将軍達――を新生ワシントンD・C.――エリア55へ呼び出したのだ。困惑の中、将軍達はただ言われるがままに向かった。

コロラド州コロラドスプリングス、標高1800mに位置するこの辺鄙な街の郊外、合衆国を貫き聳え立つロッキー山脈の一角に、エリア55の入口は存在した。駐車場でジープを降り、将軍達は施設内部に入って、地下へと続く通路を守る憲兵達に出迎えられた。

地下層第5階、施設内では最大規模を誇る階層で、収容人数30人程度の特別会議室があった。コンクリートの冷たげな床には絨毯が敷かれ、大統領専用の椅子が1つと重要幕僚達の席が10席、他に来賓か一般将軍達用の席が20程あった。豪華とは言えない、ナチスドイツ第3帝国によく見られる、機能美を優先した造りの会議室だった。招かれた将軍達は席に向かった。

その中の1人、新太平洋艦隊司令官のウィリアム・F・ハルゼー大將は、臨時職であったがその戦果がルーズベルトに見込まれ、救出に成功したニミッツに代わらず、その職に就いていた。

彼らを招き、迎えたルーズベルトは軽い挨拶を済ませ、将軍達を

席に着かせた。

「アラスカ、ハワイ、東海岸に関連した厳戒態勢下の中、呼んでしまつてすまない」ルーズベルトは言った。「だが知つての通り、ナチスの脅威が迫っている」

2日前、第3帝国は世界各所に向けて、V2・V3ロケットの発射計画を伝えた。米国政府はこの突然の事態に情報統制を図りたかつたが、既に時は遅く、国内に潜伏するナチスの諜報員達の扇動もあり、国民は一切の事を知る所となった。V2・V3ロケットには、敵が英国戦線で使用した新型の毒ガス兵器『SAK』や通常炸薬が搭載され、発射される。そしてその後、ドイツ海軍機動艦隊が急接近、東海岸全土を焦土に変えるべく、多数の艦載爆撃機を空に上げるのだ。

「問題は山積みだ」

ルーズベルトは言った。「本件は既に全国民に知られ、V2の脅威の程を知る者も少なくはない。更に敵は大艦隊を持ち、多数のUボートが東海岸の海路で暴れ回っている」

その頃、Uボートは東海岸で対米戦後最大の全盛時代を迎えていた。高度なソナー、魚雷を備え、高速性の高い艦種には、ガトー級やバラオ級といった潜水艦が3隻単位1チームで構築されるという狼群戦術を使用していた。本来は規模の大きな輸送船団を潰すはずの戦術だが、高性能のUボート1隻に対しては最低3チームは送り込むのが、常識だった。

「言うまでもないが、我が合衆国は建国以来最悪の状況だ」

「では、降伏を？」

米陸軍の将軍の1人に、ルーズベルトのただならぬ視線が向けられた。「いや、違う」

「しかし大統領閣下……V2やV3が本当に大西洋を越えるだけの射程を備えていたら、本当に化学兵器SAKガスが弾頭に搭載されていたら……如何なさるつもりですか？」

死にかけ、ハゲタカや死神に狙われているルーズベルトは、既に

理性など殆ど無く、2ヶ月後の投票日に向けた栄光ある勝利の事ばかり考えていた。英国戦線におけるS A Kガスの死亡率や症例等、第3帝国の凶悪な兵器の事を知ってはいたが、それも無視していた。

「ここで無条件降伏などしてみる！奴ら全てを奪っていくぞ」

「しかし国民の生命には――」

「黙れ！」ルーズベルトは叱咤した。「これより、我々は国内戦争に突入する。東海岸に存在する命の為に、君達軍人は最善の努力を図ればいいのだ！」

ルーズベルトは眼鏡を取り、布で埃を拭き取った。

「グローヴズ少将」

大統領に呼ばれ、会議室で沈黙を守っていた1人の男は立ち上がった。ルーズベルトに指名されたレスリー・R・グローヴズ少将は、骨太で濃い顔の男で、米陸軍の襟章を付けてはいるが、前線に居るような人間ではなかった。陸軍工兵隊に所属するグローヴズは1942年、ワシントンD・C・で国防総省――ペンタゴンの建設に携わっていた。本部庁舎の建設主任であったグローヴズは、アメリカ内で最高機密だった1つの計画に招き入れられた。

原爆開発計画の責任者に突如任命されたグローヴズは辞退を上層部に申し入れたが、拒否された。彼は渋々計画に参加、『代替物質開発研究所』という計画名を『マンハッタン計画』に改名した。ニューメキシコ州ロスアラモス――通称『サイトY』――にて始まった計画はポーツマス悲劇や対日独宣戦布告を受けて、常に左右し続けられていた。

「――開発中の原爆は使用出来るか？」

グローヴズは目を見開いた。「まだ確証は取っていませんので――」

「使えるのだな？」

「……一応ですが、実験用に用意した『ガジェット』ならば――」ルーズベルトは笑みを浮かべた。「5日後、国内戦争が勃発する。我々はそれまでに敵の制圧拠点の1つであろうニューヨークにガジ

エットを移送、敵の上陸後――起爆する」

一度、会議室内にどよめきが上がった。

「正気じゃない！」ハルゼーは吼えた。「大統領、冷静に考えて下さい！」

ルーズベルトは冷徹な瞳を見せ、ハルゼーを見据えた。「無論、冷静だ。この計画は最終段階のものだよ。第1次段階で、ニューヨークを覆い尽くす量のマスタードガスが役に立たなかった場合のな」掠れた声で言った。「それよりも前に、君ら海軍が敵艦隊と輸送船団を殲滅すればいい話だ」

狂気だ、とハルゼーは思った。ホプキンスやハルもそう感じたが、今のルーズベルトに理性や良心は存在しなかった。第3帝国が汚い手を打つならば、ありとあらゆる手段を持って、敵を地獄に送り込む。史実でもそうだが、化学兵器の使用は第2次大戦中、アメリカといった連合国にとって報復処置としていつでも使用出来る様に用意されていた。第3帝国の暴走を招くだろう、という予想から、イタリア侵攻時やノルマンディー上陸作戦時には化学兵器が用意され、いつでも報復出来る様になっていた。

「街を破壊したくないのなら、駆逐艦か巡洋艦にでも載せ、敵艦隊に突っ込ませるか？」

「そういう問題ではありません。もし国民にばれたら、どうするおつもりです？」

それが1番の問題であり、1番の疑問でもあった。2ヶ月後に投票日を控えるルーズベルトが、自国民すら巻き込みかねない、そして合衆国の大地を汚すような行為をあえてやろうとするのかが分かっていなかった。それこそ、自分で自分の首を絞めるようなものだ。

「全てはナチに罪を被せればいい、地方都市であるポーツマスが核攻撃を受けた際、国民の5割以上がヒトラーの腸を抉り出そうと考えたはずだ」ルーズベルトは言った。「だが、今回は東海岸最大の大都市だ。国民が怒りを覚え、喜んでナチス兵士を殺そうと考えるはずだ」

ルーズベルトは更に続けた。「幸い、ヒトラーはV2・V3ロケットをニューヨークに撃ち込み、空爆の目標にすると表明している。市民を避難させても敵味方共は疑問に思わない」

「防衛する陸軍の兵達はどうするおつもりです？」

グローヴズは困惑した表情を浮かべ、言った。「ガジェットは実験出来ていない以上、その爆発範囲は知る術がありません。科学者の中でもニューメキシコ州全土から18kt相当と、幅広い威力を示していて予想が付いていけませんので、都市どころか州ごと……」

「それは名誉ある死だ」ルーズベルトは言った。「仕方あるまい」

この時、部屋に居たルーズベルト以外の人間は、合衆国の没落――そして指導者の交代の余地を見た。ハルゼーはドイツ海軍への絶対的勝利を自分の後ろに控える多くの命を救う為の、神に与えられた責務だと考えた。

そしてグローヴズは――ガジェットの不発を願った。

第92話 墮落（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第93話 叛乱の意志

第93話『叛乱の意志』

1944年9月18日PM01..46

アメリカ合衆国／コロラド州

会議後、太平洋艦隊司令官のウィリアム・F・ハルゼー大將は5日後に迫る合衆国の危機について、かつての師であり、アナポリスの大先輩であるウィリアム・D・リーヒ海軍大將と意見を述べ合う事に決めた。この即席の論議の場は、リーヒにあてがわれたオフィス——大統領軍事顧問に見合った、壮麗な部屋で行われた。

この2人はおろか、会議に参加した全員が感じた事だったが、ルーズベルトの人命を無視した主張や各戦線の事情からして、最早現大統領の指揮下にあるアメリカ合衆国の勝利は不可能に思えた。2人の口から出た第一声もそれだった——しかし、それをただ傍観し、合衆国の最期を待つのは2人とも完全に否定し、この戦争の早期終結に向けた方向で一致した。

エリア55第3階層、四方八方をセメントに囲まれた静かな部屋、その一角に置かれた麗美な座椅子に腰を下ろし、2人は話をした。

「ニミッツ提督が救出された後も、君は太平洋艦隊司令官を続けているのだな」

「それだけ信用されているという事です」ハルゼーは言った。数時間前の会議上で反対意見を出したのに何も咎められず、軍歴に傷を付けるといった類の脅しを受けなかったのも、『オーバーキヤスト作戦』でハルゼーが出した成果にルーズベルトが満足しているからこそだった。

「私は大西洋艦隊司令官に命ぜられるかもしれませんが」ハルゼー

は言った。「インガソル司令官は2月の英国戦線で大敗を喫していますから」ハルゼーは躊躇いがちに言った。大敗を喫したとはいえ、それは自分も同じだったからだ。多くの自国民を殺したオーバーキヤスト作戦は、ある意味最大の敗北と言えた。「若しくはニミッツ提督が大西洋艦隊司令官の職に就かれるか……」

「まあそれはそれとして……最早決心が着いたと思うが――」

「ええ」ハルゼーは言った。「しかし、ジャップと講和は」

「ならば、君は何十万もの人間を見殺しにする気かね？」

まさか！とハルゼーは思った。大統領命令とは言え、威力も何も分かっていない核兵器を自国の一大都市で使用する等とは、誰もが眉を顰めるだろう。

「ガジェットはドイツ海軍の艦隊に使用する様、私が大統領を説得致します」

「ああ、それがいいだろうな」リーヒは頷いた。「問題は威力の程だが。最低でもTNT18kt相当、最高ならばニューメキシコ州全体を破壊するという話だ」

「私としても」ハルゼーは言った。「それを考慮しますが、ナチスは最新鋭の対空防衛網を張り巡らしています。正面からB-29を突撃させるのは愚の骨頂。ならば……」

「何だ？何を考えている」

「――駆逐艦に載せ、特攻させるのです」

気まずい沈黙が、かなりの間続いた。リーヒがようやく口を開いた時、彼の顔は蒼褪めていた。そのような行為を許す訳にはいかない、と言うだろうとハルゼーは考えていたが、その結論に関してリーヒは肯定も否定もしなかった。

「やるのなら、日本との講和を約束して欲しい」リーヒは告げた。「全力でナチスドイツを滅ぼしたいのなら、太平洋上の戦争は無意味だからな」

――5日後。

1944年9月23日AM05・58

英国／ワイトルシャー州

首都ロンドンから西方130km、市内を横切るグレート・ウェスタン鉄道を基盤とする工業都市スウィンドン。その市の郊外にあるロートン村には、1つの飛行場が存在した。元は英海軍が使用していたというその飛行場は現在、第3帝国の所有地として、ドイツ海軍が駐留している。そんな飛行場には漆黒を身に纏った男達の姿があった。

その朝、英仏海峡を越えた1機的大型輸送機が英国の空に姿を現した。四発式の旅客機であるそれには、第3帝国総統、アドルフ・ヒトラーが搭乗していた。厳戒態勢下の中、Ta183『フッケバイン』ジェット戦闘機から成る航空部隊に護衛された総統専用機Fw200『コンドル』四発式長距離旅客機は無事、英仏海峡を越え、ロートンの飛行場に着陸した。因みにTa183・Fw200ともに、『Kaiser-House6』の1人であるクルト・タンク博士設計の機体である。

SSに守られた飛行場に降り立ったFw200は、新設されたロケット性能実験発射場の前でヒトラーを降ろした。ライントホターR-?にHs117シュメッターリンク、C-2ヴァッサファルといった最新鋭地对空兵器の発射実験に度々使われるこの施設には、真新しい発射機が1基、増設されていた。

「……あれがV3か」

ヒトラーは発射機に搭載された巨大なロケットを見て、呟いた。

V3――中距離弾道ミサイルに当たるこの兵器は、既に燃料が積み込まれ、発射準備を済ませていた。最大射程は5000kmである兵器で、本来はドイツ本土からの攻撃を計画の要としていた兵器

だが、攻撃の精密性を向上させる為、英国に配備される事となった。『ニューヨーク』——という名は伊達ではなく、ニューヨークを攻撃出来るだけの能力を秘めている。発射機近くに造られていた掩蔽壕に入り、ヒトラーはV3の発射に備えた。

掩蔽壕——に入ったヒトラーは、先に入室していたドイツ海軍元帥アルブレヒト・ベルンフリートや開発者であるフォン・ブラウン博士に挨拶を済まし、保護ゴーグルを掛けた。

「これは第3帝国の栄光の序章だ」

ヒトラーは告げた。「この場に立ち会えた事を幸運に思う」

ブラウンは頷き、静かにカウントダウンを始めた。

「10秒前……9、8、7、6、5」

V3は静寂の中、微動だにせず立ちつくしていたが、徐々に振動を起こし始めた。

「4、3、2、1……」

刹那、アルコールと液体酸素の輝きが視界を白く染め上げ、この世の終わりが如き衝撃音を響かせた。V3ロケットは徐々に、しかし確実に空を駆け昇る。激しい咆哮を轟かせながら、炎を滾らせる——V3が曳いた白い尾は、合衆国本土での全面戦争開戦の狼煙を意味した。

第93話 叛乱の意志（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第94話 東海岸防空戦

第94話『東海岸防空戦』

1944年9月23日

アメリカ合衆国

戦争において傷が付くのは、身体だけではない。精神にも傷は付く。死の衝撃を含め、世代から世代へと受け継がれる。その最高峰に立つのが『V2』ロケットだった。史実、宣伝大臣ヨーゼフ・ゲッベルズが命名した報復兵器第2号、それがV2だった。無差別兵器として、老若男女問わず攻撃の対象となり、事実上迎撃不可能で、気付けば空から迫っているという具合のV2は、英国に未曾有の恐怖を与え続け、幾多の命を奪い続けた。

V2は第3帝国の科学技術の結晶だったが、兵器としてのコストパフォーマンスは低かった。安価で量産し易く、心理的影響を与え続けたV1とは違い、性能面では絶対だったV2だが、超精密攻撃を行う事は出来ず、戦略的には価値は無かった。1943年5月、英国が陥落すると、これまで湯水の如く注がれ続けていた予算が打ち切れ、V2は陸軍の主力兵器から除外された。ソ連という第2の敵は居たが、ヒトラーは空軍のV1に化学弾頭を搭載させる事で効果があるだろうと考え、V2の増産は無かった。その後、VXガス——第3帝国では『SAK』が完成し、化学弾頭の開発が始まったが、その頃にはこのロケットの発展型である、C-2『ヴァッサール』地対空ミサイルの製造が主体となり、V2は忘れ去られた兵器となった。そんなV2が新たな活躍の場を得たのが——ドイツ海軍特殊潜水艦部隊だった。

V2/U——世界初の潜水艦搭載型ロケット——はSAK化学弾

頭を標準搭載とした事で、戦略的価値を持った比類なき兵器だった。伊一400に似たコンセプトを持つV2/Uは、隠密性と運動性の優れたUボート???型に搭載する事で、追撃を逃れ、尚且つ秘密裡に事を運ぶ事が可能であった。

アメリカ合衆国の中枢、ワシントンD・C.は現在、避難命令が勧告され、厳戒態勢が敷かれている。そんな街を、黒塗りのキャデラックが駆け抜けた。2本の星条旗が風を受けてはためく。車内には、大西洋艦隊司令官に新たに任命されたチェスター・W・ニミッツ大将と、大西洋艦隊の精鋭、第20任務部隊を指揮し、艦隊参謀長のレイモンド・A・スプルーアンス少将の姿があった。

その朝、ワシントンに到着したニミッツに、スプルーアンスは大西洋艦隊の経緯を報告した。スプルーアンスの口から出た言葉は、以前にも報告書から見ていたが、やはり世間に聞く大西洋の実情とは全く違っていた。彼の報告によると、第2次英仏海峡海戦では、新鋭戦艦『ニュージャージー』を始め、空母6隻、戦艦4隻を喪失し、航空機に至っては600機以上が撃墜された。激しい嵐の後、大西洋艦隊は撤退した。この海戦から、ドイツ海軍は合衆国戦線でも圧勝出来ると、予想していた。

「最悪だな」ニミッツは呟いた。「何て様だ」

渋顔を浮かべ、ニミッツは窓の外に視線を向けた。厳戒態勢のワシントンは無数の高射砲と兵士達によつて埋め尽くされている。8月時点で4000門以上はあった高射砲は更に数を増やし、V2ロケットを迎撃する態勢を整えていた。

これまでV2が撃墜されたという事例は存在しない。唯一、撃墜出来る存在といえば、同じくして第3帝国の科学力で造られたC-2やライントホターR-?ぐらいであるが、無論今のアメリカに同等の地对空兵器は存在しない。その為、最大の武器である工業力に物を言わせた。

製造が順調に進む最新鋭のジェット戦闘機P-80『シューティングスター』を始め、陸海軍の戦闘機は空に上がり、警戒した。ニューヨークやその他の東海岸の都市でも、同様の事が進められていた。マッハ4で空を駆るV2に対し、P-80でも追撃する事は不可能だが、少しでも火力を置く事で、何とかV2を落とそうと軍上層部は考えていた。

「モンタナ級戦艦は艦隊に合流しているか？」

ニミッツの問いにスプルーアンスは頷いた。「ええ」スプルーアンスは言った。「旧式戦艦に新鋭のエセックス級空母も到着し、艦隊に編入しました」

「君の報告だと、ドイツ海軍は強固な防空網と航空戦力を持っている様だ」

「はい」スプルーアンスは十分過ぎる程、ドイツ海軍の底力を味わっていた。空母から発艦した機は数分後には撃墜され、空軍からは特殊爆撃システム『ミステル』――1.8tの爆薬とジュラルミンの塊――の恐怖の攻撃を受けた。

「敵は防空に軸を置いてる」ニミッツは言った。「大量の戦艦と空母を用意し、敵機を艦載機で引き付けている内に、艦隊決戦ということじゃないか」

「ドイツ海軍は潜水艦も有しています。それもとびきりの」

スプルーアンスの懸念に、ニミッツは頷いた。「分かっている。こっちもウルフパックを作れ。敵よりも大きなものだ」

Uボート特殊潜水艦部隊は現在、東海岸沿岸域に展開している。

Uボートは浮上しており、曳航していた防水耐圧仕様のカプセル式コンテナが海面から顔を出していた。

全長35mのそれは内部に発射台、推進剤・酸化剤タンク、制御室、コンテナ起動用のバラスト・タンク等があり、曳航中は内部に2～3名の発射要員が搭乗している。コンテナは半没式で海に浮か

ぶ構造で、移動手段はUボートの曳航のみである。

バラスト・タンクが注水され、コンテナは垂直に浮かんた。推進剤と酸化剤が注入された後、V2/Uは空に飛び出した。

午前9時、今後の命運を左右する迎撃戦は幕を開けた。空に駆け上った14基のV2/Uロケットが向かう先——東海岸の各都市は一度、その緊急事態に恐れ戦いた。

数十分後、V2/Uが3基、ワシントンD.C.の空に出現すると、首都防衛戦は火蓋を切った。5000門以上の高射砲が毎分、幾万もの砲弾を天空に打ち上げては、何も無い蒼空で炸裂した。第1波の対空砲火により、晴れ渡ってたワシントンの空は——漆黒に染まった。無数の高射砲に形成された弾幕は、数キロに渡って、長くふき流れていた。

そんな空に無数の黒点が浮かび上がった。地上に待機していた防空戦闘機部隊が出陣したのだ。P-51『ムスタング』を始めとする戦闘機群はマッハ4程度で巡航するV2を必死に追い、機銃掃射やロケット弾の鋼の雨を浴びせ掛けるが、V2は全く動じない。その内、戦闘機と高射砲から成る対空弾幕——『天空の壁』——にぶち当たったV2の進攻は止まる。先行していた1基が高射砲のVT信管付き砲弾を喰らい、鋼鉄の体軀は裂けた。砲弾は推進剤であるアルコール水を入れる燃料タンクを貫通していた。

砲火は更に続く。その後も巡航を続けるV2は、対空弾幕の第2波に突入した。すると、機体はまたもや攻撃を喰らい、エンジン部分が損傷した。

エンジン部分に攻撃を受けたV2だが、そもそもこの時点でエンジンは停止していた。元々、V2は特定の速度と高度に達すると、エンジンを停止して慣性飛行で飛翔している。このV2はエンジンを停止する高度、ブレンシルス点に到達した上で、攻撃体勢に入っている。

対空弾幕の第3波に入った所で、V2ロケットの不撃墜神話にも陰りが見え始めた。この日の為、訓練を続けた高射砲要員とVT信

管の働きにより、V2は更なる損傷を被った。機体は悲鳴を上げ、体勢は崩れ始めて、V2は空中分解が始まった。随行していた2基のV2は攻撃を受けながらも、無事砲火を切り抜けたものの、先行していたV2は――空に散った。

残り2基は撃墜に失敗したものの、このV2の撃墜はラジオ放送で伝えられ、米国民や移住してきた英国人達に希望を与えた。撃墜不可能の最恐兵器が落ちたのだ。

第94話 東海岸防空戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第95話 V3

第95話『V3』

1944年9月23日

アメリカ合衆国／ニューヨーク

これまでニューヨークで繰り広げられた劇的事件を、『V3』ロケットの到来は全て塗り替えてしまった。1週間前から始まった避難計画により、ニューヨークからは人が消え、代わりに無数の高射砲が立ち並んだ。一般車両は撤去され、戦車や装甲車両が置かれ、空は戦闘機が埋め尽くした。各地に塹壕やトーチカ、土嚢が設置されたこの街は、最早難攻不落の要塞に変わろうとしていた。

この要塞に対する先陣を切ったのが、V3だった。

V3——ヨーゼフ・ゲッベルズの宣伝する報復兵器第3弾に当たるこのロケットは、世界初の中距離弾道ミサイルである。史実では1940年から開発が開始された。2段式ロケットであるこの兵器は、最大射程5000kmというもので、アメリカ本土まで届く究極の兵器である。

ニューヨーク沖、米海軍が出した20機のPB Y『カタリナ』飛行艇の内の1機、その機のパイロットは上空を突き進む、正体不明の機影を確認した。それは、紛れも無い第3帝国の報復兵器、『V3』ロケットだった。英国はワイトルシャー州、スウィンドンから発射されたV3は軽々と大西洋を越え、アメリカ本土へと着々と、そして確実に迫っていた。

PB Yからの報がニューヨークの防空司令部に届けられるのに、数分と経たなかった。先に報せを受けた米海軍は、駆逐艦や空母艦載機、そして第20任務部隊旗艦——冰山戦艦『エル・ドラード』

による猛烈な迎撃作戦を実施した。V3の機影とレーダー機器を頼りに、海軍の艦艇群は攻勢を掛けた。

敵は応射しないが、砲弾も当りはしない。砲弾はマッハ4で飛翔するV3に掠りもせず、虚空を駆け去るのみだった。V2同様、超精密攻撃は出来ないが、圧倒的なスピードは健在だ。

やがて、空を駆け上がったF6F『ヘルキャット』や、陸軍のP-51『ムスタング』は音の壁を破りながら進むV3の姿を目撃するが、無論追いつける筈も無かった。無線を介して、V3の巡航ルートを予想し、その進路に先回りする事は出来たものの、それでも迎撃とはいかなかった。

ニューヨークはブルックリン海軍工廠、60000人が従業するこの海軍施設は、東海岸において重要な海軍拠点の1つであり、ノーフォーク海軍造船所が核攻撃を受けた後としては、最も守るべき軍事拠点であった。そんな施設に対し、V3は着実に迫っていた。周辺には多数の駆逐艦や巡洋艦が並べられ、配備された対空兵器は海沿いに置かれた高射砲群と共に、その砲口を天に向けていた。

「ファイア!!!」

各艦の艦長達は、無線に届いた砲撃指令を受け、砲を唸らせる。V3と第3帝国への憎しみに駆り立てられた将校が放った拳銃の小口径弾から12cmの大口径高射砲まで、ありとあらゆる砲弾が、嵐の如くV3に浴びせ掛けられた。

恐怖に駆られた司令部は、とにかくこう指示した。「落とせ! 落とせ! 落とせ! 落とせ!」

上空を飛行していた最新鋭のジェット戦闘機P-80『シュートイングスター』編隊は、非力なジェットエンジンを唸らせながら、55mmロケット弾や12.7mm弾といった鋼鉄の洗礼を、V3に浴びせた。続いて、高射砲による対空弾幕が青空を黒く染め上げた。

砲撃も戦闘機群も意味を成さず、V3はニューヨークの空に姿を現した。高度を下げ始めたV3が狙いを定める先は——ブルックリンだった。

ニューヨーク、ブルックリン区。ブルックリン海軍工廠を始め、上陸拠点として最適だろうとヒトラーが考えたその区には現在、民間人は殆どいない。とはいえ、僅か1週間でニューヨークの全市民を避難させる事は出来ず、未だ避難していない人間も居る。それらの人間に対しては外出禁止令が出され、代わりにやってきた防衛軍の兵士によって埋め尽くされた。

ブルックリンの空に姿を現したV3は、速度を落とし、徐々に下降し始めた。対空砲火は止まらない。一方のV3も、止まる事を知らなかった。その巨大な機影は高射砲要員達や市内を守る兵士達の目に焼き付けられる。

そして遂に——V3は落ちた。

地獄の底から沸き上がった様な、恐ろしい轟音がブルックリン海軍工廠を染め上げた。弾頭は空から放たれた後、運動エネルギーを有して落ち、舗装された道路を抉った。ロケット本体はそのまま落ちていき、工廠の施設の一部を粉砕した。

其処にいた多くの兵士達は、それで終わると思っていたが——恐怖は終わらない。VXガス——第3帝国では『SAK』の名称を持つそれは空中で散布され、ニューヨークを吹き抜ける風によって、ブルックリンからマンハッタンまで、ニューヨーク市内の広域に散布された。その数日後、市内の病院や仮設の救護所には、曝露者が殺到する事になった。

無論、SAKに対抗出来る薬は存在しない。弾頭には1.5kl——1.5t相当のSAKガスが搭載されていた。VXは一般の映画程ではないが、毒性は強い。約10mgで成人男性を殺せる。1mg程度でも死亡率は4割から5割、約4kgで36万人2000人分の致死量に相当する。この弾頭搭載量は言うまでもないが、特定の環境下で使用すれば、ニューヨークの全市民と防衛軍全兵士は

ごく普通に、その命を落とす事になる。

また、その日は乾燥していた為、ガスは残留しにくかったが、曝露者は比較的多かった。各部隊ごとに密集していたからだ。ワシントンD・C.を始め、V2ロケットの攻撃を受けた東海岸の各都市にも同様の事例が報告され、多くの死者を生み出した。

そして、ドイツ海軍の機動艦隊は東海岸に迫っていた。

第95話 V3（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第96話 東海岸航空戦

第96話『東海岸航空戦』

1944年10月1日AM06・55

第1機動艦隊旗艦『バイエルン』

この未曾有の航空母艦の艦橋で、アルブレヒト・ベルンフリート元帥は椅子に腰掛けて、アメリカ国内の諜報員や、偵察機から届いた報告書の束を目に通した。強固な防空網と大規模な陸上戦力によって護られた東海岸は、先月23日の『V2』・『V3』ロケットをもものともせず、未だ嚴重な防御態勢が敷かれ続けていた。海洋戦力はニューヨーク、ボストン、そしてノーフォークに置かれ、ガトー級やバラオ級潜水艦による、無数のウルフパックが展開していた。珍しく胸騒ぎを感じながら、ベルンフリートは報告書を読み続けた。Uボートにより、形成されたウルフパックと米潜水艦によって形成されたウルフパックだが、その戦力は米側が圧倒的に勝っているという。計12隻、3つから4つのウルフパックを併せて造り出されたそれは、高度な技術で造られた新型Uボートを取り囲み、喰らった。狼というよりはハイエナのような具合だった。不安に駆られたのは、その大規模なウルフパックが既に結果を出し始め、尚且つ今後の侵略には避けて通れない問題だからだ。東海岸から始まる米本土上陸作戦時、多数の輸送船団が海路を進む事になるが、それを護衛する駆逐艦は、とてもではないが足りなかった。大半の駆逐艦はC-2『ヴァッサファル』や、目標位置測定レーダー・ミサイル誘導レーダー等、『魔法陣』を形成する艦として、確保されていた。たとえば、接収した英海軍の駆逐艦を使用したとしても、数は知れている。かつてUボートの艦長で、今は後世の鮮明な記憶を持つベル

ンフリートは、米海軍のウルフパックの力の程をよく知っていた。

「元帥閣下、お時間です」

参謀の1人が言い、ベルンフリートは静かに頷いた。

ベルンフリートは立ち上がると、飛行甲板に目を向けた。戦闘開始だ。

総勢80機に及ぶTa183『フツケバイン』艦上戦闘・攻撃機を核とした第1次攻撃隊第1攻撃隊『メテオリート』総指揮官、旗艦『バイエルン』第1飛行隊隊長のジブレ・シュミット中佐は、大戦を生き抜いた精鋭であった。ドイツ海軍初の空母『グラーフ・ツェッペリン』第2飛行隊隊長であった少佐時代、独英海軍間の初となる航空戦『エル・アラメイン沖海戦』において、Me109Tを手足とし、英海軍にその力を見せ付けてからというもの、海軍のエース・パイロットの座に君臨し続けていた。

シュミットは自分が指揮する部隊のパイロット達に全幅の信頼を置き、彼らも隊長たるシュミットに全幅の信頼を置いていた。バイエルン航空隊の大半はグラーフ・ツェッペリン時代、そして第2次バトル・オブ・ブリテンに参加した精鋭で、Ta183が実戦投入されていない前を含め、苦しい状況の中で戦った戦闘の数は、海軍内でも随一だった。

「全機、迎撃隊形」

先発に行く第1飛行隊の先頭に、シュミットは居た。彼や部隊の誰もが、東海岸に至るまでの数百キロ近く、全ての米英艦上機を掃討して任務を遂行してきた様に、アメリカ本土戦線でも圧勝出来る、と、予想していた。

航空隊の主力機、単発ジェット機Ta183『フツケバイン』――新生第3帝国の技術結晶――は、第2次バトル・オブ・ブリテン以来、1対1の空戦で負けた事は殆ど無い。初期生産機はエンジンの不調や技術的問題、パイロットの錬度の低さ故、墜落する事は多

々あった。しかし、中期――英国が陥落し、英国本土奪還戦線時には、優秀な兵員が揃い、整備面や機体面の問題も解消され、撃墜率は著しく低下した。R4M『オルカン』やルーシユタールX-4が多数投入されてからは、無類の存在となった。

しかし、現実はい違っていると、ベルンフリートは推測していた。米陸軍の最新鋭ジェット戦闘機P-80『シューティングスター』や、P-84『サンダージェット』が戦線に送り出され、兵員の錬度も上がっている様だった。性能面では圧倒的にTa183が勝利しているだろうが、Ar234艦上爆撃機にしてみれば、大変な脅威と言えた。これまで通常のレシプロ機では追いつけなかったAr234も、年貢の納め時だった。そして今、Ta183はそれら艦上爆撃機を護衛する立場にある。各パイロット達は敵機を深追い出来ない。護衛する爆撃隊に支障が生じるからだ。そして今の立場こそそれだった。

『見えましたが？』

「ああ見えた」

僚機からの交信に、シュミットは無線で言葉を返した。「敵のお出ました」

第1飛行隊の担当はニューヨークだった。水平線の彼方に細い黒線が見えて、一同はニューヨークが近い事を悟った。偵察機の観測で、先月23日の防空網は未だ健在だった。西はハドソン川、東は文字通りのイースト川、北はハーレム川、そして南はニューヨーク湾、といった四方を水に囲まれた所にある、3つの島々から成ったニューヨークに対し、戦略爆撃を加える、という任務が彼ら第1航空隊には課せられていた。

Ta183の機上から見たニューヨークの風景は、荘厳に値した。SC250汎用爆弾を落としてもいないのに紅く色付いた街並は、

紅葉の美しさを湛えている。そして紺碧のニューヨーク湾に浮かんだ自由の女神は、何とも言えない表情を向けていた。

市の境界線の北東、クイーンズ区に位置するニューヨーク市立空港——現代ではラガーディア国際空港——から飛び立ったP-80『シューティングスター』4機編隊は、朝日に染まった空の中から、唐突に現れた。4つの黒い斑点は速度を上げ、徐々に南から侵入したシュミット達に迫っていた。更に、アイドルワイルド空港から8機のP-51D『ムスタング』が迎撃部隊に加わった。

背後を追うAr234の露払いはシュミットの任務の1つだ。Ta183に搭載されたターボジェットエンジンが力強く吼え、P-51Dの編隊に襲い掛かった。

「よし、ヤンキー。覚悟はいいか？」

シュミットは呟き、レヴィ16B照準器に敵機を合わせた。

刹那、Ta183の両翼に搭載されたR4M『オルカン』55mm空対空ロケット弾が雪崩を打って翼下から飛び出した。ロケット弾数十発は、唸りを上げて空を駆る。そして敵機の編隊内で、炸裂した。

1回目の攻撃は、8機中3機のP-51Dを撃墜するという、好調な成果を上げた。当然と言えば、当然の結果だった。史実でP-51はこの頃、全盛期を迎える筈だが、この物語において、そんな状況は成立しない。圧倒的な性能を誇るTa-183とP-51の差は歴然だった。

『ベネディクト、お前の番だ』

「了解」

シュミット編隊の僚機、パイロットのベネディクト少尉は応答した。彼の機体には、Rk344——通称『ルールシュタルX-4』空対空ミサイルが搭載されている。故に複座仕様機のTa183Cを操っていた。後席に乗座するオペレーターは有線誘導により、敵機を攻撃する。

Rk334は全長3200mに及ぶワイヤーを付けながら、空を

駆った。接近する機影に気付いたP-51Dの1機は攻撃を避けようとしたが、相手は速過ぎて避けきれなかった。Rk344はP-51Dの右翼を吹き飛ばし、機体を揺さぶった。

『止めはお前が差すか？』

ベネディクトは錐揉みしながら下へ落ちるP-51Dを見据えた。

「はい、お任せ下さい」次の瞬間、Mk213C/30リボルバーカノン砲が火を噴き、敵機は散り散りになった。

『よくやった』シュミットは言った。『だが、浮かれてる場合じゃないみたいだな』

シュミットの声色は険しさに眉を顰め、ベネディクトは前方を見据えた。4機のP-80『シューティングスター』ジェット戦闘機が編隊隊形を崩さず、迫っていた。しかし、その後ろに奇妙な機影が1機、見え隠れしていた。

それは――鹵獲されたTa183だった。

第96話 東海岸航空戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第97話 ニューヨーク航空戦

第97話『ニューヨーク航空戦』

1944年10月1日AM09..50

『敵機確認!数は……24』

Ta183『フツケバイン』機首の防空レーダー機器は、P-80『シューティングスター』4機編隊の背後に蠢く、無数の未確認機が存在を突き止めていた。奇妙なその機影は、1機、また1機と増え、やがて蒼空を埋め尽くす量になった。

『あの機影は……』

ベネディクトの声色は変貌していた。相手は鈍足のP-51D『ムスタング』レシプロ戦闘機でもなければ、低速のP-80ジェット戦闘機でもない。その特徴ある機体構造は――Ta183を髣髴とさせるものであった。

「奴らめ、既に完成させてたのか!」

第1攻撃隊『メテオリート』編隊総指揮官、ジビレ・シュミット中佐は吼えた。

シュミットを苛立たせる敵の正体は、米陸軍最新鋭ジェット戦闘機P-83『クレイモア』だった。P-83は1943年代の英国本土戦線時、英軍によって回収された第3帝国空軍の英知、Ta183ジェット戦闘機を基に開発された機体である。数ヶ月に及ぶ機体構造の研究・解明の上、ハワイ・カウアイ島にて鹵獲された大日本帝国海軍の最新鋭ジェット艦上戦闘機、三式艦上噴進戦闘機『旭光』のデータを併せ、1944年2月時点から実用機開発が始まった。後退翼等の革新的な機体構造を用い、Ta183と旭光に搭載されていたターボジェットエンジンを基に独自開発した非力なエン

ジンを載せ、何とか形が整ったものが、このP-83であった。英米共同開発のこの機体は、対独戦線に投入すべく、東海岸に続々と集まっていたが、今回が初の実戦となる。

敵機24機編隊のP-83は、その特徴的な後退翼に反射した陽光を煌めかせながら、眼前に迫りつつあった。しかし、その編隊隊形は崩れていて、各機は分散している様に見えた。

「全機、ヤンキー共は練習不足だ。一挙に叩き潰せ！」

4機編隊が3個、計12機のTa183はスロットル全開で敵編隊に突撃した。

この頃、相手となる米陸軍航空軍のパイロット達は、過酷な現状にあった。あまりの機体の速さに、各機が編隊を造れなかったのだ。非力なエンジンとはいえ、Ta183や旭光から得た先進的な機体構造は、これまで時速4~500km程度で空を駆っていたパイロット達に時速800km以上という、未知の領域を体感させていた。勝手が違い過ぎ、練習不足の彼らはP-83を上手に扱える自信が無かった。

そんな最中、12機のTa183は第3帝国最高水準の科学技術――測距レーダーと光学照準器を用い、機載されていたMk213C/30リボルバーカノン砲を咆哮させた。

4機のP-51Dと4機のP-80と24機のP-83の内、低速で性能の劣るP-51Dが全滅、P-80が2機、Ta183の30mmリボルバーカノン砲の前に墜ちた。残り26機の敵機は雨霞と20mm機関砲の鋼の洗礼を浴びせ掛け、ニューヨークを南下していく。とっさにシュミットは直轄編隊に無線で連絡を取り、右に旋回させる。

相手の背後を先に取ったのは――12機のTa183だった。別編隊の1機、複座式のTa183Cは機体翼下に搭載していたRk344――通称『ルールシュタールX-4』を、旋回し損ね、逃げ

遅れたP-83に向けて、発射した。全長3キロに及ぶワイヤーが空を駆け、後座のオペレーターの手により、敵機に吸いこまれる様にして、直撃した。炎に包まれた機体は擡げ、末期の悲鳴を上げた。そして、錐揉みしながら下へ下へと墜ちていくのだった。

旋回性、高速性、上昇性……。あらゆる面で勝るTa183だったが、そこに危機が迫っていた。改修を済ませ、機体性能の落ちていないTa183の鹵獲機が、P-83の機群から姿を消していたのだ。

「気を付けろ、敵の司令機が消えたぞ！」

そんな無線報告をシュミットが行っている中、増援のP-51Dの大編隊が、唐突にニューヨークの西の空から姿を現した。総勢30機。更に後ろには、P-47『サンダーボルト』の大編隊が控えていた。

『一体どういうつもりでしょう？』ベネディクトは訊いた。

「奴らめ……」シュミットは唸った。「数で抑え込む気だ」

西の空を固めたP-51は、12・7mm機銃を12機のTa183に向け、掃射した。続いてP-47が目一杯エンジンを噴かせ、吼えた。12・7mm弾が唸りを上げてシュミット編隊に襲い掛かり、機体を掠め飛ぶ。一方のP-83編隊は体勢を整え、急旋回しながら間合いを締め始めた。

「ヤンキーに好き勝手させるな！ドイツ海軍の底力を見せてやれ！」

シュミットは前方を駆るP-83の背後に迫り、ハイ・ヨーヨーを行った。これは自機が敵機よりも速く、余剰となった速度を高度に変換する空中戦闘機動である。シュミットは自機の高度を上げ、速度を抑えると、素早くMk213C/30リボルバーカノン砲の30mm弾を叩き込んだ。高度な測距レーダーと連動する光学照準器により、30mm砲弾は面白い様に敵機へと吸い込まれていった。刹那、P-83は不気味な断絶音を轟かせ、炎達磨と化した。

一方、司令機となるTa183鹵獲機を操縦するフランシス・S・

ガブレスキーは、シュミットの機体を捉えていた。史実では第2次大戦中、米陸軍航空軍で第3位のエース・パイロットとなる人物だった。今物語においても、ポーランド系アメリカ人である彼は英国本土奪還戦線に投入され、P-47を手に英国傀儡政府空軍のMe 262『シュヴァルベ』ジェット戦闘機を2機、Fw 190戦闘機を1機、Me 109戦闘機を3機、そしてBa 349『ナッター』ロケット迎撃機1機と、短期間ながらも7機という、驚異の撃墜記録を示した。特にMe 262ジェット戦闘機2機の撃墜は軍上層部の目に留まるきっかけでもあり、この鹵獲機を操縦する所以でもあった。

「さて、どうするか」

エースパイロットのガブレスキーも、突然過ぎてP-83を扱えられていなかった。敵は指揮官のTa 183、経験を積んだ相手なだけに、下手な攻撃は隙を与えるだけだと、ガブレスキーは考えていた。唯一の救い——爆撃隊の護衛という任務に着いていなければ、彼らの編隊はこのP-83編隊をごく普通に片し、空母へと帰投している時間だろう。

「全機、爆撃機を狙い撃て。敵の注意を惹き、チームを組んで叩け」

24機のP-83は、陽動班となるP-51、P-47から離れ、一時離脱する。そこで編隊を作り、敵機の掃討に躍起になっているTa 183を、急襲するというのが今の経験不足の彼らにとっては、有効な戦法と言い難いものの、それぐらいしか策が無かった。

ニューヨーク沖を航行するAr 234『ブリッツ』艦上爆撃機編隊の進撃は、突如として現れたP-51とP-47の大編隊の壁に立ち塞がれた。必死に追い駆けるTa 183は背後からR 4M『オルカン』の鋼の洗礼や、30mm砲弾の雨を浴びせるが、50機以

上の軍勢相手に効果は薄い。

A r 2 3 4 爆撃隊指揮官、クラウド・ツァーベル少佐はA r 2 3 4 P－6三座式機から、迫り来る敵機を睨み付けていた。彼は拳を握り締め、揺るぎない視線を敵に向け続けた。

「R k 3 4 4 の用意を」ツァーベルは言った。「可及的速やかに敵を排除する」

A r 2 3 4 両翼下に搭載されたR k 3 4 4 は計6基、その内1基が勢い良く飛び出した。機内オペレーターは誘導装置を手に持ち、ジョイスティックを操ってP－51の1機に当てた。敵機は爆発、炎上しながら墜落していったが、次の敵はすぐ傍に待ち構えていた。続いて、固定兵装のM k 2 1 3 C／30リボルバーカノン砲と、M G 2 1 3 C／20 m m リボルバーカノン砲が咆哮した。他の機も、念の為にと搭載していたR 4 M やリボルバーカノン砲を用い、応戦する。

先頭に行くツァーベル機が、最初の応射を敵に当てた。30 m m 砲弾と20 m m 砲弾により、P－51の体軀は引き裂かれた。しかし、背後に迫るP－47相手に、それが通用するとはツァーベルは考えていなかった。なるべく早く、戦略目標を叩くしかない。

そうこうしている内に、ブルックリン海軍工廠の姿が見えてきた。工廠からは猛烈な対空砲火が浴びせられる。A r 2 3 4 はここに前進し、爆弾を落とさなければならないが、空はP－51とP－47が埋め尽くしている。奮闘を続けるシュミット編隊は、T a 1 8 3 を操り、敵を落としていくがきりがない。

ツァーベルはブルックリン海軍工廠の乾ドックの1つに、鋼鉄の巨軀を捉えた。米海軍のノースカロライナ級戦艦『ワシントン』だ。

第97話 ニューヨーク航空戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第98話 ブルックリン空襲（前書き）

第98話 ブルックリン空襲

第98話『ブルックリン空襲』

1944年10月1日AM11:20

Ar234『ブリッツ』艦上爆撃機編隊はブルックリン海軍工廠に集結した。怪物の様なこの双発ジェット爆撃機は史実同様、偵察機として開発されていたが武装が施され、戦闘機や爆撃機として運用される事になる。史実では連合軍制空権下の空域を捕捉もされずに飛び続けたAr234だが、米陸海軍の天空の壁——堅強な防空網の前に立ち往生していた。無数の高射砲陣地と、眼前に迫るP-51D『ムスタング』、P-47『サンダーボルト』レシプロ戦闘機群は、容赦無くAr234編隊に鋼鉄の雨を浴びせた。

Ar234爆撃機編隊指揮官、クラウス・ツァーベル少佐はニューヨーク沖に展開する、ドイツ海軍機動艦隊に戻って体勢を整える途を選ばず、眼下に停泊する軍艦群への攻撃を優先した。

「爆撃用意！」ツァーベルは言った。

Ar234の爆撃要員達は搭載されたHs293・フリッツXを選択、攻撃武器に選んだ。

Hs293は第3帝国が最高峰の科学技術で生み出した、世界初の空対地動力付き誘導爆弾——現在で言う所の空対地ミサイル——である。史実のHs293とは形状は異なり、改良型に当たるHs294D——テレビ照準誘導方式を採用しており、搭載された動力機関も異なり、爆弾自体も対艦用の高性能炸薬が加えられる等、威力も強化されている。一方、フリッツX——正式にはルールシュタール／クラマーX-1——もまた、Hs293同様テレビ誘導方式を採用しており、性能面が向上している。

A r 2 3 4 爆撃機編隊が到達すると、ブルックリン海軍工廠を埋め尽くす防衛軍兵士達は恐怖に戦いた。ポーツマスの再来である。拳銃の小口径弾から120 m m高射砲、果ては駆逐艦や戦艦の対空火器群が、数日前に『V 2』『V 3』ロケットに行った様に、迫り来る敵に対応した。

「フオイヤー！（発射）」

ツァーベルは高らかに叫び、付近を駆けていた僚機が、一斉に爆弾を投下した。

ノースカロライナ級戦艦『ワシントン』は史実、45口径40・6 c m主砲を始めとする自身の能力と、武運の高さにより、幾多もの修羅場を生き抜いてきた。大西洋戦線——Uボートと長距離ジェット戦闘機が入り乱れる海原は、ワシントンに幾度となく傷を付け、ブルックリンに至る要因でもあった。

午前11時30分、全ては始まった。A r 2 3 4がM k 2 1 3 C／30リボルバーカノン砲で敵戦闘機を掃射し、天空の壁に風穴を開けた。そして対空砲陣と40・6 c m主砲群に最初の爆弾を投下した。H s 2 9 3はA r 2 3 4機内、後座に腰を下ろすオペレーターにより、操作される。小型のジョイスティックが付いた操作ボックスを持ち、白黒のテレビ画面に目をやる。H s 2 9 3には、カメラが搭載されていて、それにより投下時の映像が受信される。オペレーターはその画面を見ながら、操縦する。史実では目視方式で、赤色のフレアが備え付けられていた。更に別のA r 2 3 4は、機腹部に搭載されたフリッツXを投下した。

第1波として投下されたH s 2 9 3が、敵の最初の応射を浴びた。制御ボックスを持つオペレーターは、ジョイスティックを巧みに操り、四方八方を飛び盛る砲弾を避けながら進ませる。鋼鉄の巨躯から、目標の見分けはついた。同時に、12・7 c m両用砲が咆哮する。張り付けになった対空砲手達はエリコンF F 2 0 m m機関砲と、

ボフォース40mm機関砲の大口徑弾を放つが、虚しく空を駆け去る。怒濤の爆音が起こったのは、それから間も無い事だった。誘導されたHs293は見事、第2砲塔と艦橋を撃ち崩した。

続いて天空の壁を抜けたフリッツXは唸りを上げて戦艦ワシントンに襲い掛かり、煙突部を完膚無きにまで粉碎した。貫通したフリッツXは機関部に甚大なダメージを与え、火柱が昇った。噴煙が舞い、黒煙と火の粉が空を覆い隠した。

第1次攻撃隊『メテオリート』は休まなかった。ヨーロッパの空を駆った歴戦の兵達がTa183『フツケバイン』ジェット戦闘機を巧みに操り、30mm砲弾で敵機を穿る。砲弾の炸裂音は悪寒を感じさせるもので、米陸軍航空軍のレシプロ機パイロット達は恐怖に戦っていた。

僚機、Ta183Cを操るベネディクト少尉と共に敵機を撃ち落とし続けていたジビレ・シュミット中佐は、Ar234爆撃機編隊を阻むP-51、P-47戦闘機群に8機のTa183を送り込み、残り3機の直轄編隊と共に、その攻勢に加わった。

「全機、弾薬は限りがある。大切に使え」

と、言っても未だ30機以上存在する脅威に対応しない訳にはいかない。それらは確実にAr234を包囲しつつある。数分後、リボルバーカノン砲が吼え、毎分数千発の30mm砲弾が唸りながらP-51を穿った。完全な――とは言えないが、標的も同然の相手だが、数の多さはやはり苦痛だった。

それはごく短時間に起こった。撃墜5機を突破し、エースパイロットの称号を頂いたTa183の1機が突然、撃墜された。どこからともなく、まるで雨の様に降り注いだ20mm弾がTa183のコクピットを貫通し、パイロットを血祭りに上げた。砲弾にキャノピーが悲鳴を上げ、粉碎した直後、座席に着いていたパイロットは

吹っ飛ばされ、空を舞った。一方のTa183は、ニューヨーク湾に墜落した。

シュミットは愕然とし、上空に視線を向けた。「ジェットだ!」

視界に映ったその正体は、米陸軍の最新鋭ジェット戦闘機P-83『クレイモア』だった。

第98話 ブルックリン空襲（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第99話 ニューヨーク航空撃滅戦

第99話『ニューヨーク航空撃滅戦』

1944年10月1日PM00…12

蒼空に現れたP-83『クレイモア』の銀翼の尖端は、天井に聳えた母なる太陽の光を浴びて、時折煌めいていた。太陽を背とするP-83――米陸軍航空軍ジェット戦闘機編隊は、目も留まらぬ速さで20m砲弾を浴びせ掛け、ドイツ海軍の猛者達を驚かせた。

「全隊、散開せよ！」第1次攻撃隊『メテオリート』総指揮官ジブレ・シュミット中佐は無線越しに叫んだ。「敵は所詮、烏合の衆だ。ヤンキー共にドイツ海軍との力の差を見せ付けてやれ！」しかし、そうは言ったが、シュミットは今まで――Ta183が実戦投入された後――の中で最も過酷な戦闘になるかもしれないと薄々感じていた。

シュミットの不安は現実の物になりつつあった。急降下するP-83は、機載された20m機関砲から一頻り鋼鉄の雨を降らせた後、方々に展開していく。それを追おうとTa183は唸りを上げ、スロットル全開で敵機の背後に回り込もうとしたが、P-80混合の別派ジェット戦闘機部隊が戦域に侵入、Ta183の注意を逸らすとともに、包囲網を狭めていった。

一方のP-83は、Ta183とすれ違った後、インメルマンターンを行っていた。

インメルマンターンは、航空戦闘機動の1つとして、ドイツ空軍のエースパイロット、マックス・インメルマンが考案した。当時の低速複葉機では、失速が目に見えた空戦機動だったが、今日の戦闘機であれば、十分な余裕を持って行う事が出来た。P-83はピッ

チアップし、機首を上空に向けた。そのまま真上に180度ループし、反転。機腹が空を向く。その後、180度ロールする事でP-83はTa183と向き合う事となった。このインメルマンターンにより、P-83は敵機の追撃を阻む事は出来たが、速度は低下し、空戦において重要となる敵の頭上——上空を取る事は出来なかった。急降下による代償である。

双方陣営が対面すると、20mm砲弾と30mm砲弾が空を舞った。そして、回避。銃撃の嵐は双方に影響を与えなかった。Ta183は左旋回し、敵機の背後を狙う。

『増援は……増援はまだですか？』

ベネディクト少尉は悲痛な声色で告げた。願いは何時になったら届くのだろうか？シュミットは呟いた。彼自身、増援の到着を願っていた。既に誘導ミサイル、R4Mロケット弾等の空対空兵器は底を尽き、機載銃器の弾薬も残り僅かだった。

「まだだ」急旋回する中、急激なGを噛み締めながらシュミットは言った。「何とか持ちこたえろ」やがて、P-83と対峙し、無線は中断された。逃げ損ねたP-83をシュミットは追う。機の背後を取るも、相手はジンキング機動を駆使し、Mk213C/30リボルバーカノン砲の鋼鉄の洗礼をかわし続けた。

ジンキングとは、敵機に背後を突かれた場合に行う回避機動の1つである。上下左右に機体を小刻みに動かす事で、ある程度の銃弾を避ける事が出来た。無論、個人差はある。パイロットの技量、経験により、荒削りで単調な機動にもなれば、巧妙な運動により、敵機を翻弄する機動も取れる。言ってみれば基本機動だが、同時に難しくもあった。同じ位置、同じ方向に運動すれば、相手に銃弾を撃ち込まれてしまう。その為、最低でも2秒以内に機動位置、方向を判断し、次々と操作しなければならない。故に冷静な判断力と適格な操縦能力が求められた。シュミットを翻弄する相手は、その能力を持ち併せていた。背後を取られたP-83はジンキングを繰り返して、30mm砲弾の嵐を避けた。

その刹那、上空1万mを駆る1機のTa183が居た。しかし、その両翼には黒十字ではなく、白星が描かれていた。操縦者は米陸軍航空軍のエースパイロット、『ジェットキラー』の異名を持つフランス・S・ガブレスキーだった。彼は背後下面を駆る友軍機が、Ta183に追われる姿を見つけた。操縦桿を握り締め、スプリットS機動を取る体勢を整え始めた。

インメルマンターンの上下逆の機動、それがスプリットSだった。インメルマンターンとは違い、先に180度ロール、背面飛行――機腹を上空に向けた状態から、180度ループを繰り出す。この時、ガブレスキーは機首をやや左方向へと向け、ループを行った。スプリットSは、主に下方を自機と反対の方向へ通り過ぎた敵機を追跡する際等に使われる事が多いが、ガブレスキーの目的もそれだった。一挙に空戦を変える事も出来る機動だが、問題は多い。まず最低でも5000m以上の高度を必要とする。当然ながら、高度が低いと地面に激突してしまうからだ。この危険性から、機体性能の低い航空機はインメルマンターンで代用する事が多い。

しかし、ガブレスキーが操るのは鹵獲されたTa183だった。初期型ではあっても、P-83以上に優れた動力源を備えていた。特別訓練を経て、今戦域に送り込まれたガブレスキーは何なくスプリットS機動を成功させ、Ta183とP-83の追いかけっこに参加した。

航空戦闘において、最も危険なのは敵を攻撃する時である。油断が生まれ、迫り来る敵機に対応出来ずに撃墜される事が多い。その教訓をふと、思い出したシュミットは同時に妙な胸騒ぎを覚え、後ろを振り返った。案の上、敵機は迫っていた。

伸るか反るか――だ。

シュミットに追われる米陸軍パイロット、コールドウエル中尉は、

大胆な行動に打って出た。刹那、P-83は左方へと急旋回し、シュミットの視界から消えた。

それは、敵機の接近に誘われた動揺からの結果だった。相手の一瞬の隙を突き、コールドウエルは逃げおおせた。途端に消えたP-83は遥か彼方へと消え去り、シュミットは背後から迫り来る危機に対応しなければならぬ。ガブレスキーが操縦するTa183――鹵獲機はすぐにシュミットの背面に到達し、機載された30mm機関砲を撃ち出す準備を整えた。

まるで雪崩の様な音が轟き、30mm砲弾の雨が怒濤の如く、Ta183に降り注いだ。シュミットはジンキングを行い、上下左右と運動しながら砲撃を流す。対空砲火により、シュミットの視界は黒く染まっており、砲弾が炸裂しては機体は揺さぶられた。

「コールドウエル、隊長機だ」

ガブレスキーは無線越しに言ったが、応答はない。その時、無線は既に壊れていた。

原因は幾つも考えられた。速度、高度、対空砲火、整備不良、スプリットS等の空戦機動……。何にせよ、無線は使える状態になかった。コールドウエルのP-83は戦線を脱してはいなかったのが不幸中の幸いだった。やがて1機のP-83が到達し、ドックファイトに加わりうとしていた。

「こちら隊長機」一方のシュミットも、僚機とのコンタクトを図る。

『隊長……どうしました？』相手はベネディクト、無線越しに爆発音が轟き、シュミットの右方向に一筋の輝きが見えた。

「どうもこうもない、敵に尻を突かれた」シュミットは落ち着いた声色で言った。「援護してくれば助かる。2機相手じゃつらいんでな」振り返り、迫り来るP-83を見据えた。

『了解』

通信を終え、ここでシュミットは背後の敵に対し、反転、バレルロールを繰り返した。同時に、Ta183は華麗な螺旋を描きなが

ら、空を舞い始めた。

バレルロールとは、ロールとピッチアップを同時に行う空戦機動である。横倒しの樽バレルの内壁をなぞる様に螺旋を描きながら飛行する。ジンキング同様、敵機の砲火をかわす事ができ、尚且つ形勢逆転を狙える機動である。相手のオーバーシュートを狙えるからだ。

ハイGバレルロールーと呼ばれる機動を繰り返したシュミットに対し、ガブレスキーの鹵獲機はオーバーシュートしてしまった。ここぞとばかりに、シュミットは残り少ない30mm砲弾を、Mk213C／30リボルバーカノン砲から押し出した。砲弾が空を駆け、唸りを上げて、鹵獲されたTa183の機体を引き裂いた。破片が飛び散り、爆発。火の手に包まれる前に、ガブレスキーはベイルアウトして難を逃れたが、貴重なジェット戦闘機を喪失するという失態を犯してしまった。

「弾が……」

機内、機器類に埋め尽くされた眼前の1つに、残弾数を知らせる計器の姿があった。

シュミットは沈黙し、0を示す計器を見据えていた。どうにか空戦には勝った。しかし、背後からは敵がまだ1機迫っている。

砲撃が機体を迸るのに、そう長くは掛からなかった。敵機――P-83を駆るコールドウエルは僚機が落とされた事に怒りを覚えていた。隊長機からの通信は沈黙を続けており、それが直接繋がるかどうかは定かではないにせよ、コールドウエルは隊長機墜落の可能性を考えていた。

そんな最中の事だった。突然、眼前から1機の機影が見えた。ベネディクトの機体だ。無線越しに彼の声が聞こえ、意気揚々と背後

に続く無数の機影の正体を語った。増援到着の報を聞いたシュミットは急旋回し、コールドウェルから逃れようとした。相手は迫り来るベネディクト機に視線を向け、後続のP-80に援護を仰いだ。高高度を行く戦闘機群は、増援の戦闘機群に向かう。

ベネディクトは右、コールドウェルは左に旋回した。双方ともに、シザーズ戦闘に入ったのだ。

シザーズでは、2機の戦闘機が並行に飛行しながら急旋回による蛇行を行い、どちらかが前に出そうとする。絶妙な操縦を要求され、少しでも速度を間違えれば相手に背を向ける事となる。

今戦闘において、先に出たのは――ベネディクトだった。無理も無かった。相手が非力なエンジンを持つP-83とはいえ、ベネディクトの乗る機体は複座式のTa183C。焦って操縦をミスしたのも、シザーズ戦後の結果に繋がった。

「くそッ！」ベネディクトの背後が揺れ、機体が悲鳴を上げていた。

やがて、警告とも言えるエンジンの不調を、身体全体に感じ出した。「もう駄目だ！」キャノピーが開き、宙を舞う。後座のルールシュタールX-4空対空ミサイルオペレーターも同様に飛び立った。やがてパラシュートが開いた。眼下には、紺碧のニューヨーク湾が映っていた。

第99話 ニューヨーク航空撃滅戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第100話 ニューヨーク沖海戦前哨戦

第100話『ニューヨーク沖海戦前哨戦』

1944年10月2日AM06…31

第1機動艦隊、旗艦『バイエルン』

東海岸各所に向けての第1次強襲作戦終了直後、艦隊を指揮するアルブレヒト・ベルンフリート元帥の顔色は思わしくなかった。報告書の多くは、新型ジェット戦闘機『P-83』の戦闘記述が強調され、その後尾に、破壊率の低さと艦載機的大量喪失が連ねられているという具合だった。誰もが米軍の新型機、そして予想以上の防衛網の事を賞賛し、仕方無かったという雰囲気醸し出していた。

ベルンフリートは、この第1陣を持ってして東海岸の主要軍事拠点を殲滅し、第2陣で居住区域への攻撃に入るつもりだった。成功すれば、上陸した陸軍が敵の補給網を早期に塞ぎ、敵に抵抗の隙を与えず大打撃を被らせられる筈だったが、消耗戦は免れない様だ。

地図をじっくり検討し、報告書を読むとともに、次案を画策し始めたベルンフリートは、次なる危機に晒される事となった。敵爆撃機群の到来である。

早朝、赤の帯が掛かった空を、米陸軍航空軍の大爆撃部隊が覆い隠した。空を埋めるのは、B-29といった新型爆撃機から錆の付いた旧型B-17、双発のB-25まで、米陸軍の大編隊を組んで、1時間ほど前に東海岸各所から飛び立った。

「敵大編隊を確認、方位060、距離11万ヤード！」電信員が声を張り上げ、報告した。

ベルンフリートに抜かりは無かった。迫り来る重爆撃機の大編隊に対する対抗策として用意していたのが、M A C・C A M シップを改造した、『ベルンフリート魔法陣』の軸用改造船だった。

1943年5月、英国本土が陥落して以降、ドイツ海軍は英海軍の船団護衛用艦艇を大量に接収した。いわゆる『大西洋の戦い』において、活躍したそれらの艦艇は、既に敵味方も無い大西洋上では何の意味も持たず、海軍は当初、輸送船に戻すか鋼鉄に還すかの2択を考えていた。

しかし1943年夏期、艦対空兵器——C-2 ヴァッサファルミサイルが初飛行に成功し、生産の目途が決まると、余剰分のM A C・C A M シップは新たななる可能性を見出した。ベルンフリートや技術者達によって考案された対空防衛陣『ベルンフリート魔法陣』は、航空機に対して絶大な力を発揮する反面、1つでも陣を形作る艦艇を喪失すると崩壊する——という、甚大な欠点も存在した。他に、C-2を撃ち尽くせば当然だが、発射装置は意味を成さず、駆逐艦や巡洋艦は行動を制約される。これらの問題を解決する方法の1つが、M A C・C A Mを利用する事だった。

M A C・C A M シップは元々、商船や正規艦艇等にカタパルトと戦闘機を付けたものだった。C A Mは飛んだら最後、戦闘機は搭載した燃料と弾薬を使い切り、パイロットはパラシュートで脱出、若しくは不時着着水するという、詰まる所は即席の空母だった。一方、それを発展させ、離着艦を可能とした簡易空母が、M A C シップだ。ドイツ海軍は第3帝国の英知——世界最高峰の科学技術を、この2種の簡易空母に組み込んだ。カタパルトを改造し、C-2 ヴァッサファルに対応した艦。若しくは撤去し、ミサイル誘導用の目標方位測定レーダー、ミサイル誘導レーダーを搭載した艦に分けられた。これら簡易艦艇は個々では海戦では即座に撃沈されてしまうかもしれないが、大量に配備する事で、魔法陣を維持し続ける事が出来た。遠隔地となる米本土戦線においては、100隻以上が投入されている。

第1機動艦隊、空母『バイエルン』から飛び立ったジビレ・シュミット中佐は、先日の第1攻撃隊『メテオリート』編隊指揮官を解任され、本来の第1航空隊隊長としての任務を担っていた。Ta183『フッケバイン』12機編隊を統括し、彼は空を駆った。

4隻の空母から成る第1機動艦隊の艦載機の主はジェットだったが、レシプロ機も居た。艦載機仕様のFw190も加わった大規模な防衛航空部隊は、眼前に迫り来る重爆撃機群を捉えた。

「全機、攻撃を開始せよ！」

シュミットは吼えた。刹那、最前線近くに配備されていたCAMシップが、艦載していたC-2ヴァッサファルを発射した。天に向けて放たれたC-2は白い尾を曳き、マッハ4の速度で空を駆る。放たれたC-2は計4基。その内、2基が前方に迫っていたB-29のジュラルミンの巨軀を捉えた。

高度1万メートル、P-47『サンダーボルト』やP-51『ムスタング』、F6F『ヘルキャット』戦闘機に守られたB-29『スーパーフォートレス』大編隊――超空の要塞群――はジュラルミンの肌を曙光に煌めかせ、轟々と空を駆けていた。背後にはB-25『ミッチェル』双発爆撃機が控える。この超空の要塞群に対し、ドイツ海軍は現代版攻城兵器『空飛ぶ破城鎚』――C-2ヴァッサファル艦対空ミサイルと、高性能艦載戦闘機をけしかけた。

空飛ぶ破城鎚――C-2ヴァッサファルは、高性能爆薬を炸裂させ、B-29に襲い掛かった。ジュラルミンの要塞は呆気無く崩れ去った。少なくとも、2機のB-29はそのまま墜ちた。

しかし、それはほんの序章に過ぎない。

迎撃に向かうTa183の前には、あの米陸軍ジェット戦闘機群

の姿があつた。

第100話 ニューヨーク沖海戦前哨戦（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第101話 要塞攻略

第101話『要塞攻略』

1944年10月2日AM07:00

2基の空飛ぶ破城鎚は、曙光に赤みを帯びた空から、薄闇に覆われた空へと飛び出した。B-29大編隊——超空の要塞群——はこの破城鎚に崩され、ジュラルミンの巨躯の燃焼光と曙光の煌めきに編隊右翼は包まれた。これにより、2機のB-29は崩れ去り、呆気無く墜ちた。

第1機動艦隊旗艦、空母『バイエルン』第1航空隊のTa183『フツケバイン』12機は、空飛ぶ破城鎚のC-2ヴァッサファルの排気ガスやB-29の機銃弾の雨の中を難なく進み、水平線の遙か上空に連なる超空の要塞群に進んだ。第1航空隊隊長ジビレ・シユミット中佐は、Ta183を駆り、11機の精鋭を配下として、ジュラルミンの城壁に迫った。両翼下には、55mmロケット弾R4M『オルカン』が15基、計30基搭載されている。

「フオイヤー！（発射）」

シユミットは吼え、Ta183の編隊からR4Mは放たれた。無数の55mmロケット弾はその名の通り、嵐が如くB-29に向かい、これを各個撃破した。その間だけで、6機のB-29が落とされた。錐揉みしながら火を噴いて落ちた。

その時だった。突如、前方にP-80『シューティングスター』ジェット戦闘機の8機編隊が現れ、シユミットの編隊に襲い掛かった。P-80の翼下から、ロケット弾の雨が解き放たれた。目まぐるしい攻勢の後、両編隊は互いに交差し、旋回を始める。両編隊は大きく左に旋回してまた向かい合うと、再度攻撃が繰り返された。

崩れ去ったB-29編隊——超空の要塞群——は敗走を始めていた。しかし、背後にはB-25『ミッチェル』双発爆撃機が迫る。更に、その下を30機以上のSBD『ドントレス』とSB2C『ヘルダイバー』急降下爆撃機編隊が駆けていた。この2機、SBDとSB2Cは新旧の急降下爆撃機だった。SBDは史実、ミッドウェー海戦を機に米海軍を飛躍させた機体で、SB2Cはその後継機であった。B-25が轟々と頭上を駆ける中、SBD・SB2C大編隊はドイツ海軍第1機動艦隊との間合いを詰めていった。

「下だ！下にもいるぞ！」

シュミットは叫んだ。この時、シュミット率いる12機編隊の他、迎撃部隊には同様の機数から構成される編隊2個が加わっており、P-80から成る編隊は撤退準備を進めていた。代わりにP-51『ムスタング』の編隊が加わった。米陸海軍はこの様な護衛機から成る『天空の壁』を何重にも用意して、配備していた。

両者が遭遇したのは、それから間もなかった。P-51は第2次大戦時の最優秀機と言われていたが、数十年も先を行った技術から成るTa183の前には、雑作も無い敵だった。シュミットは高性能測距レーダーと連動する光学照準器の輝点にP-51の機体を合わせ——30mm弾を放った。Mk213C／30リボルバーカノン砲から解き放たれた砲弾は吸い込まれる様にして、P-51の右翼付け根を撃ち崩した。

シュミットは、銃弾や排気ガスが混じった天空の壁の穴を抜けた。10秒後には、4門のリボルバーカノン砲口から、単発ずつ砲弾が撃ち放たれ、P-51を粉碎した。空域内の回廊地帯——C-2ヴァッサファルが入り乱れる区間——を避け、B-25の大編隊に向かう道程は、朝陽の深紅の帯が敷かれていた。赤と橙と黄の厚い朝の帯は、双発爆撃機を強調させた。B-25は光り輝いている。

『隊長、米海軍の大編隊が魔法陣の第1陣を抜けます！』

「放っておけ」シュミットは無線で報告してきたベネディクト少尉に告げた。彼は前日の戦闘時、撃墜されたがUボートによって救出され、空母へと帰艦していた。彼はその戦果の程と志願により、Ta183Cに再度乗り、空を駆る道を選んだ。

そして今、彼は復讐に燃えていた。Rk344——通称『ルールシュタールX-4』が鮮やかな排煙を噴き、赤みを帯びた蒼空に線を描いた。マッハ3で飛翔するこの兵器に対し、有効な対抗手段は限られた。1機のP-47はこの背後に迫る飛翔体に対し、スパイラル・ダイブを繰り返したが、悪あがきにしかなかった。急降下し、回避機動を取るとこの空戦機動は、不発に終わる。Rk344は見事機体に直撃し、P-47は翼を粉碎されて——墮ちて行った。

午前8時ちょうど、敵機は更に数を増し、ドイツ海軍は死傷者を増やしていた。迎撃部隊は余剰分の敵機に手を回せず、魔法陣を形成するMAC・CAMシップは米海軍の急降下爆撃隊により、各個撃破されていた。

そしてこの時、ドイツ海軍の『天空の壁』は穴が開き始めていた。

第101話 要塞攻略（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第102話 勝機からの狂気

第102話『勝機からの狂気』

1944年10月2日PM04・10
アメリカ合衆国／コロラド州

コロラドスプリングス、ロッキー山脈に築かれた『エリア55』
第4階層に位置する大統領執務室では、報告書類の束に目を通し、
嬉々とする第32大統領フランクリン・D・ルーズベルトの姿があ
った。報告書類は10月1日付、東海岸の軍事拠点、ワシントンD.
C.の司令部から送られてきた情報で、東海岸の空を舞台に起こっ
た騒々しい1日についての事柄が書かれていた。約4000門の対
空砲――1000門程が廃され、東海岸各地に運ばれた――を用い
て掴んだ勝利の過程が、気取って腐った、この戦況にうんざりして
いる高級将校の手によって発信され、エリア55のテレタイプがそ
の情報を打ち出した。

やがて、呼び出されたコーデル・ハル國務長官にフランシス・ビ
ドル司法長官、側近のハリー・L・ホプキンス、日米講和派のウィ
リアム・D・リーヒ海軍大将が、そこに加わった。誰もかれもが、
会心の笑みを浮かべ、口から不気味な小声を漏らす大統領の姿を見
て、良くない兆候だと感じた。

「諸君、我々は勝利した！」ルーズベルトは腹の底から声を出し
た。「DCの勇士達は、圧倒的な愛国心と実力の差を見せ付け、空
を覆う敵機を駆逐した」ルーズベルトは一同の顔を見渡した。「今
こそ、復活の時なのだ」

ルーズベルトは切々と語り始めた。10月1日早朝、4000門
以上の砲が空を向き、始動の時を今か今かと待ち侘びていた。それ

から程なくして、24機のTa183『フツケバイン』と、無数のAr234『ブリッツ』がワシントンD.C.の空を覆い尽くした。首都防衛部隊は即座に対空砲を咆哮させ、蒼空を切り裂いた。一度、ワシントンは闇に包まれた。

数分後、鋼の洗礼を受けたTa183の内、数機程が落とされた。足の遅いAr234に関しては、更に甚大な被害が出ていた。血の様に赤い火を噴きながら、無数のドイツ海軍機が落ちていった。やがて、P-47『サンダーボルト』、P-51『ムスタング』を始めとする迎撃飛行隊が姿を現し、ワシントンの形勢は首都防衛部隊に傾いていった。それにも構わず、ドイツ海軍爆撃部隊は首都に爆弾を落としていったが、主要目標となる施設を破壊出来ず、大打撃を与えるには至らなかった。

「そして今日、B-29を始めとする重爆撃機を用い、敵艦隊に復讐を果たした」

戦闘開始は7時。ニューヨーク沖に展開していたドイツ海軍第1機動艦隊は、元英海軍籍のMAC・CAMシップを中心に、複数の艦艇に損害を与えた。

「我が方の損害は？」

ルーズベルトは、リーヒに顔を向けた。「B-29を多く失った。他の重爆撃機も」

「大きな損失ですな。海軍側を加えなくとも……」

「……敵の防空網を崩したとならば、それも許されるでしょう」
ばつの悪くなったルーズベルトに代わり、ホプキンスは言った。

リーヒは無用な死に怒りを覚えつつ、攻め口を変えた。「B-25はともかく、B-17やB-29を失うのは、現在の財政的には辛くはないでしょうか？国民の血税を溝に捨てた様なものです」
B-29は当時の値で約63万9000ドル——その値は現在にして約54億円に相当した。旧式機のB-17でさえ、27万6000ドルも掛かった。精鋭揃いのドイツ海軍機動部隊にしてみれば、高価過ぎる標的と言えた。因みに、B-25は9万6000ドルであ

る。

ルーズベルトは憤慨気味に、リーヒを見据えた。「国民が財産か命、どちらを望むと思う？」

「両方……では？」

ハルは顔を上げ、言った。「当然ですが、国民はその2つを欲しますよ。そして失うのを拒むのも、当たり前と言えば当たり前です。アカやジャップやナチが跳梁跋扈する合衆国の有様など望まないでしょうし、それを防ぐ為と言って、筋の通らない金の浪費も望まないでしょう」

戦う必要は無いと、ハルはリーヒに顔を合わせながら言った。

話が本筋に戻ったのは、それから間も無い頃だった。ルーズベルトの冷たげな視線がハルに向けられ、軽く咳払いした。

「今日、諸君を呼んだのは、合衆国に蔓延る病を駆逐する為だ」
V2・V3ロケットが東海岸を襲い、政府が成果を出せなかったこの頃、国内では反戦活動が激化していた。これは第3帝国が世界に発した報せと、国内に潜伏する独ソ諜報員達の扇動による所が大きかった。これらは両国が大国アメリカを打ち破る為、内紛を誘発させる工作だった。

その問題に対し、ルーズベルトは新たな法律を築こうとしていた。「駆逐するべく、2つの新法を造る」ルーズベルトは言った。「1つは“愛国者法”」ルーズベルトはビドルに目を向けた。「そして――“懲罰法”だ」

愛国者法とは、主に合衆国の障害となる反政府主義者・組織を今までよりも自由に監視・取り締まる為の法であった。しかしこれは名ばかりで、国内反逆者を排除する正当な手段として生まれたものだった。この法が適応されれば、FBIに大幅な資金が注がれ、ルーズベルトが私設秘密警察の如く使える部署が生まれただろうが、司法長官のビドルや、ハル達は良い顔をしなかった。

そして2つ目の法により、一同は凍り付いてしまう事となる。

「愛国者法は許容出来ます。しかし……」

ビドルは渋顔を浮かべた。「この懲罰法は……」

懲罰法——かつての『魔女裁判』を髣髴とさせる様な刑罰を与えるこの法は、反愛国的行為・軽犯罪行為を起こした罪人に対して施行される。主に広場や交差点等、人通りの多い場所で懲罰法は執行され、晒し台——欧米における拘束道具——で罪人が拘束された姿や、鞭で罪人が痛め付けられる姿を群衆に晒す——という辱めの法だった。鞭打ちや晒し台は辱めだけでなく、時には命さえ奪う効果もあり、民衆に与える精神的影響は計り知れなかった。しかし一昔前——1600年代ならまだ許されたであろう行為を、世界で最も躍進し、次世代のリーダーたるアメリカ行政機関が行うという事は、アメリカが野蛮で横暴な国家だという様を知らしめる最高の方法と言えた。

「私は理解し兼ねます」

ビドルは言った。「セーラムの悲劇でも再現するつもりですか？」

ビドルは低く唸った。「日系人の強制収容といい、貴方はやり過ぎだ」

「反愛国的だな」ルーズベルトは言った。「鞭を30回も打つてやれば、警官が道端で死なずに済む様になる。晒し台で3時間も風に当ててれば、次の日は新兵に仲間入りだ。最早、各地で激化する暴動を抑え込むには、これぐらいはやらなければならん！」

「何と言おうとも私は——」

「もういい」ルーズベルトはビドルの言葉を遮った。「もう1度言ってみろ。即解任するぞ」

この時、ルーズベルト政権下の米国に明るい見通しは無いと、一同は確信した。

第102話 勝機からの狂気（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

第103話 大西洋艦隊動く

第103話『大西洋艦隊動く』

1944年10月3日AM11:03
アメリカ合衆国／ワシントンD.C.

紅葉に紅く染まった10月のアナコステア川の景観にチェスタ
ー・W・ニミッツ大將は目を瞠っていた。その一方で、心は淀んで
いた。彼が立つ栗石舗装の広場は仮設の救護テントが張られ、無数
の男達が、どこまでも並ぶベッドで日々を過ごしていた。彼等の多
くは“先週の被害者”と呼ばれ、看護師達に家族に宛てた別れの言
葉を告げていた。即ち――『V2』SAK化学弾頭の曝露者だ。大
西洋艦隊司令官に就任したニミッツは海軍から出た曝露者の支援体
勢を監督していた。

10日前、ワシントンに狙いを定めたV2ロケットは3基あった。
前述したがこの内1基が迎撃され、2基が着弾した。1基はワシン
トンモール内、歴史博物館前。そしてもう1基は――今、ニミッツ
が立っているワシントン海軍工廠だった。

「司令官、お時間宜しいでしょうか？」

そうニミッツに話掛けてきたのは、大西洋艦隊参謀長のレイモン
ド・A・スプルーアンス少将だった。「艦隊の準備は一応整いまし
た。即時投入出来る小型艦艇は40隻余り。空母に関しては、西海
岸から回航してきたエセックス級3隻とカサブランカ級6隻が順次
投入可能です」

「レンジャーはどうだ？」ニミッツは訊ねた。

スプルーアンスは渋々ながらも、頷いた。空母『レンジャー』は
去年11月16日、ドイツが放った原子爆弾UG1――コードネー

ム『ミヨルニル』による核攻撃の末、甚大な被害を受けていた。その頃は大西洋の抑止力の1つとなるべく、改修作業中だった。低濃度の放射能に汚染され、廃棄も考えられたが、大日本帝国海軍の猛攻とドイツ海軍への脅威から、改修が進められた。

「しかし司令官、未だ放射能の危険が残っています」

「ああ……だが、そんな事も言ってられまい」ニミッツは唸った。「敵の艦隊が迫る今、1隻でも多くの戦力が必要となる」

これまでの一連の戦況から、ニミッツは途方も無く残酷な結末を考えていた。今回の海戦で、米海軍大西洋艦隊は敗北する。この予想は眼前に広がる光景——悶え苦しむ曝露者達と、その先の地面に突き刺さったV2ロケットの弾頭筒を見れば、想像に難くなかった。

4日後。大西洋。

ドイツ海軍第1、第2機動艦隊が展開する海域に対し、東海岸各所から集められた米海軍の艦艇は、1つの巨大艦隊を造り出した。旗艦たる戦艦『モンタナ』を軸とし、6隻の正規空母。10隻の戦艦。40隻以上の駆逐艦、巡洋艦から成る艦艇群が周りを固め、大西洋の荒波を蹴って進む。更にかつての英海軍籍艦艇も加わった。東海岸の地上基地各所からは米陸軍航空軍の航空機群が飛び立ち、空を埋め尽くした。Uボート——海の伏兵達に対し、それ以上の数の潜水艦が海を埋め、護衛空母と駆逐艦がUボートウルフパックの掃除を担った。

ニミッツは愁いを帯びた瞳で、水平線の彼方を見据えた。

……果たして、我々は勝てるのだろうか？

疑念を覚えながらも、海戦の火蓋は既に切って落とされていた。

第103話 大西洋艦隊動く（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

第104話 ニューヨーク沖海戦（前）

第104話『ニューヨーク沖海戦（前）』

1944年10月7日AM06:00

「恐れるな。敵の先頭陣は対空プラットホームだ」

第20・2任務群旗艦『セントポール』艦橋。

モートン・デイヨー少将はドイツ海軍第1機動艦隊の簡易艦、ミサイル防空艦の艦影に恐れ戦く艦橋の一同に檄を飛ばした。第20・2任務群の殿を務める重軽巡洋艦群の指揮官として、敵艦隊に対する先陣を切るという大役を担ったからには、祖国の土を踏ませる訳にはいかなかった。

第20・2任務群の旗艦、ボルチモア級重巡洋艦『セントポール』を筆頭に、同級艦『ボストン』そしてクリーブランド級軽巡洋艦『ヴィンセンス』を中核と成す第20・2任務群は、後ろに控える6隻の正規空母、多数の護衛空母群に備えられた航空戦力を犬死にさせない為にも、C-2防空艦——魔法陣の先端を破壊しなければならなかった。重巡洋艦3隻、軽巡洋艦2隻、駆逐艦4隻——計9隻の火力に加え、2個駆逐隊を指揮下に持つデイヨーは、武者震いを覚えながら猛進した。

「ファイア！」

デイヨーは吼え、重巡セントポールの主砲は咆哮を上げた。9門の55口径20・3cm砲はその圧倒的な破壊力を防空艦——かつてのMACシップに向け、叩き付けた。何の装甲も持たないMACシップは案の上、鋼の柔肌を引き裂かれて——爆発した。

「敵艦発砲！」水平線上に煌めく閃光を見た見張り員は叫んだ。それは前衛に着いていた敵駆逐艦部隊の砲撃であった。同時に、敵艦は速度を速め、前進してきた。

デイヨーは下令した。「取舵20度！」艦長が復唱し、舵は取られた。

「後続の艦艇に異常はないか？」

「USSカッシングが損傷！」

電信員が報告し、デイヨーは苦虫を噛み潰した様な顔を浮かべた。

「艦長、砲撃の用意だ」

重巡洋艦『セントポール』艦長、カイル・J・マークス大佐は頷いた。続いて、デイヨーは電信員に指揮下の駆逐艦4隻、2個駆逐隊に魚雷の用意をするようにと下令した。

「面舵一杯！」

「魚雷発射始め。ファイア！！」

駆逐艦4隻、フレッチャー級駆逐艦『カッシング』は速力低下で若干遅れはしたものの、魚雷は大西洋に放たれた。敵艦隊は取舵一杯で逃れようとしたが、その内の1隻は艦首を引き裂かれた。

「敵駆逐艦轟沈！」

参謀からの報告に、デイヨーは笑みを浮かべた。

第20・1任務群——旗艦『エル・ドラード』

『こちらUSSセントポール、第20・2任務群指揮官のデイヨーだが』

「デイヨー提督、USSエル・ドラードのスプルーアンスだ」第20任務部隊総指揮官にして、大西洋艦隊参謀長であるレイモンド・A・スプルーアンス中将は言った。「貴官の部隊は優れた戦績を残した。来たる結末に備え、戦力を一時温存してくれ」

デイヨーは洩面を浮かべた。「お言葉ですが提督、我々はまだやれます」

「分かっている」スプルーアンスは言った。「しかしもうすぐ敵航空部隊が来る。後はこのエル・ドラードと第20・1任務群艦艇に全て任せてくれ」

その後、渋々デイヨアの第20・2任務群は反転、代わって第20・2任務群と第20・3任務群が加わった。第20・2任務群は氷山戦艦『エル・ドラード』を中心に、ニューメキシコ級戦艦等の旧式戦艦3隻、駆逐艦12隻の巨大部隊であった。その後方に空母2隻から成る第20・3任務群が配置された。

「敵機接近！」

50機以上のTa183『フツケバイン』艦載ジェット戦闘機群は、通常兵装としてMk213C／30リボルバーカノン砲を持ち、R4M『オルカン』やRk344——通称『ルールシュタールX-4』や250kg、500kg爆弾等を副兵装として備えていた。エル・ドラードや駆逐艦群、旧式戦艦は持てる対空火器を存分に使い、空に向けて無数の弾を撃ち放った。

F6F『ヘルキャット』戦闘機が空に上がると、絶対的な敗北ムードも払拭され、兵士達は若干ながら気を持ち直した。復讐の時である。

第104話 ニューヨーク沖海戦（前）（後書き）

ご意見・ご感想等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5121n/>

時空戦艦『紀伊』

2011年4月2日18時34分発行